京都府遺跡調査概報

第 11 冊

1. 長岡宮跡第140次
2. 長岡京跡右京第141次
3. 長岡京跡右京第148次
4. 長岡京跡(立会調査Ⅰ)
5. 長岡京跡(立会調査Ⅱ)
6. 木津川河床遺跡
7. 隼上り遺跡
8. 旧洛南中学校内遺跡
9. 祝園地区所在遺跡

1984

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年４月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく３年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和58年度は，46件の調査を実施しました。これらの発掘調査は，いずれも道路建設，学校建設，宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり，調査によって発見された遺跡の多くは，調査終了後破壊され，消滅する運命にあります。しかし，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は，遺跡の重要性を理解していただくために，また，たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用を図るために刊行するものであります。昭和58年度は，第９冊，第10冊，第11冊の３冊にまとめることにしましたが，この第11冊には長岡宮跡第140次調査ほか７件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け，さらに，炎暑の下，極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼を申し上げます。

昭和59年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は

　1.　長岡宮跡第140次　　2.　長岡京跡右京第141次　　3.　長岡京跡右京第148次

　4.　長岡京跡立会調査（Ⅰ）　　5.　長岡京跡立会調査（Ⅱ）　　6.　木津川河床遺跡

　7.　隼上り遺跡　　8.　旧洛南中学校内遺跡　　9.　祝園地区所在遺跡

　を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 長岡宮跡（第140次）	向日市上植野御塔道7-5	昭58. 10. 8 ～ 昭58. 11. 13	向日市	増田　孝彦
2. 長岡京跡（右京第141次）	長岡京市今里3丁目	昭58. 8. 11 ～ 昭58. 10. 24	京都府乙訓土木事務所	山下　正
3. 長岡京跡（右京第148次）	長岡京市開田4丁目	昭58. 11. 10 ～ 昭58. 12. 24	京都府乙訓土木事務所	黒坪　一樹
4. 長岡京跡立会調査（Ⅰ）	長岡京市～大山崎町	昭58. 1. 15 ～ 昭59. 3. 31	日本電信電話公社	竹井　治雄
5. 長岡京跡立会調査（Ⅱ）	長岡京市	昭58. 6. 17 ～ 昭59. 3. 31		
6. 木津川河床遺跡	八幡市八幡焼木・源野	昭58. 5. 17 ～ 昭58. 7. 18 昭58. 7. 25 ～ 昭58. 9. 22	京都府流域下水道建設事務所	黒坪　一樹
7. 隼上り遺跡	宇治市菟道東隼上り	昭58. 11. 7 ～ 昭58. 3. 31	日本道路公団	小池　寛
8. 旧洛南中学校内遺跡	京都市南区大ノ国町	昭58. 7. 15 ～ 昭59. 1. 30	京都府教育委員会	松井　忠春
9. 祝園地区所在遺跡	相楽郡精華町大字南稲八妻・東畑・乾谷・柘榴	昭57. 10. 5 ～ 昭59. 3. 31	住宅・都市整備公団	石尾　政信

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1．長岡宮跡第 140 次発掘調査概要…… 1

2．長岡京跡右京第 141 次発掘調査概要……13

3．長岡京跡右京第 148 次発掘調査概要……23

4．長岡京跡（立会調査Ⅰ）……35

5．長岡京跡（立会調査Ⅱ）……45

6．木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要……47

7．隼上り遺跡昭和58年度発掘調査概要……95

8．旧洛南中学校内遺跡発掘調査概要…… 105

9．祝園地区所在遺跡昭和58年度発掘調査概要…… 121

挿図・付表目次

長岡宮跡第 140 次

第 1 図　調査地位置図…… 1
第 2 図　調査地及び周辺の調査（P：宮内調査次数略号）…… 2
第 3 図　調査地平面図…… 4
第 4 図　SD 14001 平面図・断面実測図・SK 14001 平面図 …… 5
第 5 図　出土遺物実測図…… 7
第 6 図　出土遺物実測図（9 は鴟尾片部位復元推定図）…… 9

長岡京跡右京第 141 次

第 7 図　調査地位置図……13
第 8 図　調査地関連図……14
第 9 図　土層断面図……15
第 10 図　調査地平面図……17
第 11 図　石溜り SX 14505（北トレンチ）……18
第 12 図　出土遺物(1)……20
第 13 図　出土遺物(2)……21

長岡京跡右京第 148 次

第 14 図　調査地位置図……23
第 15 図　調査地近景……23
第 16 図　調査地周辺図……24
第 17 図　壁面位置概念図……25
第 18 図　土層断面実測図……26
第 19 図　発掘区内遺構検出状況①……27
第 20 図　発掘区内遺構検出状況②……28
第 21 図　掘立柱建物跡（SB 14801）柱穴断面実測図 ……30
第 22 図　溝状遺構（SD 14801）断面実測図 ……30
第 23 図　出土遺物実測図……31
第 24 図　周辺遺構（R 98 次調査）関連図 ……32

長岡京跡立会調査

第 25 図　立会調査位置図（1/25,000「京都西南部」「淀」）……36
第 26 図　立会調査地区名図……37
付 表 1　立会調査地区別概要……38
第 27 図　立会調査地点別層位模式図……39
第 28 図　松田橋線出土遺物……40
第 29 図　立会調査地の状況(1)……42
第 30 図　立会調査地の状況(2)……43
第 31 図　立会調査地の状況(3)……44

木津川河床遺跡

第 32 図　調査地位置図……48
第 33 図　発掘区配置図……48
第 34 図　周辺の遺跡分布図①（縄文・弥生）……50
第 35 図　周辺の遺跡分布図②（古墳時代）……51
第 36 図　多角測量路線図……53
第 37 図　発掘区地区割り概念図……54
第 38 図　遺構検出状況全体図……55
第 39 図　北壁・西壁土層断面実測図……58
第 40 図　西壁中央部土層堆積状況……58
第 41 図　竪穴式住居跡 (SB 01・02) 実測図 ……59
第 42 図　竪穴式住居跡 (SB 01) 竈部実測図 ……60
第 43 図　竪穴式住居跡 (SB 02) 竈部実測図 ……61
第 44 図　竪穴式住居跡 (SB 03) 実測図 ……62
第 45 図　竪穴式住居跡 (SB 04) 実測図 ……63
第 46 図　竪穴式住居跡 (SB 05) 実測図 ……64
第 47 図　竪穴式住居跡 (SB 05) 竈部実測図 ……65
第 48 図　竪穴式住居跡 (SB 07・08) 実測図 ……66
第 49 図　焼土坑 (SK 03) 実測図 ……66
第 50 図　竪穴式住居跡 (SB 10) 実測図 ……67
第 51 図　掘立柱建物 (SB 11) 実測図 ……69
第 52 図　柵列 (SA 01) 実測図 ……70

第 53 図　土坑 (SK 01) 実測図 ……71
第 54 図　土坑 (SK 02) 実測図 ……71
第 55 図　土坑 (SK 06～08) 実測図 ……72
第 56 図　土坑 (SK 09) 実測図 ……72
第 57 図　土坑 (SK 11) 実測図 ……72
第 58 図　溝状遺構 (SD 05～07) 実測図 ……73
第 59 図　溝状遺構 (SD 06) 埋土堆積状況実測図 ……73
第 60 図　SX 01 付近断ち割り断面図 ……74
第 61 図　土器溜り (SX 01) 実測図 ……75
第 62 図　竪穴式住居跡内出土遺物①……79
第 63 図　竪穴式住居跡内出土遺物②……80
第 64 図　竪穴式住居跡・土坑内出土遺物……81
第 65 図　土器溜り出土遺物(甕)……85
第 66 図　土器溜り出土遺物（甕・鉢）……86
第 67 図　土器溜り出土遺物（器台・鉢）……87
第 68 図　土器溜り出土遺物(壺)……88
第 69 図　土器溜り出土遺物(甕)……89
第 70 図　土器溜り出土遺物（高杯）……90

隼 上 り 遺 跡

第 71 図　調査地位置図……95
第 72 図　遺物…… 100
第 73 図　調査地平面図…… 101
第 74 図　出土遺物実測図…… 102
第 75 図　出土遺物実測図および拓影…… 103

旧洛南中学校内遺跡

第 76 図　調査地位置図…… 105
第 77 図　調査地区割図…… 106
第 78 図　各壁層序図…… 108
第 79 図　A地区平面実測図…… 110
第 80 図　B地区平面実測図…… 111
第 81 図　B～C地区間遺構実測図…… 113

第 82 図　C地区平面実測図…… 115
第 83 図　出土遺物実測図…… 116
第 84 図　出土貨幣及び泥面子拓影図…… 116
第 85 図　平安京条坊復元図…… 118

祝園地区所在遺跡

第 86 図　調査地位置図…… 122
付 表 2　試掘調査地一覧表…… 123
第 87 図　No. 1 地点平面図 …… 125
第 88 図　No. 4 地点平面図 …… 125
第 89 図　No. 1 地点土層断面図 …… 126
第 90 図　No. 4 地点土層断面図 …… 126
第 91 図　No. 5 地点トレンチ配置図 …… 127
第 92 図　No. 5 地点土層断面図（Eトレンチ南壁） …… 128
第 93 図　No. 6 地点トレンチ配置図 …… 129
第 94 図　No. 7 地点トレンチ配置図 …… 130
第 95 図　No. 8 地点トレンチ配置図 …… 130
第 96 図　No. 9 地点トレンチ配置図 …… 131
第 97 図　No. 9 地点Bトレンチ平面図 …… 132
第 98 図　No. 10 地点トレンチ配置図 …… 133
第 99 図　No. 11 地点トレンチ配置図 …… 134
第 100 図　No. 10 地点Aトレンチ北壁断面図 …… 135
第 101 図　No. 12 地点トレンチ配置図 …… 135
第 102 図　No. 13 地点土層断面図 …… 136
第 103 図　出土遺物実測図・拓影…… 137

図 版 目 次

長岡宮跡第 140 次

図版第 1　(1)調査地近景（南東から）　(2)SD 14001 検出状況（西から）

図版第 2　(1)SD 14001 瓦堆積状況（西から）　(2)SD 14001 軒平瓦出土状況（西から）

図版第 3　(1)トレンチ全景（東から）　(2)SD 14001 東断面（東から）

図版第 4　出土遺物

長岡京跡右京第 141 次

図版第 5　(1)南トレンチ完掘状況（南から）

(2)石溜り SX 14105・溝 SD 14101 検出状況（南トレンチ）（北から）

図版第 6　(1)溝 SD 14103（南トレンチ）（北から）

(2)溝 SD 14103 近景（北から）

図版第 7　出土遺物

図版第 8　(1)出土遺物　(2)出土遺物

長岡京跡右京第 148 次

図版第 9　(1)上層遺構検出状況（西から）　(2)溝状遺構（中世）検出状況

図版第10　(1)下層遺構検出状況（東から）

(2)掘立柱建物跡 (SB 14801) 検出状況（西から）

図版第11　(1)柱穴 (P 3) 検出状況　(2)柱穴 (P 5) 検出状況

(3)柱穴 (P 7) 検出状況　(4)柱穴 (P 9) 検出状況

図版第12　(1)溝 (SD 14801) および南壁断面土層堆積状況

(2)南西隅南壁 (H) 土層堆積状況

図版第13　出土遺物

木津川河床遺跡

図版第14　(1)調査地遠景（男山山頂から）　(2)調査地近景（西から）

図版第15　(1)発掘区掘削作業（東から）　(2)北壁土層断面（西側隅）

(3)北壁土層断面　(4)東壁土層断面

図版第16　(1)発掘区全景（西から）　(2)発掘区全景（東から）

図版第17　(1)竪穴式住居跡 (SB 01・SB 02)　(2)SB 01 かまど部

図版第18　(1)竪穴式住居跡（SB 03）　(2)竪穴式住居跡（SB 04）
図版第19　(1)竪穴式住居跡（SB 05）　(2)SB 05 かまど部
図版第20　(1)竪穴式住居跡（SB 06）　(2)竪穴式住居跡（SB 07・SB 08）
図版第21　(1)竪穴式住居跡（SB 09）　(2)竪穴式住居跡（SB 10）
図版第22　(1)掘立柱建物跡（SB 11）　(2)柵列（SA 01）
図版第23　(1)土坑（SK 01）　(2)土坑（SK 02）
(3)土坑（奥より SK 06・07・08）　(4)土坑（SK 09）
図版第24　(1)溝状遺構（左から SD 05・06・07）
(2)土器溜り（SX 01）検出状況（南から）
図版第25　(1)土器溜り（SX 01）検出状況（西から）
(2)土器溜り（SX 02）検出状況（北から）
図版第26　(1)土器溜り（SX 01）部分①　(2)土器溜り（SX 01）部分②
(3)土器溜り（SX 01）部分③　(4)土器溜り（SX 01）部分④
図版第27　竪穴式住居跡内出土遺物
図版第28　竪穴式住居跡内出土遺物
図版第29　竪穴式住居跡内・(焼)土坑内出土遺物
図版第30　竪穴式住居跡内・土器溜り内出土遺物
図版第31　土器溜り内出土遺物

隼 上 り 遺 跡

図版第32　(1)調査地遠景（隼上り瓦窯跡から）　(2)調査地全景（西から）
図版第33　(1)C Ⅳ区近世遺構全景（東から）　(2)D Ⅴ区近世遺構全景（北から）
図版第34　(1)近世墓　(2)近世墓礫検出状況
図版第35　(1)中世土坑完掘状況　(2)中世土坑遺物出土状況
図版第36　(1)B Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ区柱穴群（南東から）　(2)瓦出土状況

旧洛南中学校内遺跡

図版第37　(1)発掘調査地全景（東南東方から）　(2)発掘調査地全景（東方から）
図版第38　(1)A地区発掘前の全景（南方から）
(2)A地区第1文化面全景（南方から）
図版第39　(1)A地区完掘後の全景（南方から）　(2)A地区完掘後の全景（北方から）
図版第40　(1)B地区発掘前の全景（南方から）　(2)B地区完掘後の全景（南方から）
図版第41　(1)B地区完掘後の全景（北方から）　(2)B地区帯状遺構（東方から）

図版第42　(1)B地区掘り込み1（北方から）
(2)B地区各土坑及び掘り込み1（南方から）
図版第43　(1)C地区発掘前の全景（北方から）　(2)C地区近景（北方から）
図版第44　(1)C地区完掘後の全景（西方から）　(2)C地区完掘後の全景（東方から）
図版第45　出土遺物(1)
図版第46　出土遺物(2)

祝園地区所在遺跡

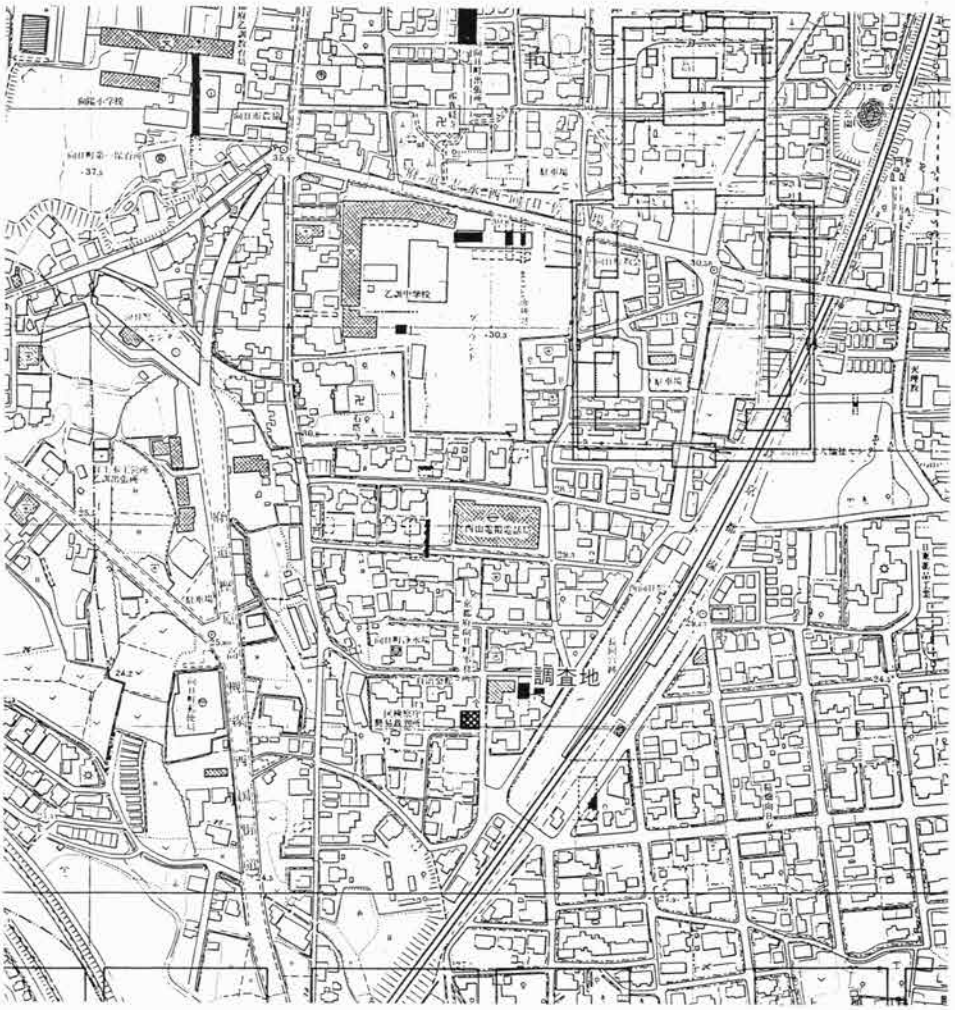
図版第47　(1) No. 5 地点Dトレンチ全景（北西から）
(2) No. 5 地点Aトレンチ南壁
図版第48　(1) No. 6 地点調査地全景（北方から）
(2) No. 6 地点Dトレンチ全景（東から）
図版第49　(1) No. 7 地点調査地全景（南東から）
(2) No. 7 地点Aトレンチ全景（西から）
図版第50　(1) No. 8 地点調査地全景（東から）
(2) No. 8 地点Aトレンチ全景（西から）
図版第51　(1) No. 9 地点調査地全景（南から）
(2) No. 9 地点Bトレンチ溝 SD 01 全景（東から）
図版第52　(1) No. 10 地点調査地全景（北東から）
(2) No. 10 地点Aトレンチ全景（東から）
図版第53　(1) No. 11 地点調査地全景（東から）
(2) No. 11 地点Bトレンチ全景杭列と暗渠排水路（南東から）
図版第54　(1) No. 12 地点調査地全景（北方から）
(2) No. 12 地点Eトレンチ全景（北方から）
図版第55　(1) No. 13 地点調査地全景（南西から）
(2) No. 13 地点Fトレンチ全景（北西から）
図版第56　(1) No. 14 地点調査地全景（南から）
(2) No. 14 地点 C-1 トレンチ全景（北から）
図版第57　出土遺物

1. 長岡宮跡第140次発掘調査概要

（7 AN 15 J 地 区）

1. は じ め に

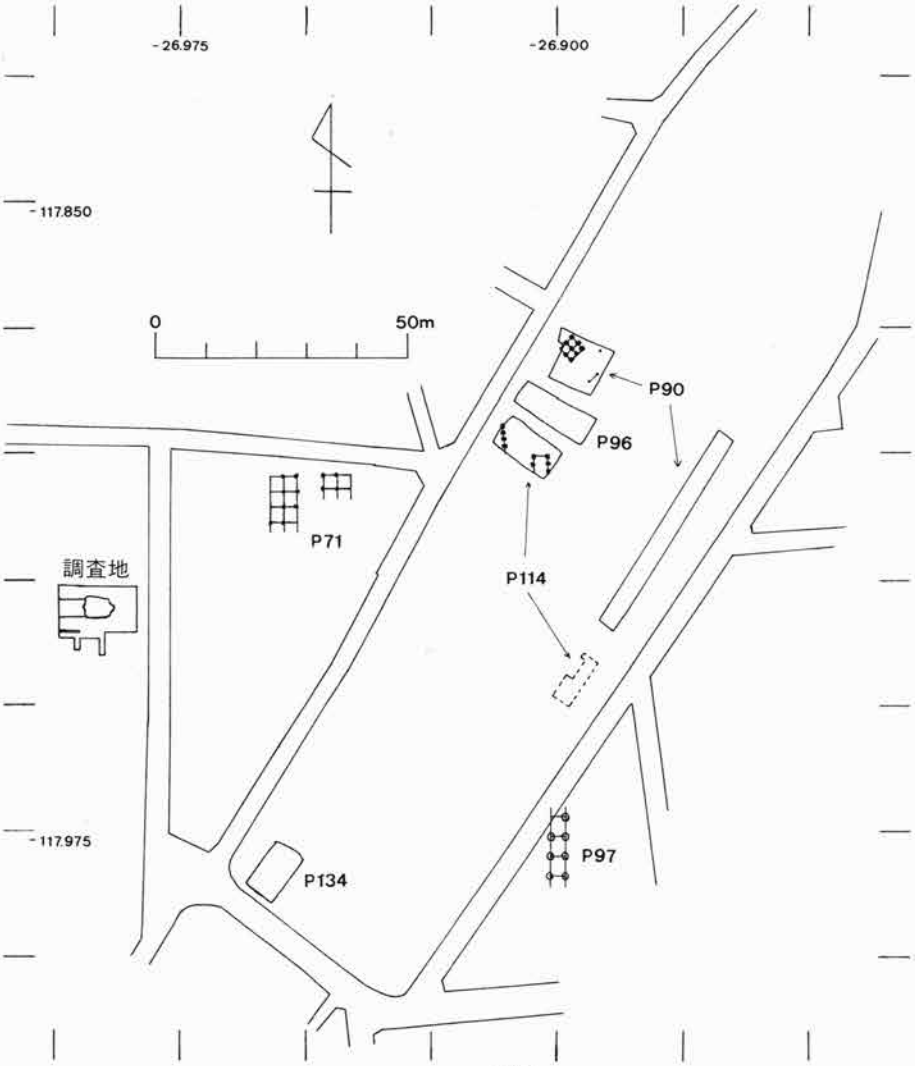
この調査は，向日市立西向日コミュニティーセンター（仮称）の建設が計画されたため，向日市総務課と向日市教育委員会が協議し，遺構の有無を確認し，記録保存を図るとともに，重要な遺構を検出した場合，保存のための資料を作成することを主な目的として，当調査研



第1図　調 査 地 位 置 図（1/5,000）

究センターが向日市から調査の依頼をうけ実施したものである。

調査地は，向日市上植野町御塔道７－５にあり，大極殿より南へ 400 m，朝堂院から 150 m の標高 29.0 m 前後の段丘上に位置し，長岡宮跡官衙配置図(注1)では，朝堂院西方官衙地区にあたり，長岡京条坊復元図(注2)から見れば，二条第一小路中心線延長上に位置する。周辺では調査地から南東へ約 90 m の地点では，礎石建物の一部が確認され(注3)，北東へ約 30 m の地点では，南北棟の掘立柱建物が２棟検出(注4)されている。また，北東へ約 90 m の阪急電鉄株式会社西向日駅構内からも長岡京期の建物跡等が検出されている(注5)。一方，南東へ約 50 m の所で当



第２図　調査地及び周辺の調査(注6)（P：宮内調査次数略号）

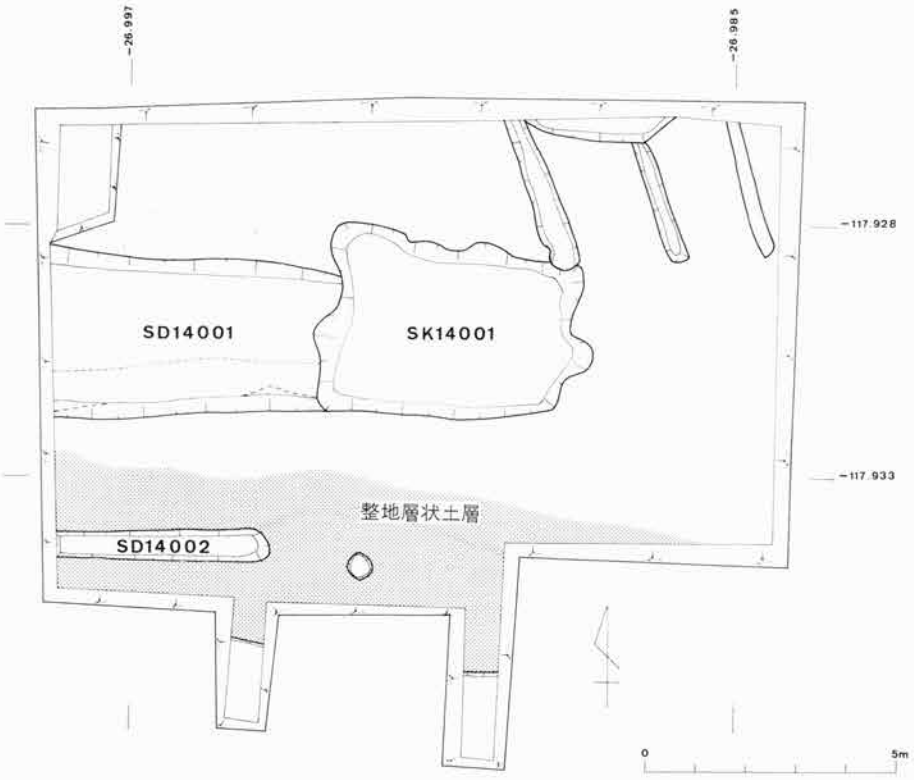
調査研究センターの実施した調査においては，長岡京時代の遺構は全く検出されず空白地帯となっている。以上のことから，当該地が長岡宮朝堂院西方官衙地区でもかなり南寄りにあたることから，周辺で確認されている遺構との関連，条坊復元図から見た宮内建物配置を考える上で重要な位置をしめており，遺構の存在が充分予想された。

調査は，昭和58年10月8日から同年11月13日まで行い，当調査研究センター調査課・主任調査員　長谷川達，同調査員 増田孝彦が現地調査を担当した。その間，調査補助員・整理員として有志学生[(注7)]の協力を受けた。また，隣接する社会福祉法人・向日市社会福祉協議会には，種々調査の便宜を図っていただき，向日市総務課・向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所・地元上植野自治会・土砂置場として土地を提供していただいた橋本登志子氏などの協力があった。記して謝意を表したい。

2. 調　査　経　過

調査は，コミュニティーセンター建設予定地に 10 m×16 m のトレンチ（第3図）を入れたが，当該地は着手以前に，検察庁向日市簡易裁判所が建っており，現在の道路面よりも約 70 cm 高く，かなりの盛土が予想されたため，重機により盛土の除去を行った。盛土は，トレンチ西側で約 40 cm，東側で約 80 cm を認め，西から東へと緩い傾斜をもっていた。盛土除去後，暗褐色の旧地表面が表われたが，この層は，畑地として利用された痕跡は認められず，盛土削平がくり返されたようで，約 30 cm の旧表土層中に厚さ約 3 cm の淡黄褐色土の薄い層が暗褐色土と交互に，2層にわたって堆積していた。しかも，この淡黄褐色土は一定せず，途中で分断されたり，なくなったりしていた。当地は，過去に竹林として利用されていた時期があったようで，その時に土入れ等によって上記した旧表土層の堆積になったものと考えられる。これを除去した所で，トレンチ北西寄りで黄褐色礫混り粘質土層（地山）の広がりが認められたため，以後人力により遺構検出作業にはいった。この黄褐色礫混り粘質土層を精査した結果，トレンチ中央部で東西に延びる溝（SD 14001）を検出した。溝南側には，瓦類が溝の傾斜に沿って落ち込んだ状態で堆積していた。また，この溝の南側においても，規模は小さいが SD 14001 同様の東西に延びる溝 SD 14002 を検出したが溝は途中で切れていた。

一方，トレンチ中央より東側では，西側で見られたような黄褐色礫混り粘質土の広がりは認められず，代って淡褐色砂質土層が広がっていた。SD 14001 がこの土層を境に途切れていることから，後世に削平されたものと考え，精査を行った結果，トレンチ東端付近でやや西寄りに傾き，トレンチ中央付近で途切れている溝3条を検出した。溝内部及び淡褐色土中

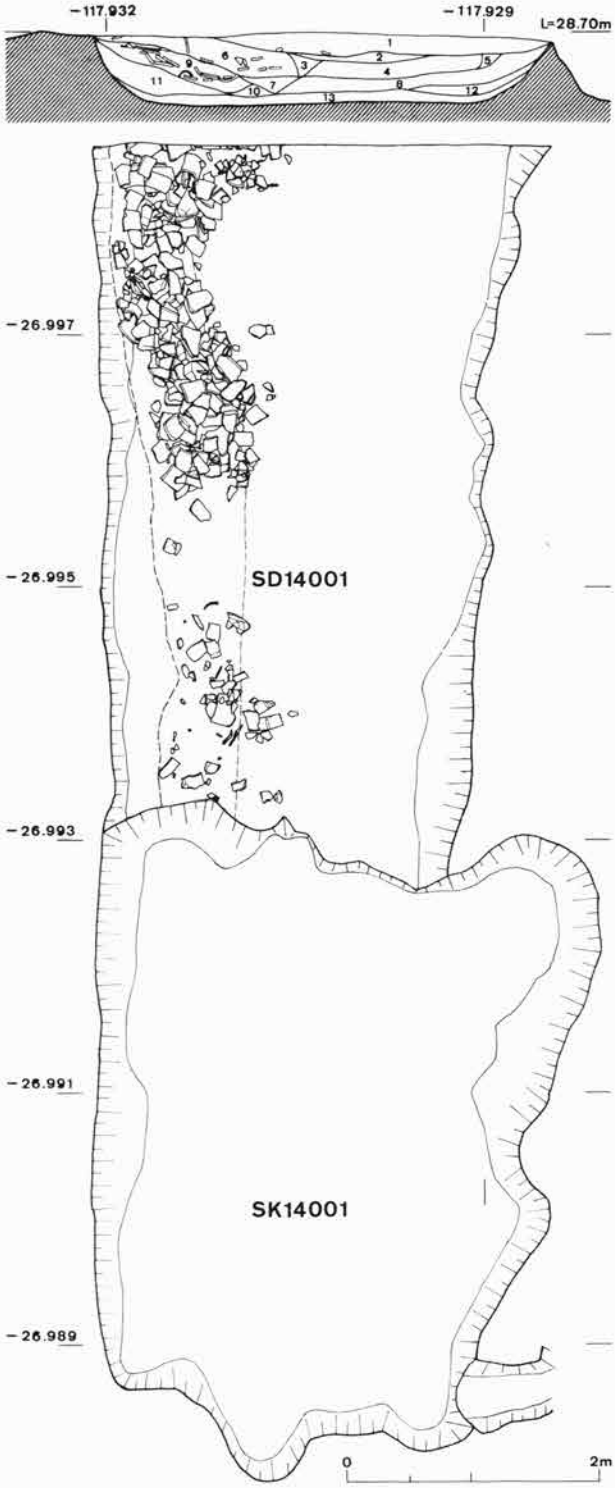


第3図　調　査　地　平　面　図

からは，少量の瓦片・近代以降の陶磁器片が出土したため，近代以降の堆積層であることが明らかとなった。

さらに，この淡褐色砂質土層を除去し，黄褐色礫混り粘質土層まで掘り下げを行ったが，SD 14001 の延長部分は確認できず，SD 14001 と切合い関係を有する土坑 (SK 14001) を検出した。SK 14001 は SD 14001 とよく似た埋土を有し，出土遺物も長岡京時代の遺物しか検出できなかったが，埋土等から考え，SD 14001 が埋まってすぐ SK 14001 が造られたものと考えられる。また，SK 14001 の東側部分において SD 14001 の延長部分を検出すべく精査を行ったが，SD 14001 東端底面レベルと，SK 14001 の東側検出面とが同レベルのため，延長部分の痕跡を認めることができなかった。

SD 14001 検出面周囲に広がる黄褐色礫混り粘質土層は，調査地南側においては，その面の上に，黄褐色土・赤褐色土・白色系粘土の混在する整地層状の土層（第3図）の広がりが認められた。この土層は，南に向かうに従い徐々に厚くなっており，断面で見ると約 7 cm の薄い層状を成しており，調査地北側においてはまったく認められなかった。この整地層状



第4図　SD 14001 平面図・断面実測図・SK 14001 平面図

の土層の広がりは，トレンチの西端から東端近くまで延びていることから，当初，溝とその状況から築地およびその側溝と考えられたため，さらに南側に，1.3m×3m・1.3m×2.5m のトレンチ2本を設定し，確認することにした。その結果，南側に溝はなく，整地層状を呈する部分の精査を行ったにもかかわらず，添柱等の痕跡もなく築地と断定するには至らなかったが，SD 14001 南側から南東側拡張トレンチで5m，南西側拡張トレンチで4.5m の位置で整地層状の土層が切れていた。地山面である黄褐色礫混り粘土層もこの位置で段差がつき，約10cm 低くなる。なお，この整地層状の土層の上面レベルは，東側の現道路面とほぼ同じである。

1. 暗茶褐色土　2. 淡黒灰色粘質土　3. 褐色土　4. 暗褐色土　5. 黄褐色土（黒褐色土混り）　6. 淡赤褐色土　7. 淡黄褐色粘土層　8. 黒褐色粘土　9. 暗黄褐色土(焼土炭混)　10. 暗褐色粘土　11. 黄灰色粘土（黒灰色粘土混）　12. 黒灰色粘土　13. 暗灰褐色粘土　14. 黄褐色礫混り粘土

3. 検 出 遺 構

今回の調査で検出した遺構は，溝5条と土坑1，現代の攪乱2か所であるが，溝は SD 14001・02を除いてあとは近代以降の溝である。

溝1　SD 14001（第4図）

トレンチ中央部で検出した東西方向に延びる溝で，幅3～3.5 m あり，トレンチ中央部分で SD 14002 と切合い関係を有するため約 6 m のみ確認できた。西端での深さ 55 cm を測る大きな溝であるが，検出面のすぐ上面が旧表土層となっているため，造られた当初はかなりの深さを有していたものと考えられる。溝底面は，かなりの凹凸が見られ，東側に比べ西側が低い傾斜面をもつ。東側では，水が流れた痕跡は認められなかったが，西側トレンチ壁付近は底面がやや凹んでおり，暗灰褐色粘土の堆積が認められたことから，水溜り状態になっていたのではないかと考えられる。溝内部埋土は，かなり分層できるが，西端断面（第4図）で見た場合，基本的には最下層に沈澱層の暗褐色粘土があり，その後，溝が若干埋ってから（この埋土は北側が厚く，南側は薄い）多量の瓦類が落ち込んでいることが観察できた。この瓦類の落ち込み部分は，トレンチ西壁付近では，溝壁に密着しているが，中央から東端にかけては密着せず，溝検出面まで一度に埋ってから落ち込んでおり（第3・4図破線），溝掘形ラインと瓦落ち込み部分とは区別され，溝が浅くなる東端に向かうにしたがって明瞭にそれを区別することができた。瓦の堆積部分の下は，層を成すほどでもないが，部分的に密集した，炭・焼土の混在する部分がかなり見られた。瓦の集積部分からは，平瓦・丸瓦および軒平瓦1・鴟尾片・若干の須恵器片が出土したが，特筆すべきことに，ふいご羽口1・鉄鋌の出土も認められた。なお，この瓦類の落ち込みは，西端から中央部までは多量に埋っているが，中央から東端にかけては西側に比べてかなり量が少なくなる。この上層はその後，溝の南側の整地を行った際に落ち込んだものと考えられ，焼土・炭・瓦片をわずかに含んだ淡赤褐色土により埋っていた。さらにその上層には，最終的に溝の凹んだ部分を整地したのか，暗茶褐色土で埋っていることが観察された。

以上のように SD 14001 は大きく4回に分けて埋っていったものと考えられる。なお，溝心の国土座標は，Y＝－117,930,500 を示す。出土遺物により長岡京時代の溝と思われる。

溝2　SD 14002（第3図）

トレンチ南寄りで確認した東西に延びる溝で，トレンチ西壁より東へ4.5 m の所で終っており，幅 50 cm～60 cm・深さ約 12 cm の規模を有する。掘形は，黄褐色・赤褐色・白色系粘土の混在する整地層状を呈する土層より掘り込まれており，内部は暗茶褐色土・淡赤褐色砂質土の混在する埋土により埋まっていた。内部からは，遺物はまったく出土しなかったが，

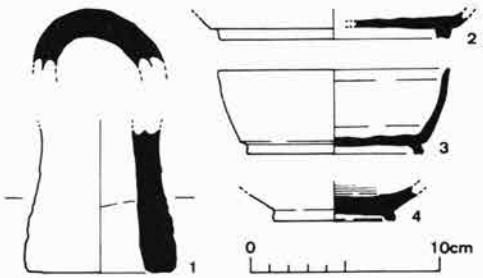
旧表土層直下から掘り込まれているため詳細は不明である。ただ，埋土の状態や，東西に延びている点を重視すれば SD 14001 と同時期である可能性もある。

土坑　SK 14001（第3図）

トレンチほぼ中央部で検出したもので，SD 14001 と切合い関係を有し，南辺掘形は，SD 14001 南辺掘形延長ラインとほぼ等しくする隅丸長方形プランを呈する土坑である。北側掘形はややいびつな平面形を呈するが，長辺5m×短辺3.5m，切合い関係を有する付近での深さ約 25 cm を測る。この切合い関係を有する付近より，近代の削平を受けていることに加え，地山面である黄褐色礫混り粘土層はやや東下りの傾斜をもつため，土坑掘形は東側ほど浅くなる。土坑底面は，水平面を保ち，内部埋土は2層からなっている。上層は若干の炭を含んだ暗茶褐色・淡赤褐色土の混在する土層からなり，SD 14001 の埋土とほとんど見わけのつきにくい状態であった。内部より少量の平瓦・丸瓦・須恵器片が出土している。下層は，少量の炭を含んだ暗褐色土からなる埋土で，土坑底面より軒平瓦1・鴟尾片・須恵器杯1・かなり風化の進んだ一辺 30 cm を測る凝灰岩1を検出した。内部埋土に炭を含んでいることや，鴟尾片等が出土していること，また，SD 14001 の延長部分にあたる所から，土坑を造った時に SD 14001 を切ったため，同時に内部に埋っていた瓦類も同様に削られ，土坑内に埋ったものと考えられる。出土遺物は，すべて長岡京時代のものであるが，埋土の状態から見れば SD 14001 が完全に埋ったのち，土坑が掘削されたと考えられる。

一方，SD 14001 の延長部分は前述したように SK 14001 により削られており，また，SK 14001 東側検出面と，SD 14001 の東端底面レベルが同レベルのため精査を行ったにもかかわらずその痕跡を見いだすことはできなかった。ただ，南側に広がる整地層状を呈する土層がトレンチ東端近くまで延びていることからすれば，SD 14001 がトレンチ東端近くまで延びていた可能性はある。

4. 出 土 遺 物（図版第4　第5・6図）



第5図　出土遺物実測図

今回の調査で出土した遺物は，SD 14001 内より出土した平瓦・丸瓦がほとんどであり整理箱にして約34箱を数える。他に，軒平瓦2点・鴟尾片・須恵器片・ふいご羽口・鉄鋌などが出土した。

土器類（第5図1～4）

（1）は，ふいご羽口で，SD 14001 内の

瓦集積部分から鉄鉾とともに出土したものである。ほぼ円柱状をなすと思われるが，先端および器体の2/3を欠いている。残存長 7.5 cm を測り，中央部に約 3.5 cm 程度の孔を穿っていたと思われる。器壁は 1.5 cm を測り，先端付近は高熱を受け青灰色に焼けしまっている。

（2～4）は，須恵器杯Bで SK 14001 内より出土した。いずれも長岡京時代に比定されるものである。高台はすべて貼付高台である。高台は下方にふんばったもの（2）と，外方に張ったもの（3・4）がある。（2・4）は，底部のみの破片で，（4）は小型品であり内面をヨコなで後磨きを施す。（3）は，平坦な底部より内湾しながら立ち上がる体部を有するもので口径12.2 cm・器高4.5 cmを測る。

軒平瓦（第6図1・2）

（1）は，均整唐草文軒平瓦である。瓦当の左半部と平瓦部の一部を残す。脇区・中心飾りを欠失しているが，平城宮式6704と考えられ，中心から唐草文が3反転する。凹面は瓦当から 5 cm を横方向の箆削り後，なで調整を施す。以下は平瓦の布目痕が顕著に残る。凸面は，顎下端から頸部にかけ横方向の箆削りの後なで調整，さらに約 10 cm は，縦方向の箆削り後なで調整，以下は平瓦の布目が残る。胎土は緻密で，焼成は良，断面は灰褐色・表面は，黒色を呈する。

（2）は，均整唐草文軒平瓦である。瓦当面の中心飾りと左側に1単位・右に2単位分，平瓦部の一部を残す。中心飾りの花頭は，縦一点の基部と，下方と左右に分岐した端部とからなり，上外区の界線に接する。凹面は磨滅が著しく調整は不明である。凸面は顎下端から頸部にかけ箆削り後なで調整を施す。胎土は緻密で，焼成は甘く，断面は灰白色・表面は黒灰色を呈する。この瓦は，平城宮式6689と見られる。

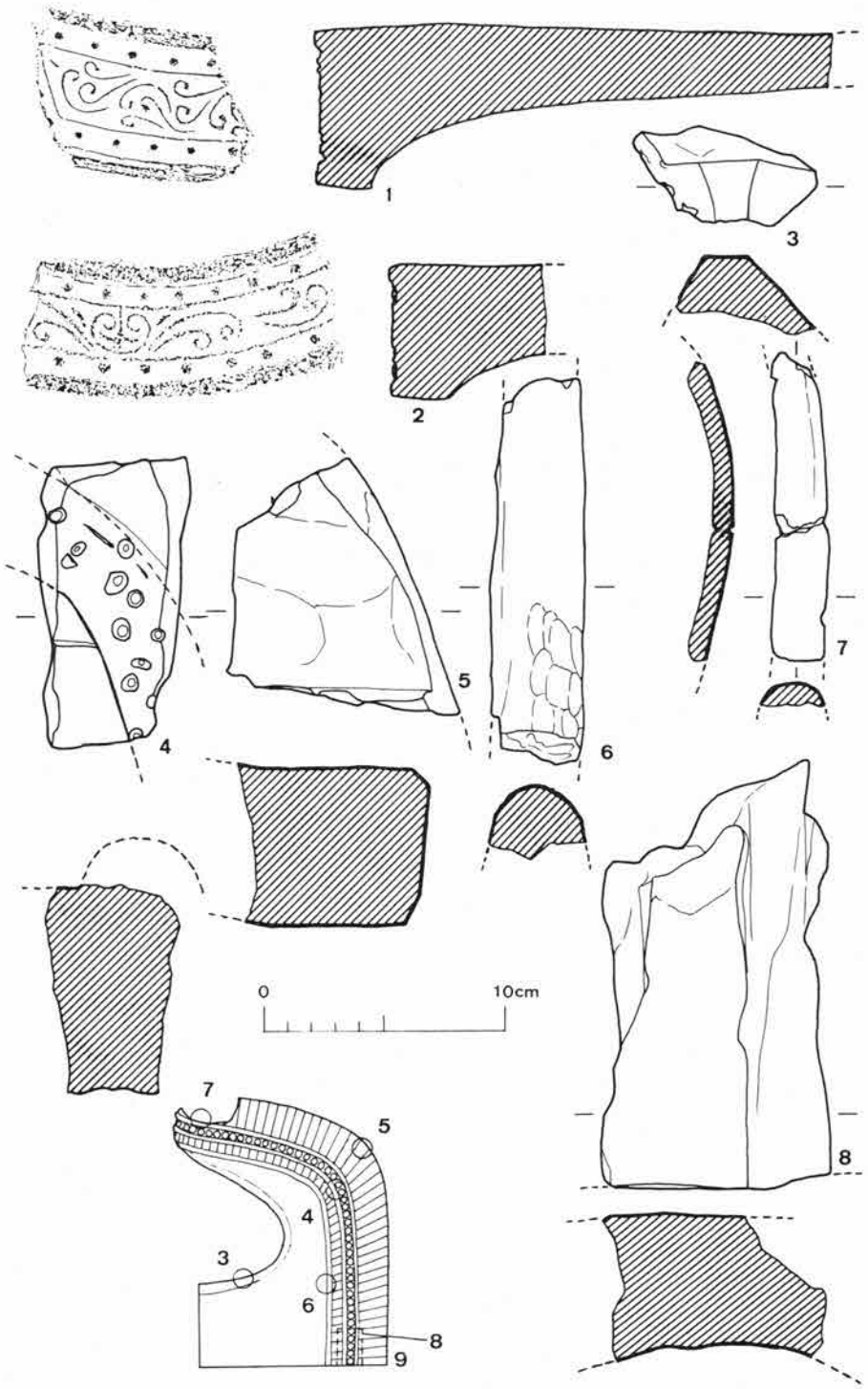
鴟尾（図版第4　第6図3～8）

SK 14001・SD 14001 から両者合わせて18点出土した。すべて同一個体と考えられるが，胴部の小破片がほとんどであり，図化することはできなかった。

（3）は，頭頂部の破片である。残存長 4 cm・幅 8 cm・厚さ 3 cm を測る。頂部は箆削り，側面は箆削り後なでる。

（4）は，内郭の屈曲部の右側面の断片と考えられる。残存長 12 cm・幅 6 cm・厚さ 9 cm を測る。内郭と外郭とを分ける縦帯を貼り付け部分より欠失している。内面をなで，外面は箆削りによる段差を明瞭に読みとることができる。

（5）は，鰭部の屈曲部の断片と思われるもので，残存長 11 cm・幅 7.5 cm・厚さ 6.5 cm を測る。鰭の一段分のみ残存しているものと思われ，両面に横方向の箆削りを，側端は，縦



第6図　出土遺物実測図（9は鴟尾片部位復元推定図）

方向の篦削りを施す。

（6）は，直線的な縦帯であるが，内郭を区画していたものか，外郭を区画していたものなのか不明である。残存長 16 cm・幅 4 cm・厚さ 3 cm を測る。下方になで調整および指おさえ痕が残る。

（7）は，（6）同様縦帯であるが，やや細身で内側に湾曲していることから頂部付近の縦帯ではないかと考えられる。残存長 13 cm・幅 2.2 cm・厚さ 1 cm を測る。全面になで調整が見られる。

（8）は，腹部の下端と思われ，やや屈曲し，底部は水平ではなく，やや傾く。残存長17.5 cm・幅 9 cm・厚さ 6 cm を測る。底部は篦削り，側面は篦削り後なで調整を施す。

以上の6断片は，いずれも表面は黒灰色・断面は淡褐色の色調を呈する。胎土は緻密であるが，2 mm 程度の砂粒を若干含む。焼成は良である。いずれの断片も正確な部位をおさえられるものではないが，（4）の断片をもとにこの鴟尾は，内郭と外郭とに分けられるものと考え，（9）の鴟尾片部位復元推定図を載せた。なお，鴟尾片部位復元推定図に付した番号は，鴟尾片実測図番号と一致する。

5. ま　と　め

今回の調査では，朝堂院西方官衙地区でも南寄りになる地点において，大きな溝 SD 14001 およびその南側に広がる整地層状の土層を検出した。この溝の性格を断定することはできなかったが，溝がほぼ二条第1小路中心線延長上に位置していることから，宮内官衙配置を考えていく上で一つの指針となるものである。また，溝内に落ち込んだ多量の瓦は，この溝の南側に瓦葺きの官衙の存在を示すもので，鴟尾片および SK 14001 内から出土した凝灰岩などとともに考えても，朝堂院にも匹敵するような礎石建物の検出された宮内第96次調査[注8]のように，礎石及び鴟尾片をそなえたかなり大きな建物の存在をも暗示している。瓦類とともに供伴したふいご羽口・鉄鋅も長岡京時代のものと考えられ，宮都造営に係る工房跡が付近に存在する可能性も指摘される。少ない調査面積のため，多くの問題を残したが，今後の調査によって SD 14001 の性格が明らかにされることを期待したい。　（増田 孝彦）

注1　山中　章ほか（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集　向日市教育委員会）1980　巻末図による

注2　注1と同じ

注3　石尾政信「長岡宮跡第97次（7 AN 15 F 地区）発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集　向日市教育委員会）1980

注4　高橋美久二「長岡宮跡昭和52年度発掘調査概要　宮内71次（7 AN 15 D　地区）」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1978）』京都府教育委員会）1978

注5　石尾政信「長岡宮跡第96次（7 AN 15 E-5 地区）～朝堂院南方官衙～発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集　向日市教育委員会）1981

注6　山中　章「長岡宮跡第90次・第96次（7 AN 15 E-Ⅲ・7 AN 15 E-V 地区）発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集　向日市教育委員会）1980　より転載（一部改変）

注7　調査補助員　山下京介・礒永和貴・小川健太郎・山崎敏昭・柱尾友一・藤本由美子・熊谷葉子・安藤　進，整理員　東山結花・雲出美智子・加藤由美

注8　注4と同じ

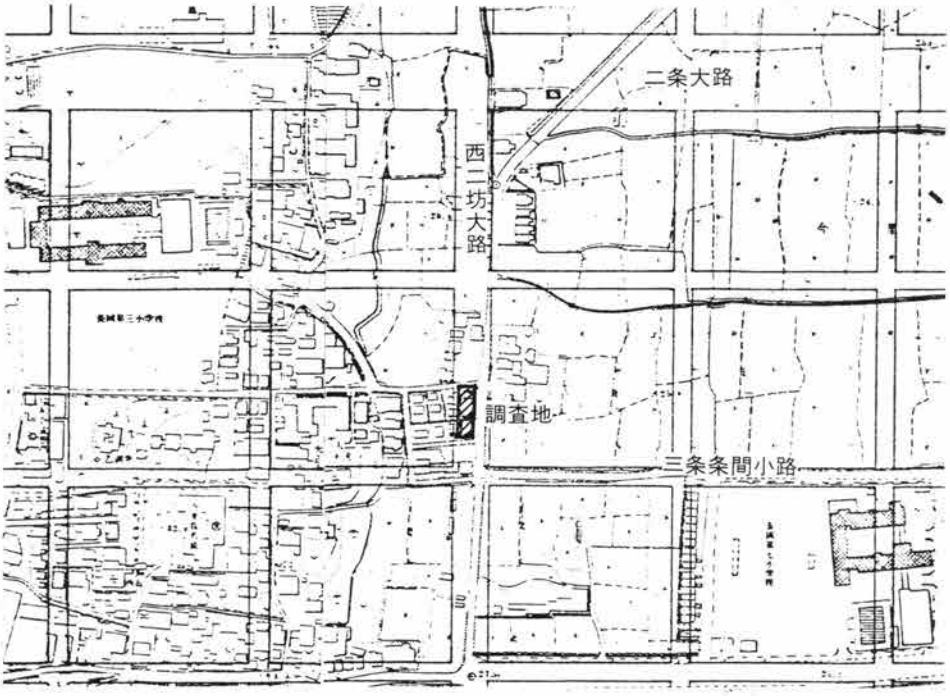
2. 長岡京跡右京第141次発掘調査概要

（7ANIST-5 地区）

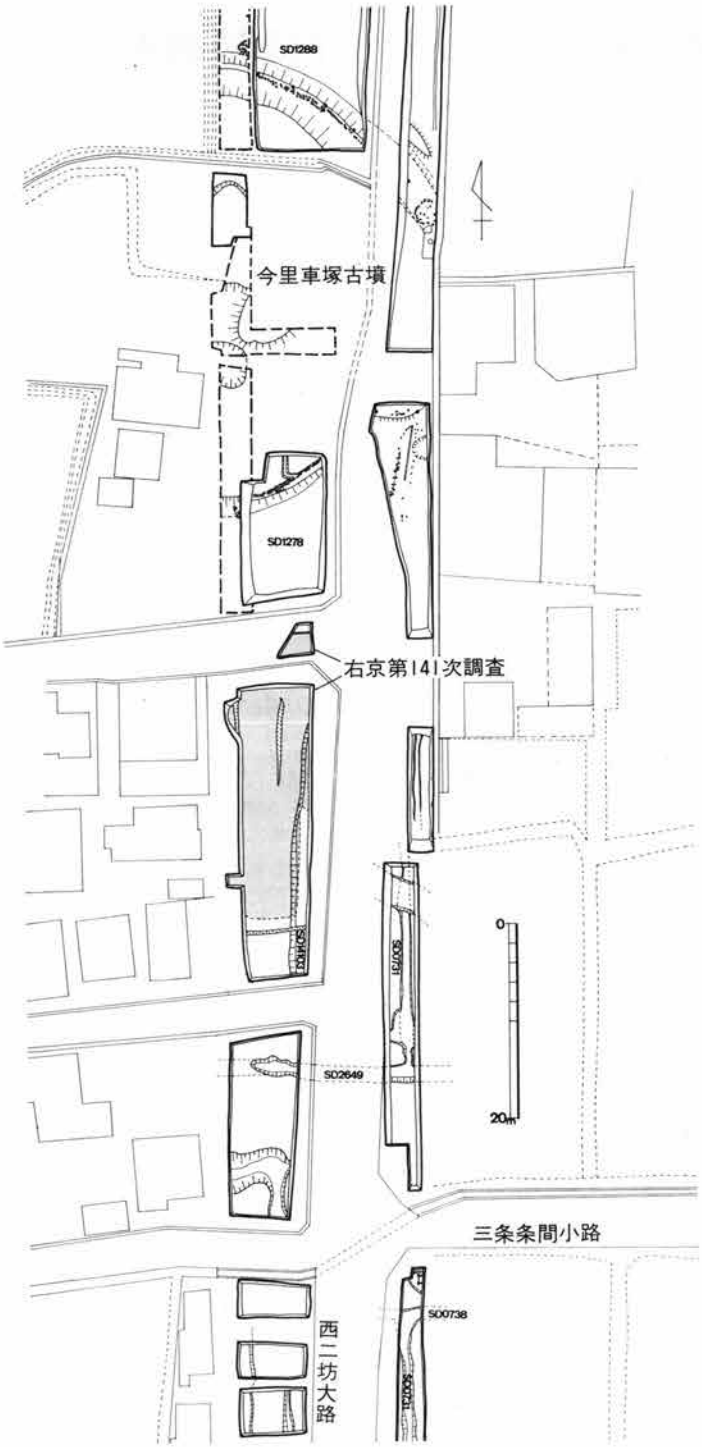
1. はじめに

この調査は，長岡京市今里地区における都市計画街路（外環状線）改良工事に伴うものである。この工事に伴う調査は，昭和52年から京都府教育委員会が実施してきたが，昭和56年度から，当調査研究センターが継承し，実施している。

調査地は，長岡京市今里３丁目にあり，長岡京域を西北から東南へと縦断する小畑川の西岸の氾濫原とそれ以西の河岸段丘との地形変換点付近に位置する。これまでの調査によって，周辺には長岡京の条坊遺構，５世紀後半の前方後円墳（今里車塚古墳），弥生時代から古墳時代にかけての集落跡（今里遺跡）等が発見されている。とりわけ，長岡京の西二坊大路・三条条間小路の両側溝が検出されたことは，長岡京の条坊復原に大きな視座を与えるものとなっている。今回の調査地は，これまでの調査成果から，西二坊大路の西側溝が推定される位置にあるばかりでなく，今里車塚古墳に南接する位置であると理解されていた。



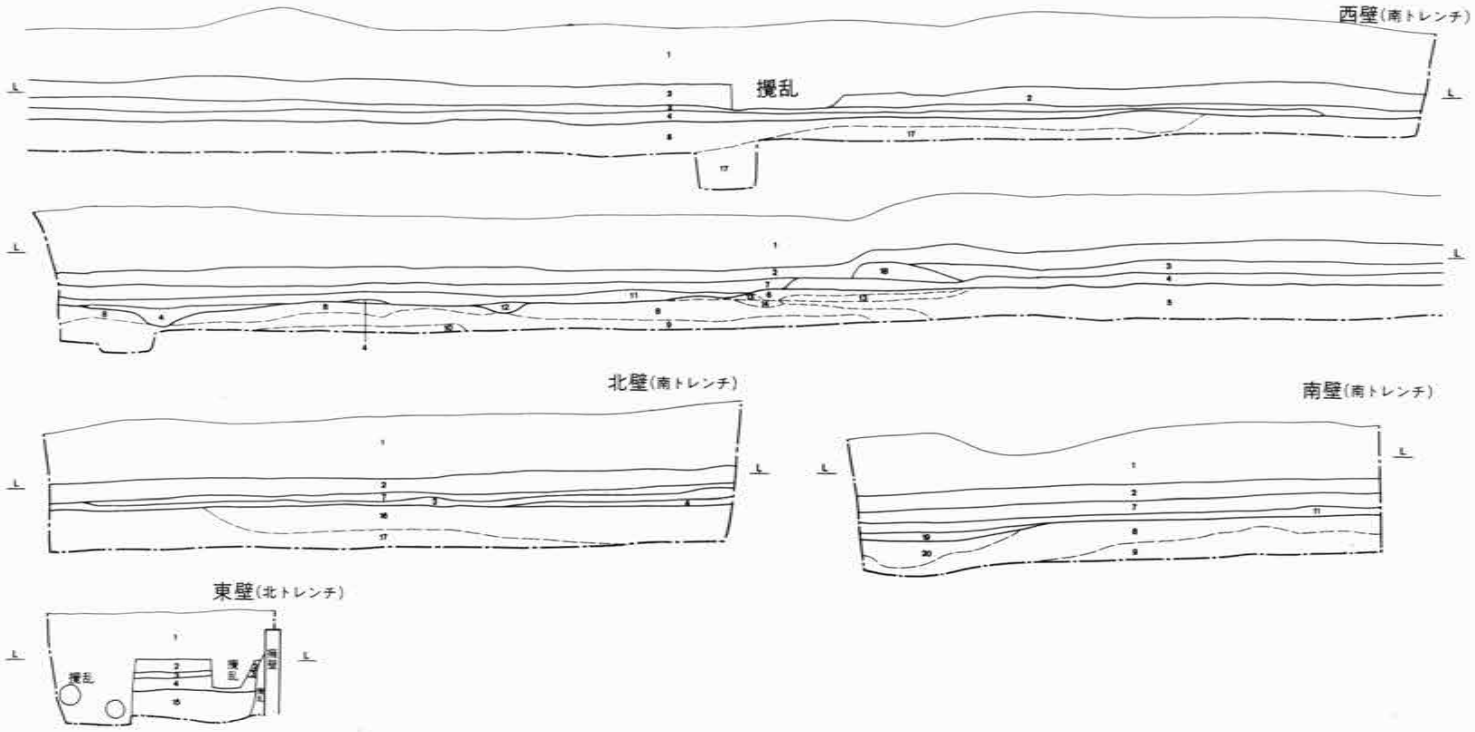
第7図　調査地位置図（1/5,000）



第8図　調査地関連図

調査は，昭和58年8月11日から10月24日まで実施し，当調査研究センター調査課・主任調査員　長谷川達・調査員　竹井治雄・山下正が現地を担当した。その間，京都府乙訓土木事務所・京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・長岡京跡発掘調査研究所・及び周辺土地所有者の方々の御協力と御指導を賜った。また，現地作業・整理作業に学生諸君の参加・協力があった。(注1) 記して謝意を述べたい。

なお，今回の調査においては，これまで使用されてきた外環状線の道路計画の軸線を利用した地区割でなく，調査地の周辺に埋設されている基準点（長岡京跡基準点52-8・X＝－



第9図　土　層　断　面　図（L＝27.0 m）

① 盛土　② 耕作土　③ 淡灰褐色土（床土）　④ 暗褐色粘質土　⑤ 灰黄褐色粘質土　⑥ 灰黄褐色土　⑦ 灰色土　⑧ 灰色砂質土　⑨ 灰色砂礫土　⑩ 青緑灰色砂質土　⑪ 灰黄色土（床土）　⑫ 灰色粘質土（溝 SD 14102 の埋土）　⑬ 黒褐色砂礫土　⑭ 暗灰色土　⑮ 暗茶褐色礫含土　⑯ 淡褐色土　⑰ 暗灰色砂礫土　⑱ 灰黄褐色粘質土　⑲ 暗灰色砂質土（溝 SD 14103 の埋土）　⑳ 灰色シルト

18473.159 km, Y＝－27929.514 km）を使用して，直接国土座標を表示することとした。(注2)

2. 調 査 経 過

今回の調査地は，当工事に伴う調査の呼称でいうところの南方部（7ANIST 地区）の北端部にあたり，(注3) 道路計画線の西寄りにある。調査は，まず空地（旧宅地）部分から着手し，それが終了した後，空地の北を走る東西の道路部分に入った。前者（南トレンチ）は，南北30 m, 東西 6 m～8 m と細長いトレンチであり，後者（北トレンチ）は，周囲に既設管が存在すること，進入路を確保する必要があったことから，南北 3 m, 東西 2 m～4 m の台形状のトレンチとなった。

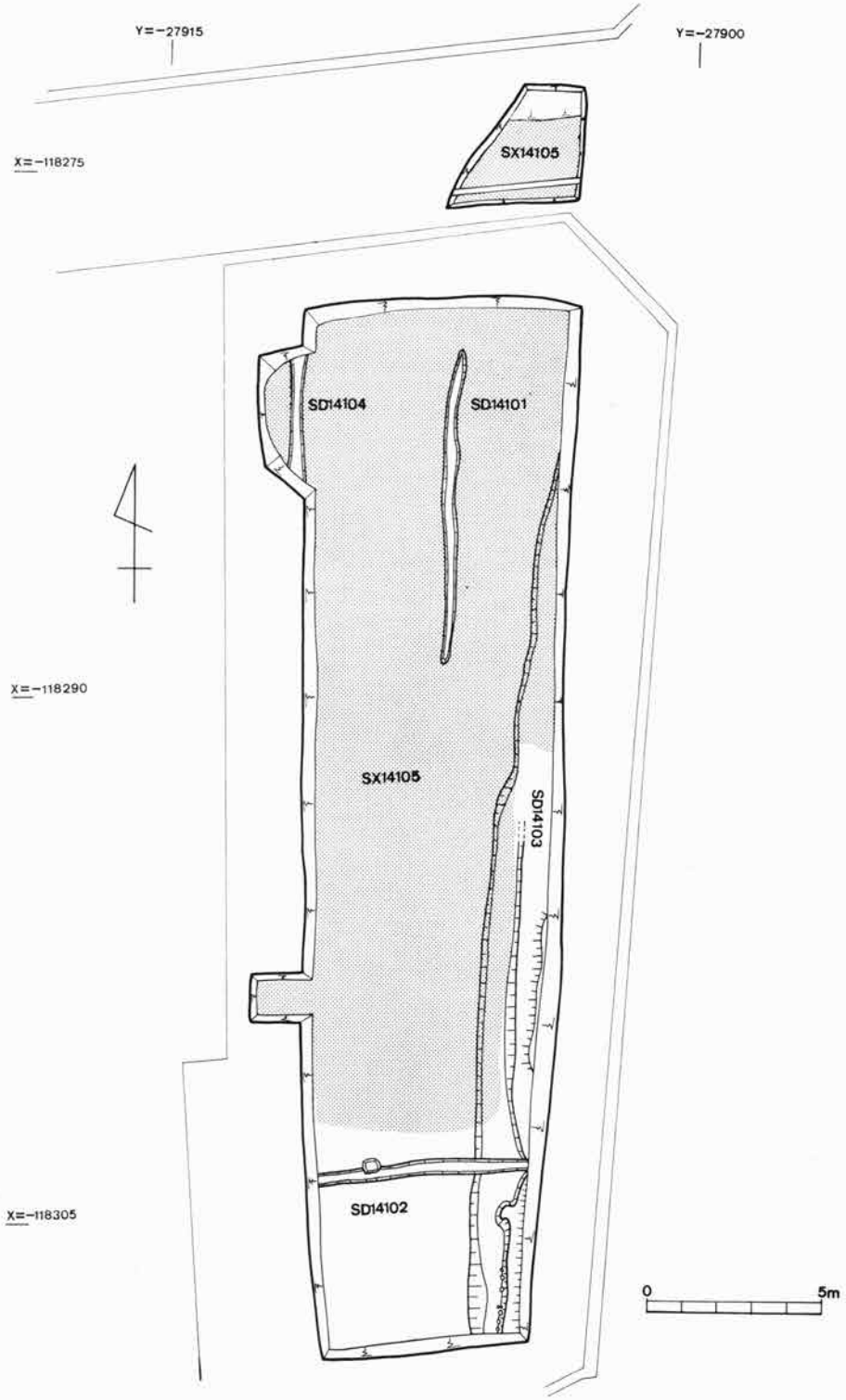
南トレンチは，0.5 m 前後の盛土を除いて，旧水田面があり，その耕作土・床土をはいだ直下で，弥生時代から中世に至るまでの遺物を含む暗褐色粘質土が広がることが確認された。そのため重機によって床土までを排土し，その後人力によって掘削を行った。その結果，暗褐色粘質土をはいだ直下で石溜り（SX 14105）を検出し，トレンチの南側の一部をのぞきトレンチ全体に広がることが確認された。この石溜りの面で，溝 SD 14101・04 を検出し，さらに石溜りを取りのぞいた面(灰黄褐色粘質土・暗灰色砂礫土)で南北に走る溝 SD 14103 を検出した。石溜りの検出されなかったトレンチの南側部分では，旧水田面が北側に比べ 0.2 m 程下がっており，床土直下には，暗褐色粘質土があまり見られず，灰色砂質土が地山を形成していた。この灰色砂質土の面で溝 SD 14102 を検出した。

北トレンチは，その位置から今里車塚古墳に関連した遺構，とりわけ古墳の周濠の外堤部の検出を主目的として設定したものであったが，トレンチの北側には水道の埋設管が，現地表下 1.0 m 前後まで入り，またトレンチの南側には擁壁が残るという状態で，実際に調査が行えたのは，極めて小さな面積であった。アスファルト・盛土（バラス）を除いた直下で旧水田面があり，基本的な層序は，南トレンチの北側と同様のものであった。調査の結果，石溜り SX 14105 の北への延長を確認したのみで，今里車塚古墳に関わる遺構は検出できなかった。

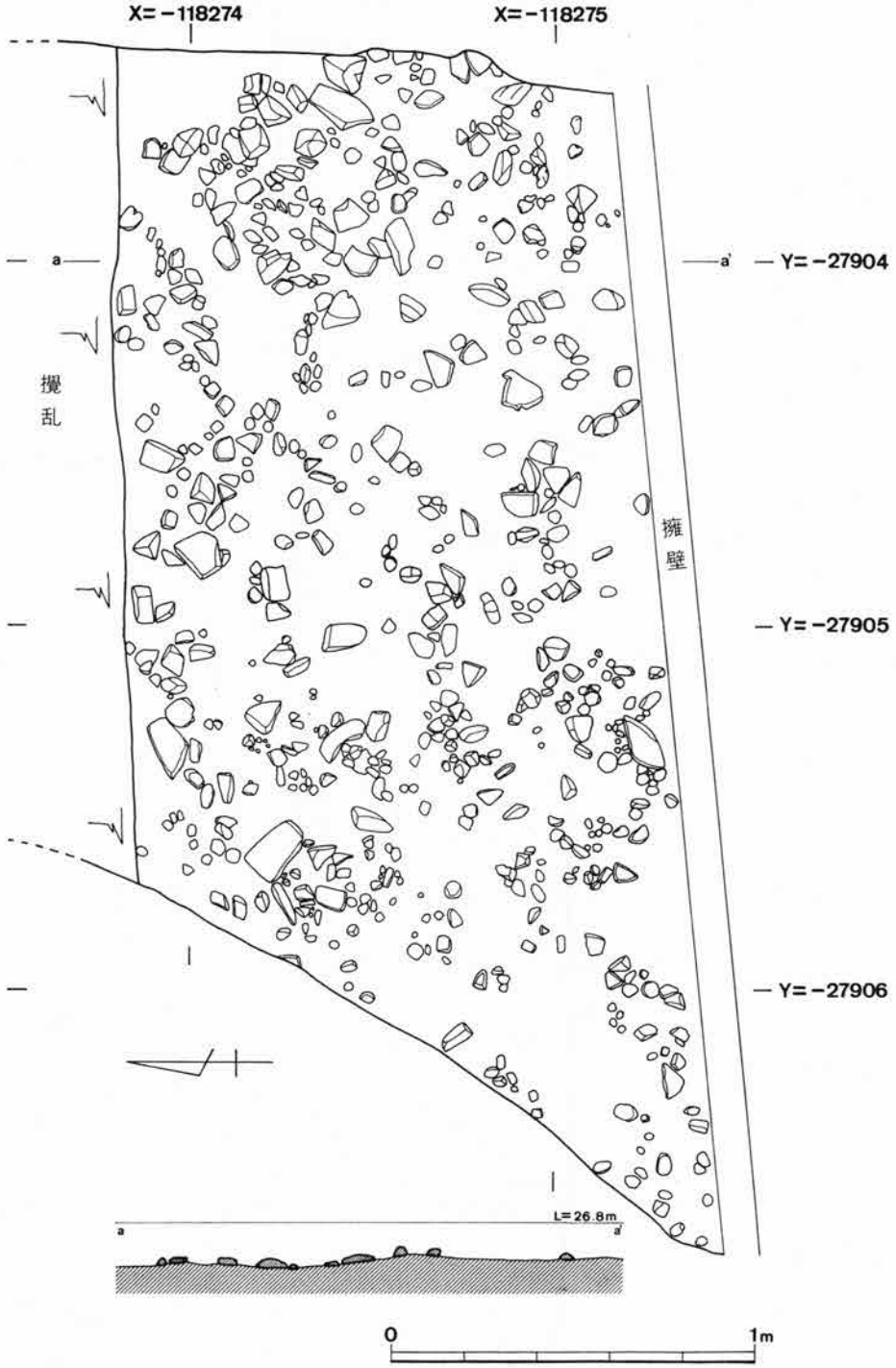
3. 検 出 遺 構

今回の調査で検出した遺構は，長岡京期のものと思われる溝 SD 14103, 中世の溝 SD14101・02・05，石溜り SX 14105 である。以下その概略を記す。

〔溝 SD 14101〕 石溜り SX 14105 を切り込んで形成された南北溝で，幅 0.3 m・深さ 0.15 m あり，全長 9 m を測る。溝中から瓦器片が出土している。


Y=−27915
Y=−27900
X=−118275
X=−118290
X=−118305
SX14105
SD14104
SD14101
SX14105
SD14103
SD14102
0
5m

第10図　調 査 地 平 面 図



第11図　石溜り SX 14505（北トレンチ）

〔溝 SD 14102〕 トレンチの南側寄りで検出した東西溝。幅 0.3 m・深さ 0.2 m あり，埋土は灰色粘質土で，その中から瓦器片が出土している。

〔溝 SD 14103〕 トレンチの東側で検出した南北溝。幅 1.2～1.5 m・深さ 0.1～0.2 m で溝底は凹凸がある。溝の中には，暗灰色砂質土が埋もれ，その中から須恵器・土師器の細片とともに平城宮6721系の軒平瓦が出土した。溝はその北側で見て真南北方向から5°前後東へ振っているが，溝の南隅での中心の国土座標は，Y＝－27,905.05 である。

〔溝 SD 14104〕 溝 SD 14101 と同様に石溜りの面で検出した南北溝。溝中には瓦器の細片が入る。

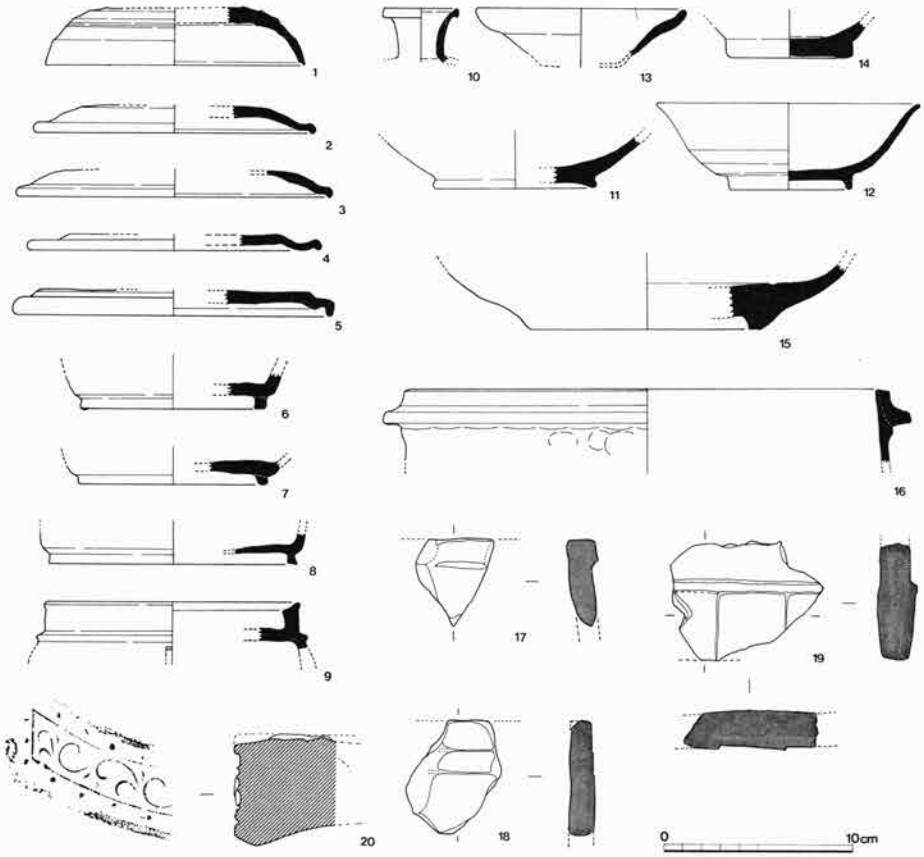
〔石溜り SX 14105〕 調査地の南側の幾分地形が下がった所をのぞいて，トレンチの全体に広がり，地山を形成する灰黄色粘質土・暗灰色砂礫土の直上で検出した。石は，河原石で砂利程度のものから 20 cm 前後の石まで所によって疎密はあるものの，全面に敷きつめられていた。石とともに須恵器・土師器・瓦器・磁器（白磁）の小片が出土しており，また瓦器を含む溝 SD 14101 が，この石溜りの南で検出されていることから中世に所属するものと考えられる。

他に，溝 SD 14101 を切る土坑があり，東西 0.3 m・南北 0.2 m・深さ 5 cm を測る。坑内から遺物は出土していないが，切合い関係から中世の柱穴等が考えられる。

4. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は，弥生時代から中世に至るまでのものであるが，少量で細片が多く，また確実に遺構に伴うものは，20の軒平瓦のみである。他はすべて水田床土やその直下の暗褐色粘質土から出土したものである。

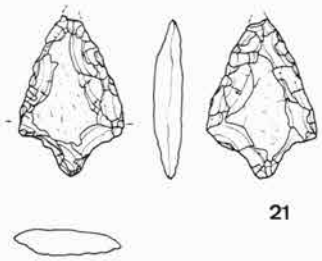
1（須恵器杯蓋）は，たちあがりをもつ杯身とセットになる段階のもので，天井部と口縁部との境にやや稜をもち，天井部は篦削りを行う。2～5（須恵器蓋）は，平らな天井部とS字型の端部をもつ。5の内面には，墨の付着がみられ，研磨され平滑であることから転用硯と考えられる。6～8（須恵器杯）は，平坦な底部に高台を貼り付けるものである。9（須恵器硯）は，円形の硯面をもち，台脚には透しをもつ。硯面の海と陸の区別は不明瞭である。楢崎彰一氏の分類[注4]に従えば，円面硯の透脚硯である。10（須恵器壺）は，外反する口縁の端部をおりまげ，上下端を断面三角形にして突出させている。口頸部と体部との接合部分は不明である。11（須恵器椀）は，底部を回転糸切りした後高台部分を削り出している。12（灰釉椀）は，口径 14.0 cm・器高 4.6 cm を測り，平坦な底部から内湾しながらゆるやかにたちあがる体部をもち，口縁端部はやや外反させる。高台は，断面三角形を呈し，貼り付ける。

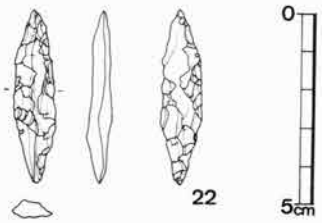


第12図　出　土　遺　物 (1)
1～8，10，12：須恵器　9：陶硯　12：灰釉陶器　13：土師器　14：白磁　15：青磁
16：瓦器　17～19：埴輪（形象埴輪）　20：軒平瓦

内面にのみつけがけと思われる釉を施し，明灰色を呈する。13（土師器皿）は，口縁部を強い横なでによってやや内湾気味に丸く収めている。14（白磁椀）は，内面にのみ乳白色の釉が施されており，貫入も見られる。口縁部は欠失しているが，玉縁状口縁を有するものかと思われる。15（青磁盤）は，内外面ともに緑灰色の釉が施され貫入もみられる。内面には 5 mm 幅の蓮弁文を施し，見込み部分には稜をもつ。16（瓦器羽釜）は，口縁部に直交するかたちで鍔をめぐらし，鍔の下方には貼り付け痕が残る。17・18・19（形象埴輪）は，内外面とも淡灰褐色を呈し，外面には凹凸がみられる。家形埴輪の断片かと考えられる。

20(瓦)は，平城宮6721系の軒平瓦で，溝 SD 14103 から出土した。凹面には横方向の，凸面には縦方向の削りが施され，また瓦当面下 1 cm は，横方向の削りによって面取りを行っている。21・22（石器）は，サヌカイト製の石鏃である。21は，基辺が突出し，茎部をも





第13図　出土遺物(2)

つ「凸基有茎式」(注5)であり，先端が欠失している。22は，基辺が突出し，茎部をもたない「凸基無茎式」であり，先端は尖り気味である。

5. まとめ

今回の調査では，当初期待された今里車塚古墳に関わる遺構（とくに周濠外堤部）を検出することはできなかった。右京第12次・26次の調査において，今里車塚古墳の北側周濠が検出され，幅 12.0 m・深さ 0.7 m の規模をもつことが確認されていたため，古墳に南接する位置にある現道路部分にもトレンチ（北トレンチ）を入れたが，外堤部を形成すると思われる地形の変化は窺えなかった。

溝 SD 14103 は，その位置から長岡京の西二坊大路の西側溝にあたる可能性がある。ただ右京第7次・12次・26次の各調査で検出された西二坊大路の両側溝の位置関係から考えると今回検出した溝 SD 14103 は，推定される位置から東へ 5～6 m 程ずれるため，(注6)西二坊大路の西側溝とは断定し得ない。

遺物は，遺構に伴うものも少なく，細片が多いが，弥生時代から中世に至るまでのものがあり，遺構は検出できなかったが，周辺にそれに関連した遺跡・遺構の存在を窺わしめる資料といえる。

（山下　正）

注1　篠原俊一・浜口和宏・藤沢達也・木ノ下治男・小滝初代・宮本佐和子・谷地明子・吉沢素子・杉本和子・戸波みどり・神山久子・臼井千映子・竹原京子・赤司　紫・山本弥生（敬称略）

注2　外環状線の道路計画の軸線上に設置されていた地区割のためのポイントが，ほとんど消失していたためである。

注3　高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会）1979

注4　楢崎彰一「日本古代の陶硯—とくに分類について—」(『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　平凡社）1982

注5　『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会　1964　の石器分類に従う。

注6　右京第7次・12次・26次の一連の調査によって，西二坊大路の両側溝が検出され，両側溝の心々間距離が 16.7 m，路面幅で 15.4 m あることが確認されている。西二坊大路の東側溝である SD 0731 は，Y＝－27895.29～－27895.52 km の間にあり，今回検出した SD 14103 がY＝－27905.5 km（溝の南隅）であるから，仮に SD 14103 を西側溝とした場合，西二坊大路の路面幅は，10 m 前後と小さくなってしまう。

高橋美久二ほか　前掲注３
高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-2）』京都府教育委員会）1980

3. 長岡京跡右京第148次発掘調査概要

（7ANKHT-2地区）

1. はじめに

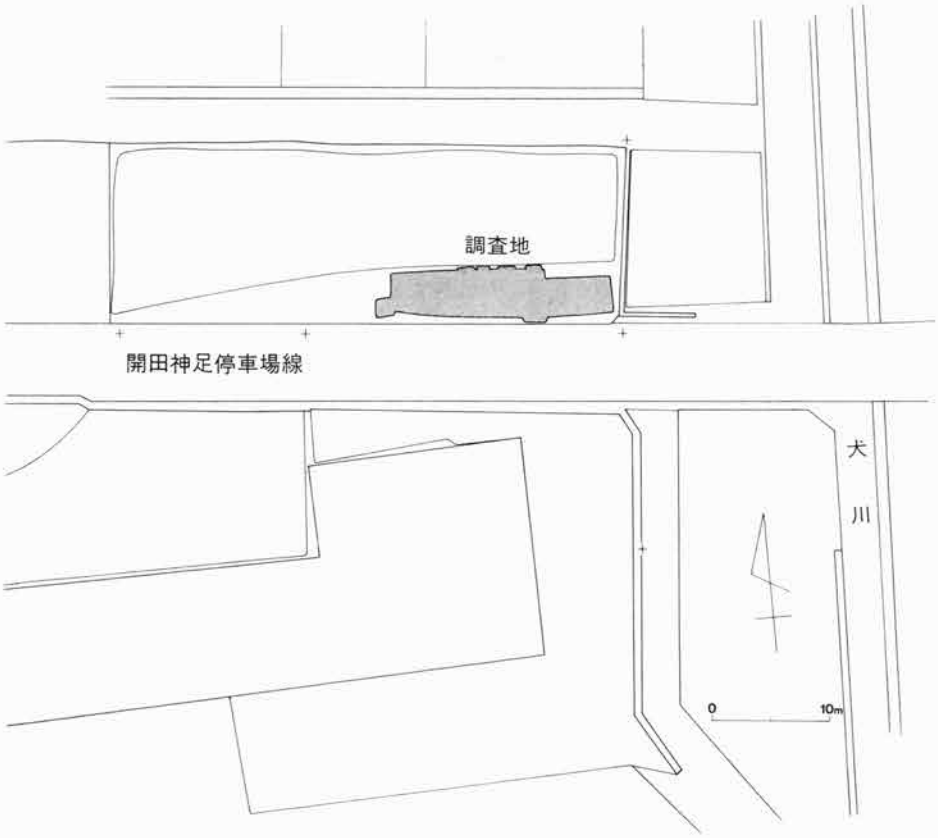
これは，長岡京市開田3丁目に当る府道開田神足停車場線を拡幅し，交通安全施設（歩道）を設ける工事に先立ち実施した発掘調査の概要である。京都府乙訓土木事務所の依頼を受け，当調査研究センター調査課・主任調査員　長谷川達，同調査員　竹井治雄・黒坪一樹が現地調査を担当した。

調査地は，長岡京跡の条坊復原図によれば右京六条二坊八町に推定され，北西部付近で五条大路（東西）と西三坊坊間小路（南北）が交差する。そして，今回の調査地を含む開田地区は，これまで多くの貴重な考古学的資料が調査・報告されてきている。わけても重要なものに，古墳時代後期の方墳と推定される塚本古墳周濠部の調査(注1)や五条大路の南北両側側溝(注2)や掘立柱建物跡(注3)の検出等がある。また，付近を南北方向に流れる犬川の存在も，地勢的に見のがせない。北西部に広がる西山丘陵が，南東方向に緩やかに傾斜しつつ，このあたりで標高約20mとほぼ平坦地（扇状地性低地）になる。

府道脇の狭い休閑地であった調査地の掘削面積は，約75m²である。調査期間は，昭和58年11月10日から同年12月24日までである。この間には長岡京跡発掘調査研究所の中山修一氏をはじめ，(財)長岡京市埋蔵文化財センターの岩崎誠，木村泰彦両氏からいろいろと御教示を受けた。現地作業および整理作業においても，多くの方々の御協力を得た(注4)。心から感謝の意を表したい。

第14図　調査地位置図（1/50,000）

第15図　調査地近景（南東方面より）



第16図　調　査　地　周　辺　図

2. 調　査　経　過

調査は先ず，盛土と水田耕作土を重機で排除し，床土直下の面を削平することから始めた。発掘区東側は，耕作土・床土の堆積があまり明確でなく，約 40 cm の盛土（一部分は下位に耕作土，床土を認める）直下で暗茶褐色粘質土が薄く堆積し，これより下では黄褐色砂礫（地山）が厚く認められた。

西側を掘り進むにつれて，南北，東西にそれぞれ平行して走る細い溝を検出した。包含層およびこれらの溝からは中世の瓦器椀片や陶器片に混って，長岡京期の遺物も出土した。この溝を記録した後に，床土をすべて除去すると，暗茶褐色粘質土の面になる。西にいくにつれて緩やかに下がるこの面で，遺構と遺物の検出に努めた。発掘区のほぼ中央で東西方向の柱穴列を確認した。暗茶褐色粘質土の面から掘り込まれた同系色の柱穴の埋土は，わかりにくかった。ただ，抜き取り痕らしき黄褐色砂混り粘質土の存在が，位置決定の目印となった。

東西6つの柱穴が明らかとなったが，最終的な規模（間数）を確定するため，発掘区を可能な限り拡張した。北側は畦ぎりぎりまで広げ，南の柱列に平行する柱穴の有無を調べた。この結果，さらに6つの柱穴の存在を認めた。また，発掘区南西隅と南側の一部を拡張したが，柱穴の痕跡は認められなかった。（既にアスファルト道路に接して発掘区があるため，全体の拡張は望めず，最も東の柱列に限り，南への続きを調べた）

この掘立柱建物跡（東西5間，南北1間分）の検出と共に，建物の最も東側の地点で柱穴によって切られた1条の溝（SD 14801）を検出した。

柱穴のたち割り観察をした後，暗茶褐色粘質土を全体に剝ぎ取り，黄褐色砂礫（地山）面で遺構・遺物の有無を確認する作業に入った。打製石斧の小片が採取されたが，遺構は存在しなかった。壁面直下のたち割りを行い，断面の最終的な観察，実測の後，12月24日にはすべての作業を終えた。

今回の調査では，上層遺構として床土直下で中世の溝9条，土坑1基を，下層遺構として暗茶褐色粘質土面より掘立柱建物1基と溝1条をそれぞれ検出した。　（黒坪 一樹）

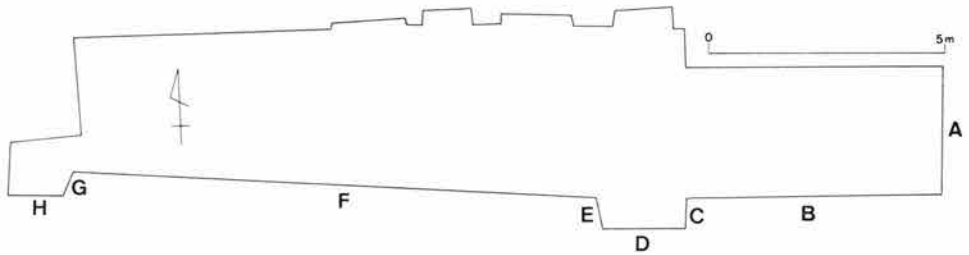
3. 調 査 概 要

(1) 層　　位

狭い発掘区にもかかわらず，西側と東側では土層の堆積状況に大きな差がある。層序区分は第18図に示すとおりである。東壁（A）と南壁西端（H）を例にとり，発掘区の基本的な層位を観察しておく。

南壁（H）の層位を列記すると，盛土（Ⅰ層），暗青灰色粘土（Ⅱ層），灰褐色粘質土（Ⅷ層），茶褐色粘質土（Ⅸ層），暗茶褐色粘質土（Ⅹ層），暗灰褐色粘（質）土（XI層），黄褐色砂（Ⅴ層），灰黄褐色砂礫（Ⅶ層）となる。

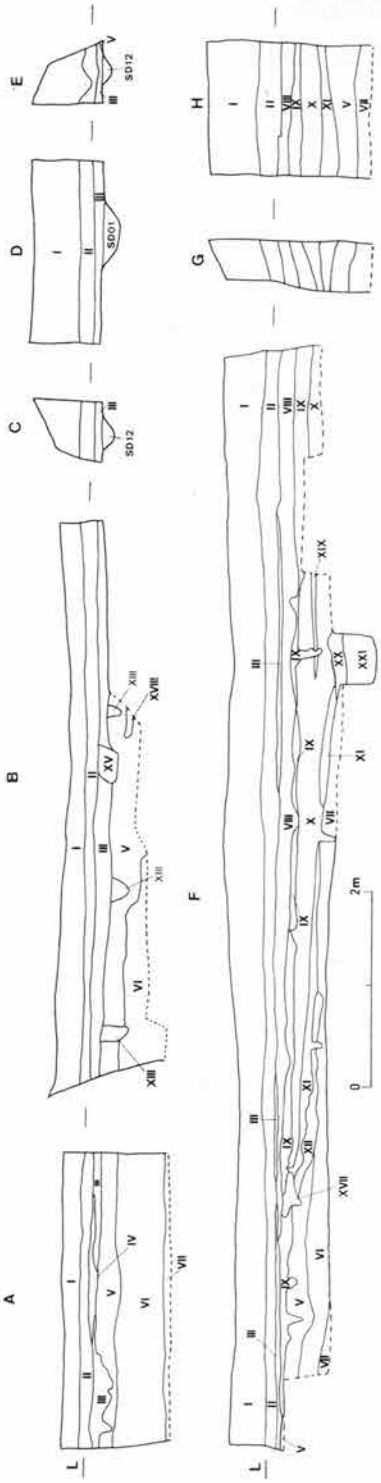
Ⅰ層は，近現代に新しく盛られた土である。コンクリート，瓦礫等を含む。Ⅱ層は，チャートの小礫を疎らに含んでいるが，水田耕作土である。Ⅷ層は，水田床土である。植物質遺



第17図　壁 面 位 置 概 念 図

存体が酸化したものか，赤褐色の班点が下位にて散見される。西側のⅢ層とほぼ同質であるが，このⅧ層では赤い鉄分の沈澱が認められない。Ⅸ層は，長岡京期に該当するⅩ層の上に薄く堆積している。西に向って緩やかに傾斜する。厚さは平均約 7 cm で，中世の遺物に混って，長岡京期の須恵器・土師器・瓦片・土馬等が出土している。

Ⅹ層は，長岡京期の層である。掘立柱建物の柱穴はすべてこの層から掘り込まれている。平均約 15 cm の厚さで堆積し，西にいくにつれて厚く安定した層となる。なお，帯状に薄い層 (XIX) がこの層の中間部に存在している。柱穴を掘り込む際に設けられた整地面と考えるが，実態はよくわからない。このⅩ層からは，長岡京期の須恵器杯身，杯蓋等が出土している。Ⅺ層は，Ⅹ層に比べやや色調が淡く，下位にいくほど漸移的に黄色味を帯びてくる。東側では認められず，遺物の出土もみられない。Ⅴ層は，完全な粗砂層となる。打製石斧の小片が 1 点出土したのみで，時期については言及できない。西にいくほど傾斜してきて厚く堆積する。西端（H壁）では約 15 cm である。Ⅶ層は，灰黄褐色砂礫層で所謂「地山」である。直径 2～3 cm の礫を比較的多量に含み，遺物の出土は全くみられない。



第18図　土　層　断　面　実　測　図（L＝18.200m）

Ⅰ：盛土　Ⅱ：暗青灰色粘土（旧耕作土）　Ⅲ：暗灰褐色粘質土（床土）　Ⅳ：淡褐色粘質土　Ⅴ：黄褐色砂　Ⅵ：明黄褐色粘質土
Ⅶ：灰黄褐色砂礫　Ⅷ：灰褐色粘質土　Ⅸ：茶褐色粘質土　Ⅹ：暗茶褐色粘(質)土　Ⅺ：暗灰褐色粘質土　Ⅻ：灰褐色(細砂混り)土
XIII：暗赤褐色粘土（XIV～XVIIはこれと同質）　XVIII：灰褐色砂粒，XIX：濃暗茶褐色粘土，XX：暗青灰色砂礫　XXI：青灰色砂礫

東壁(A)の説明に入ろう。上から順に層位を列記すると，盛土（Ⅰ層），暗青灰色粘土（Ⅱ層），暗灰褐色粘質土（Ⅲ層），黄褐色砂（Ⅴ層），明黄褐色粘質土（Ⅵ層），灰黄褐色砂礫（Ⅶ層）となる。南壁西端で見られたⅨ層やⅩ層は存在しない。わずかに薄く残存している耕作土，床土の下はすぐ，遺物を全く含まない明黄褐色粘質土で，地山に至るまで厚く堆積している。このⅥ層は，ガリガリの黒色斑粒（マンガンか）を部分的に含んでいる。犬川の氾濫により形成された層と考える。

層位の説明は以上のとおりである。掘立柱建物跡の最も東の柱列あたりから西に向って，暗茶褐色系の粘土や粘質土の堆積が認められ，建立の際に全体を整地したようである。建物部分に最も厚く暗茶褐色粘質土が堆積している。　（宮本 佐和子）

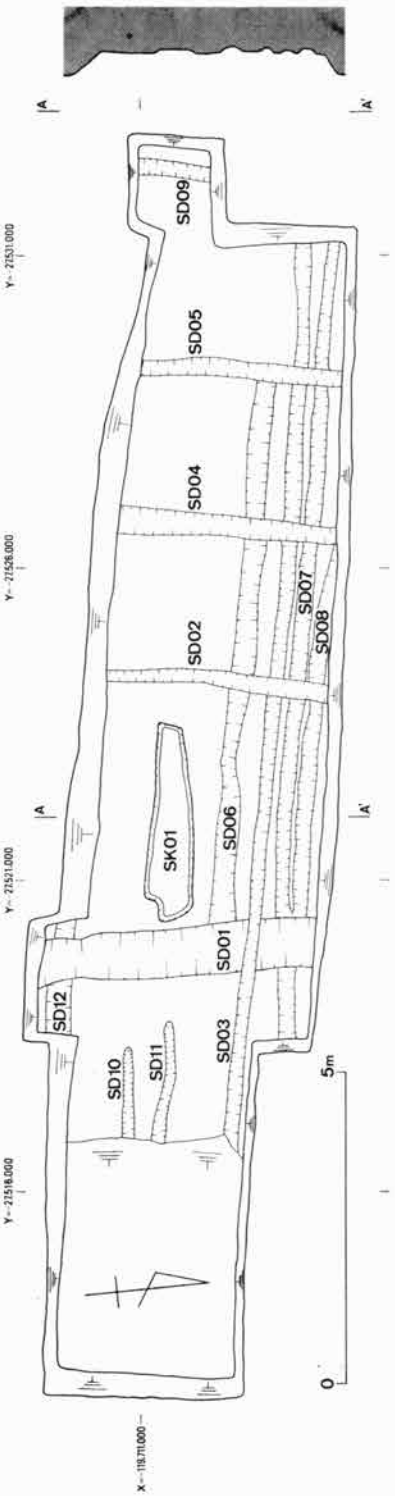
(2) 遺　　構

今回検出した遺構は，次のとおりである。

溝状遺構		中世
土坑１基		中世
掘立柱建物１棟	長岡京期	
溝 (SD 14801)	奈良時代	

溝状遺構，土坑を上層遺構，掘立柱建物以下を下層遺構として理解し，説明していきたい。

溝状遺構は，床土下部を掘り込んだもので，南北方向のSD 02・04・05・09，東西方向のSD03・06・07・08・12がある。すべて幅20 cm・深さ 10cm 程で，南北方向のものは，約 2.5～3 m 間隔で平行して存在している。



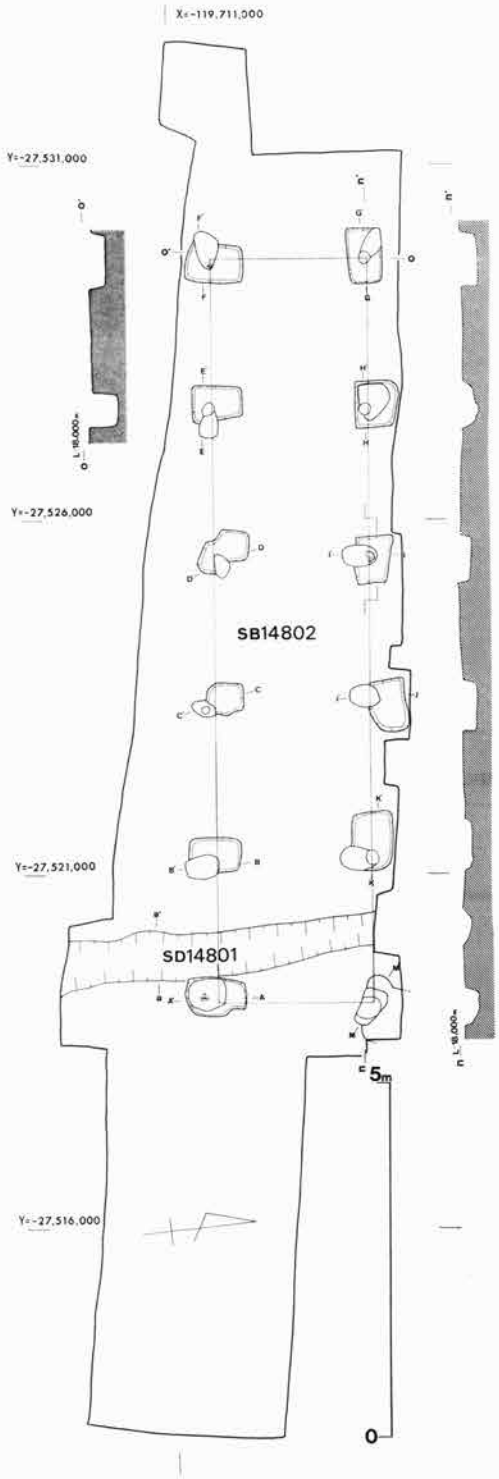
第19図　発掘区内遺構検出状況①（主として上層遺構）遺構番号はすべて次数省略

埋土は，灰褐色土（床土とほぼ同質）である。中からは，中世の瓦器椀小片をはじめ，長岡京期の須恵器・土師器片等が出土した。

なお，SD 10・11 は以上のものと性格を異にする。深さは約 8 cm・幅は最大約 10 cm で，断面形はV字を呈している。（他の SD の断面形はすべて，半円形に近い。）埋土は，暗褐色粘土でやや赤味を帯びる。ガリガリで黒褐色の鉱物（マンガンか）を含む明黄褐色粘質土から掘り込まれている。

これらの溝状遺構（SD 10・11 は除く）は，中世の畑作の際に設けられた灌漑用の溝と推察し得る。また，畝と畝との間の窪みとも考えられるが，仮にそうであっても，畝が遺構面にどういった形で表われるかについて不明な点が多い。今後，畝・畦畔・溝といった遺構についても慎重な検討を行い，多くの類例とあわせて考慮する必要がある。

土坑 (SK 01) は，細長い不定形なものである。長軸約 3.2 m，短軸約 0.7 m，深さ約 15 cm の規模である。上からの削平をひどく受けたのか，極めて浅いものと言える。埋土はやや赤味がかった暗褐色粘質土である。床土直下の層から検出しており，遺物は若干の土師器細片に混って，長岡京期の須恵器杯蓋片等も出土している。



第20図　発掘区内遺構検出状況②（下層遺構）

下層遺構とした掘立柱建物（5間×1間分）は，約7尺(2.1 m)の柱間規模を有する。各々の柱の形状や長・短軸の向きはまちまちであるが，東西方向の並び方をみると，南辺がほぼ直線的に揃えられている様である。残存する深さは，平均20 cm 。削平を受けて浅いものが多く，中には15 cm に達しないものもある。このため柱芯を明確にし得ないものもあった。埋土は，第21図に示したとおりである。個別の堆積状況の記載は省くが，暗茶褐色粘質土（X層）の面から掘り込まれ，主に暗茶褐色粘土や黒褐色粘土の混在あるいは重層した状況を呈している。そして，抜き取り痕には黄褐色粘質砂（地山に類似）が詰っており，ここから長岡京期の土師器皿・須恵器杯蓋・高杯脚部・打製石斧片等が出土している。

溝 (SD 14801) は，掘立柱建物跡の最も東端の柱列に切られて，幅約50 cm，深さ約30 cm の規模で存在する。残りは良好で，暗赤褐色粘土と青灰色砂礫（底近く）の埋土である（第22図)。遺物は，須恵質の埴輪片をはじめ，ミニチュアかまど？・須恵器甕，杯などが出土している。これらの遺物は，塚本古墳の時期（古墳時代後期）から奈良時代にわたるもので，かなりの時期幅がある。（黒坪 一樹・城田 正博）

(3) 遺　　物

溝状遺構中の遺物（第23図　1～3）

（1）は土師器皿である。表面の剝落が著しく，調整痕はよくわからない。口径約8 cm で内外面とも手ずくね整形の後なでにて仕上げられているようである。（2）と（3）は須恵器杯蓋と杯Bである。（2）は細片であるため，やや全体径が不正確であるが，約13 cm を測る。ロクロ回転なでにより仕上げられている。胎土・焼成とも良好である。本遺構中からは，この他瓦器小片も出土しているが，あまりに小片であるため図化していない。

溝 (SD 14801) 中の遺物（同図　4～8）

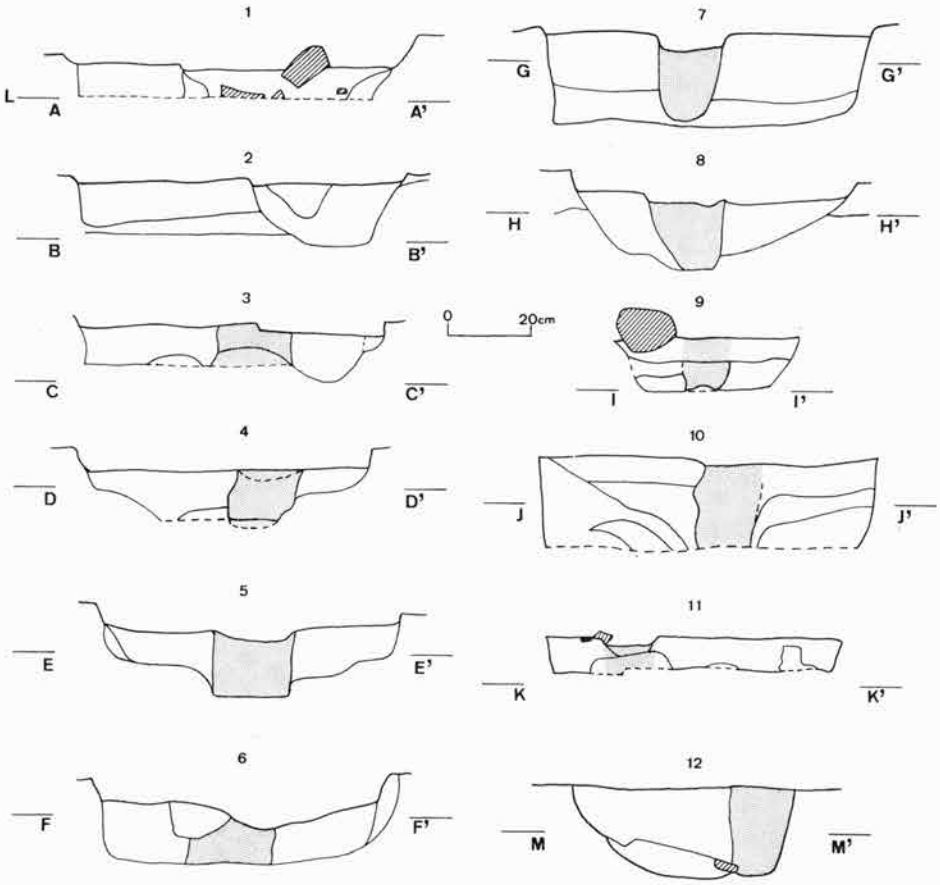
（4）は須恵質の埴輪片である。表面にはたて刷毛目痕を認めるが，下半分はなで消されている。鍔に沿った窪み（凹状）は幅広いが，つくりは粗い。焼成は固いが，胎土はやや粗い。

（5）・（6）・（8）は須恵器杯身・杯蓋である。（8）は所謂杯Bであるが，口縁径が約18 cm と大きい。底部外面に篦切り痕をとどめ，他は回転なでによる整形である。

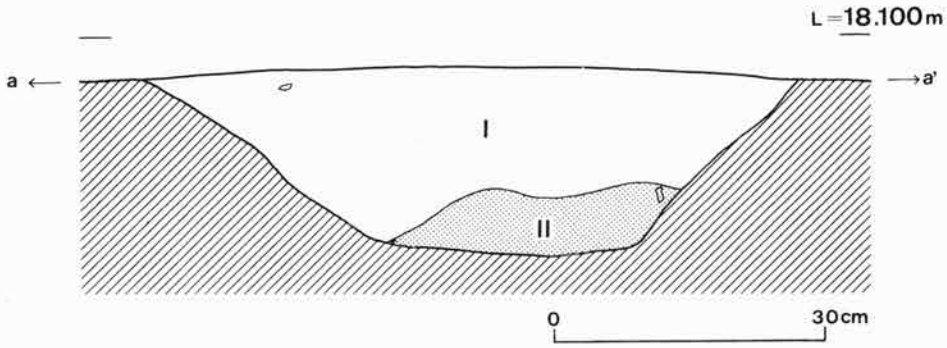
（7）は土師器皿である。風化が著しいが，外面は削りで内面はなでによる調整である。口縁径は約15.5 cm。このほかに，須恵器甕片，かまど（ミニチュア？）等の遺物も出土している。

土坑中の遺物（同図　18・19）

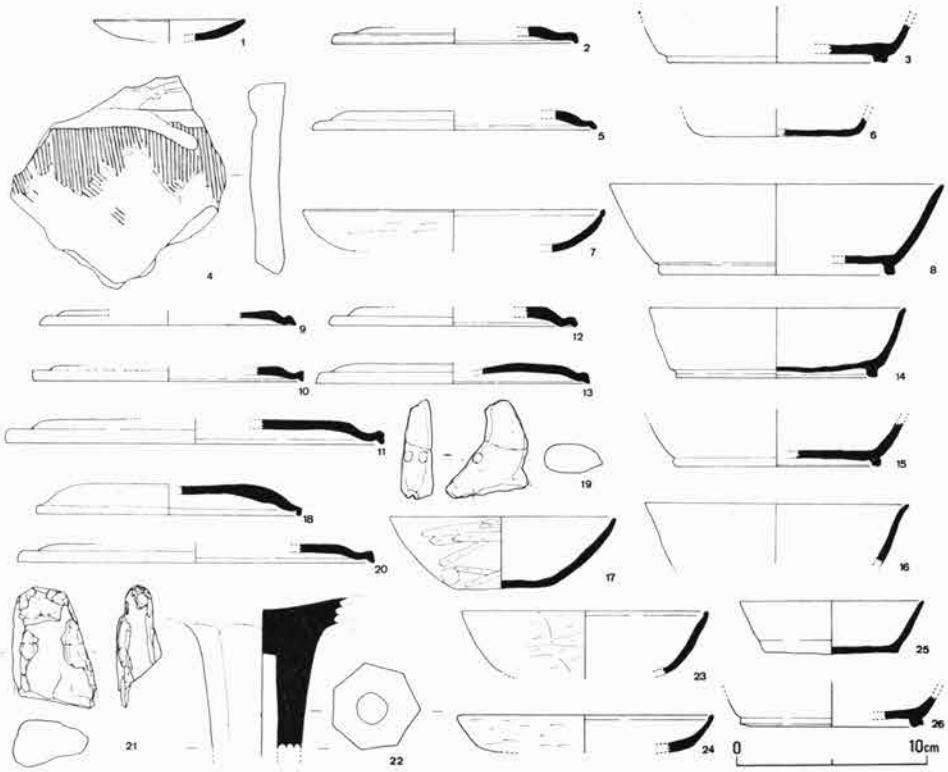
長岡京期より新しい遺物も含んでいるが，図化し得るものは極めて少ない。ここでは長



第21図　掘立柱建物跡 (SB 14801) 柱穴断面実測図（L＝17.800 m）
埋め土は暗茶褐色粘土と黒褐色粘土（これは下位またはブロック状に存在)。スクリーン・トーンは柱芯部分（黒灰色粘土の埋土）を，斜線部分は遺物を示す。



第22図　溝状遺構 (SD 14801) 断面実測図
Ⅰ：暗赤褐色粘土　Ⅱ：青灰色砂礫



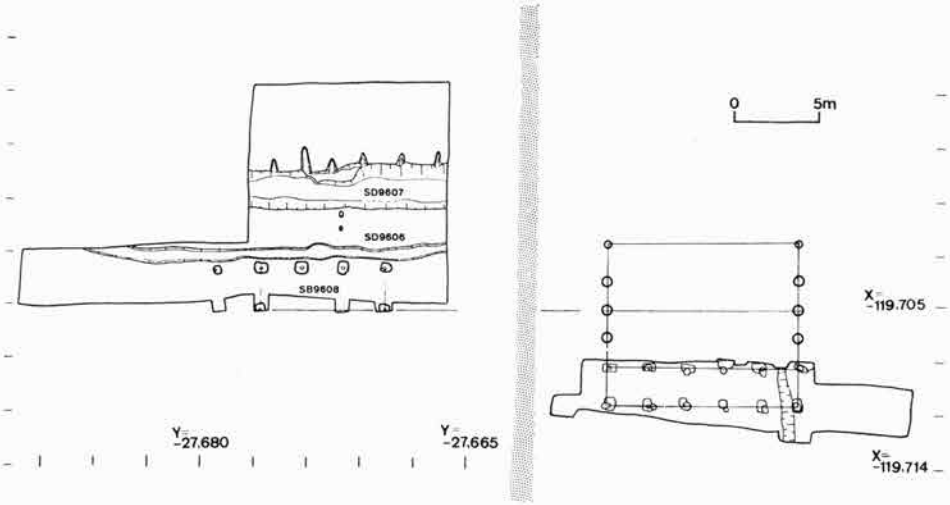
第23図　出土遺物実測図

1：土師器皿 (SD 07)，2～3：須恵器杯 (SD 06)，4：須恵質埴輪片，5•6•8：須恵器杯 7：土師器皿（以上 SD 01），9～16：須恵器杯，17：土師器椀（以上遺構 (SB 14801) 検出面），18：須恵器杯蓋，19：土馬（以上 SK 14801），20•26：須恵器杯，21：打製石斧，22：高杯脚部，23：土師器椀，24：土師器皿，25：土師器杯（以上 SD 14801 柱穴内）

岡京期の特徴的なものを紹介した。(19) は土馬の頭部である。風化がすすみ，眼の識別が困難なほどである。(20) は須恵器杯蓋である。口径は 19 cm で，胎土・焼成とも良好である。

掘立柱建物跡内の遺物（同図　21～26）

いずれも柱穴の抜きとり痕中より出土したものである。Pit 1・2・12から比較的まとまって出土した。Pit 1 からの遺物が最も多い。(22) は七角形に面取られた高杯の脚柱部である。最大径約 6 cm と非常に大きなものである。表面は風化の度合いがすすんでいる。(23) は，土師器の椀である。口径約 13 cm で，口縁端部がやや内側に屈曲してまとまっている。外面篦削りで内面はなでにより仕上げられる。(24) は，（7）と同様の土師器皿である。口径は約 13.5 cm を測る。(25) は，土師器杯である。底部外面を篦切り，内面をなでにより



第24図　周 辺 遺 構（R98次調査）関 連 図
SB 14801 を東西5間，南北3間（×6尺），南北庇（×7尺）として図化

仕上げ，体部は内外面とも回転なでである。胎土は良好だが，焼成は充分でなく灰白色を呈する。口径は9.8 cm である。(26) は須恵器杯Bである。高台の接地面が狭く，外側がやや浮き上る状態になっている。胎土・焼成とも良好である。(21) は，緑泥片岩製の打製石斧の破砕片である。

なお，掘立柱建物跡の柱穴痕内ではないが，この柱穴が設けられた遺構面，すなわち第X層の面から出土した遺物（9～17）について若干述べておく。（9）～(13) は須恵器杯蓋片である。(11) を除き口径は 13～14 cm である。口縁端部が，垂直近くにたち上るもの（10～13）とやや傾きをもち低くなるもの（9・12）がある。胎土・焼成はいずれの資料も良好である。(14) ～ (16) は須恵器杯Bである。(17) は土師器椀である。外面は箆削り，内面はなでにより調整されている。器壁は極めて薄く，良好な胎土・焼成と併せて丹精なつくりと言える。これらの遺物も，掘立柱建物跡と同時期の所産と考えてよいであろう。

（黒坪 一樹）

4. ま　と　め

今回の調査における最も大きな成果は，掘立柱建物跡 (SB 14801) の検出にあると言える。そこで，この建物の規模について若干の観察を行い，まとめに代えたい。

SB 14801 の全体規模を復原するにあたり，どうしても無視し得ないのは五条大路南側側溝（以下南側溝と記す）との距離間隔の問題である。ここで SB 14801 の柱間を7尺として

南北3間，東西5間さらに南北両側庇をもつと仮定する。今回の地域まで真東西に南側溝が伸びていることを前提とした場合，最も北の柱列（庇）と南側溝との距離はわずか約 0.9 m である。甚だ両者は近接しすぎている。先に調査された右京第96次調査での掘立柱建物跡 (SB9608) は，3間×2間と推定されており，すぐ北側に接して雨落ち溝のような細長い溝 (SB 9606) をもつ。そして南側溝と最も北の柱列との距離は約3 m であった。(注5) これと比べてもいっそう，今回の南側溝との間は近くなっていると言える。

今回の柱間規模を7尺としたのは，あくまでも庇の部分の値を母屋にあてはめたにすぎないのであるが，ここで母屋の柱間を6尺均等とすると，南側溝との距離は大きくなり，より現実味がある。塚本古墳の存在が，五条大路の路線に与えた影響については不明な点も多い。(注6) 今後この付近での調　査が行われるつど，慎重な対処が必要である。

（黒坪 一樹・浜口 和宏）

注1　木村泰彦「右京第106次（7 ANKHT 地区）調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和57年度』掲載，1983)

注2　木村泰彦「右京第96次（7 ANKUT-4 地区）調査略報」(前掲書所収　1983)

注3　前掲書で報告されたもの（本文中にも引用）の他，戸原和人・中山修一「産業文化会館建設にともなう発掘調査概要」(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第五冊　1980) にも検出例が報告されている。

注4　現地調査では主に城田正博（立命館大学学生）が，整理作業については，浜口和宏・城田正博（立命館大学学生），吉沢素子（京都府立大学学生），宮本佐和子，小滝初代，肥後弘幸（大阪市立大学学生）（以上敬称略）がそれぞれ携った。なお，遺物の写真撮影は，写真家（元文部技官）の高橋猪之介先生に御面倒をお願いした。

注5　注2参照

注6　中尾秀正「長岡京跡第8104次（7 ANKHT 地区）立会調査概要」(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9冊）1982　この調査で後期古墳とされている塚本古墳の周濠の一部を検出した。しかし，五条大路の南側側溝に該当する遺構は検出されていない。

4. 長岡京跡立会調査 I

1. はじめに

今回の調査は，昭和57年度及び昭和58年度の電話線地下埋設工事に伴う立会調査で，京都府長岡京市，大山崎町に所在する。調査は昭和58年1月15日から始め，昭和59年3月31日に終了した。調査には，当調査研究センター調査課・主任調査員　長谷川　達，同調査員　竹井治雄，山下　正が当った。埋設工事の路線名は，長岡京市内では局西線（下海印寺），天神前線（友岡），調子線（久貝），大山崎町内では円明寺線（円明寺），松田橋線，下植野線（下植野）である。これらの路線は，長岡京条坊復原図によれば右京六条大路から九条大路に至り，西二坊から西四坊の範囲で，京城の西南部を占めている。この周知の遺跡内における立会調査は，遺構の有無を確認し，遺物採集等の作業を通じ，遺跡の内容を明らかにしていく資料を得ることを目的とした。

2. 調査経過

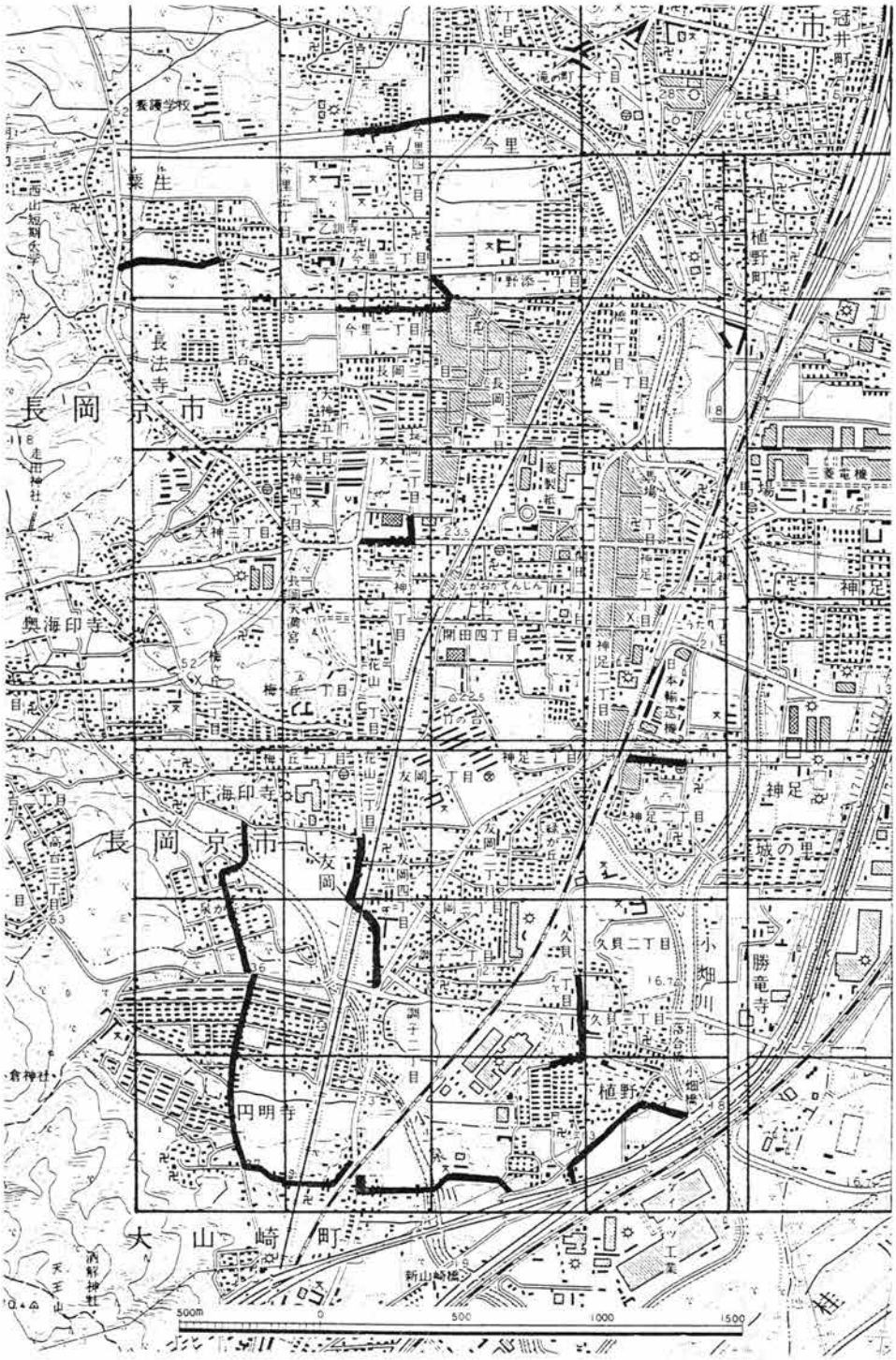
調査は，埋設管の掘削幅1m，深さ2～3mと非常に狭く，しかも深いことから立会調査という方法を採った。現地での主な仕事は，掘削断面の観察，遺物の採集等であるが，必要に応じて重機を一時止め掘削坑に入り，写真撮影や土層の略図を作成し，記録した。

3. 調査結果

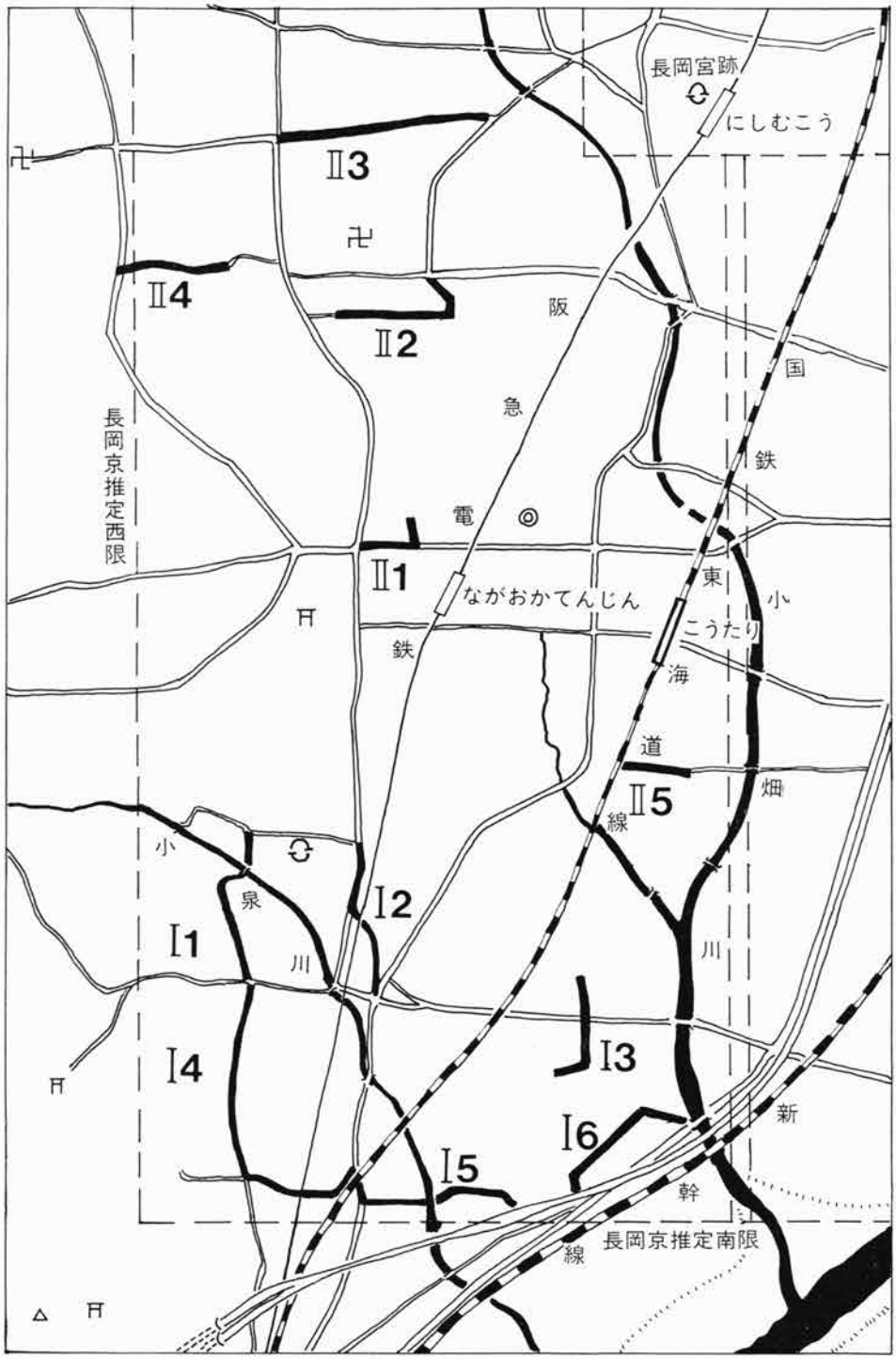
今回の調査で特に顕著な遺構は確認できなかったが，わずかながら遺物を採集することができた。各路線別に土層の観察結果及び採集遺物について略記する。

〔局西線〕（I-1）

調査路線は，小泉川にかかる新向井橋から泉ケ丘団地を縦貫し円明寺団地に至る市道589号線である。この道路は，西山丘陵裾部を南北に走り，標高35～40mで，団地造成時に大きく改修されている。掘削断面は，地表下40cmまでが道路敷の盛土である。以下2.5mまでは，小泉川付近で2～5cm大の砂礫が1m以上堆積している。泉ケ丘団地内では黄褐色粘質土，砂質土が堆積している。円明寺団地の手前の竹藪付近では厚さ15～20cmの茶褐色粘質土が堆積しており，この層が遺物包含層と考えられる。



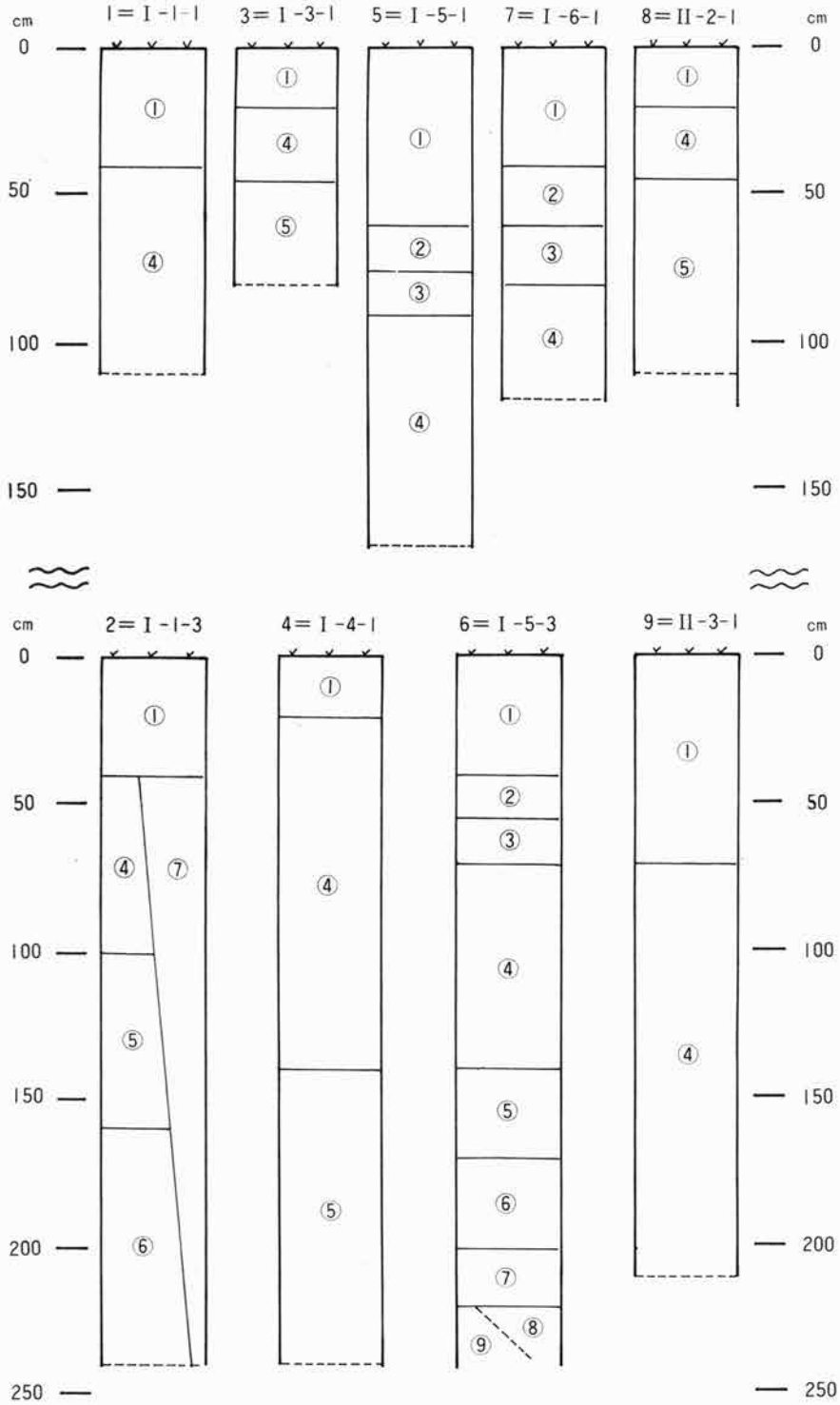
第25図　立会調査位置図（1/25,000「京都西南部」「淀」）



第26図　立会調査地区名図

付表1　立会調査地区別概要

次数	地区	地点	地点別の目標	期日	立会調査の概要	出土遺物	備考
I	1	1	局西線	58. 2. 7	①道路面の盛土（以下各地点共通）厚さ40cm，④褐色砂礫の混入で土砂流の堆積と考えられる。		第27図-1
I	1	2	局西線	58. 2. 14	②旧耕作土(以下各地点共通)，④小礫を含む茶褐色粘質土，⑤小礫を含む茶灰色粘質土，⑥灰色粘砂質土，⑦灰色粘質土，⑧褐色砂土		
I	1	3	局西線	58. 3. 8	④暗褐色粘土，⑤茶褐色粘質土，⑥灰色シルト，⑦池または谷間の堆積と思われる灰色泥土		第27図-2
I	1	4	局西線	58. 3. 22	道路面の盛土（厚さ約40cm）の直下に，竹藪の境界溝と思われるピット状の落ち込みを観察するも遺物等の包含は確認されなかった。		
I	3	1	下植野・大山崎線	58. 11. 10 ～ 58. 11. 14	④茶褐色粘質土，長岡京域ではこの土層でしばしば遺構が確認される。⑤黄褐色粘質土		第27図-3
I	3	2	下植野・大山崎線	58. 10. 12 ～ 58. 10. 14	厚さ20cmの道路面の盛土直下は掘削した表土下180cmまですべて褐色砂礫層であった。		
I	4	1	円明寺線	58. 6. 25 ～ 58. 7. 10	①厚さ20cm，④砂や粘質土の混入した褐色砂礫土厚さ120cm，⑤黄褐色粘質土，厚さ100cmこの付近の各地点ともほとんど上記④⑤の地層が続いている。		第27図-4
I	4	2	円明寺線	58. 8. 4 ～ 58. 8. 7	①厚さ20cmの道路面の盛土の直下に④厚さ190cmの褐色砂礫土あり，⑤は厚さ約10cmの腐蝕質の黒灰色粘土，⑥灰色砂礫土		
I	5	1	松田橋線一大山崎中学校前	58. 4. 8 ～ 58. 4. 11	③耕作床土(以下各地点共通)，④淡黄灰色粘質土，地表下170cmまで掘削するも遺物包含層まで達しないようす。		第27図-5
I	5	2	松田橋線一大山崎中学校敷地東南角付近	58. 4. 14 ～ 58. 4. 26	地層はI-5-1地点とほとんど同じであるが，地表道路面が低いため，最下層に遺物包含層が観察できる。		
I	5	3	松田橋線L-3	58. 5. 16	④淡黄灰色粘質土厚さ70cm，⑤茶褐色粘質土厚さ30cm，⑥暗褐色粘質土厚さ30cm，⑦黒褐色粘質土厚さ20cm ⑧灰色砂礫，⑨黄褐色粘質土	⑥より土師器(壺，甕，高杯)出土	第27図-6
I	6	1	下植野線一自動車センター付近	58. 10. 17 ～ 58. 10. 19	表土下80～120cmの間が④暗灰色粘土		第27図-7
I	6	2	下植野線L12，L13	58. 7. 11 ～ 58. 7. 12	表土下90～150cmの間が④暗灰色粘土層であるが，これはI-5-1地点の④と対応するものと考える。この地点より東方約300mを流れる小畑川の後背湿地に当ると思われる。		
II	2	1	市道11号線一舞塚	58. 9. 1	④暗褐色粘質土厚さ20～30cm，⑤黄褐色粘質土厚さ60～70cm，④は長岡京期の遺構のある層全体として昭和57年度調査の右京第105次調査地と同じ。		第27図-8
II	3	1	長法寺向日町線	58. 9. 1	地表下21 0cmまで掘り下げたが，70cmまでは①道路面の盛土，それ以下は④混礫褐色粘質土の盛土であり遺物を含まない。		第27図-9



第27図　立会調査地点別層位模式図

〔天神前線〕（Ⅰ-2）

調査路線は，友岡四丁目の府道大山崎大枝線で，府道樫原～高槻線と連絡する。調査地東側は友岡廃寺に推定されている。地形は阪急ガード下を境に比高差 2m もあり，これが友岡廃寺の寺域推定ラインの根拠となっている。掘削断面においても路線の北半分は，地表下 30 cm まで黄褐色粘砂質混礫層が厚さ 20～30 cm 堆積し，土師器皿・須恵器・瓦類の破片が含まれている。一方，阪急ガードより南では上記の層が無く，黄褐色粘質土（地山）が堆積している。

〔調子線〕（Ⅰ-3）

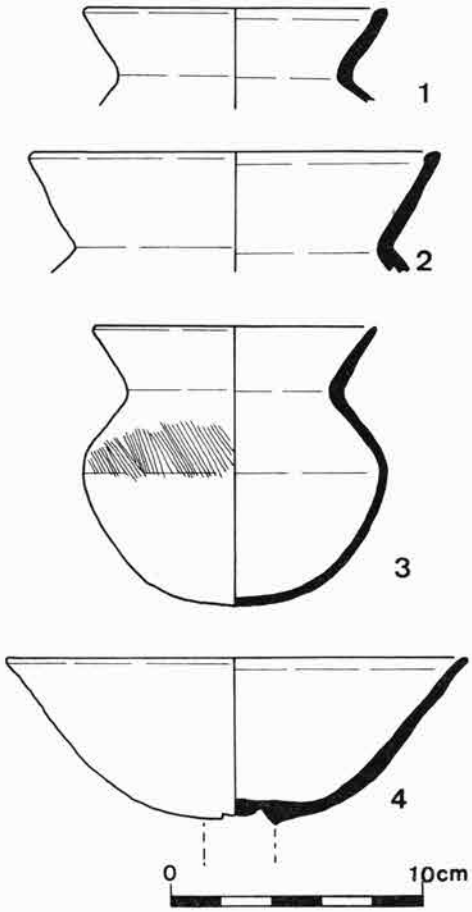
調査路線は，恵解山古墳の西側を走る市道 420 号線，これに続く町道下植野線である。市道 420 号線では掘削の深さは約 1m と浅い。掘削断面は，表土，茶褐色粘質土の堆積状況を示す。ここでも，茶褐色粘質土は遺物が採集できなかったが，遺物包含層であると考えられる。町道下植野線は西側の丘陵裾部の削平によってできた道路である。地表下，黄褐色粘質土，部分的に礫の集合がみられる。

〔円明寺線〕（Ⅰ-4）

調査路線は，円明寺を南北に縦貫する町道大山崎線円明寺線である。西山丘陵の下位に位置し，標高 40 m 前後である。道路の多くは団地造成時にできたものであろう。掘削断面は，表土，黄褐色粘質土，砂質土（礫まじり），青灰色シルトの順に堆積状況を示す。この層は大阪層群に近似している。

〔松田橋線〕（Ⅰ-5）

調査路線は，大山崎中学校正門前の町道下植野大山崎線である。この付近の地形は，小泉川東岸では氾濫の影響を受けて畑地が多く，名神高速道路沿いでは水田が広がる。小泉川付近の掘削断面は，道路敷以下，旧水田，淡黄灰色粘質土，黄灰色砂礫の順に



第28図　松田橋線出土遺物

堆積状況を示す。黄灰色砂礫は，小泉川の氾濫によるものと考えられる。一方路線の東端にあたる松田橋L－3地点では多くの遺物を採集し，包含層も確認できた。地表下 2.5 m の間に，旧耕作土，床土以下，Ⅰ淡黄灰色粘質土層，Ⅱ茶褐色粘質土層，Ⅲ暗褐色粘質土層，Ⅳ黒褐色粘質土層，Ⅴ灰色砂礫，Ⅵ黄褐色粘質土層の順に堆積している。Ⅰ層は上述の土層と同じ色調，土質で，近世陶磁器が含まれる。Ⅱ層からは平安時代の土器類が採集できた。Ⅲ層は少量の小礫，腐植土が混り，部分的に軟かいところがある。遺物は古墳時代の土師器高杯，甕が出土している。Ⅳ層はブロック状に堆積している。Ⅴ層は 3～6 cm の円礫の集合である。Ⅵ層は，遺物が無く，還元状態の緑色に変色している。

〔下植野線〕（Ⅰ-6）

調査路線は，府道下植野大山崎線で，国道 171 号線と連結するところである。掘削断面は，道路敷以下，旧水田，床土，淡黄灰色粘質土，青灰色粘質土の堆積状況がみられるが，掘削の深さが 0.8 m と浅く，地山まで至らない。

4. ま　と　め

掘削断面の結果において，土層のうち各路線に共通するもの，単一の土層として特徴的なものを記しておきたい。

松田橋線で観察した黄灰色礫層は，中世以後の小泉川の氾濫による堆積であることを確認した。この氾濫は，下層の遺構を洗い流しておらず，名神高速道路（松田橋L－3）までは及んでおらず，小規模のものである。これは，以前，大山崎中学校内で検出された竪穴住居跡の遺存から十分考えられる。松田橋L－3地点のⅡ，Ⅲ層は，遺構内の堆積土とも考えられ，標高 12～15 m の下植野地区の集落跡等が想定できる。

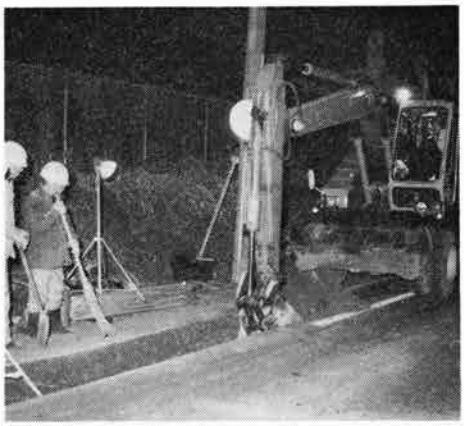
天神線では，友岡廃寺の寺域に係る遺構は確認できなかったが，路線北半部で採集した遺物は寺域の推定ライン内のものであることから，廃寺関連資料として意義がある。

各路線に共通する土層である黄褐色粘質土は，人為的な影響をうけていない地山である。黄褐色を呈しているのは，常に陸化状態を示しており，集落遺跡の立地に適した土層といえる。

以上述べたように各路線の土層観察の結果は，遺跡の広がり，性格等を追求していく目安になると考える。

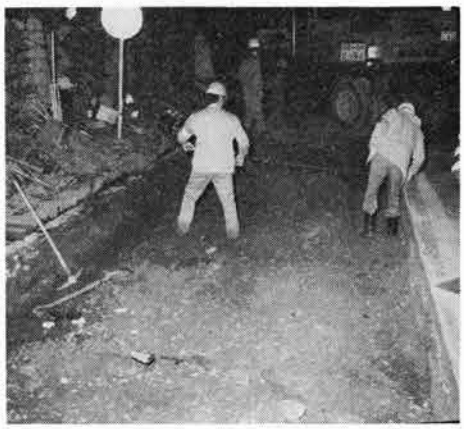
（竹井 治雄）

(1) Ⅰ—1



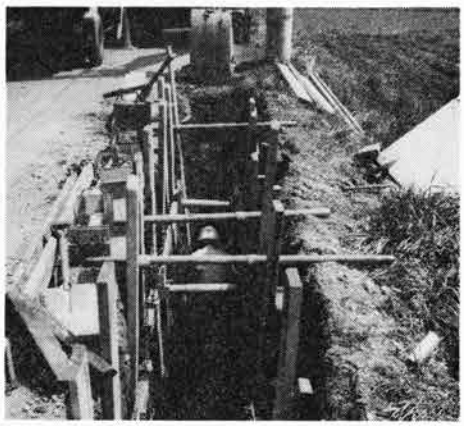
(2) Ⅰ—2

(3) Ⅰ—2



(4) Ⅰ—3

(5) Ⅰ—4



(6) Ⅰ—5

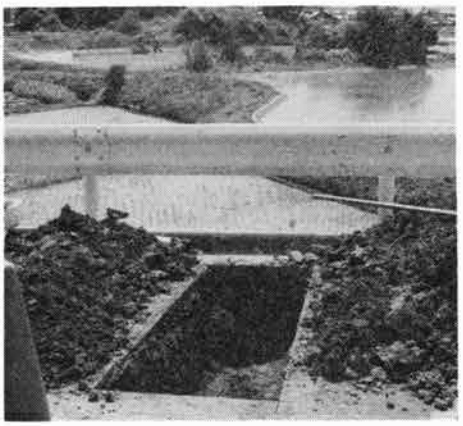
第29図　立会調査地の状況(1)

(1) I —5

(2) I —5

(3) I —6

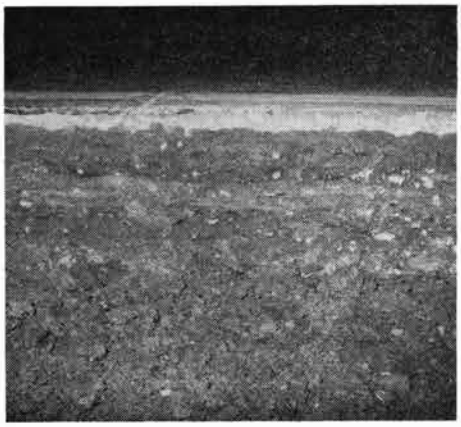
(4) II—3



(5) II—4

(6) II—5

第30図　立会調査地の状況(2)

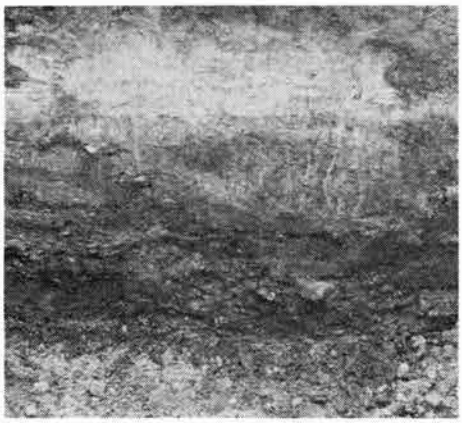


(1) Ⅰ—2

(2) Ⅰ—3

(3) Ⅰ—3

(4) Ⅰ—5



(5) Ⅰ—5

(6) Ⅰ—5

第31図　立会調査地の状況(3)

5. 長岡京跡立会調査 II

1. はじめに

今回の調査は，昭和58年度の電話線埋設工事に伴う立会調査で，京都府長岡京市に所在し，昭和58年6月17日から始め，昭和59年3月31日に終了した。調査は，当調査研究センター調査課・主任調査員　長谷川　達，同調査員　竹井治雄・山下　正が担当した。埋設工事の路線名は主に長岡京市内で，開田線（天神）・向日町長岡線・長法寺向日町線（今里）・梅長線（長法寺）・神足線（神足）などである。これらの路線は，長岡京条坊復原図によれば右京二条大路から八条大路，西一坊から四坊の広大な範囲にあたる。この周知の遺跡内における立会調査は，遺構を確認し，遺物採集を通じ，遺跡の内容を明らかにしていく資料を得ることが目的である。

2. 調査経過

調査は，埋設管の掘削幅が 1 m，深さ 2～3 m と非常に狭く，しかも深いことから立会調査という方法を採った。現地での主な仕事は，掘削断面の観察・遺物の採集であるが，必要に応じて重機を一時止め掘削坑に入り，写真撮影や土層の略図を作成した。

3. 調査結果

今回の調査で特に顕著な遺構は確認できなかったが，僅かに遺物を採集することができた。各路線別に土層の観察結果及び採集した遺物について略記したい。

〔開田線〕（II-1）

調査路線は，府道伏見～柳谷～高槻線，市道7号線である。府道は，長岡京市の市街地中央の東西通りで，開田城館の濠跡の一部にあたる。掘削断面は，道路敷以下，厚さ 20～30 cm の砂層と粘質土層の互層を呈している。砂層は褐色を帯びた川砂で遺物は含まない。粘質土は茶褐色を呈し，腐植物を多く含む。市道7号線の掘削断面は，表土下茶褐色粘質土（5～10 m），黄褐色粘質土の順に堆積している。

〔向日町長岡線〕（II-2）

今里一丁目を東西に走る市道11号線である。この付近は安定した低位段丘上に古くからの集落があり，その周辺には水田が営まれている。掘削断面は，表土以下，茶褐色粘質土層，

黄褐色粘質土層が堆積している。茶褐色粘質土は，厚さ 5～15 cm を測り，腐植物，小礫が含まれる。

〔長法寺向日町線〕(Ⅱ-3)

今里四丁目北側を東西に走る府道長法寺向日町線である。掘削断面は，道路断面は，道路敷以下，黄褐色粘土と角礫の混在している層が 1.5 m 以上堆積している。遺物は採集されなかったが地山ではないと思われる。

〔梅長線〕(Ⅱ-4)

調査路線は，七ツ塚古墳北方約 50 m の市道588号線である。この道路は現水田との比高差 1.5 m を測り，団地造成時に新設されたものであろう。掘削断面は，道路敷以下，褐色粘土に砂礫が混入しており，1.5 m 以上堆積している。

〔神足線〕(Ⅱ-5)

調査路線は，府道下植野長岡線の国鉄ガードより東側部分で，勝竜寺城の北方にあたる。掘削断面は，表土下，黄褐色粘質土が 2 m 以上堆積している。暗褐色粘質土は，部分的に黄褐色粘質土上面にみられる。

4. ま　と　め

今回の調査路線は，すべて安定した低位段丘上であり，黄褐色粘質土が地山である。このあたりは遺跡が密集しているところであるが，後世の削平も激しいことから遺物包含層も少ない。開田線，神足線，向日町長岡線で見られる部分的な茶褐色粘質土は，遺物が採集されなかったものの，本来，遺物包含層，遺構の堆積土であると考えられる。このように，遺物包含層と地山との関連性の把握は，遺跡の広がり，性格を追求していくうえで，一定の資料を提供するものである。

(竹井 治雄)

6. 木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要

1. はじめに

木津川河床遺跡は，弥生時代後期から室町時代に至る集落跡として従来から知られている。木津川大橋から木津川と宇治川に架けられた御幸橋（八幡市）までの両岸の河床範囲がこれに当る。東西約4kmもの長さを有する広大な面積である。

今回の地域は，昭和57年度にも当調査研究センターが発掘調査を実施し，古墳時代前期の資料を中心に，弥生時代後期から中・近世に至る多くの遺物を検出している。(注1) 本年度（昭和58年）は昨年度の成果を踏まえて，この地における生活跡の検出を期待しつつ実施した。その結果，主に古墳時代前期から後期の遺構および遺物を多数検出するに至った。

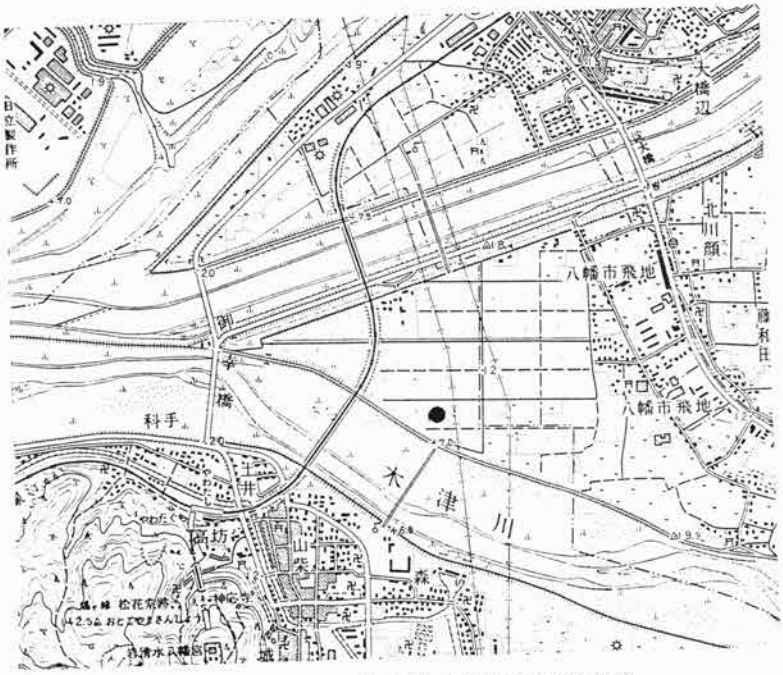
当地は，八幡市八幡小字焼木・源野に所在し，京都府流域下水道浄化センターの管理棟部分の建設計画地に当る（第32・33図）。調査（掘削）面積は約1,100 m^2である。現地調査は，昭和58年5月17日から同年9月22日まで実施し，当調査研究センター調査課主任調査員長谷川　達，調査員竹井治雄・黒坪一樹が担当した。期間中は多くの学生諸氏の御協力をはじめ，地元の八幡市教育委員会の方々にも(注2)いろいろと御面倒をおかけした。また，調査後の整理作業についても，多くの方々から御助力を賜った。御芳名を記し，心から感謝の意を表したい。(注3)

2. 調査に至る経過

この調査は先述の如く，昭和57年度から開始された木津川流域下水道浄化センター建設工事に伴うものである。水処理施設部分の試掘調査であった昨年度の結果を考慮し，昭和58年度の工事計画予定地について，京都府教育庁指導部文化財保護課，京都府土木建築部下水道室下水道課，京都府流域下水道建設事務所および当調査研究センターとの間で協議が行われた。

そこで，管理本館新築部分に関しては，はじめに試掘調査を実施し，遺構等が検出された場合は拡張して発掘調査に切りかえることとした。なお，水路改修部分については立会調査とすることが決定された。

この決定に基づき，木津川流域下水道建設事務所と当調査研究センターの間で委任契約を締結し，調査を開始した。　（長谷川 達）



第32図　調査地位置図（●印）(1/30,000)

第33図　発掘区配置図

3. 位置と環境

鈴鹿山脈の南部にその源流をもつ木津川は，拓植川・長田川・名張川等の諸河川と合流し，京都府相楽郡木津町付近より北上する。そして，木津川河床遺跡の東端である京都府久世郡久御山町から西端の御幸橋（八幡市）にかけ，湾曲して大きく流れを西にかえる。そのまま八幡市橋本付近で宇治川，桂川と合流し，淀川となる。総全長は 50 km 以上に及ぶ。

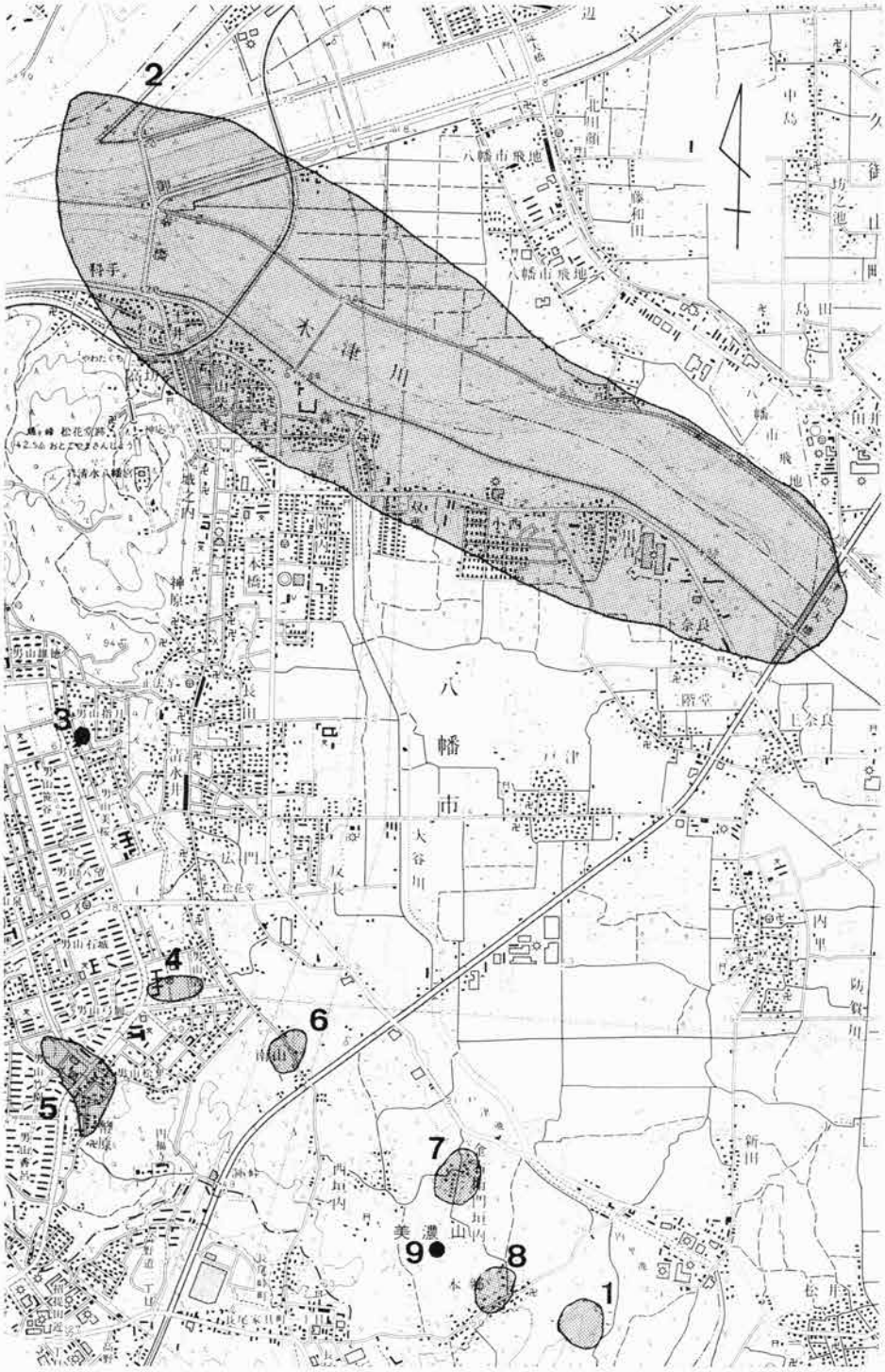
古くから水運交通路として利用されてきた木津川は，大和から近江，河内方面への物資流通の橋渡し的役割を担ってきた。当地も水運交通路の要衝であり，人々の居住地の拓けたところであった。なお，現在の木津川の流れは明治２年の河川改修によるもので，古来，木津・宇治・桂の三河川は，山城盆地最底部に存在した巨大な遊水池である巨椋池に一旦注ぎ込んでいた。すなわち，巨椋池から淀川が派生する形となっていた訳である。従ってこの巨椋池の下である当地は，豊富な水量に恵まれて水田耕作が盛んに営まれる一方，大雨による洪水の被害もまた甚大であった。大小さまざまな流路が入り組む低湿地の中，自然堤防上に集落を営んでいた古代人の生活は，絶えず脅やかされたであろうし，大水から逃れるための移動も頻繁に行ったものと察せられる。このあたりはわずか標高約 10 m 強の低湿地であり，水田に利用されている所が多い。地勢の移りかわりを自然地理学的に捉えることは，巨椋池の規模を復原することと併せて当地では重要な課題と言える。

以下では周辺の歴史的環境を知る上から，八幡市に分布する諸遺跡を時代順に概観しておきたい。(注4)

先土器・縄文時代の遺跡は，これまでのところ明確な発見例が無い。わずかに金右衛門垣内７や美濃山遺跡１から表面採集されたナイフ形石器や若干の縄文土器等の遺物が知られているにすぎない（第34図）。

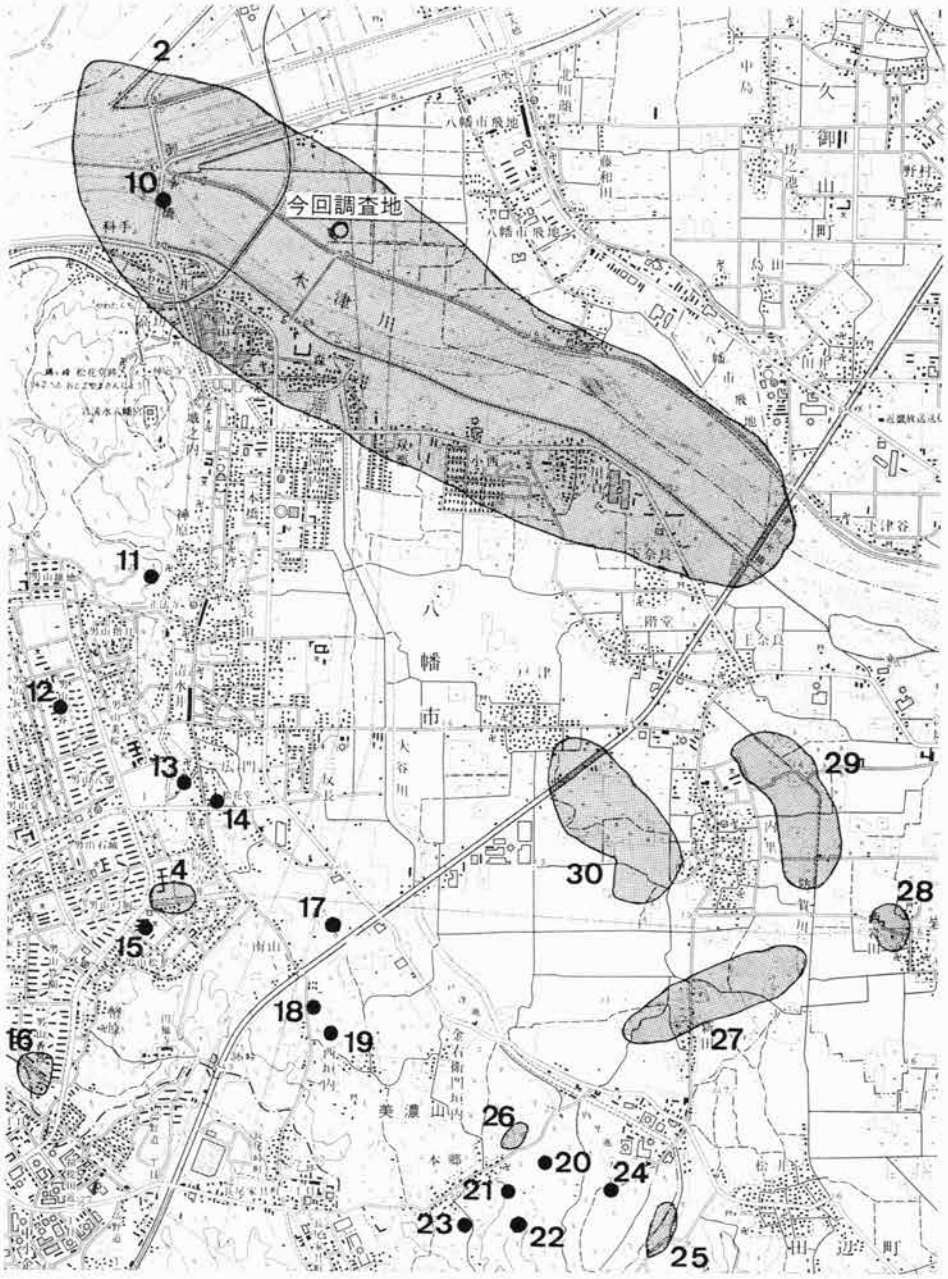
弥生時代に入ると著名な遺跡が数多くある（第34図）。代表的なものとしては，井の元（金右衛門垣内，中期）７，中ノ山４，南山６，幣原５，井の元南９（以上後期）などがあげられる。幣原遺跡の竪穴式住居跡や，井の元南遺跡の甕棺等の遺構・遺物は興味を引く。これらの遺跡は総じて比較的標高の高い美濃山丘陵周辺の微高地に点在している。

古墳時代にも多くの遺跡が知られている（第35図）。時期は前期のものから後期のものまである。美濃山丘陵北西部の斜面に集中して，ヒル塚17，西二子塚18，東二子塚19，内里池西20，南山15，小塚23などの円墳がある。いずれも保存状態は悪いが，西二子塚古墳からは直刀や玉類等の副葬品が出土している。男山丘陵と美濃山丘陵の谷間部には，石不動11，茶臼山12，西車塚13，東車塚14，王塚21等の前方後円墳が存在している。茶臼山古墳の舟形石棺や東車塚古墳の内行花文鏡・三角縁神獣鏡等は特筆すべきものと言える。



第34図　周辺の遺跡分布図①（縄文・弥生）

1. 美濃山遺跡　2. 木津川河床遺跡　3. 式部谷遺跡　4. 中ノ山遺跡　5. 幣原遺跡
6. 南山遺跡　7. 井の元遺跡　8. 本郷遺跡　9. 井の元南遺跡



第35図　周辺の遺跡分布図②（古墳時代）

2. 木津川河床遺跡　4. 中ノ山遺跡　10. 御幸橋古墳　11. 石不動古墳　12. 茶臼山古墳　13. 西車塚古墳　14. 東車塚古墳　15. 南山古墳群　16. 長谷遺跡　17. ヒル塚古墳　18. 西二子塚古墳　19. 東二子塚古墳　20. 内里池西古墳　21. 王塚古墳　22. 美濃山横穴　23. 小塚古墳　24. 荒坂古墳　25. 荒坂横穴群　26. 狐谷横穴群　27. 新田遺跡　28. 石田神社周辺遺跡　29. 内里東遺跡　30. 内里五町遺跡

また，九州の大隅国の隼人の一部が，大住村（現在の綴喜郡田辺町大字大住）を開発したが，彼らの特異な墓制と深い関わりを持つとされる横穴群も，美濃山丘陵の微高地上にいくつかの例をみる。古墳時代の後期（七世紀）で，荒坂横穴群25，狐谷横穴群26，美濃山横穴22などがそれである。

ところで古墳時代の研究をすすめる際には，古墳そのものの分析も重要であるが，これらを造営した人々の集落といったものがどこに在り，いかなる規模と内容を有するかという点を等閑視することはできない。当地においては，これまで集落跡の発掘調査例は皆無に等しい状況である。古墳時代遺物の散布地として知られる長谷16，新田27，石田神社周辺28，内里東29，内里五町30等の遺跡からは，多数の土師器や須恵器が採集され，今後調査がすすめば集落跡となる可能性は大きいと言える。

奈良・平安時代の遺跡も多い。志水廃寺（奈良）の寺院をはじめ，鳩ケ峰経塚，井関経塚，石清水八幡宮（以上平安）等がある。古墳時代もそうであるが，これらの時代には低地への定着（利用度）をさらに強めている様である。

八幡市で知られている主な遺跡を時代を追って概観した訳であるが，繰り返し述べるように，古墳時代の集落跡については発掘件数も少なく具体的にほとんど知られていないのが実情である。従って，低湿地における集落（古墳時代後期）の実態をうまく検出できたことに，今回調査の最大の成果があると言える。今後の木津川河床遺跡調査の出発点としてまず充分な資料を得たことにより，人々の生活や当集落の性格にいささかでも光があてられることを望むものである。　（木ノ下 治男）

4. 調 査 経 過

調査対象地が灌漑用水路（素掘り）の走る水田であるため，調査はまず発掘区周縁部に排水溝を掘り，区内の溜り水を排除することから始めた。掘削は重機で発掘区西南隅から始め，約 2～3 m の幅で西壁と北壁を L 字形に掘り進めた。地表下約 1.5 m の深さに達した時点で，奈良～平安時代の須恵器甕と土師器杯蓋の細片が出土した。従って，この掘削深度で発掘区全体を一旦揃え，人力にて遺構の有無を確かめながら面的に掘り下げる作業に移った。やがて地表下約 1.8～2 m 程の深さから古墳時代後期の遺物が出土し始めた。しかしながら，暗茶褐色粘質土の地に掘り込まれた同系色の遺構の埋土は，識別するに甚だ困難なものであった。慎重な精査・観察を幾度となく繰り返し，ようやく部分的な焼土の広がりを有するいびつな形の竪穴式住居跡や，大小の土坑（いずれも古墳時代後期）を確認した。これらより新しい時期として数条の溝も検出した。

また，発掘区東半部では，小規模ながら倉庫とおぼしき掘立柱建物跡や柵列の存在を認めた。これらは砂質の地を切り込んで存在しているため，雨による崩壊を心配し，掘り上げから写真，実測を素速く行う必要があった。雨天になりそうな時は，作業を実施せず粘土質の埋土はそのままにしておくなど配慮した。

調査の最終段階には，沼地状の窪みに廃棄された状態で古墳時代の前期を中心とする夥しい土師器類を発見した。以上の遺構の写真撮影，実測図作成を完了した後，最終的な断ち割り作業に移った。この作業の主な目的は，竪穴式住居跡等（古墳時代後期）と土器溜り（同前期～中期）の遺構面の重層関係を調査することにあった。併せて下層遺構の確認も重要なものと言える。各所の写真撮影，断面実測を行うかたわら，多量の遺物（土器溜りのもの）のとり上げ作業を急いだ。

雨天にも苦しめられたが，９月22日には無事すべての作業を終了した。

5. 測量と発掘区

木津川河床遺跡におけるトラバース測量は，既に調査区内に設置されている杭・割り付けラインの国土座標値及び真北方向を求めることが目的であった。測量の期間は，調査終了間際の昭和58年９月19・20日の両日で，快晴，微風の天候に恵まれた。測量の路線は，木津川と宇治川の間の水田地帯で，測点の見透しが良好であった。

測量方法は，基準点[注5]「美豆」と「生津」の両三角点を結ぶ結合トラバース測量である。測量の路線は，この両三角点間に新点Ｂ，Ｃ，Ｄ点を設置し，不等間隔の五角形を呈している。新点「Ｃ」は調査区の基準点「Ｙ＝21」の杭と合致させ，「Ｄ」点は調査区の東側に直接肉眼でとらえられる位置に杭を打った。

第36図　多角測量路線図（1/30,000）

距離測量と水平角測量の作業は，光波測距儀，トランシットを使用し，上述の路線を左回りに進行した。距離測量は，各測線で数回の観測値を得，その最確値（平均）を求めた。水平距離は，光波測距儀に仰角を入力すると自動的に得られる。水平角測量は，各交角を倍角法（三倍角）で正・反２回ずつ測定し，その値の平均を求めた。交点の点検は，五角の測定値の総和で９秒

の誤差が生じたが，許容範囲に収まるものと判断した。交角の決定値は，この誤差を比例配分したものである。国土座標値の算出の過程は省略するが，座標の誤差（閉合差，閉合比）は，許容範囲(注6)内であることを確認した。測量の精度（閉合比）は，29,600分の1である。測量の成果，新点 **C** は次のとおりである。

$$\begin{cases} X = -123,676.347 \\ Y = -26,267.437 \end{cases} \quad H = 10.521\,\mathrm{m}$$

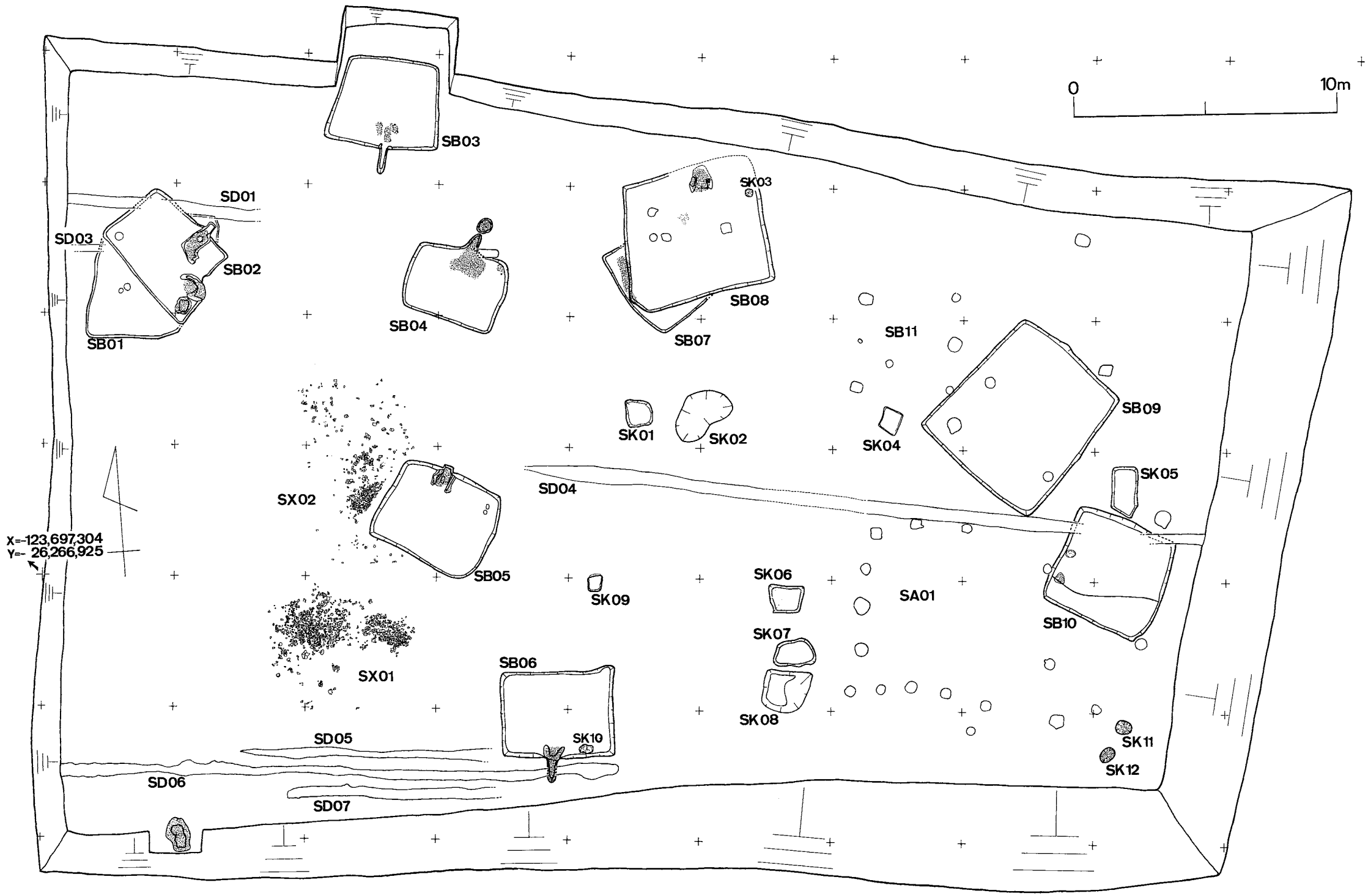
次に発掘区について言及しておきたい。第37図に示す様に発掘区全体を分割する。すなわち南北を1から6，東西をAからJまでの記号を付して 5m 四方の方眼で割り付け，数字を先に，たとえば，1A区という様に各区を呼称する。なお，同図は軸を真北・真東西に合わせた発掘区区割であり，現地調査の当初に磁北に合わせて行った区割りとは若干異なる。（方向角で N1°29′40″W の差である。）但し，後述の土器溜りの存在状況のところは，断ち割りを国土座標導入の前に行ったので，便宜的に磁北に合わせた区割の部分図（第60図）で説明してある。

なお，遺物の取り上げは各区ごと・遺構ごとに行っている。

今回，国土座標を導入したことにより，将来この地域で行われる調査に利用でき，昨年度から実施している発掘地区の位置が正確に把握できるようになった。

（竹井 治雄・黒坪 一樹）

第37図　発掘区地区割り概念図



第38図　遺構検出状況全体図（スクリーン・トーンは焼土範囲および竈部を示す。）

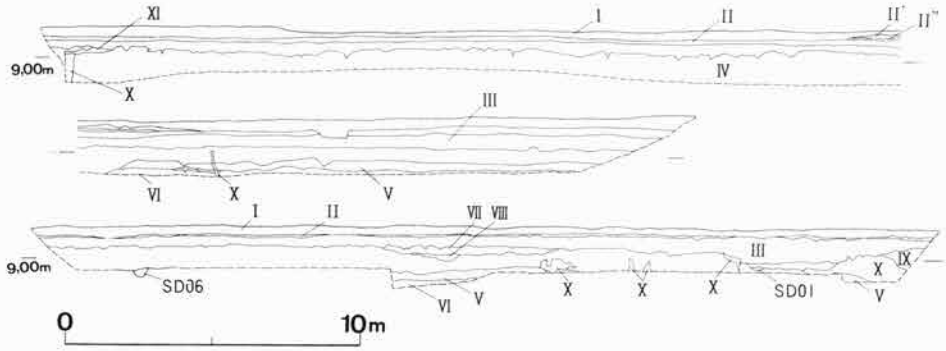
6. 層　　位

断面実測図を提示した北壁と西壁を例にとり，発掘区内の基本層序について述べていきたい（第39・40図）。

まず，北壁の層位は，順に**I. 褐色有機質土**（水田耕作土），**II. 灰白色極細砂**，**III. 濃灰褐色粘土**，**IV. 暗茶褐色粘質土**，**V. 暗灰色粘質極細砂**（灰色粘土粒混り），**VI. 暗灰色細砂**となっている。

I は近・現代の水田耕作土である。粘質度が強く，植物遺存体などの有機物も含まれている。部分的に赤褐色の鉄分（かなけ）が認められる。**II** は水田耕作土に攪乱されており，本来の半分近い厚さしか残存していない。厚さ約15 cm 程のこの層は，すべての壁面で観察されるが東の方にいくほど明瞭で，厚く認められる。灰のように細かい粒子をもち，石英・長石・チャート粒が観察される。近世以降の洪水堆積物であり，幾度かの木津川の氾濫を証拠付けるものと言えよう。**III** は約 0.5 m の厚い層で，下位にいくほど植物遺存体が酸化した暗赤褐色の斑粒を顕著に観察し得る。**IV** は中世以前の層で，発掘区中央部で約 0.9 m 弱の厚い層である。1F区～6F区の東端ラインより西にいくに従って厚くなるが，発掘区西端付近ではまた漸移的に薄くなる。これは「土器溜り」とした遺構が存在するところの範囲をほぼ最底部として，暗茶褐色系の粘土が厚く堆積していることから生じる差である。このⅣ層全体に明確な文化層の線は引けないが，中世から古墳時代後期に至る遺物を含む包含層である。この層の下位に竪穴式住居跡と土器溜りが存在する。沼地状の窪みに泥が極めて緩慢な時間をかけて堆積したことを示す層と言える。遺物は，奈良・平安時代の須恵器や土師器，中世の瓦器椀小片を上層に含み，古墳時代の土師器・須恵器を中～下層に包含している。**V** はやや粘性を帯びた細砂をベースに粘土粒（シルトボール）の混在している層である。約 25 cm の厚さである。この層の直上にて古墳時代前期の土器溜りが検出されている。しかしながら，このⅤ層中からは遺物の出土が認められない。**VI** はⅤ層とほぼ同質だが，さらに完全な細砂となる。なお，Ⅵ層以下は粗い黄褐色砂粒層となる。この地域の過去のボーリング調査[注7]で，この層は地表下約 3～4 m まで続くことが確認されている。

西壁の層位は基本的に同一である。ここでは部分的にブロック状に存在する黄褐色砂粒 (**X**) を比較的よく捉えている。木津川の河原砂に類似しており，どういった状況でこうした砂が挾み込まれるのか判然としない。旱魃や地震などにより地面に亀裂が入った後，Ⅵ層以下の砂層が上方に圧力で押し上げられたのかもしれない。付近をはしる地震構造線の影響も考える必要があろう。その他，溝 (SD 01) と同 (SD 06) を断面で観察し得た。ともに青みがかった灰褐色粘土の埋土であり，いずれも幅は 30 cm，深さは SD 01 で 10 cm，SD 06 で



第39図　北壁・西壁土層断面実測図

Ⅰ．褐色有機質土　Ⅱ．灰白色極細砂（Ⅱ′，Ⅱ″は鉄分含みやや赤い）　Ⅲ．濃灰褐色粘土　Ⅳ．暗茶褐色粘質土　Ⅴ．暗灰色粘質極細砂　Ⅵ．暗灰色細砂　Ⅶ．濃褐色粘質土　Ⅷ．暗茶褐色粘土　Ⅸ．灰褐色粘質土　Ⅹ．黄褐色砂粒　Ⅺ．濃灰褐色粘土（赤褐色砂混り）

30 cm である。

7. 遺　　構

今回検出した遺構は，以下に記したとおりである。(注8)

竪穴式住居跡 (SB)	10基	古墳時代後期（6世紀後半～7世紀）
掘柱立建物 (SB 11)	1棟	古墳時代後期（6世紀後半～7世紀）
柵列 (SA 01)	1基	古墳時代後期（6世紀後半～7世紀）
溝状遺構 (SD)	7条	中世
土器溜り (SX)	2か所	古墳時代前期（4～5世紀前半）

古墳時代前期から中世に至る多くの文化層が重層しており，とりわけ土器溜りは豊富な内容を有している。竪穴式住居跡の規模・構造についても，詳細に観察することができた。

① 竪穴式住居跡 (SB)

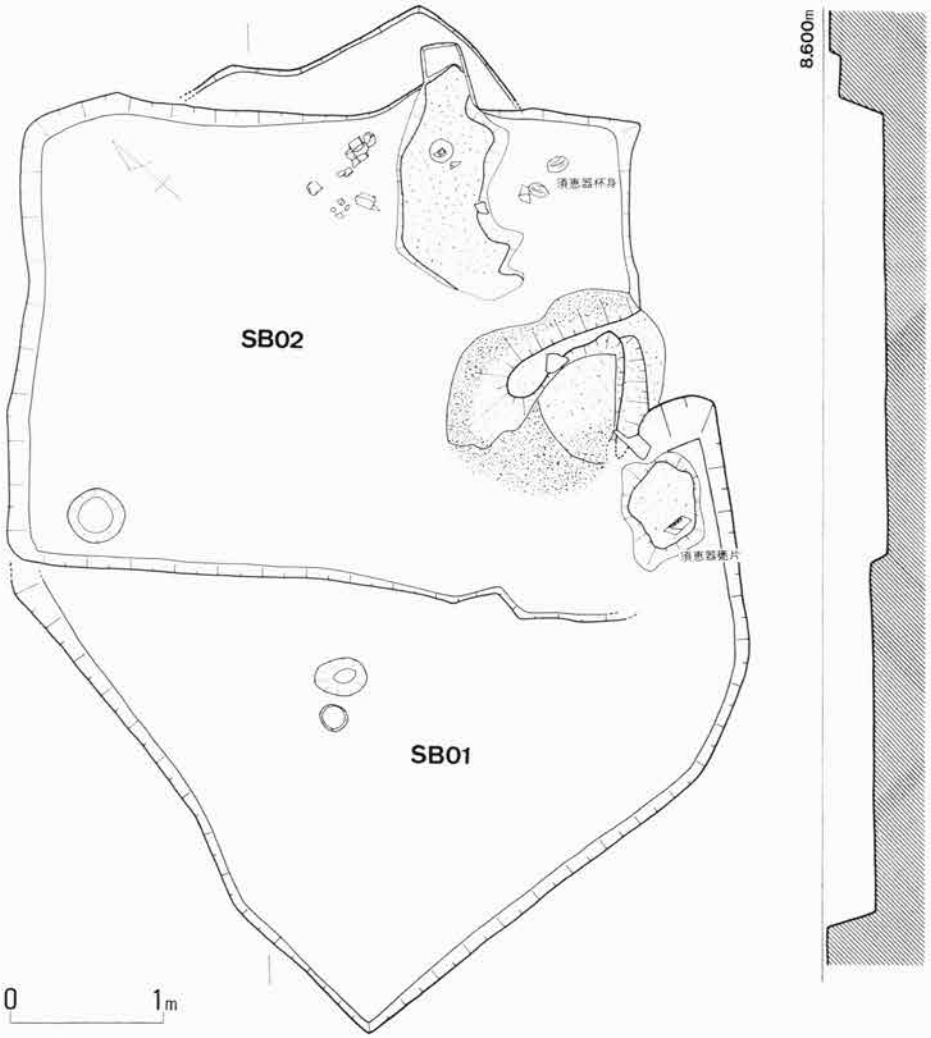
SB 01・02（第41図）

互いに切り合った二基の住居跡である。SB 01がより古く先に掘り込まれ，長辺約5 m，短辺約4.4 m，残存する住居外の生活面から

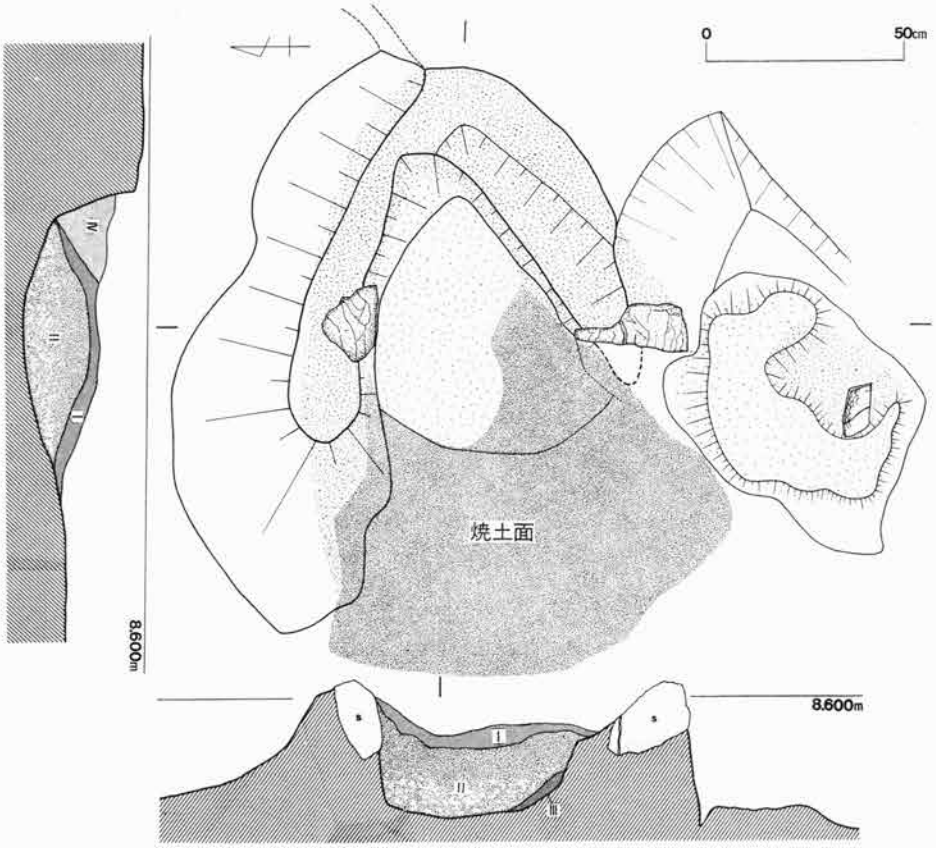
第40図　西壁中央部土層堆積状況

床面までの深さ（以下，単に深さと記す）約0.3mの規模を有する。形状は非常にいびつな隅丸四辺形である。東壁に当る長辺中央部に，粘土で造り付けられた馬蹄形の竈（カマド）がある（第42図）。竈の煙道部は壁より突出して設けられたと考えるが残存していない。

燃焼部には焼土・炭化物・土師器片等の遺物が混在している。支脚にしたと考えられる対象物はない。わずかに留意すべき点は，焚口に当る両側壁の末端部に25cm大程の角礫が置かれていることである。支脚に使用されていたものかもしれない。埋土は暗茶褐色粘土と暗灰褐色粘質土の二層で，床面は灰褐色極細砂を成す。柱穴の未確認については甚だ問題を残すところであるが，深い穴を穿って柱穴を設けた痕跡は全く無く，比較的細い柱を直接床



第41図　竪穴式住居跡(SB01・02)実測図



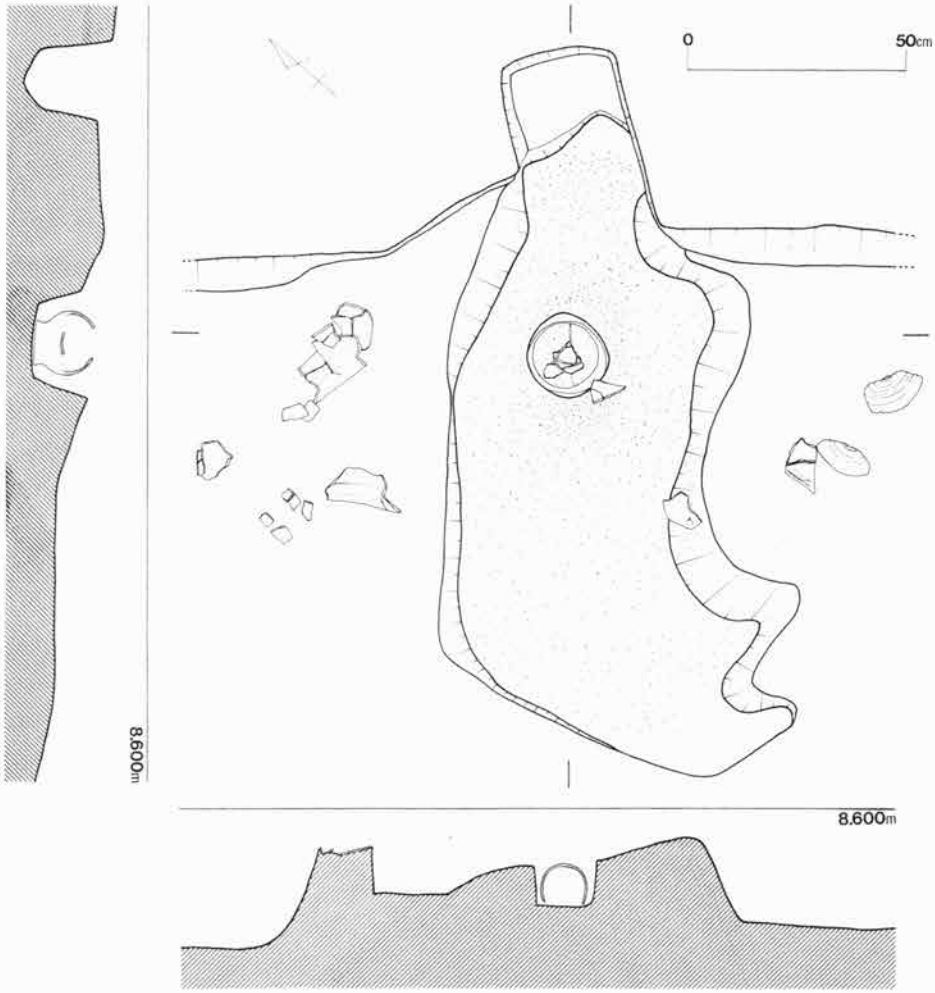
第42図　竪穴式住居跡(SB01)竈部実測図

Ⅰ．赤褐色粘質細砂　Ⅱ．暗赤褐色粘質土　Ⅲ．淡黄褐色粘土　Ⅳ．灰褐色粘質土
Sは石をあらわす。ドット部分は焼土の広がりを示す。以下の図も同じ。

面に据えたものと推察する。

付属施設として，竈の南側脇に焼土塊の広がりがある。表面の土が被熱により赤化し堅くなっており，住居壁に接して小さな火を焚いた形跡を留めている。この部分からは，須恵器甕片，土師器片等を検出した。通常よく竈の傍らに設けられる様な貯蔵穴は確認していない。また，すべての住居跡について言えることであるが，壁の周囲に排水溝らしきものは一切設けられていない。壁面のたちあがりが，ほとんど垂直に近いことも共通する。

SB 02 は，長辺約 3.8 m，短辺約 3 m，深さ約 0.4 m で長方形を呈する。SB 01 と同様，長辺の北壁中央部に造り付け竈が見られる(第43図)。燃焼部の平坦な面を検出したが，元来はドーム状に造られていたと思われる壁面は全く残っていない。燃焼部が屋内に奥まって設けられていることから，奥道のような形で複数の器を並べて同時に使用した可能性もあるが，詳細はわからない。燃焼部内の中央には，土師器甕（62図・11）が口縁部を下位にして胴部



第43図　竪穴式住居跡(SB 02)竈部実測図

上半部まで埋め込まれており，特殊ながらこれが支脚の用を果したものと考える。竈の東部脇で須恵器杯身1点と土師器片等がわずかな焼土，炭化物とともに検出された。埋土の堆積状況は SB 01 と同じで床面は暗灰色極細砂である。ここでも柱穴の確認はできなかった。

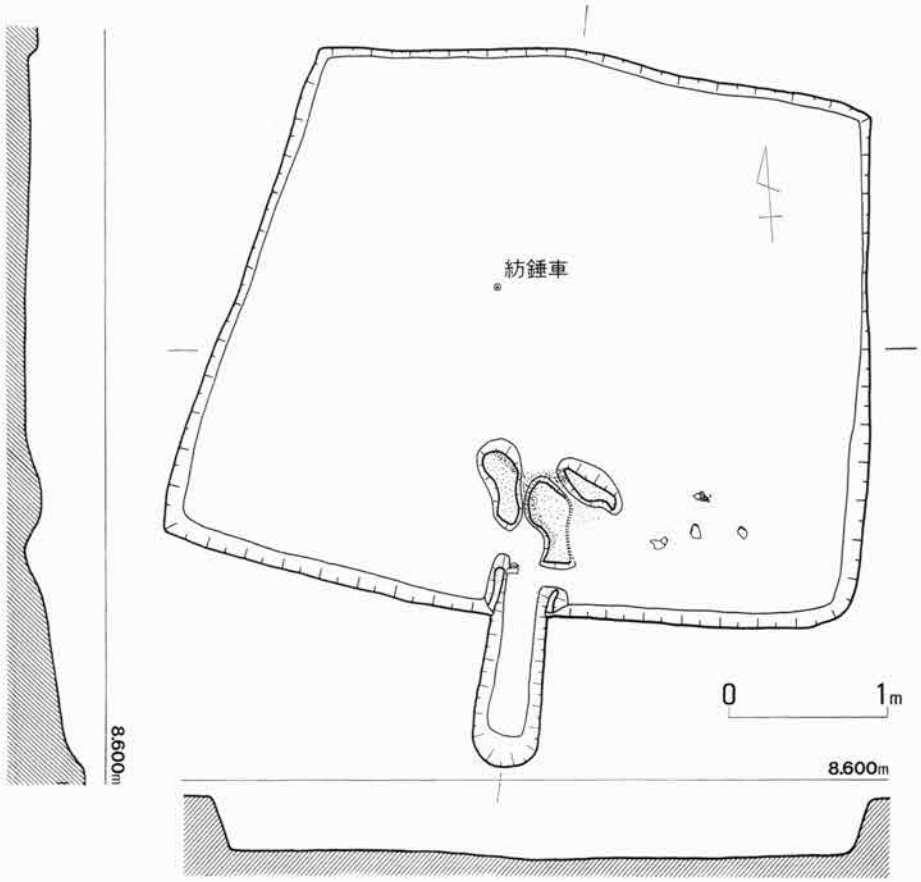
SB 03（第44図）

長辺約 4.2 m，短辺約 3.3 m，深さ約 0.4 m の規模で，形状はほぼ台形を成す。南壁中央部に竈を有し，壁から突出した約 1 m の煙道部が良く残っている。しかしながら，燃焼部は原形を留めないくらいに壊され，赤褐色の焼土の付着した壁土が散在していた。竈の東側の側壁に接して，須恵器杯蓋，土師器片が見られ，住居跡内のほぼ中央部付近に滑石製の紡錘車（第63図・28）が出土している。埋土は暗茶褐色粘土であり，床面は灰褐色細砂により

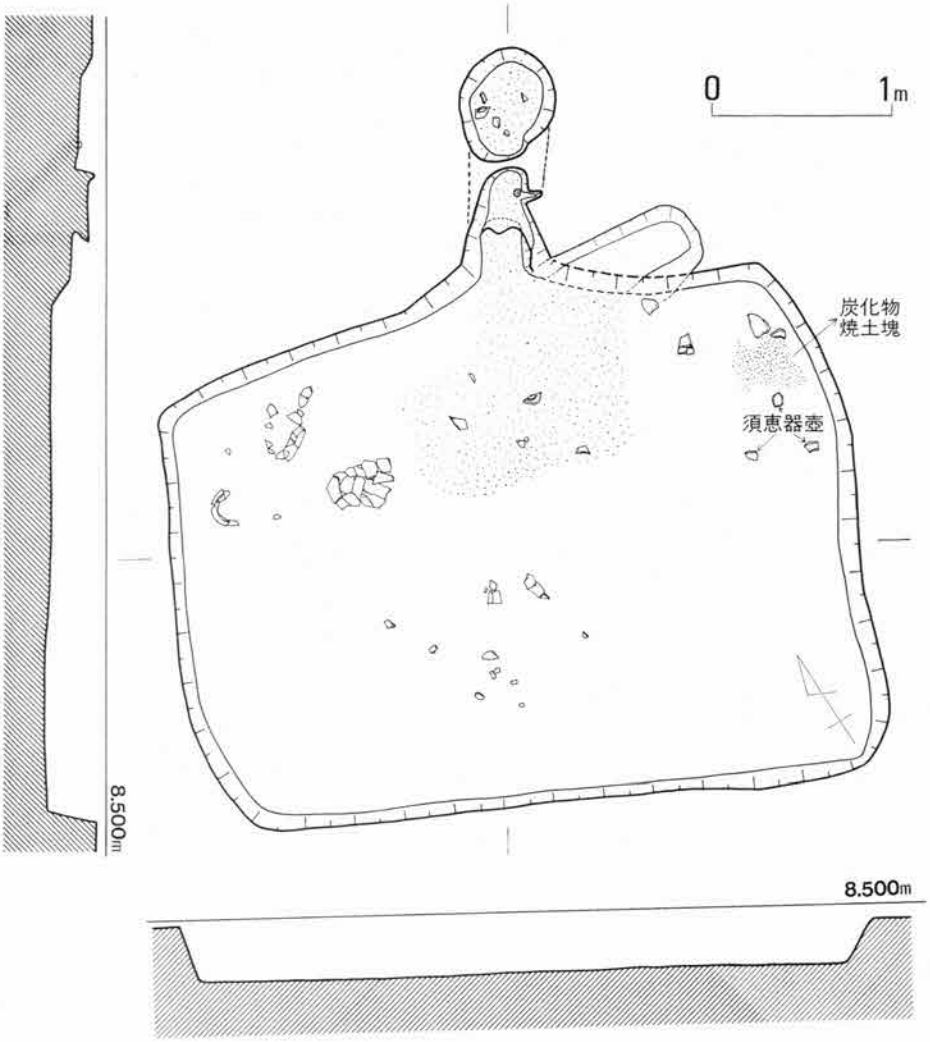
形成される。この面から掘り込まれたと思われる柱穴痕は検出していない。

SB 04（第45図）

長辺約3.5m，短辺約2.8m，深さ約0.3mを有し，いびつな隅丸四辺形を呈している。今回の全住居跡中最小である。長辺に当る北壁中央部に竈が造り付けられている。竈の燃焼部はSB 03以上に崩壊がすすみ，側壁は全く消滅している。焼土・炭化物，土師器片等が散乱し，これらの存在密度の差から燃焼部の形状，規模を推測し得るにすぎない。煙道部は約1mの長さで残存しており，先端部は深く掘られた様である。したがって，当初この先端部は土坑に見えたが，一続きの煙道部であることが判明した。先端部からは土師器小片を4～5点検出している。また，付属施設として貯蔵穴等の明確なものは無いが，竈近くで東北隅の壁面に接して須恵器ミニチュア壺（第63図・19）と焼土，炭化物がまとまって存在しているのを確認した。埋土は暗茶褐色粘土で，床面は灰褐色粘質土である。



第44図　竪穴式住居跡(SB 03)実測図



第45図　竪穴式住居跡(SB04)実測図

ここからも柱穴痕は確認し得なかった。

SB 05（第46図）

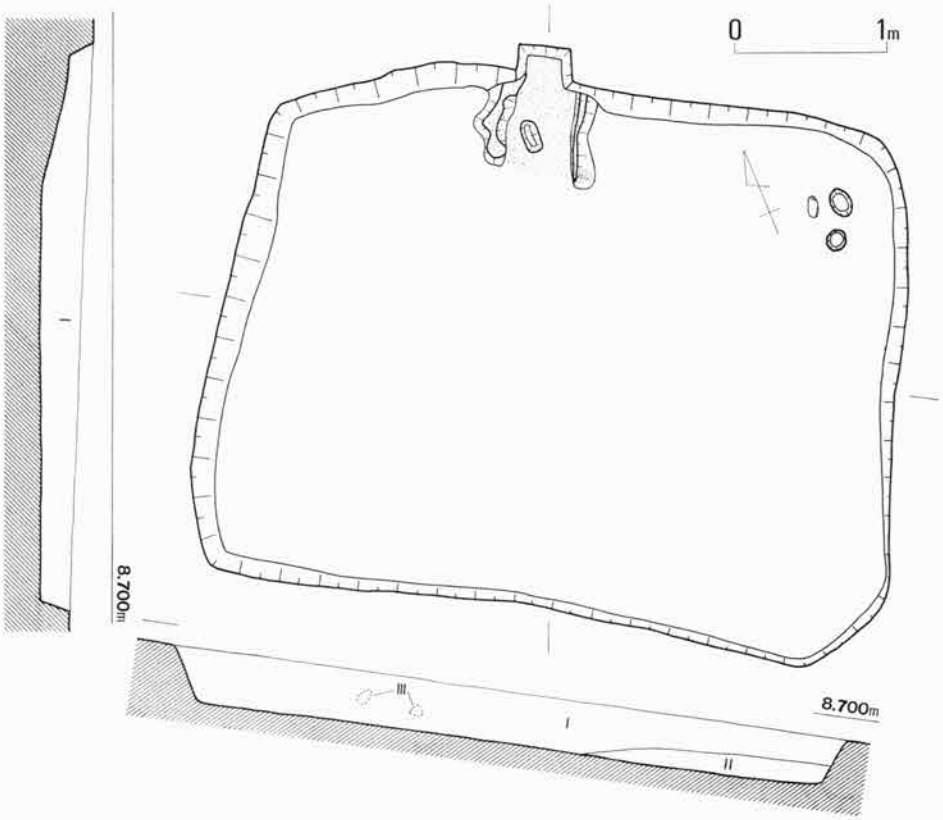
規模は長辺約4.5 m，短辺約3.5 m，深さ約0.3 mで，形状は隅丸四辺形を呈する。長辺の北壁中央部には竈が粘土で馬蹄形状に造られていた。煙道部は角を有し，短く，約20 cmの長さで壁から突出している。燃焼部には土師器片の存在が認められるほかは，支脚に使われたらしい遺構・遺物は残っていない。ただ中央部にごく小さな浅い窪みがあり，器を据えていた痕跡と推察する。丸底の甕や鉢などを安定させるのに役立ったかもしれない。

埋土は2層に分かれ，上層は暗茶褐色粘土，下層は暗赤褐色粘土から成り，床面は淡褐色

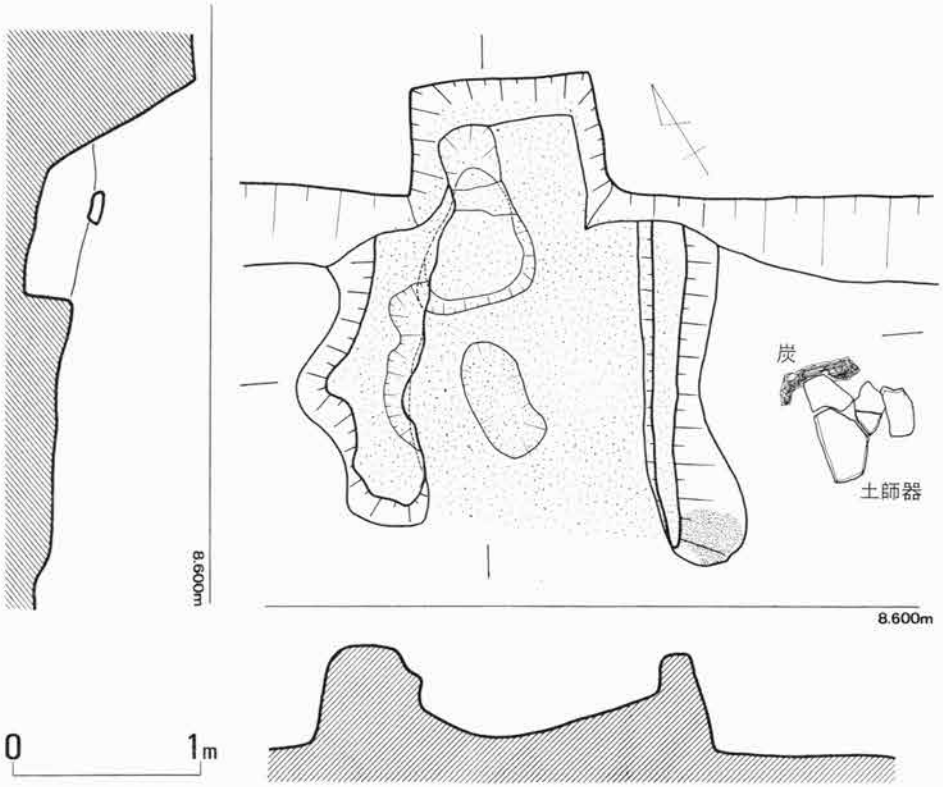
粘質細砂となる。柱穴痕らしきものは残存しておらず，確認できなかった。なお，柱穴ではないが，北東隅（竈部東側）より直径 10～13 cm 程の小穴２つを検出している。遺物や焼土・炭化物は存在しなかったが，他の住居跡と同様，北東隅にこうした遺構を設けていることに留意しておきたい。

SB 06 （図版第20，上）

長辺約 4.3 m，短辺約 3.3 m，深さ約 0.3 mで，四辺形の住居跡である。長辺である南壁の中央部に竈を有する。馬蹄形の粘土側壁は比較的良好に残っている。燃焼部中には，土師器甕片が土圧により潰された格好で存在し，支脚らしきものは認められない。煙道部は北方向に約 80 cm の長さで壁面より突出している。燃焼部はもとより，煙道部末端には炭化物・焼土塊がよく残っている。約 50 cm の深さに掘られた楕円形（40× 70 cm）の土坑が竈部の東側の脇に存在している。濃茶褐色粘土が詰っており，その輪郭ははっきりしていた。その中の遺物はごくわずかで，土師器の砕片を２点，底近くから検出したにすぎない。食物の貯



第46図　竪穴式住居跡 (SB 05) 実測図
Ⅰ．暗茶褐色粘土　Ⅱ．暗赤褐色粘土　Ⅲ．濃赤褐色焼土塊



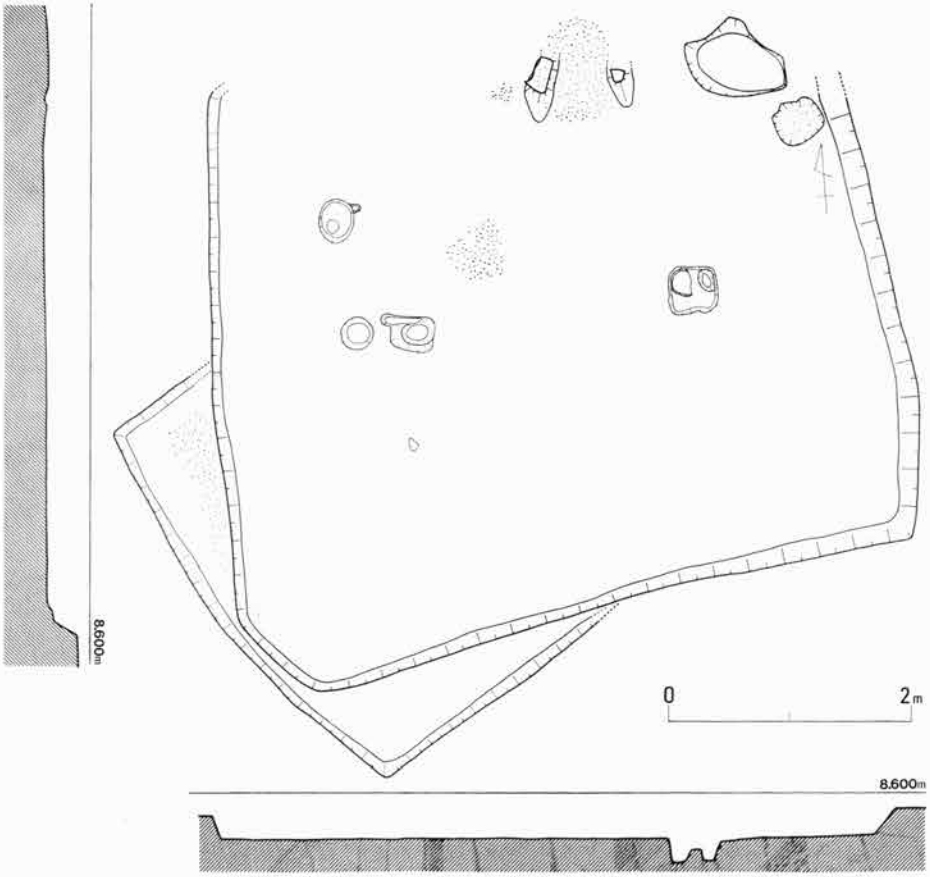
第47図　竪穴式住居跡(SB 05)竈部実測図

蔵穴として使われていたかもしれないが判然としない。埋土はやや赤味を帯びた暗茶褐色粘土である。床面は淡灰褐色粘質細砂で，ここからも柱穴の痕跡を捉えることはできなかった。

SB 07・08（第48図）

二基の住居跡が切り合って存在している。新旧関係では SB 08 の方が新しい。SB 07 は，SB 08 によって大きく切られているため，完全に復原して規模を算出することは甚だ難しい。しかしながら，残っている西側の壁が約 3.8 mであることから，これを1辺とする正方形に近いものであったと推察する。竈部の形態をはじめ，柱穴・付属施設の存在状況等についても言及し得ない。埋土は暗茶褐色粘土である。

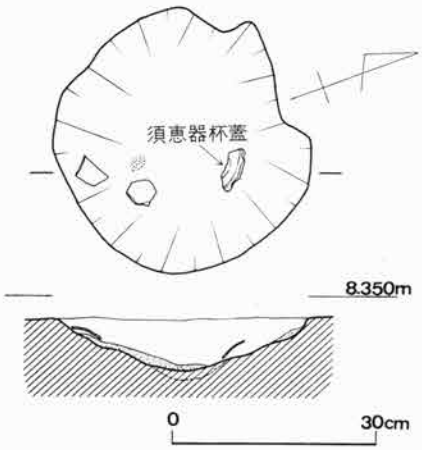
SB 08 は長辺約 5.5 m，短辺約 5 m，深さ約 0.2 mでほぼ正方形を呈する。北壁の中央部に竈を有しており，粘土で馬蹄形に造られた側壁（燃焼部）が良好に残存している。床面が細砂質であるため，煙道部の痕跡が判然とせず消滅してしまったものと考える。特記すべき遺物として，竈部に近い住居内中央部の床面（暗灰色細砂）から耳輪（金環）(第63図・29)が1点出土している。(注9) さらに本住居跡でも竈に近い住居内北東部隅に，直径約 40 cm，深さ



第48図　竪穴式住居跡(SB 07・08)実測図

約8cmの焼土の詰った小土坑を検出した(第49図)。中には,須恵器の高杯・杯蓋が(第64図・35・36)破損した状態で出土している。灰白色の自然遺物も検出し,骨粉とも考えられるが,あまりに微量であるため断定し得ない。

このように,住居跡内の竈の脇(多くは北東部隅)に何らかの遺構を有する点は,SB 01～08までのほとんどすべてに共通する特徴と言える。これらの遺構は,生活施設(貯蔵穴・土器置き場その他)であるとともに,当集落全体が持つ精神文化(たとえば風習・儀式)

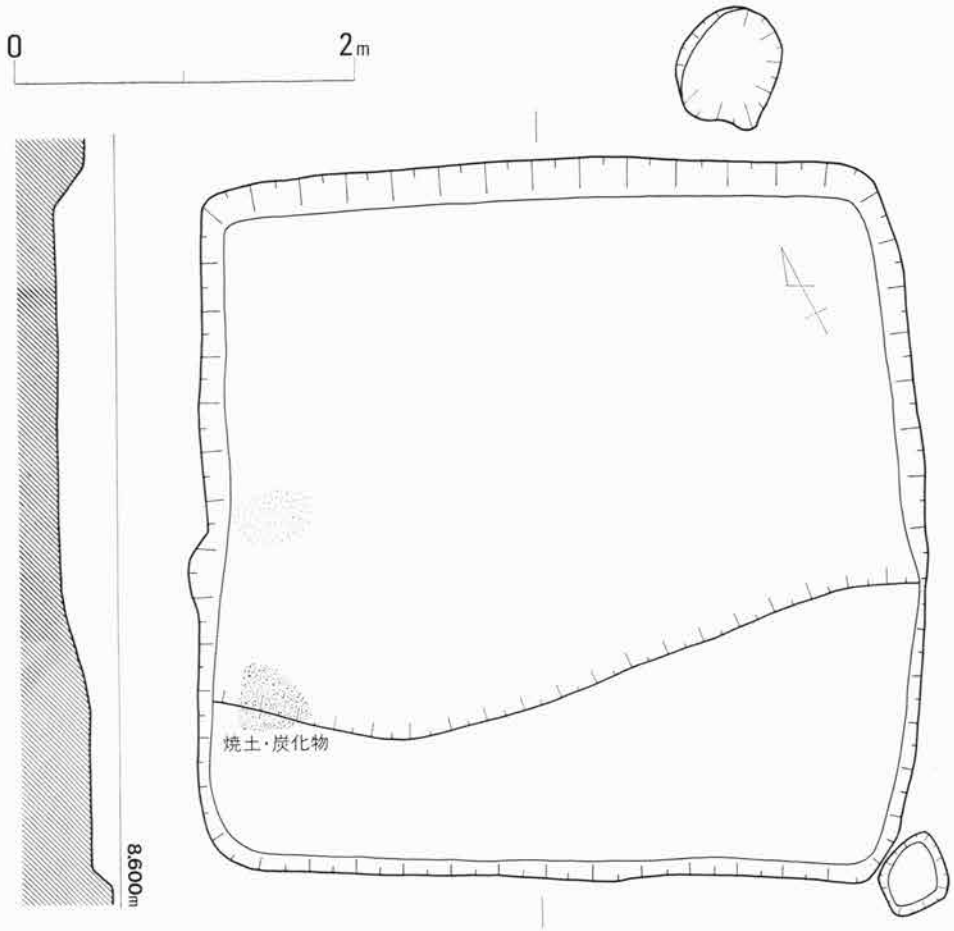


第49図　焼土坑(SK 03)実測図

と深い関わりがあるという見方も決して突飛なものとは言えない。慎重さを欠く観察や言及は避けなければならないが，興味深い事象である。なお，SB 08 の埋土は暗茶褐色粘土と淡褐色粘質土の２層である。床面は暗灰色細砂である。柱穴痕らしきものも存在するが，掘形の形については崩壊がすすみ判然としない。今後，上屋構造について考えていく上で，柱穴の未確認は大きな壁となり，問題を残したと言える。

SB 09（図版第21，上）

長辺約5.5m，短辺約5.2m，深さ約0.3mの大きさで，形はほぼ正方形を呈する。今回の全竪穴式住居跡中最大の規模をもつ。竈は有さず，西壁中央部付近に丸い焼土の広がりをわずかながら認めたにすぎない。埋土は上層が暗茶褐色粘土で，下層が暗灰褐色粘質細砂である。床面は暗灰色細砂があらわれている。柱穴は，屋内に３つ，屋外に１つ確認したにすぎ



第50図　竪穴式住居跡(SB 10)実測図

ないため，上屋構造については言及できない。各々の柱穴の構造も今一歩明らかではなく，すべて床面からかなり浮き上った上層で捉えたことなど不明な点は多い。床面を掘り込んだ形跡は全く無く，直接に柱材を据えたようである。

なお，貯蔵穴・排水溝などの付属施設は確認していない。

SB 10（第50図）

長辺約4.3m，短辺約4m，深さ約0.3mを有する隅丸正方形である。SB 09 と同様に，竈を設けていない。西壁中央部に隣接して焼土塊がまとまって存在しているのを確認した。

なお南側の約3分の1を占めて，テラス状の遺構が認められる。その性格および機能については明言できないが，住居跡内の水はけを考慮したものか，あるいは特異な生活・作業の場として機能したものとも想像される。住居内の埋土は暗茶褐色粘土であり，床面（テラス部を含む）は暗灰褐色粘質細砂である。但し，テラス部分は若干ではあるが堅く，褐色味が強いようである。

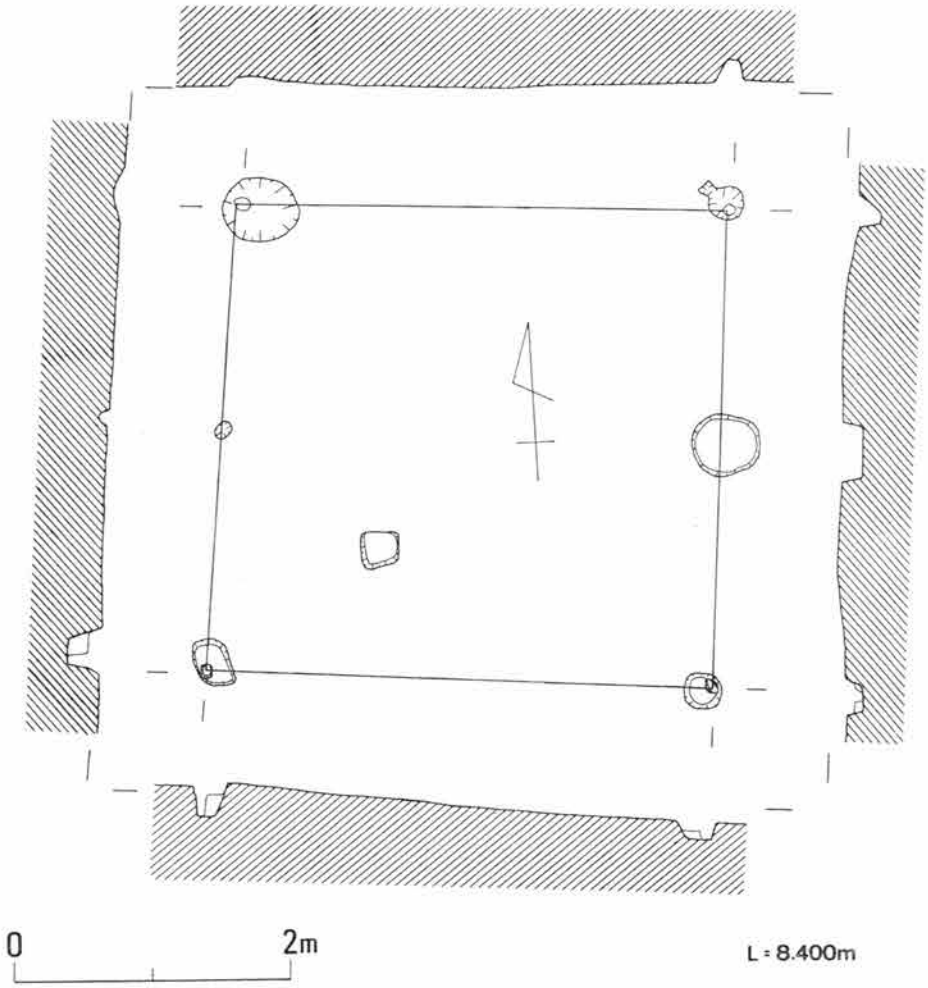
柱穴は屋内からは確認できなかったが，南東および北東隅に1つずつ存在している。恐らく本住居跡の柱穴となろう。深さは共に 10 cm 程度の浅いものである。

SB 09・10 は他の住居跡とその内容を異にしている。竈を持たないことは，一見して諒解される最大の違いであるが，他にも屋外に設けられた柱穴やベッド状遺構（SB 10 のみ）を有する点など，違いは明らかである。また層位のところでも述べたが，1F区～6F区の東端ラインをほぼ境にして，遺構の設けられている生活面（土質）が違う。西側は暗灰褐色粘質土であり，東側は暗灰色極細砂である。このことから SB 09・10と他の例を比べ，設営された時期の差ということが当然考えられる。しかしながら，両タイプの住居跡内の遺物を観察する限り，現段階で明確な時期差を指摘することは難しいようである。また，SB 10 に見られた焼土のまとまりは，竈を破棄した痕跡なのか炉のようなものなのか明らかでない。とにかく，SB 09・10 がいかなる性格のものかという詮索は，他の住居跡やその他の遺構を含め，生活面の検討を進めてからのこととなろう。

② 掘立柱建物 SB 11（第51図）

SB 09 の真西に隣接して建てられた建物である。東西1間（3.6m），南北2間（×1.7m）の小規模なもので，各々の柱穴の掘り込まれた地盤が砂質であるため残存状態はよくない。柱穴内の埋土は暗茶褐色粘土である。なお，南列の2つの柱穴の中間部に比較的大きな土坑が存在する。約 10 cm 足らずの浅いもので，柱穴と同様に暗茶褐色粘土の埋土をもつ。建物の出入口に設けられた何らかの遺構と思われる。

遺物は柱穴の掘形からは出土せず，時期決定の判断材料を欠く。しかし，周囲の生活面に



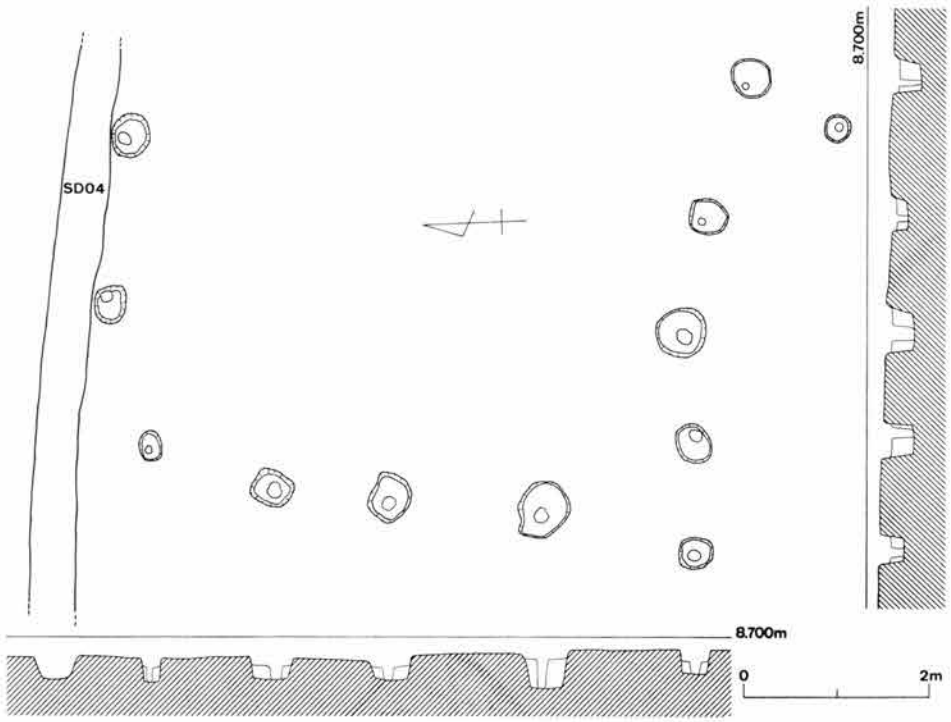
第51図　掘立柱建物(SB 11)実測図

散在する若干の遺物（土師器片）から竪穴式住居跡に近い時期（古墳時代後期）と言える。

③　柵列 SA 01（第52図）

SB 11 の南東に設けられた柱穴群である。東側においては柱穴列がなく，北・南・西側はそれぞれ平均1.3m間隔に並んで存在している。柱穴の掘り込まれている面は淡褐色粘質土で，柱の底近くは灰色細砂となる。埋土は暗茶褐色粘土である。柱材はすべて直径10cm～20cm 程度の極めて細いものを用いている。ここでも柱穴からの遺物はごくわずかで，時期について判断する材料を欠く。ただ，検出レベルや地盤の性質等から判断して，SB 09・10 や SB 11 と近い時代の所産と言える。

柵列の北列にほぼ接して南北に走る溝 (SD 04) がある。幅約0.5m，深さ約0.2m，発掘区



第52図　柵　列 (SA 01) 実　測　図

中央部を東西に走っている。全体で約25. 6m分検出している。中からは，瓦器小片・土師器片が若干出土しており，中世以降の灌漑溝の名残りと考えられる。

④　土坑 (SK)

ここでは竪穴式住居跡内の施設として既に触れたもの以外の，代表的な土坑についてみていく。

SK 01（第53図）

形は隅丸四辺形で，長径約1. 1m，短径約１m，深さ(最も深いところ) 約12cmの大きさである。埋土は，やや赤味を帯びた暗茶褐色粘土が主である。底面の中央部に焼土・炭化物が部分的に残存している。遺物は，若干の土師器片とともに，極めて腐蝕・風化のすすんだ鉄製品(リング形)が１点出土している。焼土・炭化物とともにこうした特異な遺物を含んでいることから，土坑墓と考えたが，埋葬遺骨や供献土器などはなく断定はできない。

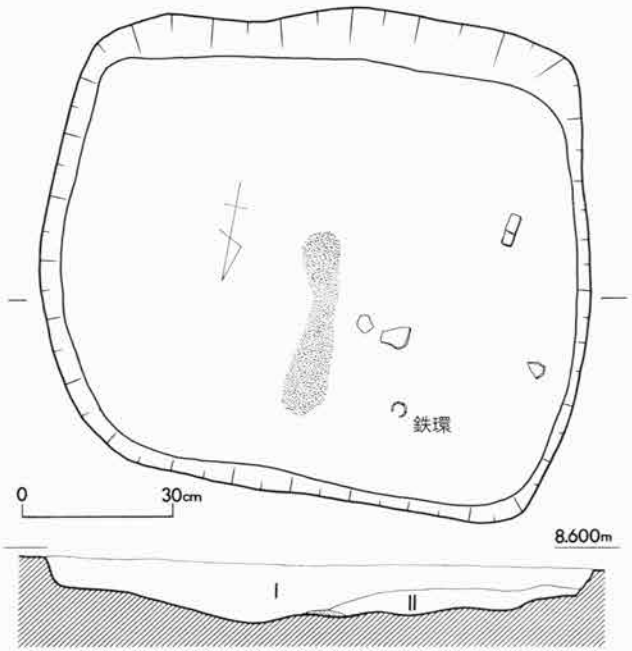
SK 02（第54図）

いびつな楕円形を呈し，長径約2. 1m，短辺約1. 5m，深さ約20cmの規模を有する。埋土は暗褐色粘土である。SK 01 に隣接しているが，こちらは焼土・炭化物を全く含んでいない。底面は平坦ではなく凹凸があり，土師器甕口縁片をはじめ遺物が疎らに出土している。時期

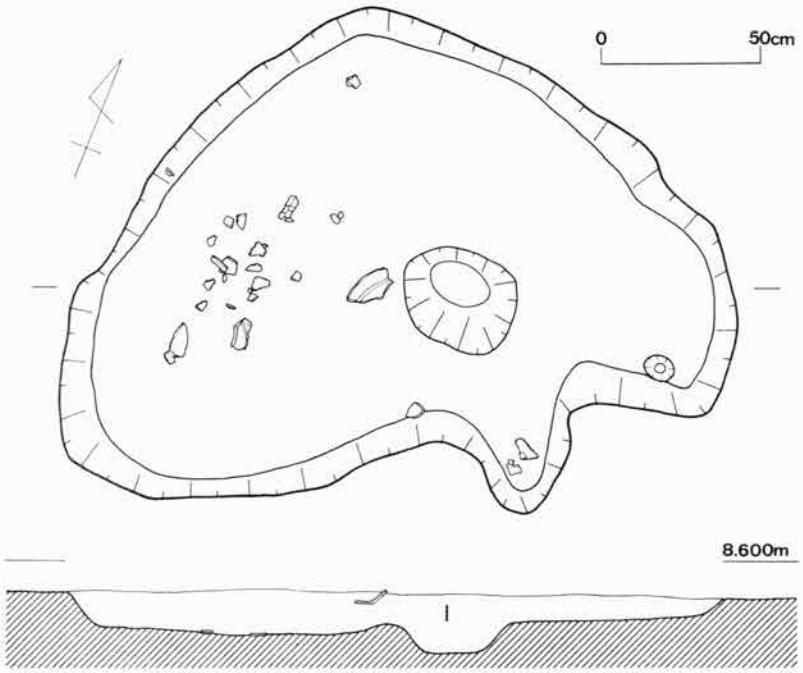
は古墳時代後期のものと言える。

SK 06・07・08（第55図）

いずれも隅丸方形に近く，いびつな形を呈する浅い土坑である。SK06は長径約1.4m，短径約1m，深さ約15cmの規模を有する。埋土は暗茶褐色粘土で，縁辺部には淡灰褐色粘質土と褐色極細砂が順に堆積している。底面から壁にかけてのたち上りは急であり，垂直に近い角度をもつ。遺物はまったく出土せず，焼土・炭化物等も含まれていない。



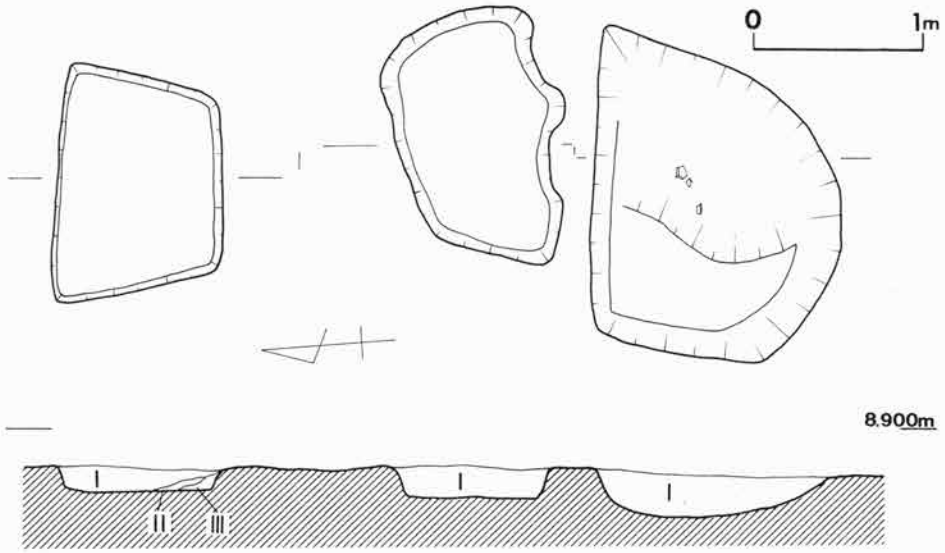
第53図　土 坑 (SK 01) 実 測 図
I．暗茶褐色粘土　II．淡灰褐色粘質細砂



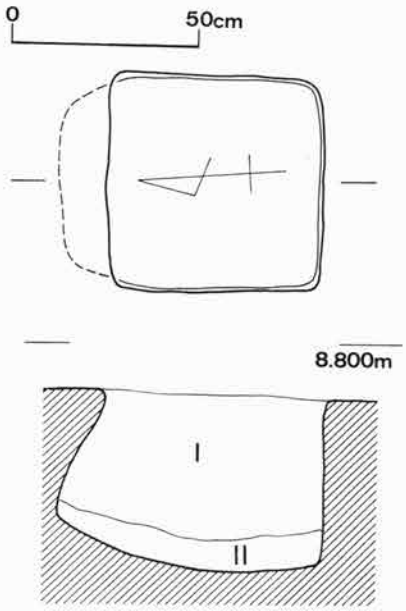
第54図　土 坑 (SK 02) 実 測 図
I．暗褐色粘土

SK 07 は長径約1.6m，短径約 1 m，深さ約15cm で暗茶褐色粘土の埋土をもつ。断面形は SD 06 と同様で，遺物や焼土・炭化物などは出土していない。

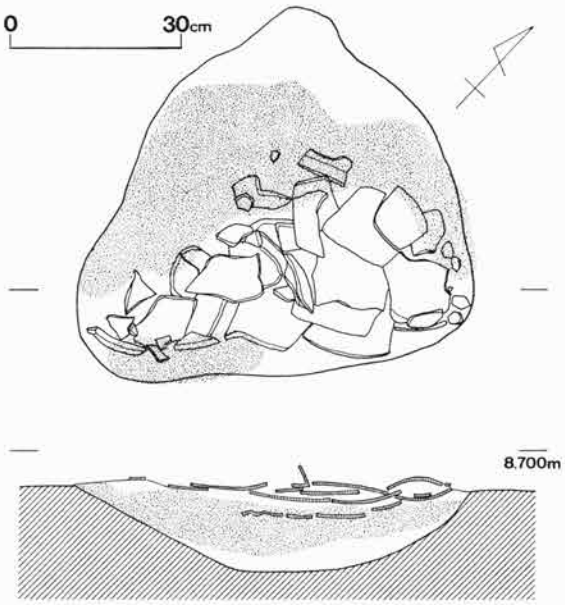
SK 08 は長径約 2 m，短径約1.5m，深さ約30cm のものである。埋土はやはり暗茶褐色粘



第55図　土 坑 (北から SK 06～08) 実 測 図
Ⅰ．暗茶褐色粘土　Ⅱ．淡灰褐色粘質土　Ⅲ．褐色極細砂



第56図　土 坑 (SK 09) 実 測 図
Ⅰ．暗茶褐色粘土　Ⅱ．淡灰褐色粘質土



第57図　土 坑 (SK 11) 実 測 図
スクリーン・トーンは焼土塊を示す

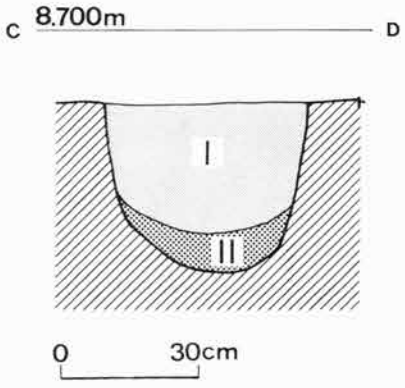
土の1層で，底からのたち上りは，特に南側はなだらかである。遺物は土師器の小片を若干検出したにすぎない。

SK 09（第56図）

1辺約0.6mの正方形に近い土坑である。深さは約0.5mで，今回検出された土坑中最も深い。埋土は二層に分かれ，上から暗茶褐色粘土，淡灰褐色粘質土の順に堆積している。なお，北壁は奥まり，やや袋状を呈している。出土遺物としては，土師器の細片が2点出土したのみである。所属時期について言及し得ない。炭化物・焼土は認められない。他の土坑に比べて深いことや，フラットな底面をもつことから食糧その他の貯蔵に適したものと言える。貯蔵穴としておきたい。

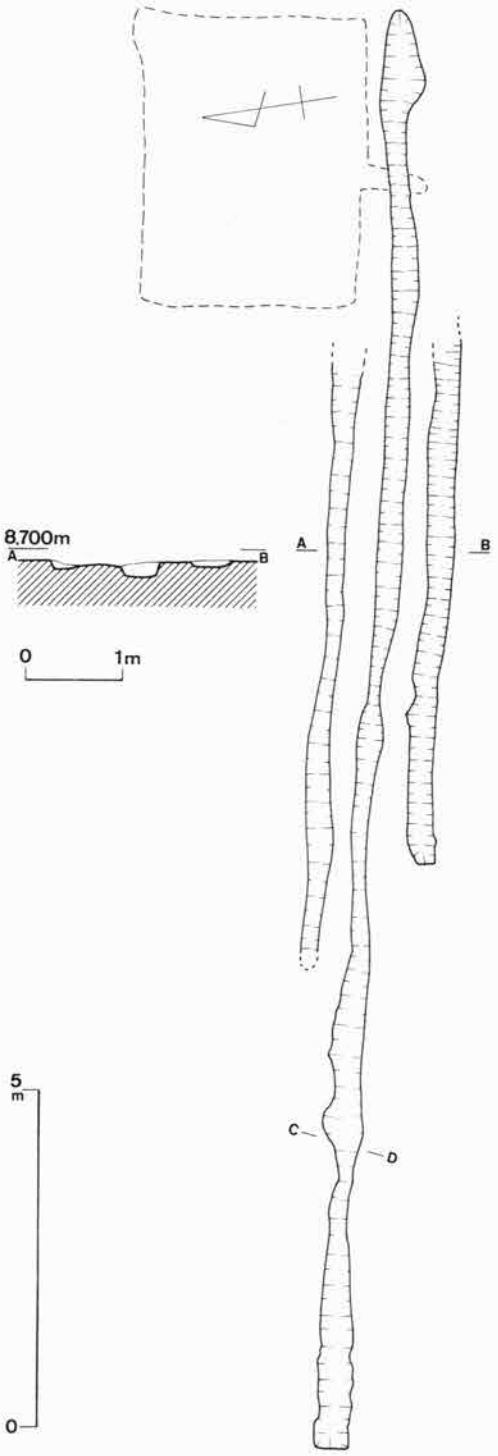
SK 11（第57図）

南東隅に検出された焼土坑である。不整形で，長径約0.7m，短径約0.6m，深さ約20cmの大きさである。埋土は暗赤褐色粘土で，



第59図　溝状遺構（SD 06）埋土堆積状況実測図

Ⅰ．暗青灰色粘土
Ⅱ．灰色細砂（角礫含む）



第58図　溝状遺構（SD 05～07）実測図

焼土を多く含んでいる。表面に露出して胴長の土師器甕1個体分（第64図・40）をはじめ土師器類がまとまって出土している。炭化物はあまり含まれていないが，赤味を帯びた焼土はよく観察される。

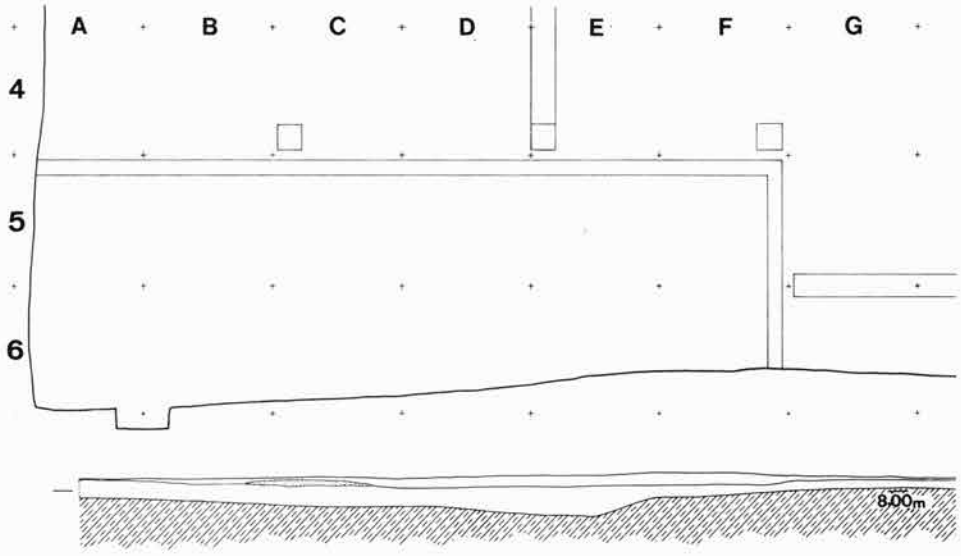
⑤　溝 SD 05～07（第58・59図）

溝状遺構は全部で7条ある。検出し得た長さは様々だが，幅・埋土・出土遺物等は概ね共通している。SD 05～06 を例にとり観察すると，先ず SD 05 は約8.7m分確認できた。幅約20～30 cm, 深さ約 15 cm で，暗青灰色粘土が詰っている。SD 06 は約21m分と最も長く残存していた。幅約 20～45 cm, 深さ約 25～50 cm で暗青灰色粘土を埋土とする。SD 07 は残存する長さ約7.8m，幅約30 cm, 深さ約 10 cm のものである。埋土は前二者と同じである。3条とも後世の削平を受けている。また，SD 06 は西にいくほど深くなる。底近くでは灰色細砂となり，ここから 15～20 cm 程の角礫が多く検出された。出土遺物はほとんどなく，わずかに瓦器椀細片・陶器壺片・土師器皿片を認めたにすぎない。SD 07 の検出位置が南壁の真際であることから，さらに並行する溝の有無は不明である。これらは中世の農耕用排水路と考える。

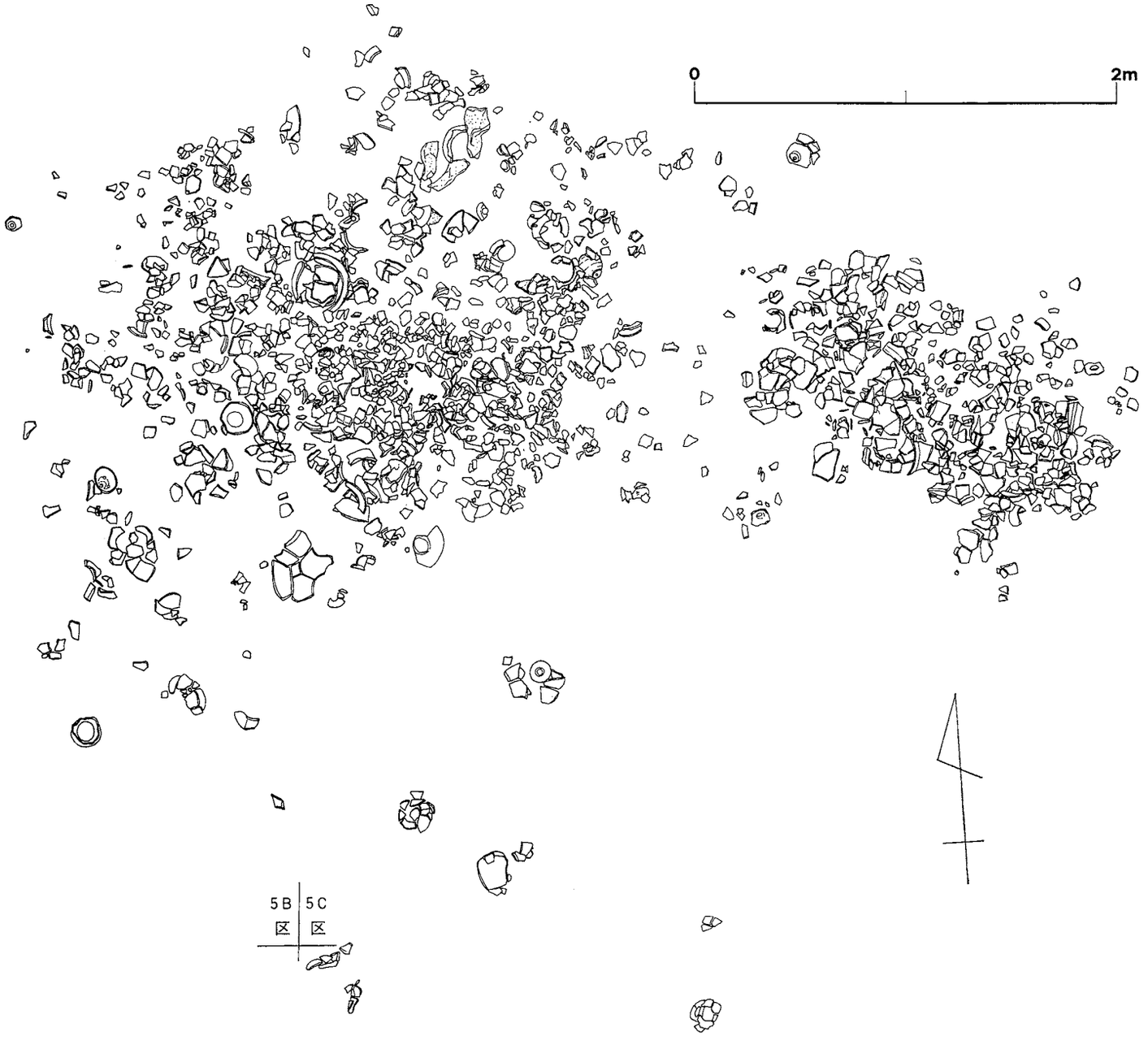
⑥　土器溜り SX 01（第61図）・SX 02

SX 01 は長軸約5.5m，短軸約4mの範囲に，大きく二つの密集部分をもつ。これだけまとまってこの期（古墳時代前期）の土師器を出土したのは，当地域では初めての例と言える。

これらの夥しい土師器の内容は，甕・小型丸底壺・高杯・鉢である。その他の遺物として



第60図　SX 01 付近断ち割り断面図（ドット部分は土器溜りの堆積）



第61図　土器溜り(SX 01)実測図

は桃らしき種子が若干出土している。

古墳時代前期の当地は，後背湿地の中にあって恐らく沼地のような地形を呈していたのであろう。こうした沼地に破損した土器類を廃棄したようである。土器表面の摩滅は決して進んでおらず，流れにより運ばれたとは考えにくい。

SX 02 は SX 01 の北約 3 m の距離を隔て存在している。竪穴式住居跡 (SB 05) の西壁に隣接しており，長軸約 3 m，短軸約 2 mの範囲に集中している。この密集域を中心にしてここから離れる程，遺物分布は疎らになる。

すべて土師器ばかりで，これらの器種組成は SX 01 と同じである。また，土器の表面における摩滅は，ここでもそれほど顕著ではない。

さて，SX 01 と02の遺物を観察・整理していくと，両者は同じ性質をもつものとして，切り離し得ないものであることがわかる。遺物も同じ時代幅をもつもので，しかも接合関係が頻繁に認められる。なお，土器群が存在する標高は約8.3mである（第60図)。SX は共に人工的な掘り込み（溝・土坑等）ではなく，自然のなだらかな沼地状窪みの中に存在している。土器溜りを中心に暗茶褐色粘土が厚く堆積するが，四方にいくに従って極めて漸移的に暗灰色極細砂となる。土器溜り付近がやや浅い窪みとなっていたのである。

8. 遺　　物

① 竪穴式住居跡内の遺物

竈内および床面出土の遺物を中心に主なものを紹介する。上層からの混入とみられる比較的新しい時期の遺物も含まれているが，これらは除外してある。土師器・須恵器・その他の遺物の順に記す。土師器には甕・壺・甑・鉢を，須恵器には杯蓋・杯身，壺，高杯を，その他の遺物には金環・紡錘車をそれぞれ内容としている。

甕

口縁部および胴部の形態から便宜的に 4 つに分類される。

甕A．くの字形に屈曲する口縁部をもち，端部をまるく収めるもの（1･5･6･21･23･27･30･32)。口縁部と胴部の境に明瞭な稜が入る。甕B．口縁部から体部にかけてゆるやかな曲線を描き，口縁部はやや外反し，端部をまるく収めるもの（2･4･11･12･18･31)。甕C．体部から口縁部にかけては甕Bと同様，ゆるやかにたち上るが，口縁端部に水平面をもつもの(3･26)。甕D．口縁部は短くて，まるく内湾し，体部は長胴形で中間付近に最大幅をもつもの(15･24･25)。口縁端部はまるく収めるものと，鉤形（内側）になっているものとがある。

調整は，口縁部内面を横刷毛，胴部内面をなでにて仕上げているものが多い。Dとしたも

のは，胴部以下も左上りの刷毛を施している。また，外面は口縁部をなでて，胴部以下を刷毛で調整している。(15) と (25) は，口縁部外面にも縦方向の刷毛がつけられている。胎土・焼成とも良好である。なお，口縁から胴部最上にかけて左上りに箆記号の線刻をもつものがある。(注11)

壺　(10・33)

点数は少なく2個体を報告し得るにすぎない。2個体とも特異な形態をもつものである。(10) は無頸壺で口縁端部がやや肥厚ぎみにもちあがるものである。内面はなで，外面はわずかながら刷毛の痕跡をとどめている。指頭圧痕が顕著であること，全体に淡白褐色ながら内面に黒褐色斑部の認められることもあげておきたい。焼成はやや軟で胎土も粗い。(33) は，口縁部（頸部）が欠損しており，全体の形状は不明である。非常に丸みを帯びた胴部に，やや上底ぎみとなった滑らかな平底に特色がある。胴部は「磨き」とも言える削りが施され，内面は粗いなでにより仕上げられている。なお内面は黒く燻（いぶ）され，数本の長い線条痕が認められる。

甑　(7～9・37)

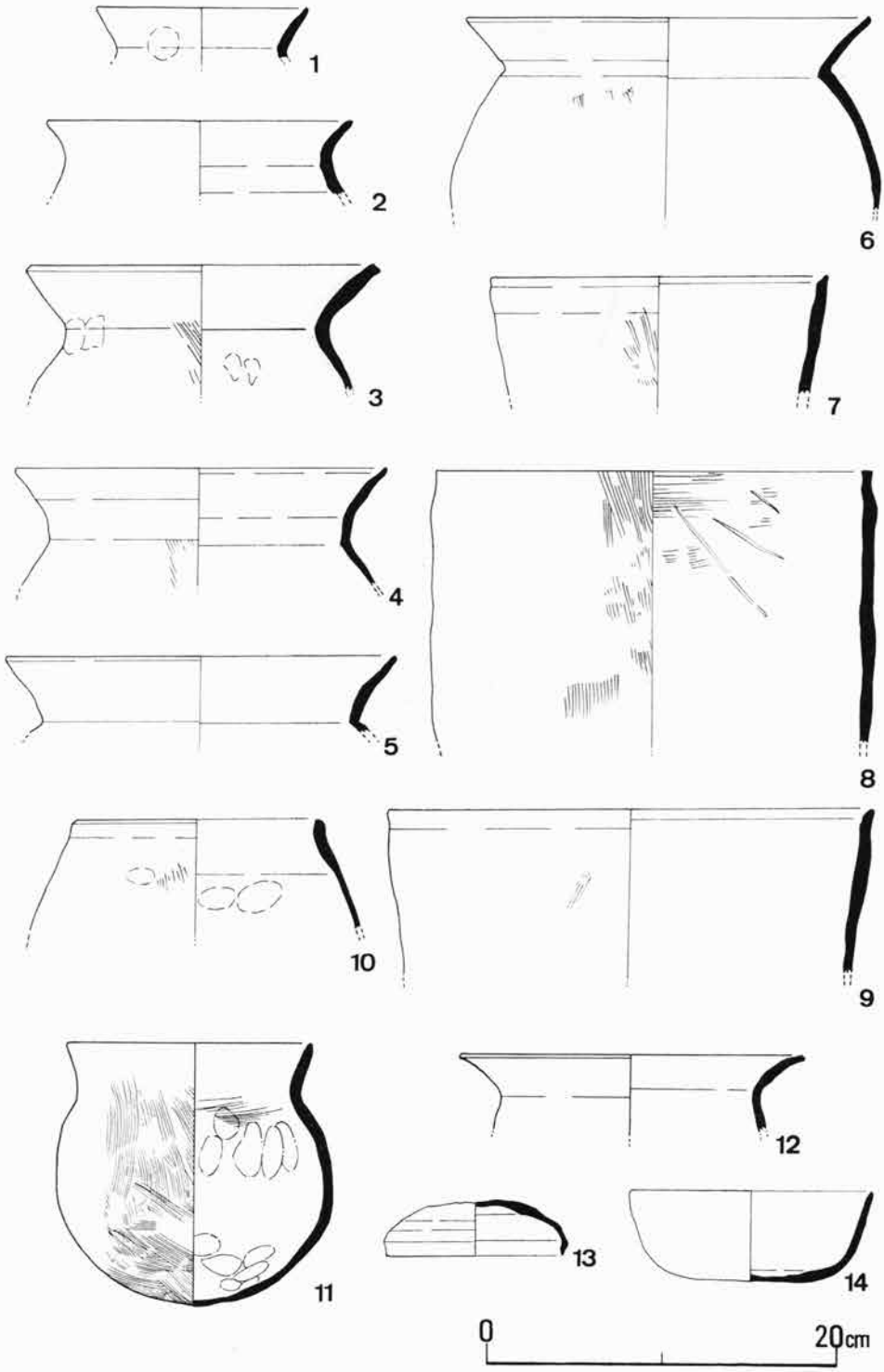
4個体確認している。胴部が垂直近くまで立ち上るものである。口縁部径は最小のもの(7)で約20cm，最大のもの(9)で約30cmを測る。口縁端部をまるく収めるものと，水平に面をもつものがある。調整は外面と，内面上半部に刷毛がつけられている。

鉢　(16・34)

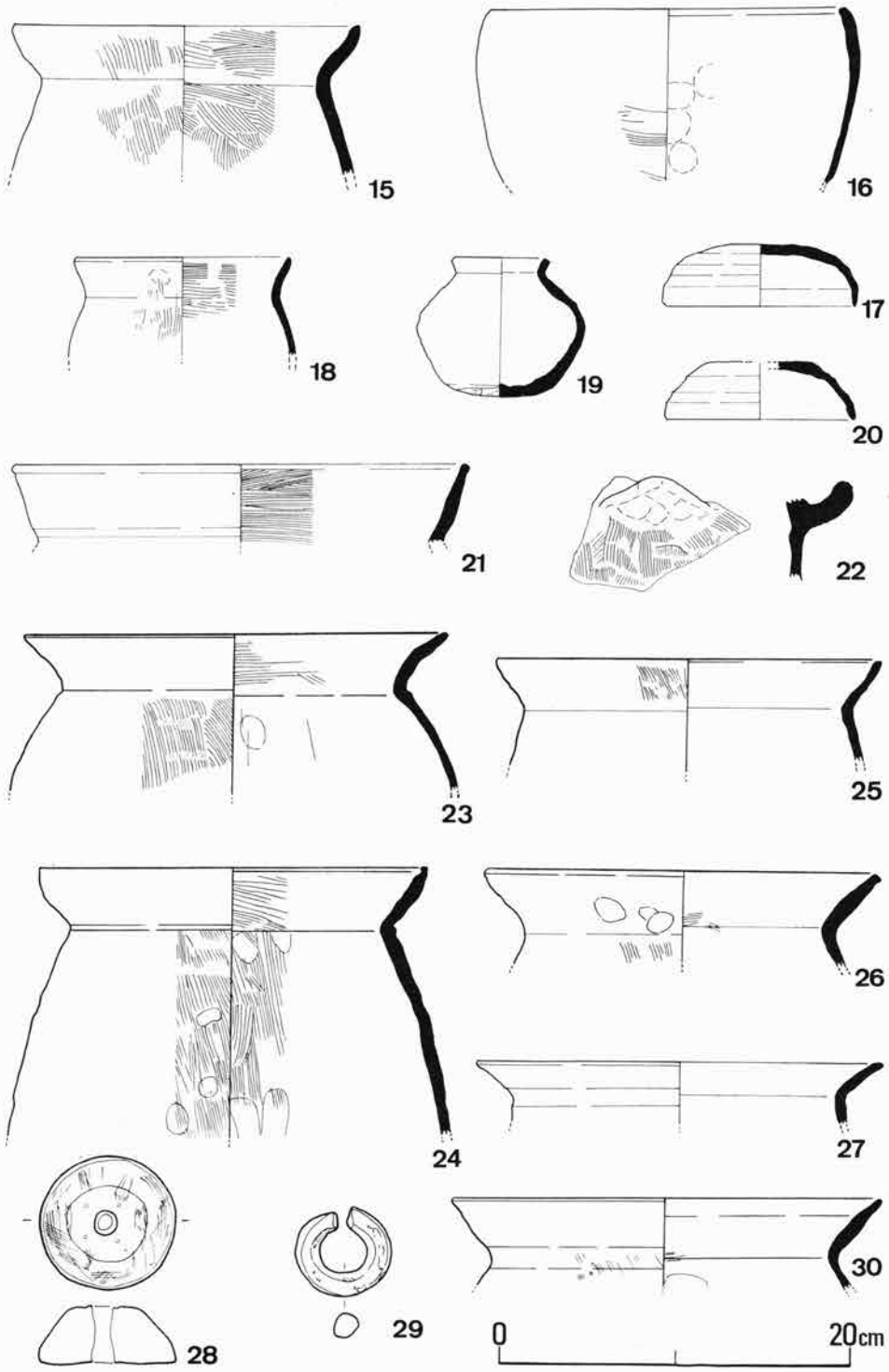
形態的に鉢とわかるものは2個体のみである。胴部の上3分の1近くから内向し，端部を丸く収めるものである。器壁は非常に薄く仕上げられ，淡灰白色の胴部外面にわずかながら刷毛目が認められる。内面は粗いなでによって仕上げられている。胎土はやや粗く，焼成もあまりよくない。口径は (16) が 20cm，(34) が 23cm を測る。

須恵器杯・壺・高杯

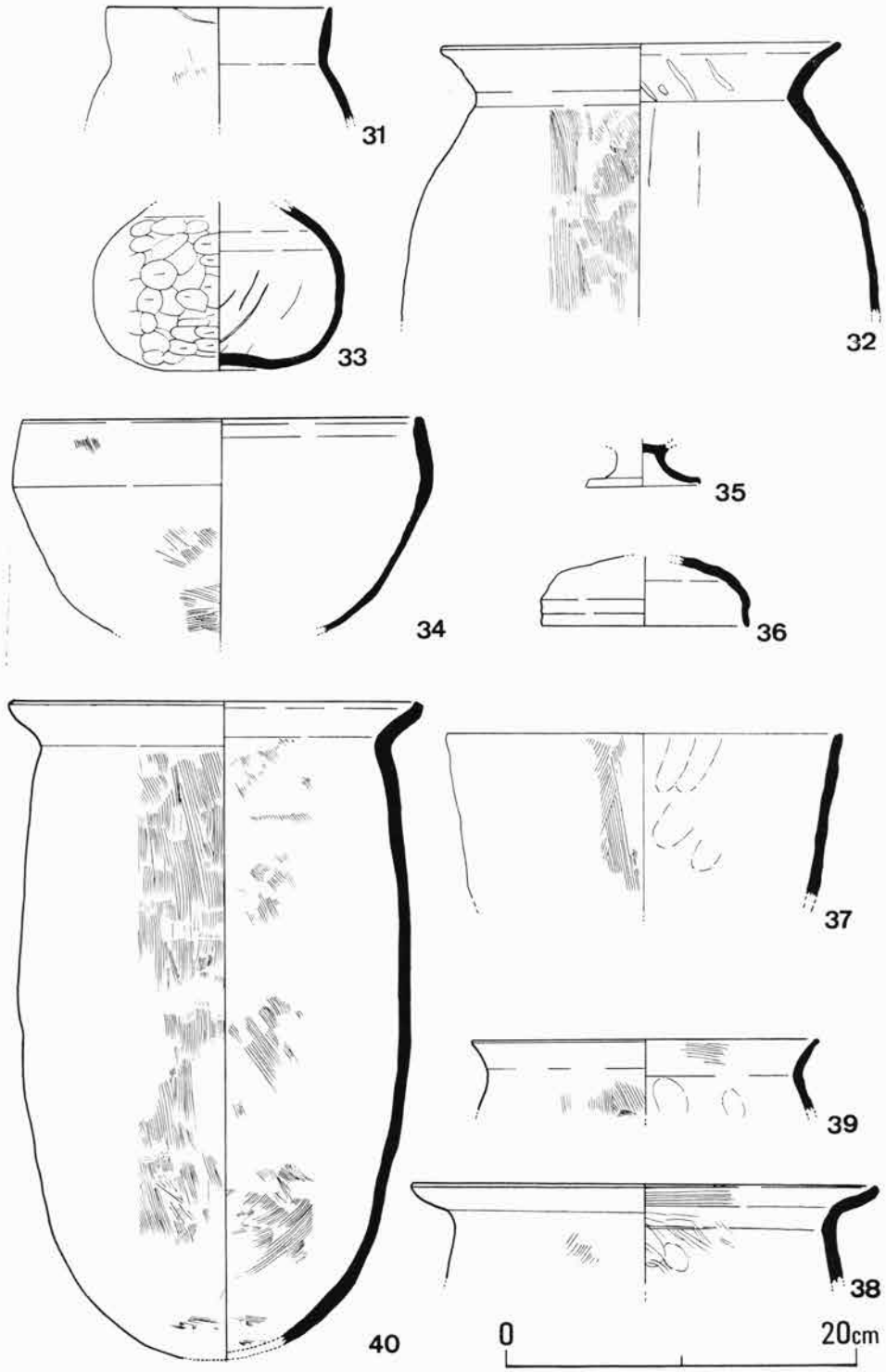
杯は2・6・9・10号竪穴式住居跡から出土がみられる。杯身は細片のため図化しえなかったが数点ある。(14) 以外はすべて同形態である。残りの比較的良好であった1号住居跡からの資料を例にとると，口縁部内側に張り出す返りの部分は低く短いもので，外側端部にかけての角度もなだらかにつけられている。陶邑 TK209 に併行する時期（6世紀前半～7世紀前半）と言える。(14) は，2号住居跡から出土したもので，口径約14cm を測る。内外面ともなでによる整形で胎土・焼成とも良い。最大径の約2分の1を占める平底から口縁端部まで大きく角度をつけてたち上る。これは他のものに比べ，時代が下る（7世紀後半）ものと言え，住居跡の時期とともに検討していかなければならない。



第62図　竪穴式住居跡内出土遺物①



第63図　竪穴式住居跡内出土遺物②　28・29は1/2



第64図　竪穴式住居跡・土坑内出土遺物

杯蓋（13･17･20･36）は，全部で4点前後出土している。口径はすべて 10cm 前後でやや小さなものである。頂部に未調整部分を若干残し，内・外面ともなでにより整形されるものに限られる。

壺（19）は非常に小型で，口縁端部に面をもつ短頸部・丸い胴部とも回転なでにより丹精につくられている。ただ，底部は非常に荒い篦削り痕を残している。高杯（35）は脚・下杯部のみである。胎土・焼成とも非常に良好である。

その他の遺物

紡錘車 (SB 03) **と金環** (SB 08) とがある。紡錘車は滑石製で非常に艶やかな面を呈し，上の平面には4つの小孔が浅くあけられている。また，側面部には細かな擦痕が無数にあり，格子模様のようにみられる箇所もある。金環(29) は青銅製で金箔を部分的に残している。重量は紡錘車が40ｇ，金環が約20ｇである。

② 土坑内の遺物

ここでは，焼土坑 (SK 11) と土坑 (SK 02) の土師器甕のみ図示した。その他の土坑中の遺物はわずかで，しかも測定できない細片が多い。(38) は，やや受口状の口縁端部をもつ胴長のもので，内面と胴部外面に刷毛を施している。(39) と (40) は，同一の焼土坑から出土したもので，(40) は口縁部が短く内向する胴長のもので，胴部内外面には縦方向の刷毛がつけられている。(39) は，口縁部が比較的緩やかにたち上り，胴部との境いに明確な屈曲線の入らないものである。胴部外面と口縁部内面を刷毛で調整している。なお SK 01 出土の鉄製環は，腐蝕が著しいため図化し得なかった。金環と同形で輪が完結していない。重量は約7ｇである。

③ 土器溜り SX 01・02 の遺物

甕・壺・鉢・器台・高杯をその主な内容としている。すべて土師器である。

甕（1～16）

(1)～(10) は「く」の字形に屈曲する口縁部を有するものである。口縁端部は折り返しをもち，面をもたず丸く収められている。口縁部の内・外面はなでにより仕上げ，胴部は外面を刷毛，内面を削りで整形して器壁を極めて薄く仕上げている。胎土・焼成とも良好である。

(1)と(8)は，内面の口縁と胴部の境い目付近に刷毛を残すもので，やや時期を古くする。全体の個体数の算出を終えていないので，これらの正確な占有率は不明であるが，およそ1割弱くらいと思われる。

(11)～(14) は，折り返しのない口縁端部をもち，やや外反ぎみの口縁部と形ばかりの底部を有する。(51) は，口縁部と胴部の屈曲ラインはなだらかである。外面にわずかながら刷毛

を残し，内面にも口縁端部および胴部との境いあたりに刷毛が認められる。内面は主になでにより整形されている。(12)～(14) は胴部内・外面とも刷毛で調整され，とりわけ (13) は内面に横方向の刷毛目が単位をもって明確につけられているのが観察される。

(15)・(16) は右上りの細かい叩き目が胴部に施されたものである。庄内式甕と言えよう。このタイプは全部で数点しかなく，割合的に極めて少ない。(15) はやや小形のもので，口縁端部が丸くやや内側に向いている。胴部の叩き目は非常に細かい。口縁部内面にわずかに刷毛を施し，胴部は念入りな削りで薄く仕上げられている。(16) は，(15) と同様の調整手法をもつものであるが，口縁から胴部にかけては屈曲ラインを明確にもち，やや外反ぎみになっていることが異なる。端部はやや面をもっている。なお，(16) は胴部の上から4分の3近くまで叩きで，これより下は刷毛目を施す。

(49)～(51) は複合口縁をもつものである。(49) は口縁部径 27cm で，口縁部内・外面は丁寧ななでで仕上げ，また胴部外面は横刷毛と縦刷毛を重層的に併用しているようである。胴部内面は篦削りである。器壁は極めて薄くなっている。口縁端部は折り返しぎみに丸みを帯びてまとまる。(50) は，口縁部径 32cmで，口縁端部に折り返しをもたず，先端に面を持たない。外面は (49) と同様の調整であるが，内面は胴部と口縁部の境に刷毛目が認められる。また胴部は削り後なでの手法により調整されている。(51) は口縁部径 29cm で，(50) と同様の調整をもつが，口縁端部がやや内に肥厚し，面を持っていることが異なる。(49)・(50) は胎土・焼成とも良好で，(50) は焼成がやや軟である。

このように複合口縁を持つもの，それ以外のものの内にも時期差が微妙に投影されている。庄内式甕をわずかに含むが，布留式甕の標準資料の集合として捉えられよう。

鉢 (17～19)

3点のみ図示した。全体的に数は少ない。(17) は，手ずくね成形の小形のもので，指頭圧痕が随所に見られる。粘土塊がまるく貼り付けられた底部は，極めて不安定なものである。(18) は，同じく手ずくね成形によるもので，ごく簡単な底部がつくられている。(19) は，広口で口縁部は短く，胴部より緩やかにたち上り，滑らかな曲面を有する。口縁部外面を篦磨きによる他は，刷毛にて調整している。外面の口縁部に黒斑が認められる。

器台 (21～37)

脚部の形態により5つに分けて説明できる。

器台A (21・22)

これらは本来，形状から高杯の部類に入れられるが，杯部を穿孔していることから器台とした。杯部は二段につくられている。調整は，杯部の内・外面と脚部の外面を細かい篦磨き

で行っている。(21)は，脚部下位にわずかながら刷毛目が認められる。

器台B（23～29）

平面的にあまり開かず，直線的に先まで伸びる脚部を有する。外面と杯部内面に彩やかな篦磨き痕が認められ，胎土・焼成とも極めて良好である。色調が他のものに比べ，赤味が強いことも注意されてよい。脚部の内面は刷毛による調整を受ける。（28）と（29）から杯部の形状がわかる。ともに端部付近が屈曲して垂直近くに立ち上るものである。(29）は外反ぎみに端部がつまみ上げられて稜が入る。なお，杯部と脚部は嵌め込み方式である。

器台C（30）

脚部が短くかつ下杯部が大きく開き，杯部から底まで直線的に伸びているもの。本例は表面の剝落が著しく，調整手法については不明瞭である。脚部の穿孔は3つのものが多い。

器台D（31～36）

脚部が一旦くびれ，角度をつけて開くもの。脚部の中央や上方から3分の1近くのところで屈曲するものが多い。最も大きな屈曲角をもつのが（36）で，このくらいになると脚柱部と脚部（底部）の区別が出てくる。調整は，外面を篦磨き，内面を刷毛にて行っている。(35）の篦磨き痕はとりわけ細かく明瞭である。また（31）・(32）・(36）の3点は，屈曲点から下底まで，ふくらみを持ちつつ伸びて，端部は先細りで丸い。穿孔は3つが多い。

器台E（37）

形態的にみて特異で，同形のものはこれ1点しかない。脚部先端は低いながらも段を有し，なでにより仕上げられている。内・外面は主に篦磨きで，非常に細かく念入りにかけられている。胎土・焼成とも良好である。鼓型器台となろうか。

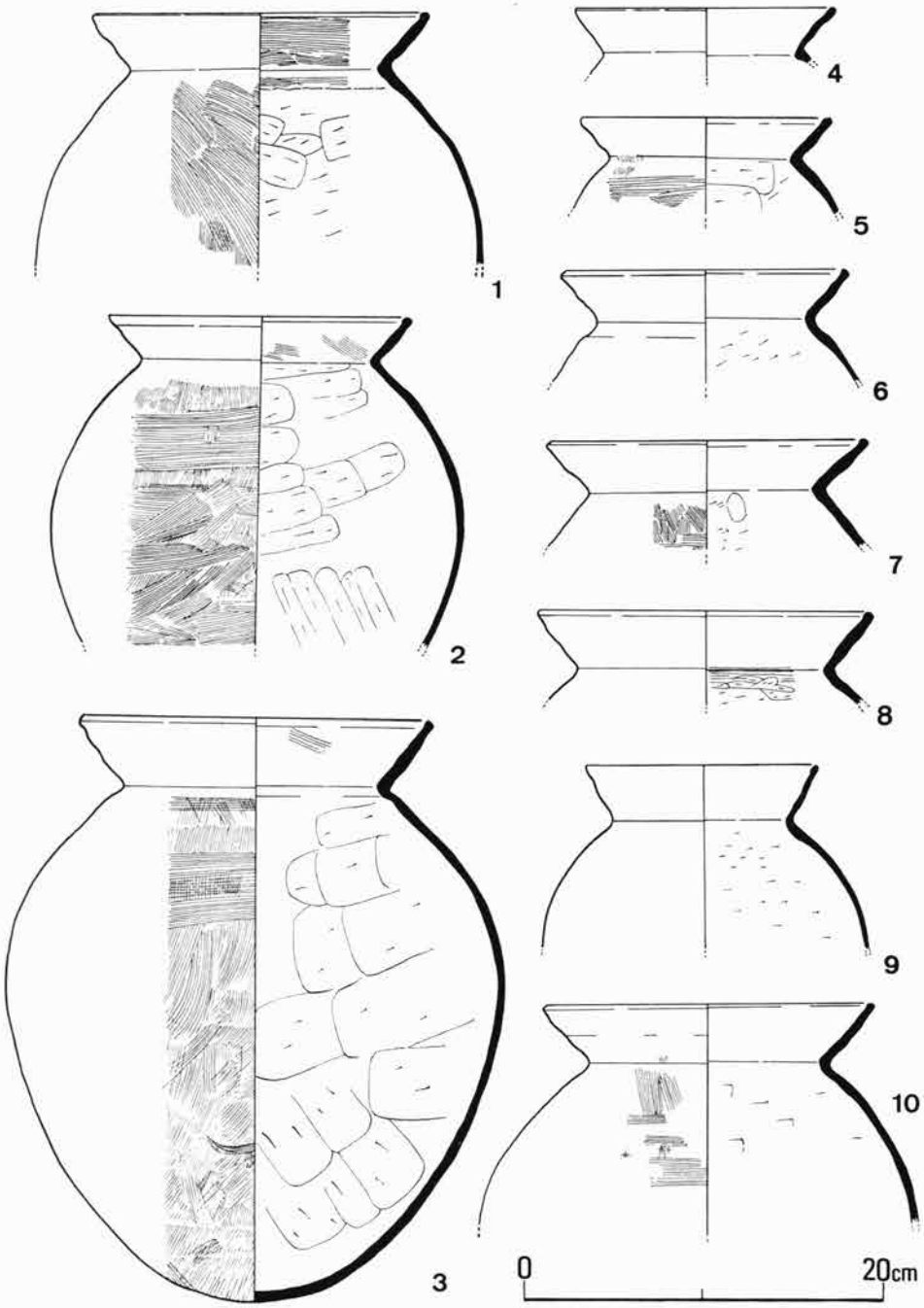
壺（38～48）

小形丸底壺と言えるものや二重口縁をもつものなども含み，形態は多種多様である。

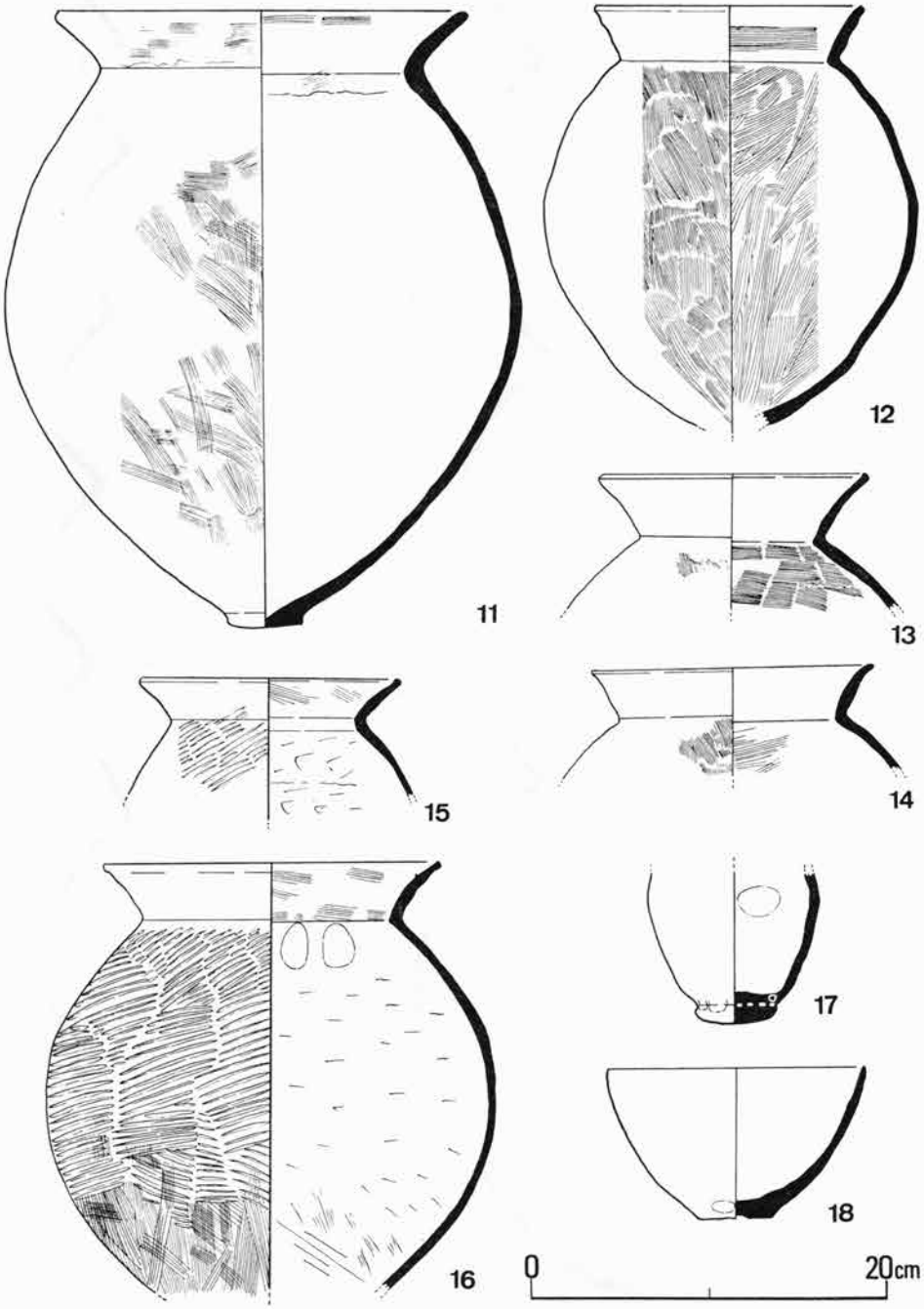
(38）は，赤褐色の軟らかな胎土で，口縁部は短く，球形の胴部に対しほとんど水平に近い角度をつけて屈曲し，端部はわずかながら上向きにつまみ上げられている。先端はやや面を持っている。表面の剝落が著しく，調整は不明瞭であるが，わずかながら胴部外面に刷毛の痕跡を止めている。類似形態はなく，これ1点だけである。

(39)～(44）は，小形丸底壺である。(39）と（40）はやや大きめのもので，ほとんど球形に近い胴部をもち，口縁部はやや内向ぎみに開く。胴部外面は篦磨きにより調整されている。内面はなでによる調整である。

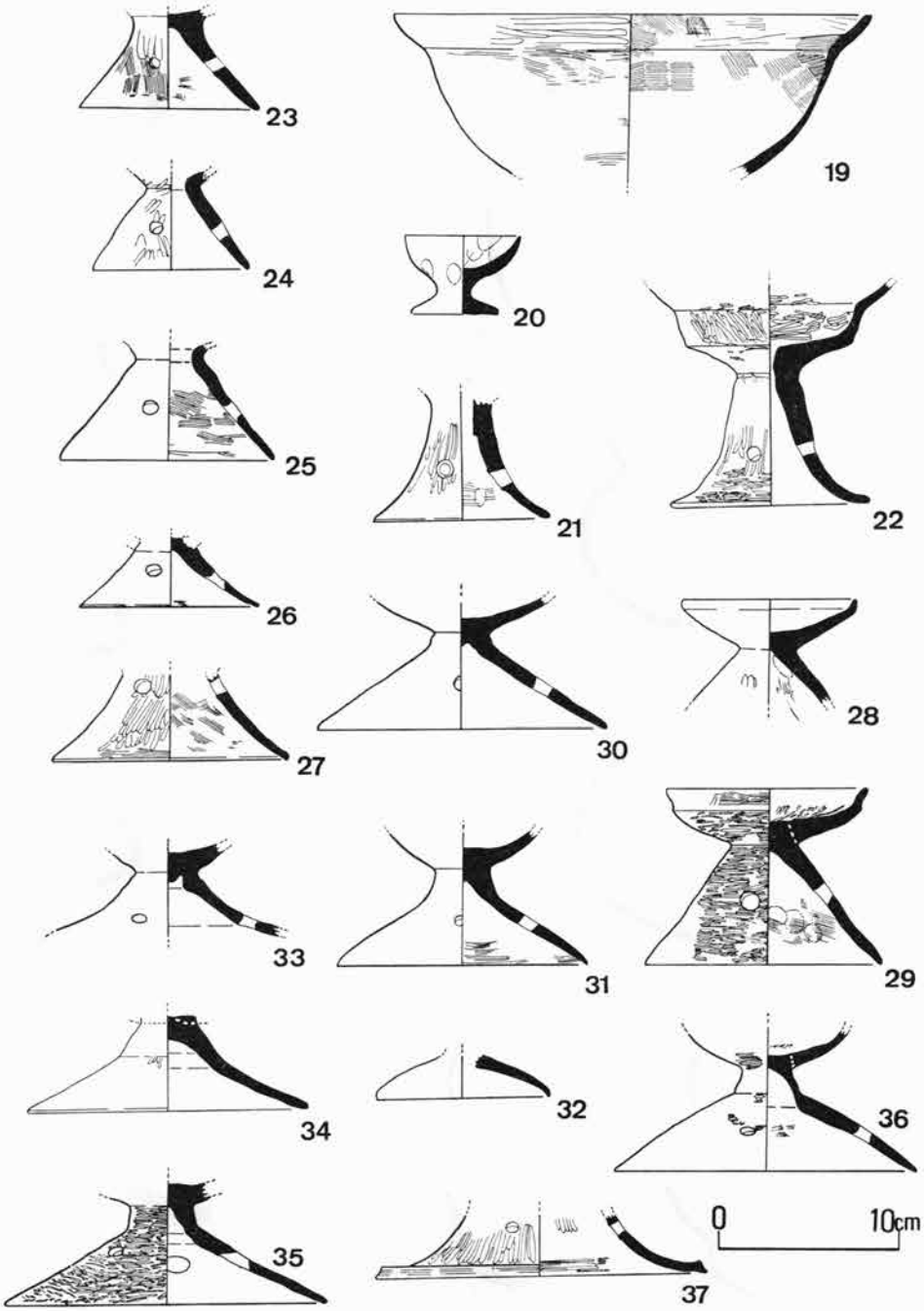
(41)～(44）は，それぞれ形態・調整手法とも異っている。(41）は短い口縁部をもち，胴部からのたち上りが急である。外面は細かな刷毛目により，内面は篦削りにより調整されて



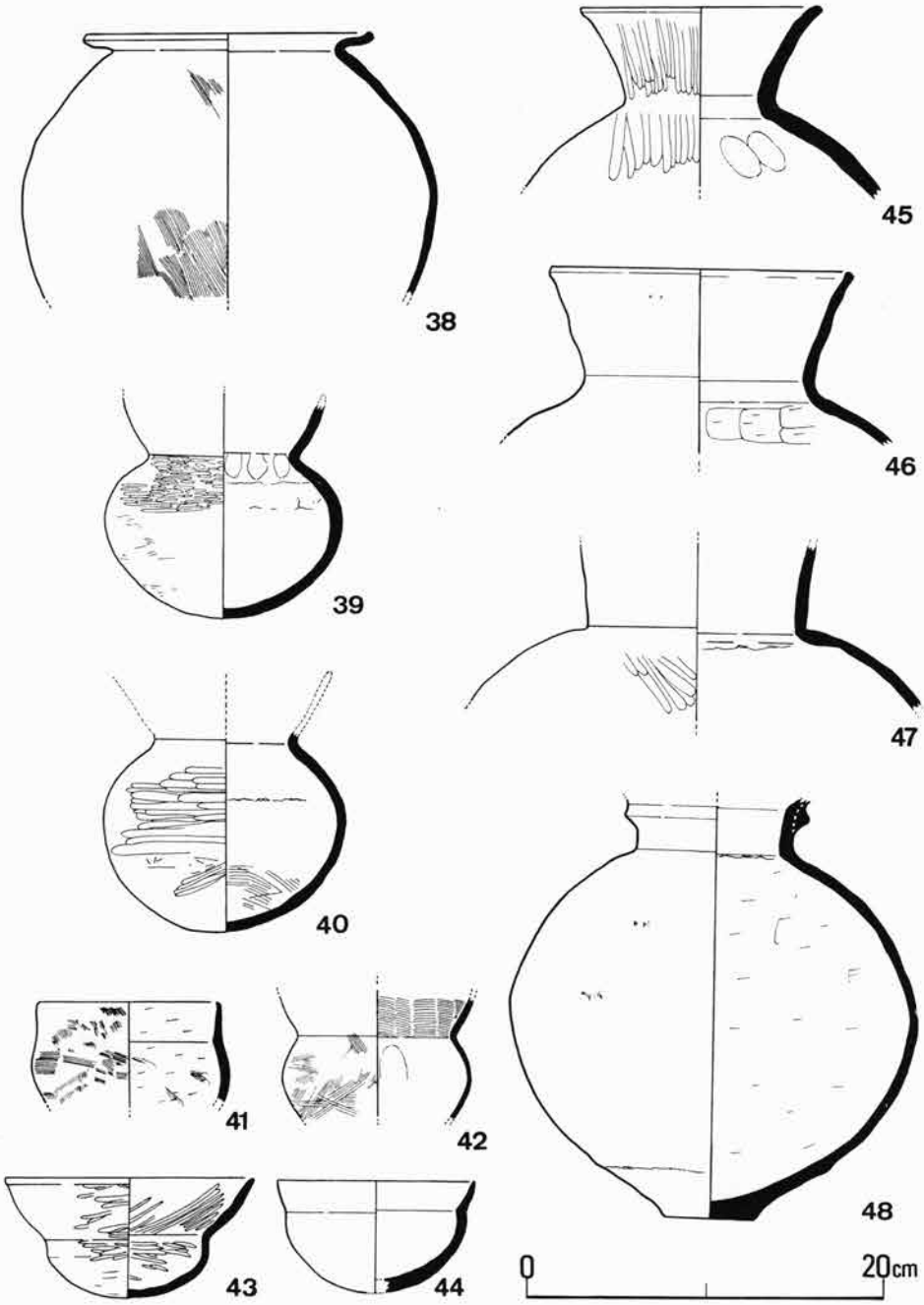
第65図　土器溜り出土遺物（甕）



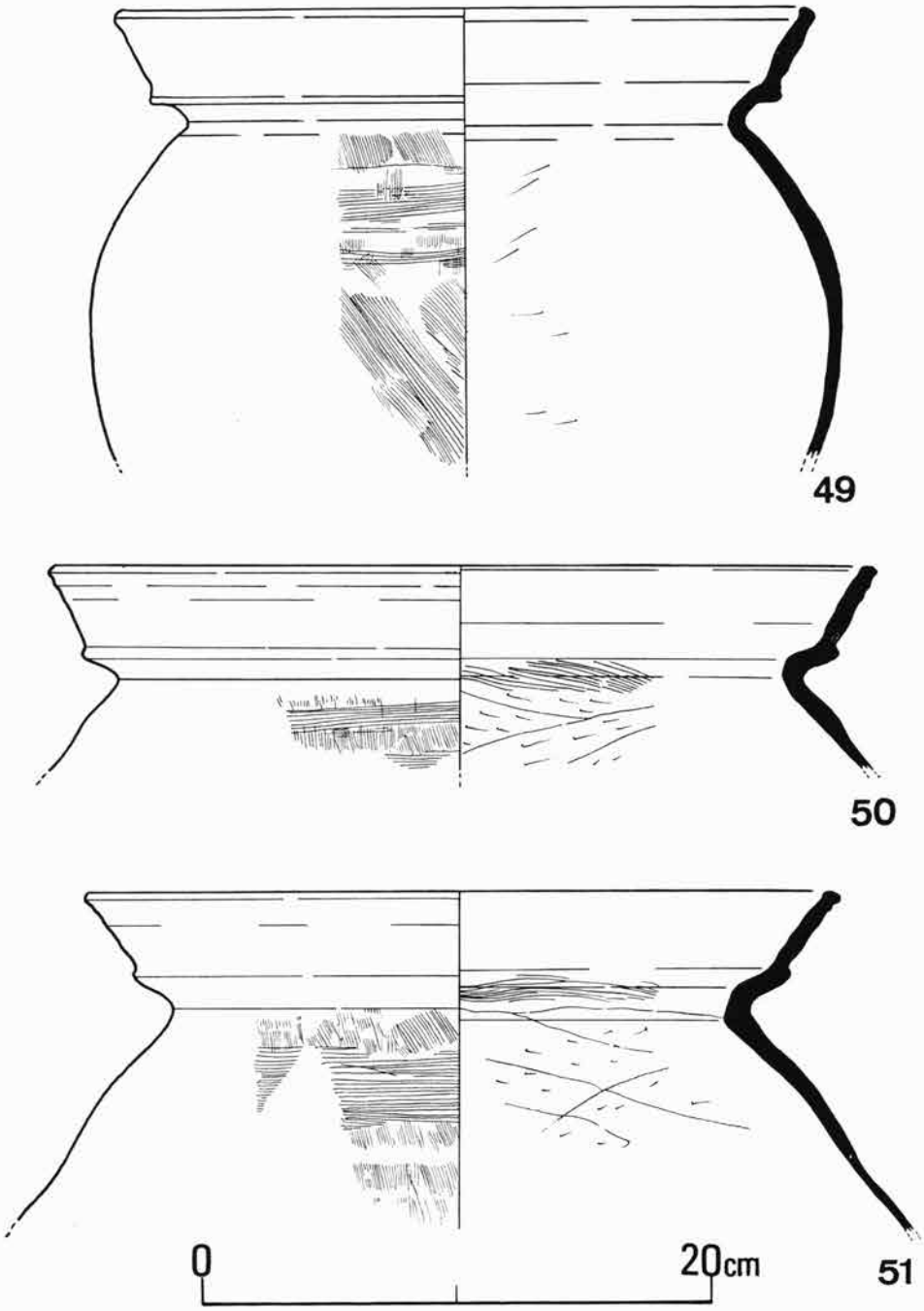
第66図　土器溜り出土遺物（甕・鉢）



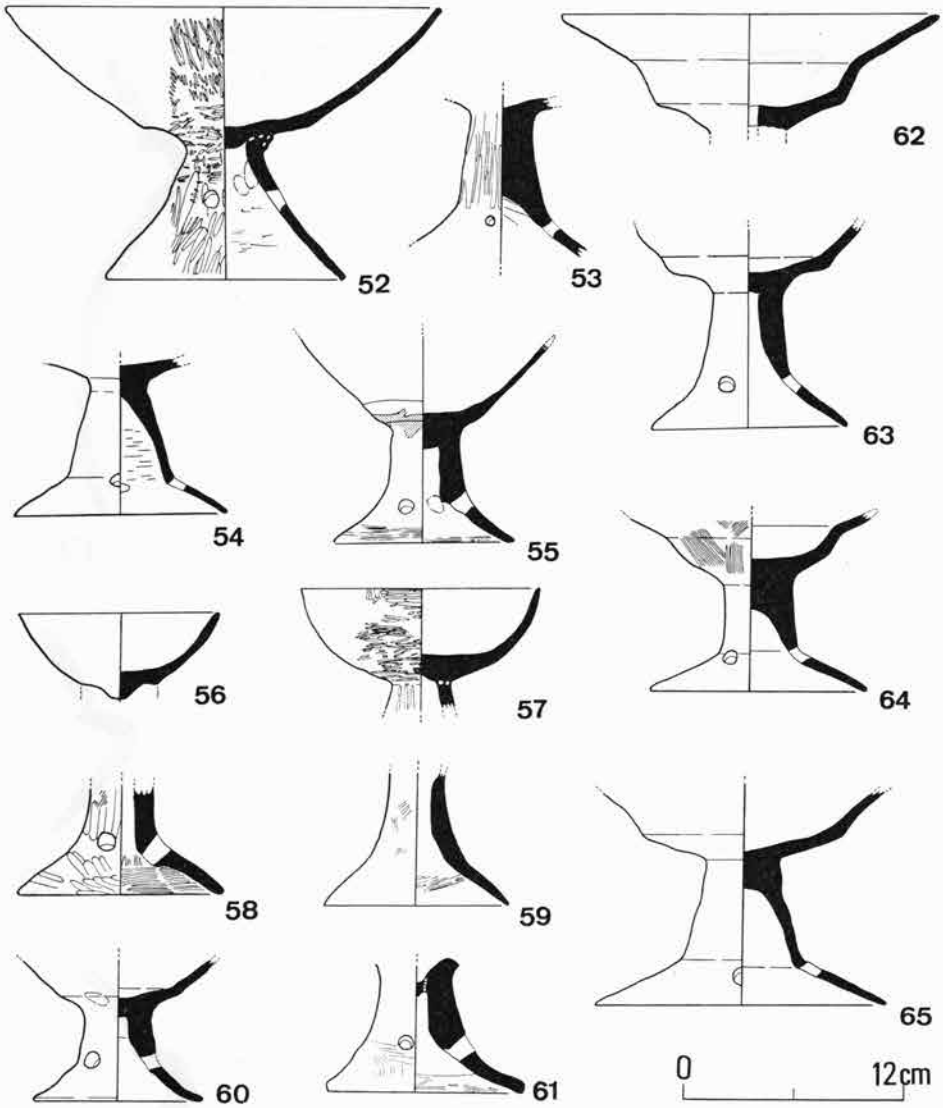
第67図　土器溜り出土遺物（器台・鉢）



第68図　土器溜り出土遺物（壺）



第69図　土器溜り出土遺物（甕）



第70図　土器溜り出土遺物（高杯）

いる。(42) は薄手のもので，口縁部のたち上りは滑らかである。口縁部の内面に明確な刷毛目が単位をもって認められる。胴部外面にも刷毛目を施す。(43) は胴部に比べ口縁部が長く，たち上りの角度も明確につけられている。口縁先端部はやや尖りぎみにおわる。内・外面とも箆磨きにより調整されている。胎土・焼成とも良好である。(44) はやや厚手のもので，調整はなでによる。(42)・(43) と同様に口縁部径が体部最大径をしのぐものである。口縁部は短く，先端部は尖りぎみである。これらの資料は時期幅をもつものと考えるが，現状では4点を一括して説明しておく。

(45)～(48) は，胴部から口縁部が垂直近くに立ち上るものである。

(45) は，やや厚い器壁をもち，口縁部は外反ぎみに屈曲して大きく開く。先端部はやや尖りぎみに細くなる。外面は篦磨きにより丁寧に調整されている。すべて縦方向を示している。内面はなでによる整形で，胴部の肩に大きく指頭圧痕が観察される。(46) は，口縁部が外反せず胴部からほぼまっすぐに立ち上る直口壺である。先端部は面を持ち，内面に微かな厚みをつけている。胴部内面を篦削りにより仕上げ，器壁は (45) に比べ著しく薄くなっている。(47) は，胴部から垂直にたち上る口縁部をもつものであるが，端部は欠損しており形状はわからない。ほとんどまっすぐで，先端を尖らせぎみに丸く収める直口壺の類であろう。胴部外面に篦磨きを施している。内面は接合痕が明確に認められ，口縁部と胴部の接着部の様子がよくわかる。(48) は，複合 (二段) 口縁をもつものである。口縁部は一旦胴部より垂直にたち上り，ここで肥厚しさらに上方に伸びる。この肥厚し段になっている部分は，粘土紐を貼り付けて突帯としている。従って直口壺に粘土紐突帯を貼り付け，複合口縁にしたと言える。小さく不安定ながら平らな底部をもつ。調整は内面を削っている様である。(45)～(48) のすべてに言えるが，チャート粒を多く含み胎土が荒く，焼成も悪い。

高杯 (52～65)

高杯は全体形の不明のものが多いが，形態から３つに分類し得る。

高杯A (52～55・58～61)

杯底部から大きく外に向って開き，わずかながら内湾するがほとんど直線的な杯部をもつもの。端部はまるく収めている。杯部は一気に作り上げられており，脚部は，杯部から外反ぎみに開くもので，途中でくびれを持たず底まで伸びるものと，中ほどで一旦角度をつけて開くものがある。調整は外面を細かな篦磨きで行っている。

高杯B (56・57)

半球形の椀状の杯部をもつもの。(57) は，脚部との接合には，凹 (脚部) 凸 (杯部) を利用している。外面を念入りな篦磨きにより調整している。

高杯C (62～65)

段のつく杯部をもつもの。たち上りから一旦段をつけ，そのまま外向して大きく開く。脚部は角度をつけて開き，脚柱と脚との区別が明らかなものが多い。(64) は杯部外面に刷毛目を施している。器台とした (22) は，形態学的にはこれに属する。

以上で，出土遺物の概要を述べたが，これらは代表的なものを抽出したにとどまるもので，今後とも資料データの蓄積を図らなければならない。そうすることによって，さらに適確な分類作業ができ，資料の編年的位置付けを行う材料を揃えることも可能となろう。

9. ま　と　め

今回の調査は，木津川河床遺跡の範囲内で当調査研究センターが実施した二度目のものである。多くの貴重な考古学的資料を検出し，これらの主な内容については以上まで述べてきたとおりである。標高約 10 m 前後の低湿地における集落跡（古墳時代後期）の存在が，竪穴式住居跡等の検出により明らかとなった。また，遺構は確認されなかったが，古墳時代前期の土器溜りの検出も重要な意味をもつものと言える。土器溜りの多量の土器を使い，生活した人々の生活跡も，近い将来，具体的な形で検出されることであろう。最後に今後とり組まねばならない課題のいくつかに触れ，まとめとしたい。

第一に，竪穴式住居跡の時期差あるいは建てられた季節差について詳細に検討しなければならない。例えば，竈部の煙道の長短が，竈の設けられている方向により差があるという点である。すなわち，竈を南壁に設けている住居跡 (SB 03・06) の方が，北壁に設けているもの (SB 01・02・04・05・08) より煙道部が目立って長い。また，北壁に設けている住居跡の向きにも共通性が見られる。こうしたことは，時期差（季節差）を反映しているものとも言え，土器形式とともに等閑視できない。

第二に，各住居跡の土器内容（セット関係）を克明に捉えなければならない。

第三は，金環や紡錘車が出土する住居跡が存在することや，竈部の傍ら（多くは住居内北東隅）に特殊な須恵器，炭化物・焼土を伴うことなど，他の類例を検討しつつ，精神文化についても留意しておくことが必要である。

第四は，木津川河床である当地の集落の時代・規模・広がり等を明らかにするため，今後の発掘調査と併せて付近のボーリング調査結果なども参考にしつつ，地下の地勢を自然地理学の立場で検討することである。今回は実施しなかったが，花粉分析等も有効であろう。

第五は，詳しく内容を分析できなかった古墳前期の「土器溜り」(SX 01・02) をさらに検討していくことである。ごく一般的には，個体数を器種ごとに算出し，適確な形態分類や編年作業を行い，畿内における当遺跡の歴史的位置付けを決定していくことになろう。

あわせて，土器胎土分析といった作業も木津川の水運交通と極めて密接な当遺跡の性格を考慮した場合，行う意義には甚大なものがあろう。夥しい土器の形状・胎土を一瞥しただけでも，主流を占める近江系はもちろんのこと，チョコレート色の胎土を持つ生駒西麓（河内系）のもの，二段口縁甕に代表される山陰系やその他山陽・東海・大和などの系統を引くものもあり，これらが共に使われていたことが諒解される。

第六は，些細な問題ではあるが，従来から使われてきた「木津川河床遺跡」という名称に

ついてである。広汎な時代の遺跡を有する複合遺跡の総称として使われてきたが，今後，時代の明らかな遺跡を検出した場合には，妥当な名称を個別に付してもよいのではなかろうか。

多くの課題を残したと言えるが，発掘してしまえば原形をとどめない遺構と遺物の1つ1つについて，充分な記録・観察を行い，正確なデータを積み重ねていきたい。さらに，こうした記録を使って歴史を考える際に，しっかりした着眼点を見極めることも今後の大きな課題と言える。

（黒坪 一樹）

注1　長谷川　達「昭和57年度発掘調査略報木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982

注2　福田和規，安藤研一（八幡市立資料館）の両氏からは，文化財保護の立場からさまざまな御意見・御鞭撻を賜わった。

注3　調査補助員

福富　仁（関西大学卒業生）・和田譲二・草野修一・柳　竹彦（京都大学），木ノ下治男（関西外国語大学），田村泰造（立命館大学），丸山秀子（花園大学），薗山隆輔（京都工芸繊維大学），平野一也（同志社大学），以上敬称略。

整理員

赤司　紫（立命館大学），井本樹里（同志社大学），臼井千映子・神山久子・小滝初代・竹原京子・戸波みどり・山本彌生，以上敬称略。

本文の執筆は主に黒坪が担当し，挿図の作成は臼井・木ノ下・和田・黒坪が行った。遺物実測・トレースは全員が協力して行った。遺物の写真撮影は写真家（元文部技官）の高橋猪之助先生に御苦労をおかけした。

なお，立命館大学学生の中塚　良氏からは，卒業論文研究で当地のボーリング調査をされる傍ら，本遺跡の成因を巡る問題について有意な御意見を頂き，また資料の提供も受けた。末筆ながら謝意を表したい。

注4　山下　正・杉原和雄「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報（1982)』京都府教育委員会）1982

注5　「美豆」$\begin{cases} X=-123,063.88 \\ Y=-26,035.10 \end{cases}$「生津」$\begin{cases} X=-124,215.19 \\ Y=-25,345.22 \end{cases}$

注6　農耕地の閉合比1/3,000～1/10,000（兼杉　博編『測量公式活用ポケットブック』オーム社 1970）

注7　京都府流域下水道建設事務所編「木津川左岸流域下水道綴喜浄化センター土質調査」その1～3，1982

注8　先に今回の遺跡の概略を別の紙面「昭和58年度発掘調査略報木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第10号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）に掲載したが，そこでの住居跡番号と今回のものとでは異なる。

注9　高橋美久二・近藤義行「正道遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集　城陽市教育委員会）1973　当該遺跡の15号住居中より金環1点が出土している。

注10　1～10（SB01），11～14（SB02），15～17・28（SB03），18～21（SB04），22～25（SB05），26・27（SB06），29～36（SB08），37（SB10），38（SK02），39・40（SK11）

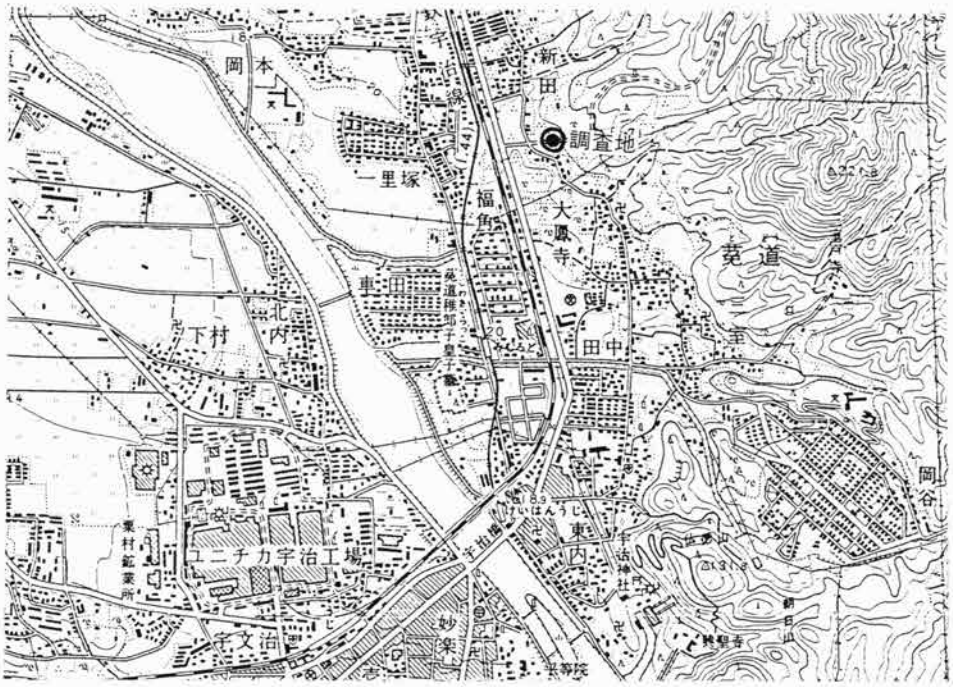
注11　小笠原好彦「古代の近江型土師器甕と二つの特徴」『滋賀文化財だより』No. 82）1984　この中で同氏は，近江型の土師器甕の口縁部に/，//，×，卌などの篦記号がつけられている実例を報告している。本遺跡での篦記号は\\\\であり，時期も6世紀後半でよいであろう。

7. 隼上り遺跡昭和58年度発掘調査概要

1. はじめに

隼上り遺跡の発掘調査は，当該遺跡地内に日本道路公団が計画・施工している京滋バイパス建設に伴う事前調査である。事業主体である日本道路公団から京都府教育委員会に取り扱いについての協議がもたれ，協議を受けた京都府教育委員会は，試掘調査の実施とその結果に基づく調査の必要性を回答した。その調査は，昭和58年10月17日付で財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと日本道路公団の間で委託契約が結ばれ実施された。

調査は準備期間も含めて昭和58年11月7日から昭和59年3月31日までの約5か月間であった。対象面積は 10,000 m² であったが，排土置場・地形などの関係で，掘削面積は約 5,000 m² となった。調査は日本道路公団が設定した道路のセンターライン杭，下り146＋80と146＋40を直線で結び，そのラインを延長して 20 m 間隔でトレンチ設定を行った。トレンチ設定に際し，遺構平面図作成の必要から各々の交点に杭を設定し，それぞれの地区名を杭で呼称した。便宜上，146＋80(注1)はＣⅥ，146＋40(注2)はＣⅣの両方を併用した。



第71図　調査地位置図（1/25,000）

試掘調査は，各々のトレンチを「L」字形に設定し(注3)，遺構・遺物を検出するに至ったが，用地買収などの関係でⅤ～Ⅶ区のみにとどめ，Ⅱ～Ⅳ区はⅤ～Ⅶ区の土層堆積状況など参考にしながら全面掘削となった(注4)。

本調査は，随時，実測・写真撮影など行い進めたが，飛鳥・白鳳時代が中心となったため地区によっては近世遺構を埋めざるを得ない状況であった。

調査の一応の成果を確認し，昭和59年３月24日，雨天の中，現地説明会を開催した。そして同年３月31日，全作業を終了した。調査は，当調査研究センター調査課主任調査員 松井忠春，同調査員 小池　寛・戸原和人・竹原一彦がその任に当ったが，調査期間を通して小池　寛が主に担当し，本概報の執筆，編集について小池　寛が行った。

調査期間中，多くの先生方より有益な御教示を賜った。特に，宇治市教育委員会からは多大の御協力を得たことをここに深謝する次第である(注5)。

2. 位置と環境

隼上り遺跡は，宇治市菟道東隼上り31に所在する。当地は宇治市中央部・宇治川東岸にあり，五雲峰から西方へのびる洪積世丘陵の先端に位置し，礫層と粘土層からなる大阪層群上に立地している。周辺は，京都府教育委員会・財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター・宇治市教育委員会により分布調査，発掘調査があり各遺跡の概要などは既に知られるところである。概観すれば，石庖丁の出土が伝えられている西隼上り遺跡(注6)や，弥生時代後期の竪穴式住居跡を２基確認した羽戸山遺跡(注7)，現在２基の円墳が残存する隼上り古墳群(注8)，それに隼上り瓦窯跡(注9)，大鳳寺跡(注10)などがある。古代から極めて重要な地であったことをこれらの遺跡が傍証している。ここでは本調査にも密接な関連を持つ隼上り瓦窯跡と大鳳寺跡について概略を述べることにする。

隼上り瓦窯跡……宇治市教育委員会が昭和57年に調査し，飛鳥時代の瓦窯３基を確認した。瓦窯の存在は，それ以前の周辺の分布調査や昭和56年の隼上り遺跡発掘調査の時点で，ある程度予想されていた。調査により「素弁八葉蓮華文」を主体とする軒丸瓦や凹面布目圧痕，凸面篦削りおよびなで調整を施す丸瓦，それに平瓦，須恵器なども焼成していたことが判明した。また，工房跡なども検出され，窯と工房の位置関係が具体的にわかる重要な遺跡として認識されるに至った。一方，古代史上，隼上り瓦窯の製品が大和豊浦寺に供給されていたことが確実となり，その運搬経路や豊浦寺の創建年代を決定できる遺跡として広くその重要性が世に問われ，現在，国の史跡指定を受け，窯体のみが現地保存されている。最近，直木孝次郎氏により，寺と瓦窯の関連について有効な説が提起されている。

大鳳寺跡……昭和46年，宇治市史編纂委員会によって第1次調査が行われ，瓦積基壇を検出して以来，継続して調査され，昭和58年第4次調査では，斜格子叩きを有する平瓦のみ包含する寺域北限の溝を検出した。これにより寺域が確認されるに至った。伽藍配置は法隆寺式である。なお，大鳳寺で使われた瓦が宇治・山本瓦窯で焼成されていたことが現在知られている。

3. 調 査 概 要

調査地は，隼上り瓦窯より南方 200 m に位置する。また，当地より南方 300 m には大鳳寺があり，飛鳥・白鳳期にかけて要衝の地であったと考えられる。

土層観察により置土・黒褐色土層・赤褐色土層・黄褐色土層の4層を確認した。置土は，調査地全面が竹林であったため濁黄褐色土が主体となり，近世・近代の遺物が混入している。黒褐色土層では，近世の遺構を多数検出したが，置土搬入の際にかなりの削平を受けており地区毎に厚みが異なる。Ⅱ～Ⅳ区ではほとんど確認できない状況であった。赤褐色土層と黄褐色土層は，飛鳥・白鳳期[注11]が主体となる層である。

近世の遺構は，茶を保管・乾燥させる蔵の基礎，それを取り囲む溝，石列，井戸，漆喰を周囲・底面に付した水溜め，瓦溜り，柱穴などが主なもので，各遺構から良好な状態で遺物が出土しているが，これらの遺物は一括性については疑わしく，明治初頭頃まで施設が機能していた可能性がある。古くは16世紀後半と考えられるものがある。当地は，五ケ庄の一村落であった畑寺村の推定地として有力視[注12]されていたが，同時代の遺物はほとんどなく，また，集落と考えられる遺構も検出していない。これは近世末に削平された可能性もあるが，地理的に当地より奥にあったと考える方が現状に即している。近世の遺構から須恵器・土師器・瓦が出土するが，これは近世の削平が激しく行われたことを示すものであり，生活空間が限られていたことを傍証している[注13]。

近世遺構で特に注目すべきものに墓がある。調査で2基確認しており，一基は長方形のプランを持ち，拳大の礫を積んでいる。内部は 30 cm と 15 cm の2段に掘り込まれている。他の一基は，焼土層・炭層が叩きしめられ，層中より土師器の皿を多数検出した。また，古銭・瓦質土器・陶器・五輪塔（風輪）など出土しており，16世紀末の年代が与えられる。

中世は，唯一土坑を確認したに過ぎない。遺物はガラス小玉・刀子・瓦質土器の三足盤・土師器の皿があり，年代は12世紀後半と考えられる。遺物の出土状況から墓か祭祀ピットであろう。

飛鳥・白鳳時代の遺構は，柱穴・土坑・焼土坑などであるが，個々についての説明は正報

告で行い，ここでは概観するにとどめたい。

柱穴は，直径 30 cm から 60 cm と規模が平均で，深さは 20 cm から 40 cm である。埋土は暗茶褐色が一般に見られる。建物は15軒以上になると考えられるが，出土遺物の時期差・建物の軸線の方位などを検討していないため言及できない。現在，確実に想定し得た建物について図化することとした。(注14) 今後，整理段階で明らかにしたい。

出土遺物は，隼上り瓦窯で焼成された軒丸瓦・丸瓦・平瓦・須恵器のほかに，土師器・製塩土器などがある。これらの遺物は当遺跡の性格を考える上で極めて重要なものである。また，焼土坑から焼土・炭に混じって良質な白色粘土を検出した。

建物の時期は，飛鳥・白鳳期と考えられる。周辺の遺跡に対応させれば隼上り瓦窯・大鳳寺の時代で，隼上り瓦窯の製品や凸面に斜格子の叩きを持つ平瓦が出土すること，それに立地などから，両遺跡とは密接な関係を持っていたことがわかる。

その他，縄文時代の石鏃，弥生式土器・庄内期の土器，鉄製品などが出土しているが，西隼上り遺跡や羽戸山遺跡と関連させて考えるべきである。中でも縄文時代の石鏃は，今後周辺の歴史を考える上で重要なものと言える。なお，昭和59年３月24日の現地説明会資料で「竪穴式住居跡を２基検出した」と報告した点について，その後の調査で，瓦・須恵器を含む落ち込みであることが判明したので訂正しておきたい。

4. ま　と　め

現地作業は３月31日に終了したため，いまのところ整理作業は充分に行い得ていない。ここでは，現在考えることができる点についてのみ記し，まとめとしたい。

(1)柱穴・土坑より隼上り瓦窯の瓦・須恵器を多数検出した。また，熔着した須恵器も出土していることから，隼上り瓦窯との関係が推定できる。焼土坑より出土したほぼ完形に近い丸瓦などから，隼上り瓦窯で焼成された製品を一時的に保管する倉庫が存在した可能性がある。製品は瓦窯→当地→宇治川の経路で搬出されたものであろう。

(2)出土遺物には瓦・須恵器以外に土師器も比較的多く出土している。また，製塩土器も出土している事から，隼上り瓦窯に関連した工人が居住していた集落の存在を想定できる。つまり，当地は集落と(1)で述べた倉庫が共存し，隼上り瓦窯の生産体制において，倉庫管理などの重要な役割を果していたものと考えられる。

(3)焼土坑において検出した白色粘土は，今後，分析の必要があるが，瓦窯の製品と直接関係を持つデータが出れば，粘土をも保管していたと考えられる。

(4)柱穴から出土する白鳳期の遺物には，須恵器・土師器などがあるが，特に，斜格子叩き

を有する平瓦（凹面は布目圧痕）は，大鳳寺との関連を示す資料である。相互の関連性については十分に検討されなければいけないが，隼上り瓦窯の工人集団が大鳳寺創建にあたり一つの役割を設定され，機能していた可能性が高い。その際，当地が連続する生産活動のターミナルとして存在し，かつ，大鳳寺の瓦が宇治・山本瓦窯以外の当地周辺で焼成されていた可能性も出てきたと言える。

(5)中世土坑は，出土遺物の検出状況から見て，墓，祭祀ピットを想定しうる。また，ガラス小玉・刀子が各々，異なった皿から出土しており，どのような儀式を経て埋納されたかを考える上で一つの新資料を得たと言える。今後，瓦質土器の三足盤の編年など，一括性を念頭に置き検討すれば，中世土器の一側面を明らかにできると考える。

(6)近世各遺構より出土した陶磁器類は伊万里・信楽・備前などバラエティーに富んでおり，宇治における近世遺物の一つの基本資料になると言える。

以上，現在までに言及可能な事柄についてのみ記したが，今後，遺物整理を進めて行く段階で随時明らかにし，最終的には報告書により正確な事実報告と考察をしたいと考えている。

（小池　寛）

注1　座標はX＝121903.3474・Y＝－17131.6635である。

注2　座標はX＝－121899.7309・Y＝17091.8280である。

注3　146＋40において146＋80を基準にすると95°11′14.73″ 右へ振ると真北になる。

注4　作業行程上，Ⅴ～Ⅶ区終了後，Ⅱ～Ⅳ区の調査に入った。

注5　調査指導者　（順不同・敬称略）

天理大学教授 西谷真治・金関　恕，財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター理事 原口正三，近畿大学教授 杉山信三，城南高等学校教諭 山田良三，同志社大学講師 鈴木重治，奈良国立文化財研究所 毛利光俊彦，宇治市教育委員会 杉本　宏，天理参考館 置田雅昭・山内紀嗣・太田三喜・竹谷俊夫 他

調査協力者および調査参加者　（順不同・敬称略）

東海アナース株式会社，金井組

東松義郎・中西繁則・吉田　徹(仏教大学)，上田順久・吉田茂典(同志社大学)，小寺　誠・中井精一（天理大学），井上　誠・加藤由美（追手門学院大学），岩本栽也（帝京大学），藤本雅之（神戸大学），高橋孝次郎（近畿大学），井川朋之（京都産業大学），植木富美夫（奈良県立短期大学），大和田淳司（大阪大学），石原徳幸（龍谷大学），鈴木加代子（大阪学院短期大学），鈴木静恵・久世美智子・埴岡美矢・伊藤今日子・和田　満

注6　『宇治市史』1　宇治市役所　1979に記載がある。

注7　小山雅人「羽戸山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982

注8　注6と同じ

注9　「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第3集 宇治市教育委員会）1983

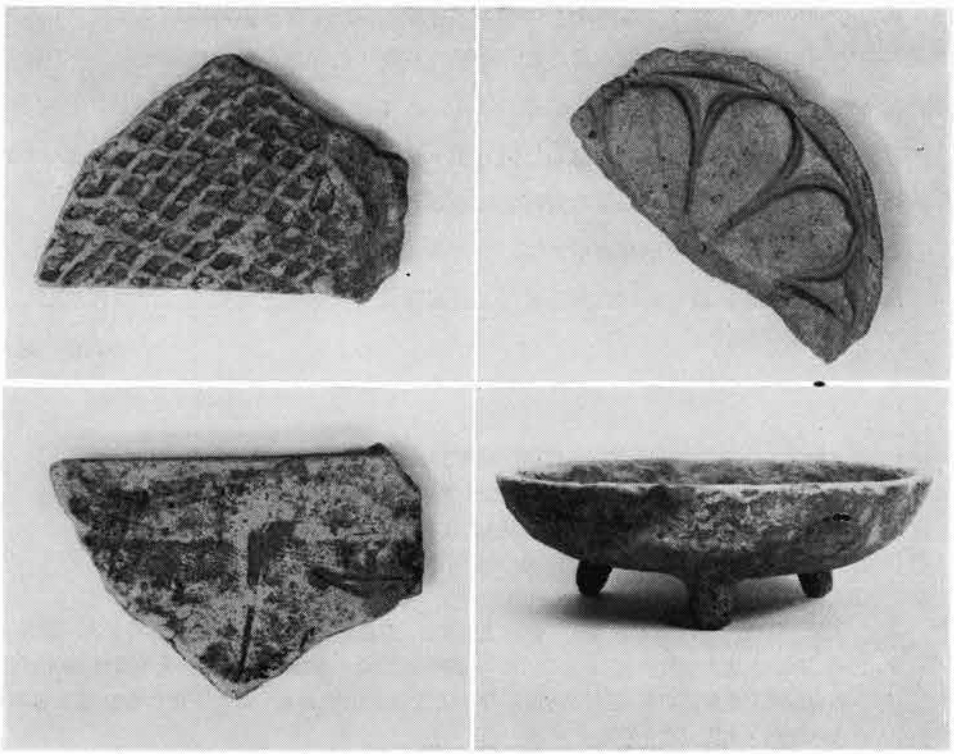
注10　「大鳳寺跡第３次発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第２集 宇治市教育委員会）1983
「大鳳寺跡第４次発掘調査」現地説明会資料 宇治市教育委員会　1984

注11　それ以後の時代の遺物も検出している。

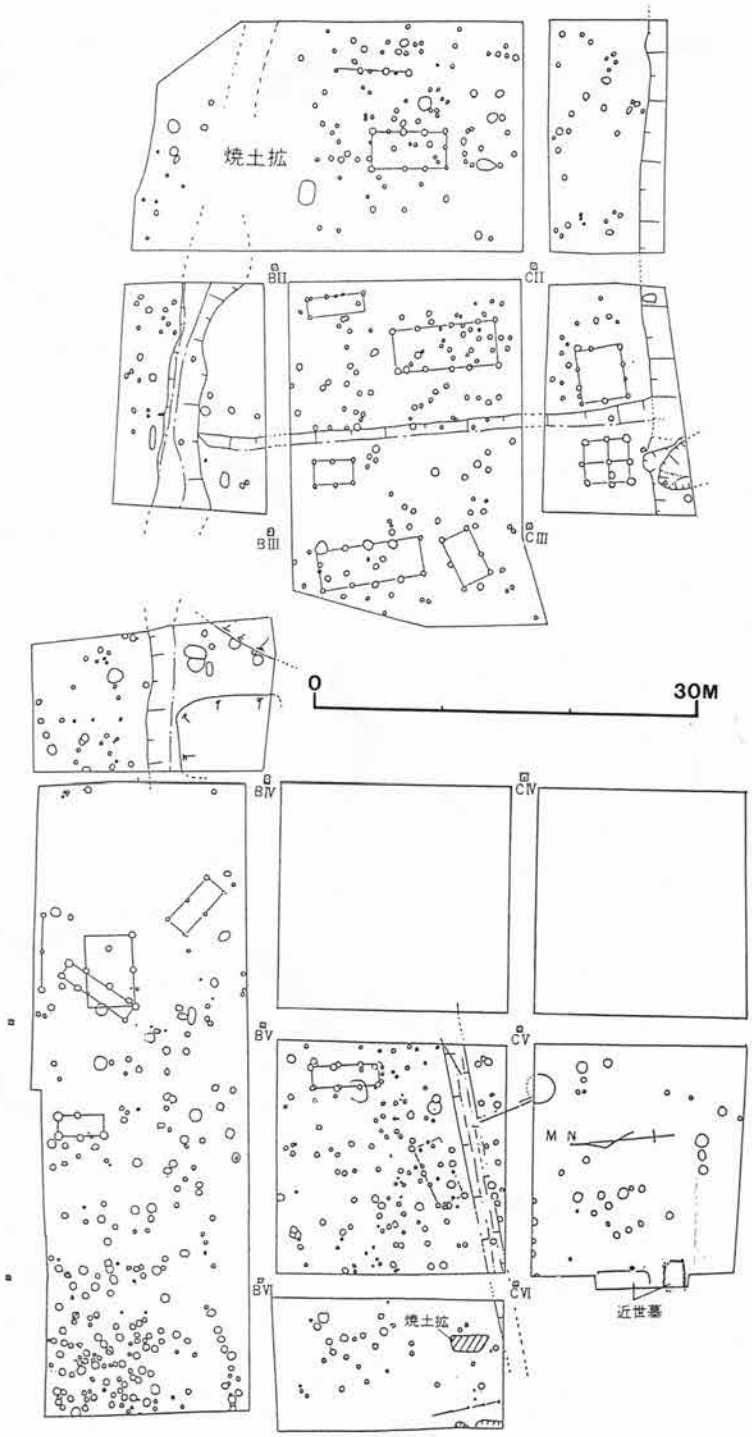
注12　『宇治市史』３ 宇治市役所 1976の中に推定地の記載がある。

注13　統計処理によって遺構の有無をある程度言えるかもしれない。

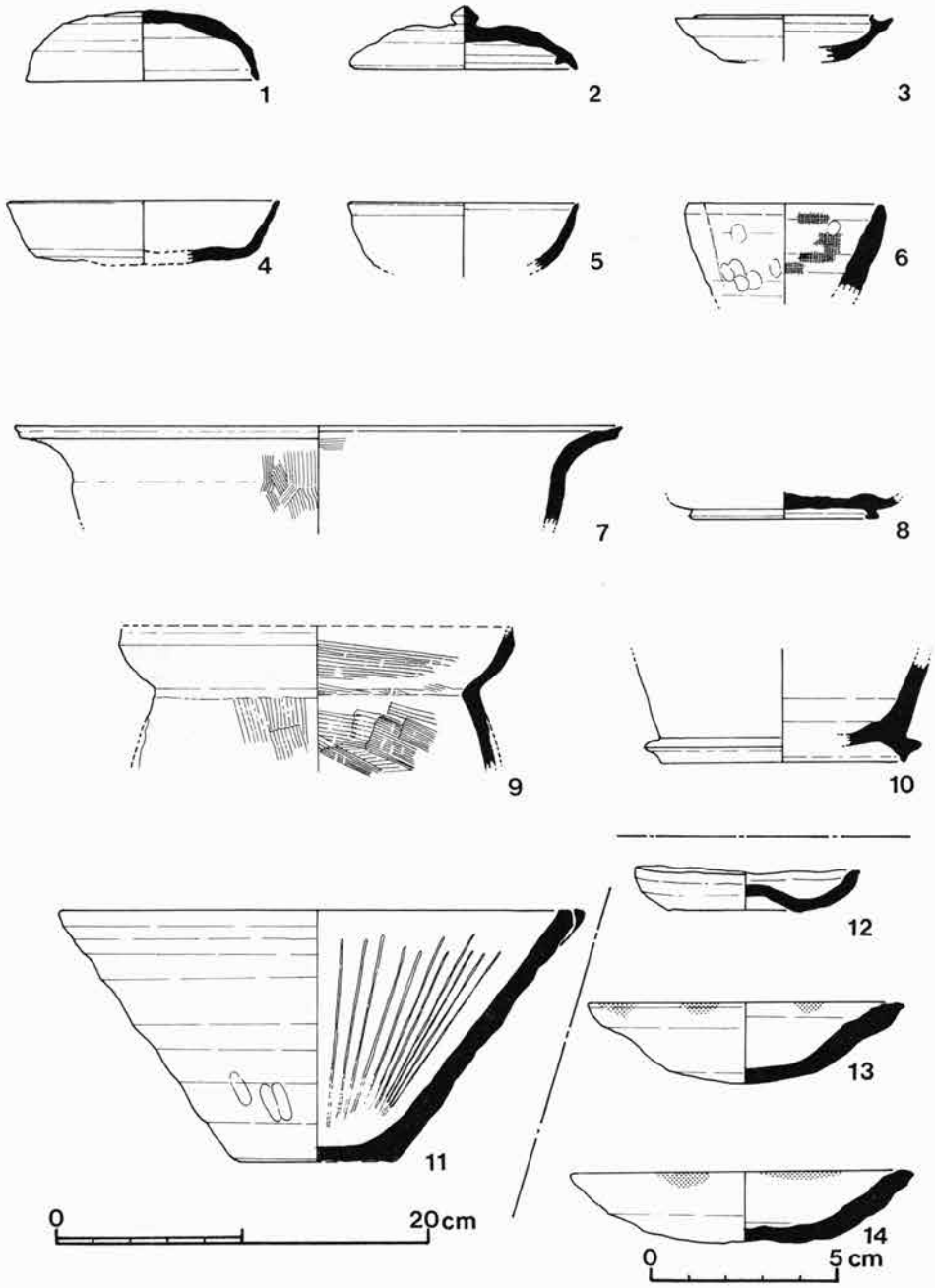
注14　公表した一部の資料には，根拠が希薄ながら建物の想定を図化したものがあるが，今後，訂正を必要とする。



第72図　遺　　物

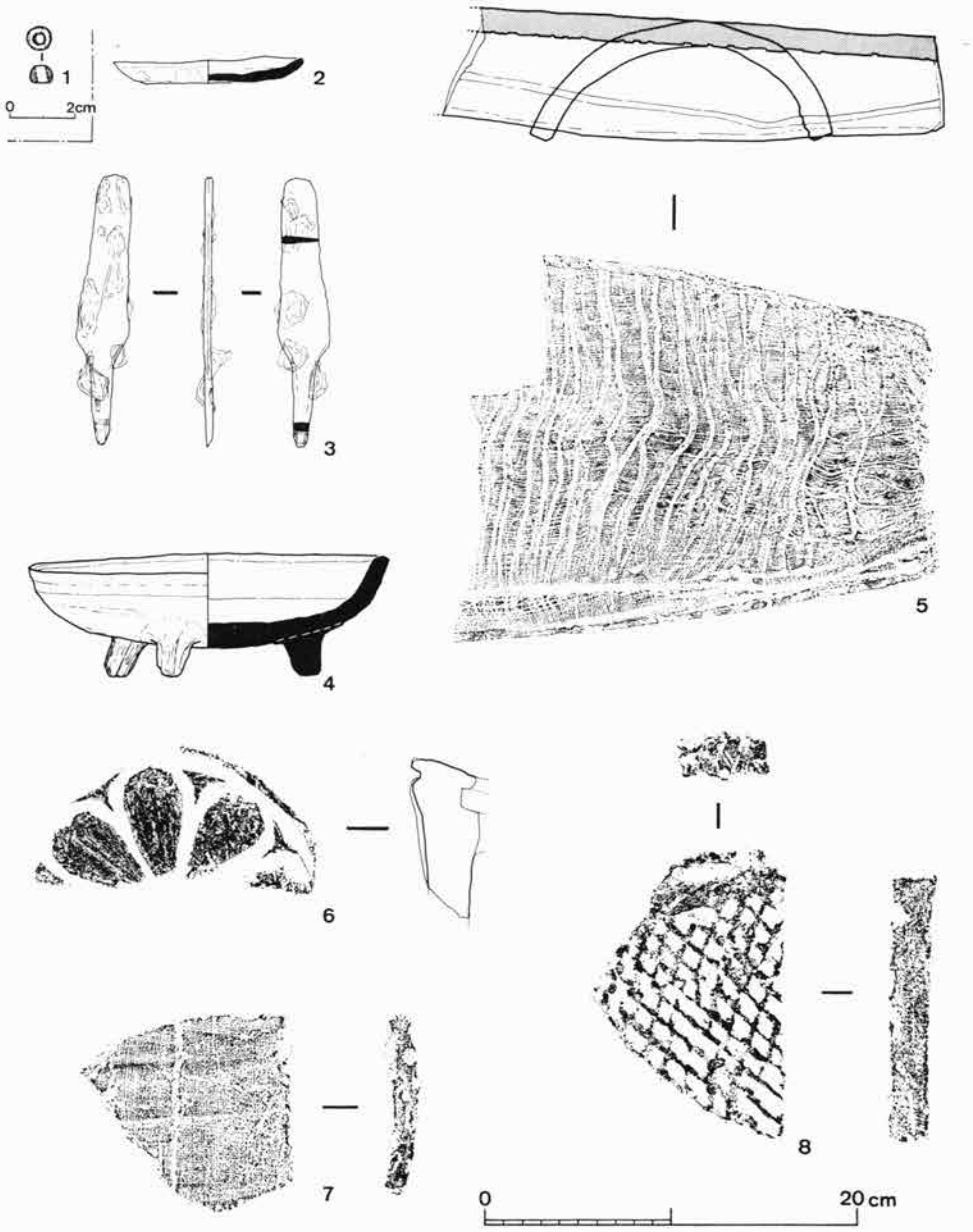


第73図　調査地平面図



第74図　出土遺物実測図

1～4, 8, 10. 須恵器　5, 7, 9, 12～14. 土師器　6. 製塩土器　11. 陶器
1, 4（D Ⅱ区）・2（C Ⅲ区）・3, 5, 7（B Ⅵ区）・6（B Ⅳ区）8, 10（C Ⅵ区）
9（B Ⅴ区）・11～14（D Ⅵ区）



第75図　出土遺物実測図および拓影

1. ガラス小玉　2. 土師器　3. 鉄器　4. 瓦質土器　5～8. 瓦
1～4（C Ⅵ区）・5,8（C Ⅶ区）・6（D Ⅳ区）・7（B Ⅴ区）

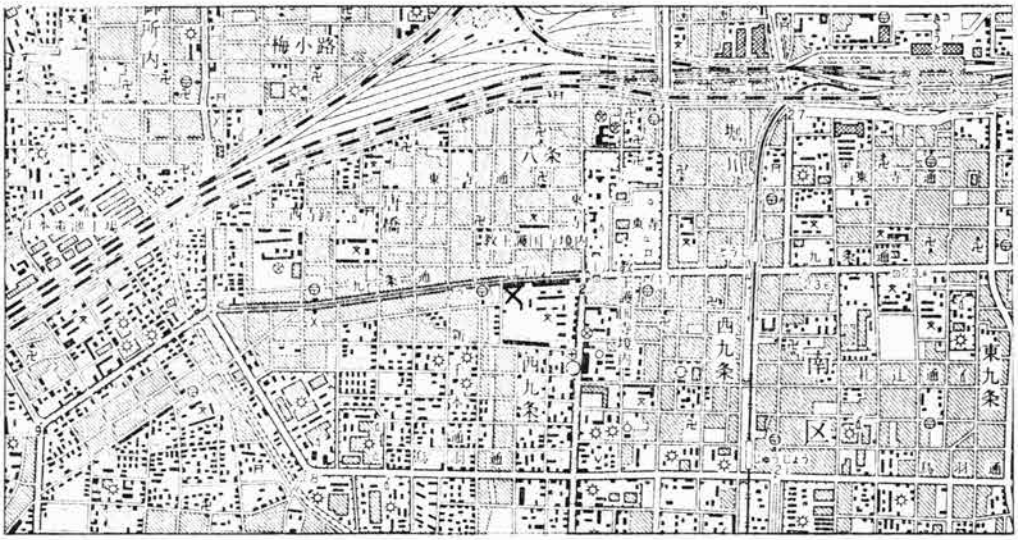
8. 旧洛南中学校内遺跡発掘調査概要

1. はじめに

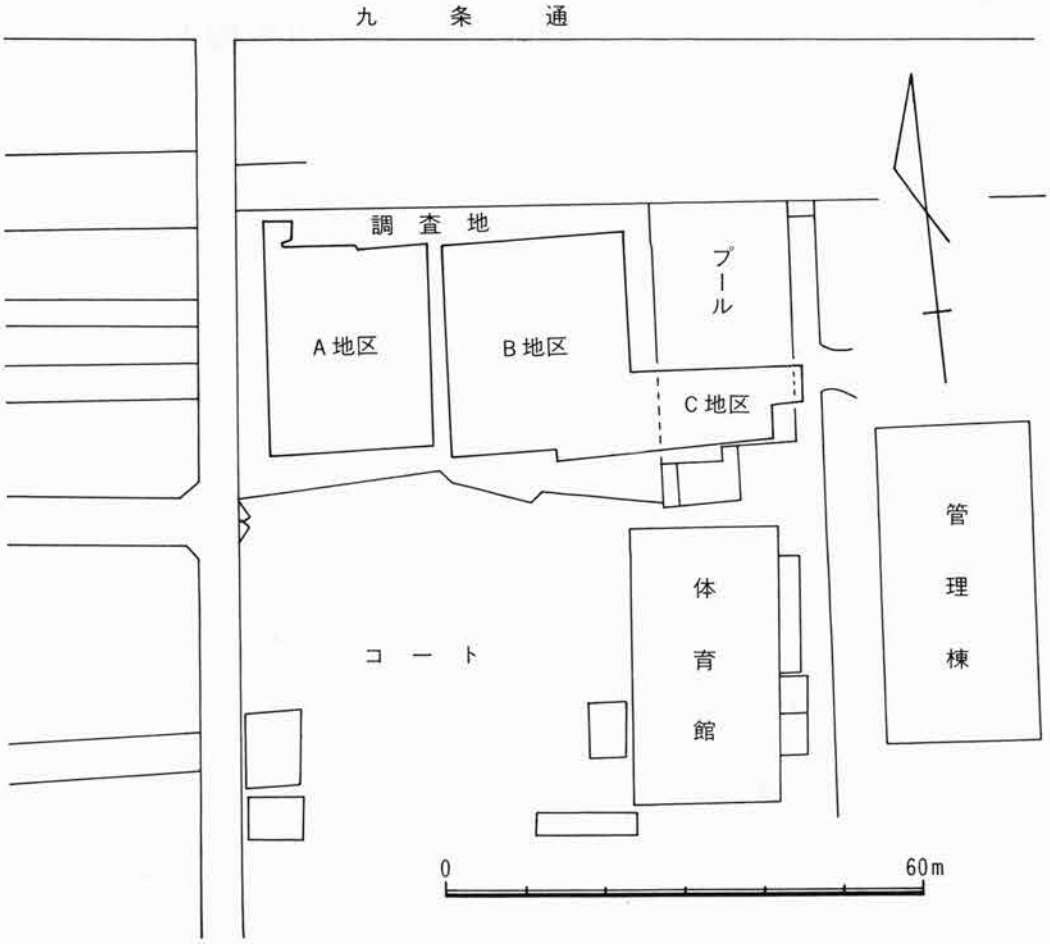
このたび，旧洛南中学校北西隅のテニスコート及びプールの存する地に，新たに競技用プールが建設されることとなった。この地は，平安京羅城外に比定されてはいるが，九条大路・羅城門・鳥羽造道に隣接する地域でもある。今日，羅城外隣接地の状況が全く判然としていないことや，文献学的に羅城外の構造・規模をめぐって諸説が提示されていることもあり，この地に平安京に関わる何らかの遺構やそれ以前の古代の遺構が残存している可能性が推定された。そのため，建設工事に先行して，遺構・遺物の有無を確認するとともに，記録を作成し，重要な遺構が検出された場合には保存のための資料をえる目的で発掘調査を実施した。

2. 調査経過

発掘調査は，まず，テニスコートを作業の行程上から東・西の2地区に分割して各々約550 m^2 をもって地区設定することから着手した。西側地区をA地区・東地区をB地区と仮称して，以後筆を進める。まず，両地区の外周に沿って重機によりトレンチを廻らして土層の検討を行った結果，A地区は現代の攪乱が夥しく，深い所では2m下ぐらいまで石炭ガラ層が続いていた。B地区ではその石炭ガラ層は薄く，残存状況が良好だと判断した。その一方，地表



第76図　調査地位置図（中央×印）　(1/25,000)



第77図　調査地区割図

面の絶対高は両地区とも類似数値を示していることから，西側は民家との境をもって石炭ガラで高く盛土したことが判明した。上記状況から推して主眼をB地区に置くことにして，A地区での残存状況を検討するなかでB地区の調査方法を吟味することにした。

A地区では，トレンチで確認された石炭ガラ層を含めた上部攪乱層を重機掘削して戦前・戦中の耕土面から調査を開始した。この耕土面は，北側が高まり，南側が上部からの掘削が夥しく，黄色粘土層の地山直上まで達していた。その北側で耕作を示唆する田畑の畝跡を検出した。その後，この耕作土を形成する暗黒褐色粘質土を丁寧に掘り下げていったが，部分的に第2文化面としての耕作面を確認したにすぎず，面的な広がりはなかった。最終的には地山面を掘り込んだ田畑の痕跡を検出したにすぎない。このことは近世後半期からの幾重にもわたる削平により旧状を全く留めていなかったことを意味する。ただし東北隅での一部若

干安定した平坦面を確認したが，これとて後述するB地区の帯状遺構の一部分にしかすぎなかった。しかし攪乱層や耕土層中から古墳時代から近代に至るまでの諸遺物が出土したことから鑑みて，平安時代以前にも遡り得る何らかの遺構が存したことを物語っている。全面掘削・精査後，写真撮影や平面及び層序の実測作業を行いつつ，B地区の発掘調査に着手した。

B地区は，トレンチ掘りした際にA地区で見られた石炭ガラ層が薄く堆積していた状況から判断して，耕作面及びその下位での遺構の存在が充分に想起された。しかし耕土層を徐々に発掘して行くにつれ，当初推定した程には良好な保存状態を呈さず，近世後半期の水田乃至畑地と考えられる区画された長方形状掘り込みが地山面を穿って構築され，B地区の大部分を占めていた。さらに北端では東西に走る帯状遺構が横たわり，その南側に溝2がみられ，北側は平坦な底面をなす溝1が溝2より深く掘り込まれていた。この溝1は側溝であるかどうかは若干の疑問を有する。ただ調査地の東南側で薄い遺物包含層と円形状土坑や方形の掘り込みが検出された。さらに全体的には田・畑の畦畔残存部にも地山を穿った土坑状掘り込みも十数か所確認した。これらの土坑や掘り込みから須恵器の小破片が2～3点出土したにすぎず，埋土を観察する限りでは中世以前の平安京に通例のものではあるが，時代比定するに至らなかった。この東南部での地山面が比較的安定し，さらに土坑及び方形の掘り込みを部分的に確認したことも相俟って，その性格や広がりを究明すべく東側のプール下に調査を拡張することになった。

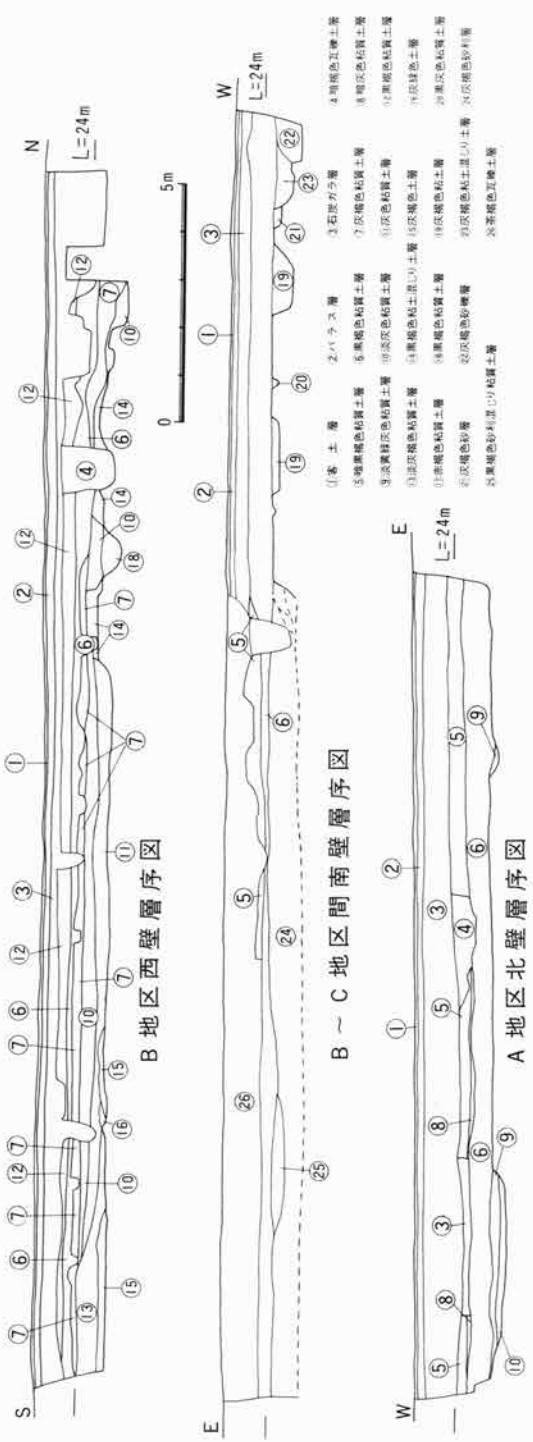
プールが解体完了した正月早々から南側へ2m，東側へ幅10m長さ20m拡張して発掘調査を再開した（C地区）。C地区ではB地区との境より東方へ1～3mの地点で地山の黄色粘土層が大きく抉られC地区東端まで継続していた。この埋土は砂利層が中心で，砂利はすべて磨耗していた。この砂利層は調査終了後の立会調査で3m以上を測ることを確認した。この砂利上面では溝状遺構や土坑を検出したが，いずれも近代以後のプール建設時などで生じたものと判断された。

3. 層　　位

A・B両地区に共通する土層は，上層から白色砂層，砂利層，石炭ガラ層，暗黒褐色粘質土層，黒褐色粘質土層である（第78図）。

白色砂層はテニスコートの表面を形成し，繊維粒の良質の砂層である。そのため水はけが良い。所謂客土層である。

砂利層はテニスコートを造成する際，水はけを良くするため暗渠排水用としたもので，大形礫が多い。



第78図　各壁層序図

石炭ガラ層は，B地区では薄く，場合によっては皆無の所もあり，A地区に向って厚さを増し，A地区西南端では地山面にまで及び厚さ約2mを測る。南北断面にあっては南方に向って厚さを増すが東西のそれとは比較にならない程の厚さである。本層は学校建設時ないし拡張時に建造校舎との平坦化を計るため石炭ガラを使用して盛土した結果と推定できる。それは学校周辺の民家との西端部での高低差が約1.3mあることから判断できるし，古老の言でもそれを肯定できる。暗黒褐色粘質土層は，上面第1文化面である戦前・戦中の畑地の耕作面を形成する(図版第48-下)。およそ50cmの厚さを測り，江戸時代後半期以降戦中まで畑地として利用された耕土と判断した。

黒褐色粘質土層は，地山の黄色粘土層を調査地全体を被う形で広がっていた。土質は上層の暗黒褐色粘質土層と全く同様であることから畑地ないし水田の存在を裏付けていると言える。層内からは原始・古代の遺物のみならず江戸時代前年期の陶器片も出土した。この土層が地山面まで到達している部分が存する点，原始・古代の遺物包含層を形成する褐色系の粘質土を全く包含しない点などから推して，江戸時代前半から，

上層の暗黒褐色粘質土層の上限年代である江戸時代後半期までに形成されたと判断したい。

その一方，C地区はA・B両地区とは様相を異にする。上層はプール建設時の掘削後の再埋設土で，以下，暗黒褐色粘質土層や黒褐色粘質土層が調査地区西側にのみA・B両地区からの延長として存在するが，埋設土の瓦礫土層の下位は砂利層となる。この砂利層は調査地東端まで継続して確認されていることからさらにより東方に広がっているものと推定される。さらに，この砂利層は，立会調査時で深さ3m以上にわたることもわかった。砂利はすべて丸味を帯び，腐植粘土層がブロック状に挟み，砂層もみられ，その砂粒の方向が北→南であることから，南流する河川を想定したい。この砂利層内から江戸時代中期と推定される土師器の小片が出土したことも合せ，この河川が少なくとも江戸時代中期には存在していたと推察して大過なかろう。

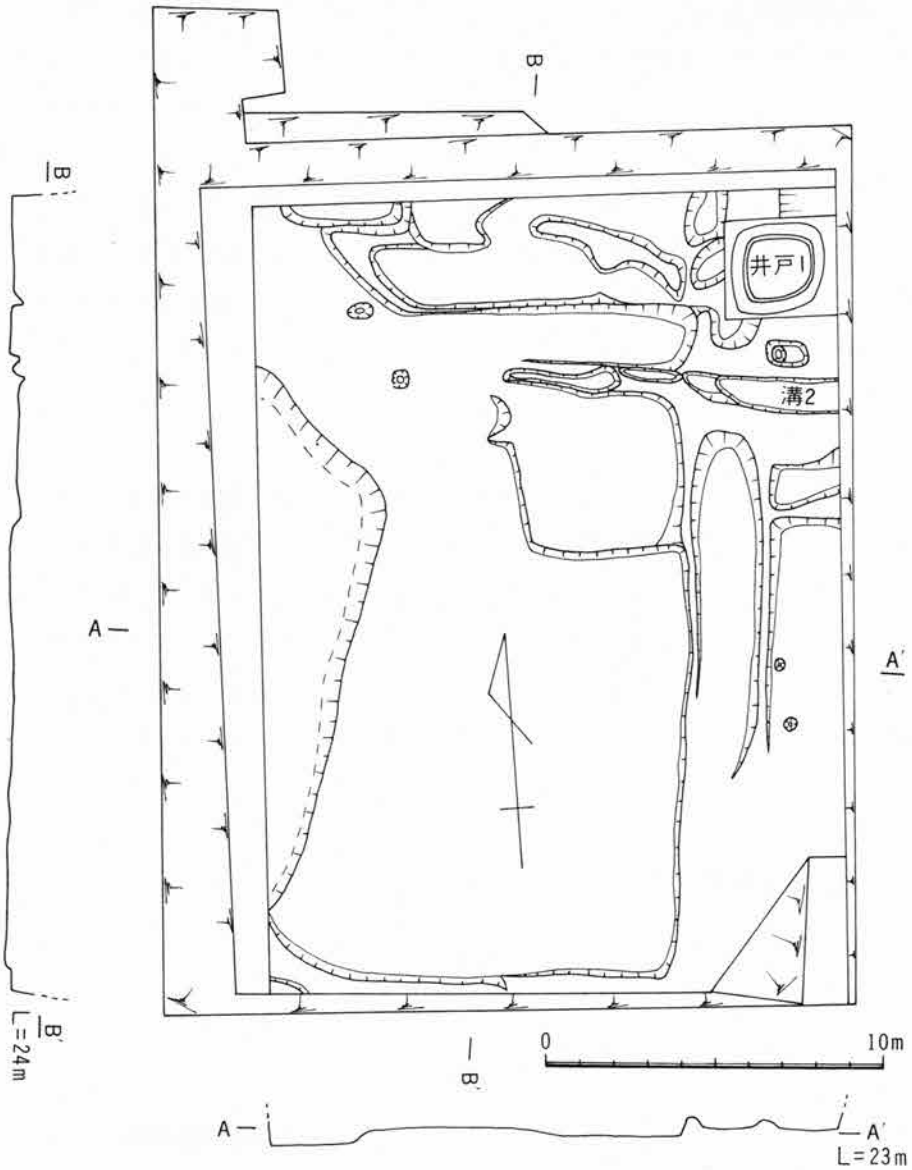
上記土層以外に数多くの土層を見ることができるが，その多くは掘り込みなどによる部分的なものであって，決して普遍的なものではない。ただし，ここで注視されるべき土層がある。黒褐色粘土混り土層である。この土層は，遺物包含層の褐色系粘土塊と粘質土層から成り，地山直上に叩きしめた状態で確認できた。一種の版築である。その広がりは溝1～溝2を中心とするのみで，東西は調査地区幅全体である。叩きしめ段階の年代は無遺物であるため比定し難いが，層位の関係から近世前半期と考えている。極めて人為的な土層と言え，何らの構築物を意図するものと言える。

4. 検出遺構の概要

A・B・C各地区で検出した諸遺構には顕著なものは無いが，今後に示唆する点が多い。ここでは各地区ごとに概要を記しておく。

A地区での検出遺構（第79図，図版第48・49）

本調査地区では，第一文化面（図版第48-下）としての耕作面がある。これは既述したように戦前・戦中を通じての耕作面である。調査地中央部には東西方向に畑の畝跡が数条走り，その東西両側を南北走の畝で画している。この畝跡の北側は低く立ち上がり，その反対に南側は上部石炭ガラ層が地山面近くまで及んでおり，その痕跡を留めない。この文化面より約30cm下位で，北東隅で漆喰で造築された井戸1を検出した。上部はすでに破壊され内側は崩壊した漆喰で充塡されていた。井戸1は一辺約2m四方の隅丸方形を呈し，深さ残存高1mで，底面中央部は若干凹む。漆喰の厚さは10cmで平均している。掘形は，一辺約2.7mを測る。この井戸1に伴う文化面はこの調査地では面的に把握できなかった。完掘時での地山面では，田・畑の区画痕跡を一部確認され，溝2も検出した。これらはB地区と関連する



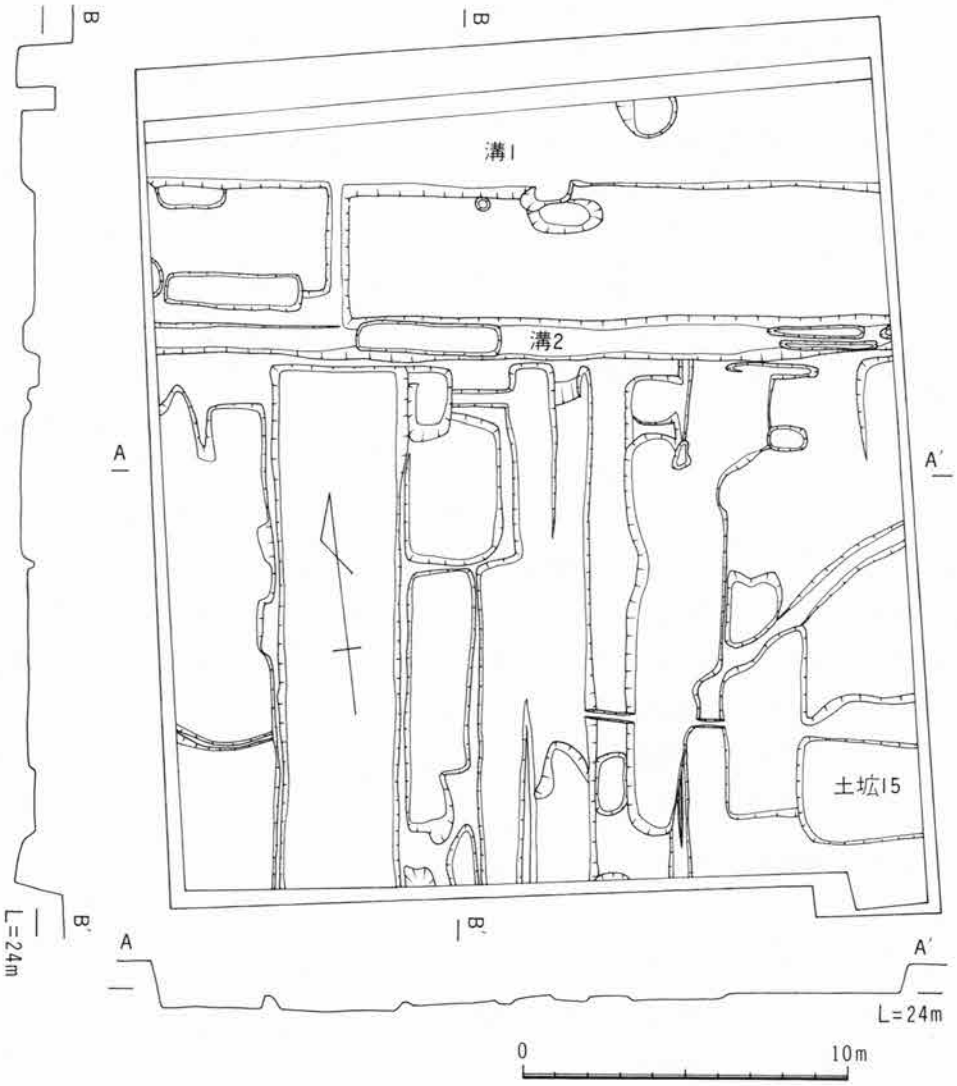
第 79 図　A 地 区 平 面 実 測 図

ので次項で併記する。他に調査地西辺では平面三角形状の大きな凹みがある。この凹みは褐色系粘土塊や砂層・砂利を多量に含む。西壁崩壊の可能性からその広がりや深さは知り得ないが地表下 4 m 以上は測る。無遺物である。江戸時代に属する。

B地区での検出遺構（第80図，図版第50・51）

本地区では北側で東西走する帯状遺構と南接して南北走する畦畔痕で画された水田乃至畑

地跡など発掘した。帯状遺構は溝1・2で画されている。溝1は幅広く調査地外に延び，底面は平坦であり，埋土も水田・畑地のそれと類似することから観て，溝でない可能性が高いが一応北肩が不明であるので溝として取り扱っておく。溝2は幅 1.2m で深さ約 50cm である。溝内は茶褐色系の粘質土とともに瓦礫片で満たされていた。遺物からこの溝2は江戸時代後半頃に比定できる。溝1と溝2を連絡する形で小溝が穿たれている(溝3)。この小溝のあり方からも溝1は溝的なものではなく水田乃至畑地の可能性が高い。この両溝に挟まれた帯状遺構は幅約4mを測り，部分的に後世の掘り込みも認められる。この帯状遺構は，



第80図　B地区平面実測図

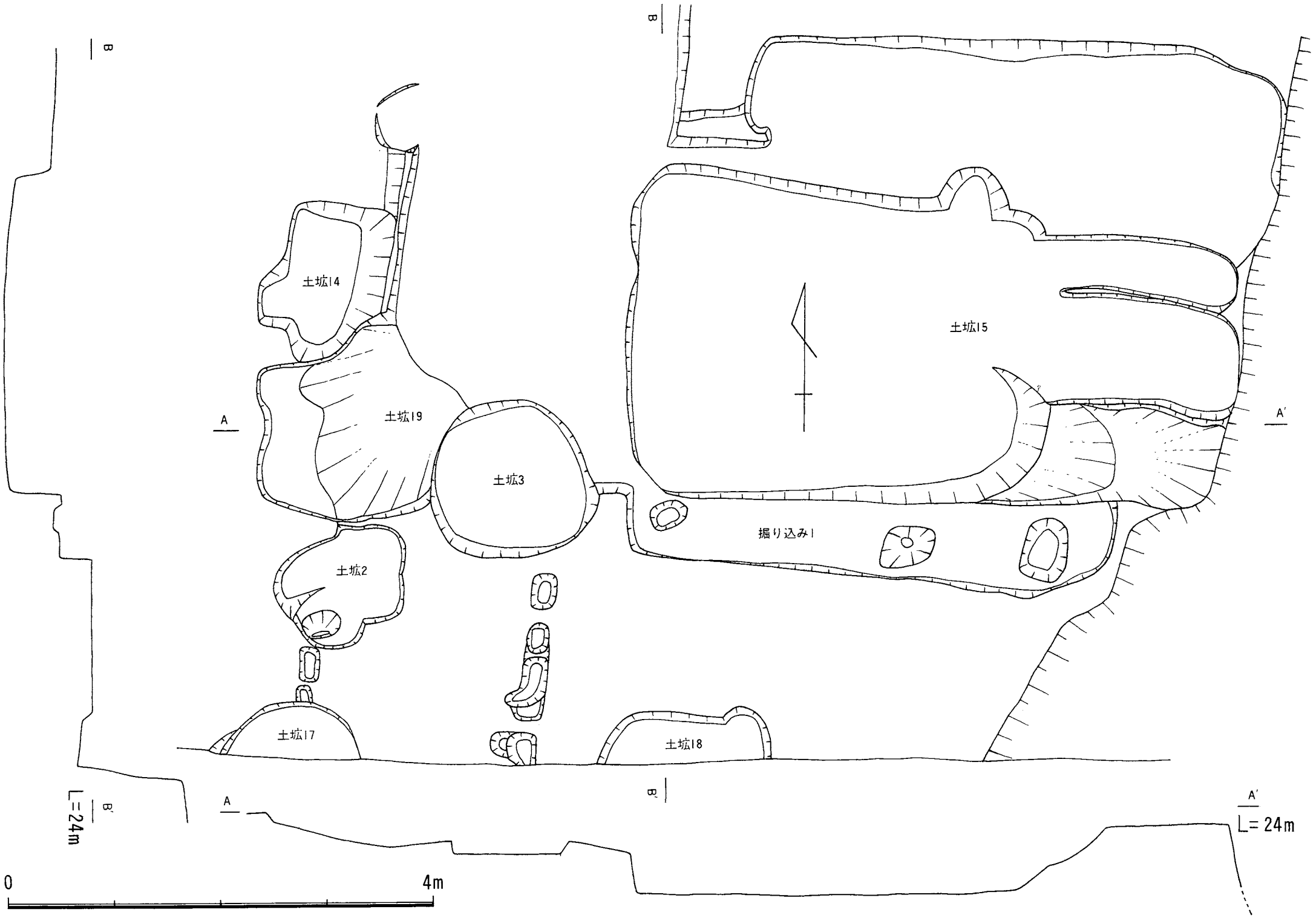
第3項で記したとおり，上面を叩きしめられていた。この叩きしめは溝1・2の外側にも若干広がっており，両側溝によって画される以前に叩きしめられたことが判明した。その広がりの南北幅は約7mを測る。東西幅はB地区幅と同一である。すなわち，調査地北半部にはこの叩きしめ遺構があって，江戸時代のある段階で溝1・2及び小溝を構築して帯状遺構を造り出して農道としたものと推定されよう。溝2の以南は南北走する畦畔跡で画された各種長方形状の水田乃至畑地跡が広がる。その一区画幅は最大約3.5mを測り，極めて細長い。同様な遺構はA地区でも部分的に確認されている。しかし調査地東南部4分の1には及ばず，むしろ遺物包含層が薄く残存する個所も存する。

次にこの東南部4分の1のやや平坦部について観察してみる(第81図，図版第52)。地山の黄色粘土層が最も平坦に残存していた所である。この部分には，長径1.5m，短径1m，深さ40～50cmの円形・楕円形・隅丸方形の土坑が9か所集中している。これら土坑はいずれも暗褐色粘土を内側に充塡され，遺物は須恵器の小片を1点出土させたのが2例知られたのみである。これらと同様の土坑がこの地域のみならずB地区の畦畔残存部分にも認められ，9か所を数える。その配列は南北間に一定幅をもたせ，東西間も平均的であり，平面的にみる限り規則的に構築されていると考えてよかろう。あるいは平安時代の集団墓地の可能性を指摘しても大過なかろう。この推察が正鵠を得ているとすれば，古文献にみえる，鳥羽造道より右京側は葬地と牧草地であったことより，平安時代のある時点で左京側にも葬地が拡大した可能性が生じてくる。古文献とも併せ再考すべき必要性が痛感される。

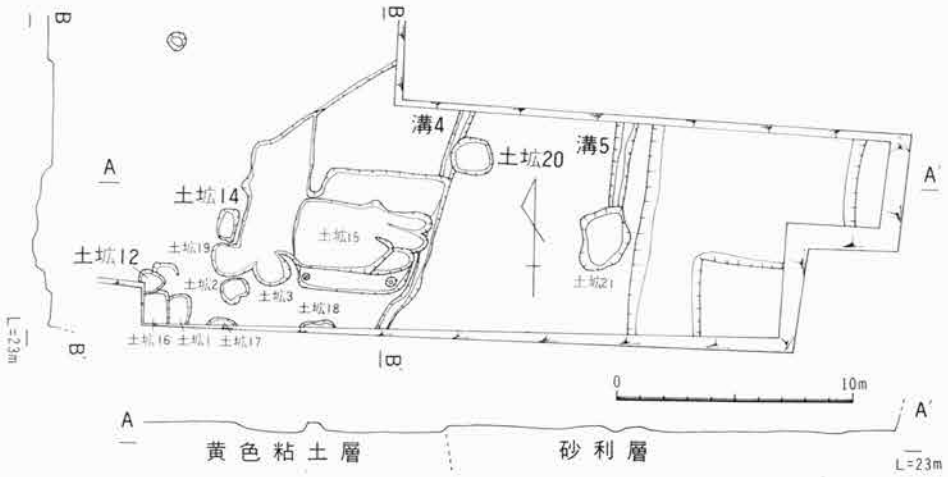
次に掘り込み1についてである。この遺構は近代の土坑15で大きく掘削破壊され，その一部分しか残存していないが，一辺4.5mの隅丸方形を呈し，二隅には径約40cm前後，深さ15～20cmのピットを各1個穿っている。方形掘り込みの深さは約40cmである。埋土には遺物を全く包含せず，時代比定し難いが，埋土から平安時代以降中世全般と考えている。平面形とピットの位置などから推定して，住居跡とするよりも他の特殊遺構とすべきであろう。特殊遺構とは何かとなると困難を極めるが，殯跡ないし特殊墓坑が考えられる。周辺土坑からも上記二説が有力視されるべきであろう。

C地区での検出遺構（第82図，図版第53・54）

C地区とは，溝4をもってそれより東側を指す。本地区では，プール建設時に大きく掘削・削平され原形を殆ど残さず，B地区のように極立った遺構はなかった。すなわち，溝4はプール建設時のヒューム管埋設溝であり，土坑20は銅板を埋蔵させた避雷用の円形土坑である。溝5や土坑21などはプール建設時の掘削跡と考えられる。注目すべきは，溝4を境にして東側はすべて基底部が砂利層となることである。溝4で深く垂直に近い形で掘削され，その接



第81図　B～C地区間遺構実測図



第82図　C地区平面実測図

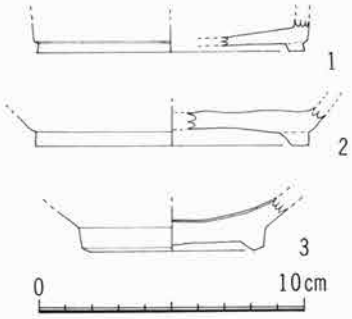
地部分では土塊や粘土塊が認められるものの，東側ではまったく砂利・砂層から成り，間層としてのみ粘土層が薄く横たわる。その砂利層を観察するとその粒子の走りは南方向を示す。砂利はすべて磨滅し丸味を帯びる。これは明らかに南流する河川によって堆積した砂利層と推察してよかろう。この砂利層は深さ3m以上にも及び，またその広がりは調査地区東端外に延びるが，北側では民家との境界付近で一部地山の黄色粘土層を立会調査で確認したから，民家直下に地山の立ち上りを想定してその北限とできよう。この地山のあり方から，東方から西流して来た水流がプール直下で直角に左折して南流していたことが推定できる。さらに砂利層中から江戸時代中頃の土師器の小片が出土したことにより，少なくとも江戸時代中頃には河川が存在していたものと考えられよう。

5. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は，コンテナー箱にしておよそ10箱を数える。その多くは上層の石炭ガラ層や瓦溜などから出土した近世末～近・現代の瓦類や陶器・磁器類などである。また，水田乃至畑地の耕土層中や地山直上からは，江戸時代後半期の，主として陶・磁器類を多く検出した。平面的には近世～近・現代の遺物は調査地全体に広がるものの，中世以前となるとB地区の中央部付近に最も集中している。土坑からもわずかながら須恵器片が出土した。

出土遺物（第83・84図，図版第45・46）は，主として，土器類，陶器類，陶磁器類，磁器類，伏見人形類，貨幣，瓦類に大別される。

土器類には，茶褐色を呈し細い沈線文を廻らした縄文時代晩期の縄文式土器片（図版第45-1・



第83図　出土遺物実測図

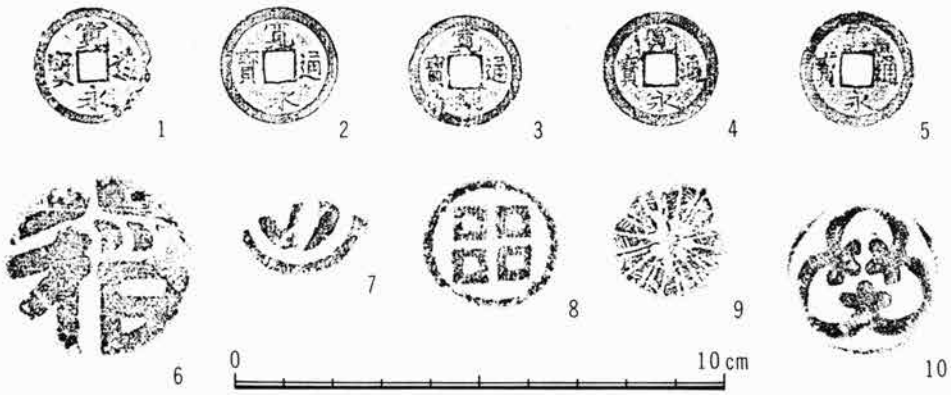
2)，弥生式土器片(図版第45-3・4)，土師器高杯の脚部片(図版第45-5)，土師器長頸壺片(図版第45-6)，6世紀後半の須恵器杯蓋(図版45-7)，平安時代前期の須恵器杯片（第83図1・2，図版第45-8・9)，須恵器壺の高台部片(図版第45-10)，同椀底部片(図版第45-11)，同壺の胴部から底部にわたる破片(図版第45-12・13)などがある。さらに灰釉陶器片(図版第45-14)や近江系の緑釉陶器片(図版第45-15・16)がある。中国製陶磁器は4点出土し，灰白磁系(第83図3，図版9-17～19)と青磁片(図版第45-20)に二分される。いずれも碗形である。

中世の遺物としては，瓦質羽釜形土器片（図版第45-21)，押印を施した常滑系陶器片（図版第45-22）などがある。

近世時では，陶器・磁器が主である。丹波系壺片（図版第45-23)，備前系壺片（図版第45-24)，志野系向付片（図版第46-1)，織部系向付片（図版第46-2)，唐津系の椀（図版第46-3）や三島唐津椀（図版第46-4)，肥前系磁器碗片（図版第46-5)，京焼系の小皿（図版第46-6）や蓋（図版第46-7）などがあり，これらのほかに江戸時代前期に比定される焼塩壺用素焼きの蓋（図版第46-8）がある。

伏見人形類には，大形の土鈴（図版第46-9）と各種文様を陽刻した泥面子（第84図6～10，図版第46-10～15）がある。

貨幣は都合6枚出土したが，戦中の中華民国貨幣（図版第46-20）1枚以外はすべて寛永通宝(第84図1～5，図版第46-16～19)である。



第84図　出土貨幣及び泥面子拓影図

瓦類は陶磁器類についで出土量が多い。形態上から，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・獅子口に分類され，その大半は江戸時代後期以降に属する。平安時代に比定できる瓦片は極く少量で，平瓦片(図版第46-21～24)と丸瓦片のみである。平瓦は凹面に布目痕を有するものと無文でなで痕がみられるものがあるが，凸面はやや多様である。縦方向の縄目叩き痕は細い例(図版第46-21)と太い例(図版第46-23)に二分されるし，平安時代後期に多く散見される格子目叩き痕を有する例(図版第46-22)や条痕叩きを施した例(図版第46-24)も認められる。

以上，今回の調査で出土した代表的な遺物を列挙したが，年代的には縄文時代から近・現代まで連綿と継続していることが窺い知れる。しかし，全体出土量が少ないため速断はできないが次のような傾向は指摘できよう。平安時代以前の遺物は量が少なく，また磨耗も夥しい。平安時代では前期～後期までの遺物を含み量的に増す。しかし，中世～近世前期でのそれは減少し，その後の江戸時代後半期以降は，逆に圧倒的な出土量となる。これは遺構のあり方と深く関連しているものと推量される。

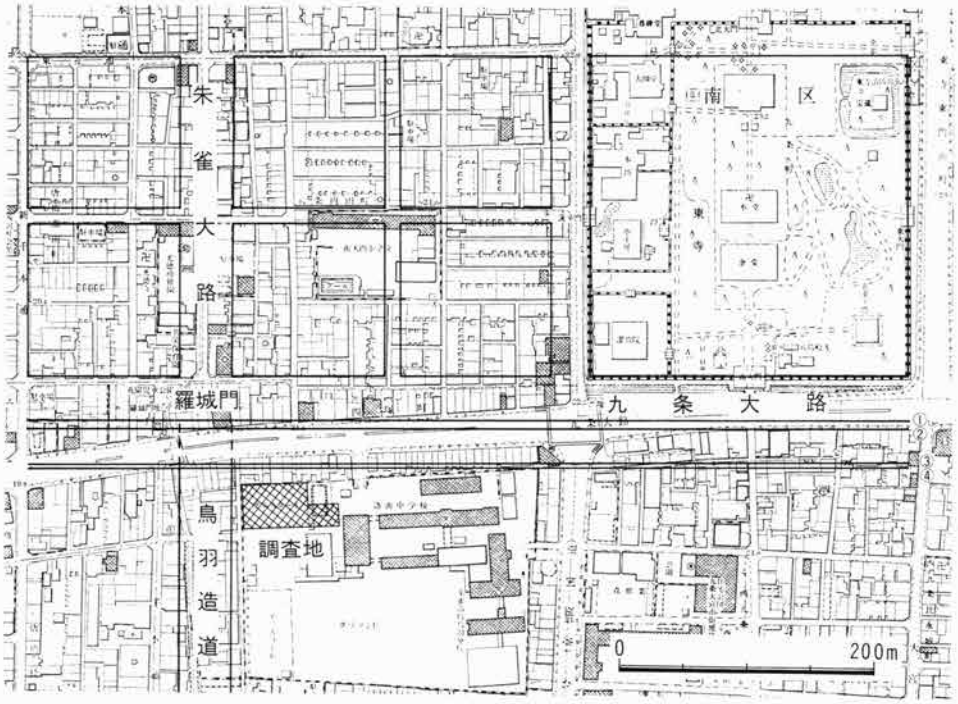
6. 小　　結

以上，調査の概要について略述してきたが，ここで改めて検出した河川跡と叩きしめ遺構(帯状遺構を含め)について若干の指摘をして結びにかえたい。

C地区で検出した砂利層は河川跡を示すものであり，平面的には東方から西流してきた河川がC地域付近で垂直に左折して南流することも併記した。この河川跡によって調査地周辺地域一帯では排水が極めて良好な場所と湧水が顕著な地域とを誘発させている。そこで，出土遺物から江戸時代中期には存したことが事実であることから，江戸時代中期ごろの京都を描いた絵図を観察しながらこの河川跡について述べてみたい。近世京都を描いた絵図は江戸時代でもかなりの枚数にのぼるが，本地域を中心に詳細に描写された絵図は数少ない。数少ない絵図を座右にして，東寺・九条通・鳥羽街道を中心に観ると，寛永6(1629)年に刊行された『京絵図』には九条通南辺や東寺南側付近には河川の表現はまったくなく，本絵図以前の中世～近世初頭のそれにも河川は描かれていない。少なくとも寛永6年ごろには河川は存在していなかったことが知られる。100年後の享保14(1729)年の『唐橋村近在諸村用水絵図』(竹内新之烝家文書)では，九条通南辺に沿って西流する河川が九条通と鳥羽街道との十字路の手前で左折して南流するように描写されている。この100年間のある段階でこの河川が構築されたのであろう。鳥羽街道の位置は，東寺より若干西側に寄った，八条村にくい込んだ地点から南方に延ばして描かれており，さらにこの街道の西隣には木造橋と溝が描写されて

いる。この溝が現在の鍋取川であるとすれば，(注1) 逆に鍋取川の東側に位置する鳥羽街道は，調査地の西側の南北に走る路地や民家付近を南下していたことになる。その鳥羽街道に隣接して東側に前述した河川(『鴨川筋』)が表現されており，今回検出した河川跡は地理的にまさにこの鴨川筋に一致するものであり，この鴨川筋に比定して間違いなかろう。この鴨川筋は天明3(1783)年の『細見京絵図』や天保2(1831)年刊の『京町絵画細見大成』にも左折して南下する描写表現がみられる。しかし，前記絵図の再刊である慶応4(1868)年刊の『京町絵図細見大成』では「堀川」と記している。あるいは江戸時代後半期では堀川とも合流していたためにその名が付されたものとも理解される。明治以降の絵図ではまったく河川の表現が変化していることから，明治初頭には埋没し，その機能の終焉を迎えたものと推察される。

この鴨川筋（一名「堀川」）の比定が正鵠を射ているとすれば，叩きしめ遺構の解釈が次の問題となってくる。そこで，既述した絵図類をさらに検討すると，朱雀大路すなわち後の千本通の東辺に沿って南北に築かれた御土居が九条通で東方へ直角に曲がり，九条通の南辺と鴨川筋の北辺間を東走するように示されている。この御土居の基底部がこの帯状遺構を中心とした叩きしめ土層にその面影を見ては如何であろうか。叩きしめるという極めて人為的な



第85図　平安京条坊復元図

(① 大井重二郎説，② 川勝政太郎説，③ 大石良材説，④ 裏松固禅説)

行為は何らかの構築物を想定せざるを得ず，古絵図の地理的位置関係や，層位上からも近世初頭にまで遡り得ることも併せ，御土居比定をより肯定的にしている。

仮りに今回確認された河川跡及び叩きしめ遺構が各々鴨川筋・御土居の一部だとすれば，次に平安京条坊復元に関わる重要な問題が提起されてくる。『延喜式』京程記事を廻って九条大路すなわち南京極大路及び羅城外について幾多の説が唱えられているが，その代表例である四氏の説(注2)を現市街地に復元したのが第85図である。一見して分るように，①大井重二郎説と④裏松固禅説を取り上げると，およそ九条大路幅の大きな差異が認められる。そこで，鴨川筋と御土居を今回確認した位置に想定した場合，御土居の基底部幅が 20 m 以上(注3)であれば，③大石良材説や④裏松固禅説の推定羅城南端部と重複することになる。翻って，御土居は，先述したように，東寺との関係上から九条大路南辺に沿って築造されたと考える方がより妥当であり，江戸時代の古絵図に図示されていることも至極当然といえる。とすれば，③・④説に御土居が重複する以上，そして御土居築造時に平安京条坊がかなり改変されたとはいえ，九条大路に関しては東寺の存在をもって改変は小さかったものと推定され，史跡の御土居幅を勘案しても③・④説は否定せざるを得なくなる。さらに，鳥羽造道の位置が調査地西隣に推定され，それが江戸時代における鴨川筋と今回検出の河川跡との合致からしてもより肯定的にしているといえる。但し，諸氏の指摘する外畔道(外路)や堤を利用して御土居を構築したとすれば，上記推察は成立し難くなるが，一案として提示しておきたいと思う。

7. おわりに

以上，今回の発掘調査について概要を記し，併せて大胆な推察を試みた。しかし，断片的な諸遺構からの推論であるため，誤謬を犯していないかと危惧する。今後の新たなる調査成果をまってさらに検討を加えたいと考える。

それにしても，今回の調査では顕著な遺構・遺物が検出されなかったとはいえ，既述したように今後に示唆する点が多い。特に，B地区東南部で確認された土坑群並びに層位からも調査地南側に良好な遺構が存在する可能性が高いと推定される。また，出土遺物中には縄文式土器片，弥生式土器片，古墳時代の須恵器片や土師器片なども存することから本地域及び周辺に先史・古代集落の存在を明示している。

最後にあたり，酷暑から厳寒期まで発掘調査・整理に従事して頂いた調査補助員(注4)，また調査期間中種々便宜を計られた朱雀高校鳥羽分校に対し，併せ記して謝意を表する。

（松井　忠春）

注１　福山敏男「羅城門の歴史」（京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告』）1971年

注２　大井重二郎「平安京の京程に関する疑問」（『史迹と美術』250）昭和30年
〃　　「続・平安京の京程に関する疑問」（『史迹と美術』256）昭和30年
川勝政太郎「平安京の外郭垣」（『史迹と美術』160）昭和19年
大石良材「平安京条坊の復原」（『古代文化』21-６）昭和44年
裏松固禅『大内裏図考證』第１（『新訂増補故実叢書』26）昭和27年
栄原永遠男「平安京研究の現状と問題点　―条坊復原を中心に―」（『日本史研究』153）昭和50年　に上記４氏の説を要領よくまとめているので参照されたい。

注３　西田直二郎「御土居」（『京都府史蹟勝地調査會報告』第２冊）大正９年

注４　調査に参加して頂いた調査補助員は次のとおりである。
加藤雅子，久世美智子，坂下雅朗，城田雅博，中川理華，西岸秀文，東　敬子（五十音順）

9. 祝園地区所在遺跡昭和58年度 発掘調査概要

1. はじめに

この試掘調査は，関西学術研究都市構想の中核候補地で，住宅・都市整備公団祝園地区の宅地開発に伴うものである。調査対象地は，京都府相楽郡精華町大字南稲八妻・東畑・乾谷・柘榴に所在する。西は奈良県生駒市に接し，北は煤谷川，南は山田川で画された地域で，精華町の南西部にあたる。

この地域の埋蔵文化財の分布調査は，昭和56年4月に，京都府教育委員会によって実施され，4基の古墳と10か所の散布地が確認されている。古墳は，墳丘の形状等から判断したもので遺物は見つかっていない。

今回は，分布調査に基づいて試掘調査を実施し，遺構の有無，遺跡の範囲を調べ，遺跡の保存及び本調査のための資料を作成することを目的とした。

試掘調査は，昭和57年10月5日から昭和59年3月31日まで行った。調査は，当調査研究センター調査課主任調査員 長谷川達，同調査員 石尾政信・黒坪一樹・山下　正が担当し，地元東畑地区・乾谷地区の方々(注1)，学生諸氏(注2)の協力があった。

なお，現地調査にあたって，精華町役場企画資料室・精華町教育委員会・京都府立山城郷土資料館・木津土木工営所及び土地所有者の方々には多大な御援助をいただいた。

2. 位置と環境

南山城地方は，京都府南部にあって，東を笠置山系，西を生駒山系，南を両山系をつなぐ丘陵で囲まれた京都盆地の南端に位置する。三重県鈴鹿山脈に発し西流する木津川が，流路を変えて北流する地点の左岸，生駒山系から東にのびる京阪奈丘陵の東端を含む地域が相楽郡精華町である。精華町は，木津川の対岸では山城町，北は綴喜郡田辺町，西から南にかけては奈良県生駒市・奈良市，南東は木津町に接する。木津川の左岸は，水田が広がり，西の丘陵地から煤谷川・山田川や堀池川等の小河川が木津川に注ぎ，その流域には棚田が発達している。精華町では，西の東畑地区の嶽山が最高地で，ここから東方向に丘陵は傾斜しているが，煤谷川中流と乾谷を結ぶ線の東側に，南北方向の丘陵尾根がはしる。この丘陵によって精華町は，ほぼ東西に分かれる。これらの丘陵は，京阪奈丘陵，甘奈備丘陵と呼ばれ大阪

層群からなり[注3]，丘陵での厚さは 200～300 m ある。また，未固結の礫・砂・粘土からなり，火山灰層を含み，極めて崩落し易い地層である。そのため大雨の後には，丘陵斜面や水田畦畔などで地すべりの跡を見ることがある。東畑地区では，大阪層群に含まれた「みがき砂」（火山灰）を掘り出した穴が傾斜面に残っている。

精華町の平野部や隣接する丘陵には，北から平谷古墳群・鞍岡山古墳群・大谷古墳群・古瓦の散布する下狛廃寺・里廃寺・大北城跡・南稲八妻城跡・祝園神社・野見宿禰の墓といわれる丸山古墳・祝園遺跡・植田大塚をはじめ，古墳や散布地が知られている[注4]。山田川沿いには，乾谷窯跡群・得所窯跡群や散布地がある[注5]。しかし，煤谷川中流と乾谷を結ぶ線の東を南北にはしる丘陵から西では，これまで遺跡は知られていなかった。京都府教育委員会が実施

第 86 図　調 査 地 位 置 図

14. 乾谷遺跡　15. 乾谷窯跡　16. 得所窯跡　20, 21, 22. 散布地

付表2　試掘調査地一覧表

地点番号	遺跡名称	種類	所在地	調査期間	調査面積	備考
第1地点	馬原1号墳	古墳か	精華町東畑馬原	1982年10月5日 〜 〃 10月22日	約 31㎡	
第2 〃	〃 2 〃	〃	〃 〃 〃	1982年10月7日 〜 〃 10月28日	40㎡	
第3 〃	大谷1 〃	〃	〃 南稲八妻大谷	1982年11月18日 〜 〃 12月6日	48㎡	
第4 〃	〃 2 〃	〃	〃 〃 〃	1982年10月27日 〜 〃 11月18日	41㎡	
第5 〃	笹谷遺跡	散布地	〃 東畑笹谷	1983年8月9日 〜 〃 9月22日	222㎡	
第6 〃	大崩 〃	〃	〃 南稲八妻大崩	1983年2月3日 〜 〃 2月18日	489㎡	
第7 〃	大谷A 〃	〃	〃 〃 大谷	1982年12月7日 〜 1983年1月11日	285㎡	
第8 〃	〃 B 〃	〃	〃 〃 〃	1983年1月11日 〜 〃 1月31日	264㎡	
第9 〃	金前 〃	〃	〃 乾谷金前	1983年3月7日 〜 〃 3月31日 1983年4月25日 〜 〃 5月23日 1983年10月6日 〜 1984年1月20日	計 659㎡	
第10 〃	西出合 〃	〃	〃 乾谷 西出谷 奥畑口	1983年11月7日 〜 〃 12月23日	311㎡	
第11 〃	蛇喰 〃	〃	〃 〃 蛇喰	1984年1月10日 〜 〃 3月30日	269㎡	
第12 〃	三平谷 〃	〃	〃 〃 三平谷	1983年2月19日 〜 〃 3月5日	362㎡	
第13 〃	奥畑 〃	〃	〃 〃 奥畑 丸山 稲番堂	1984年1月23日 〜 〃 3月15日	374㎡	
第14 〃	柘榴蛇喰 〃	〃	〃 柘榴蛇喰	1983年5月23日 〜 〃 8月10日	617㎡	
					計 4,012㎡	

した分布調査によって，「祝園地区」で4基の古墳と10か所の散布地が新たに見つかり，また，「祝園地区」の東側の民有地で窯跡や古墳などが発見されている。「祝園地区」は，煤谷川・山田川とその支流である権谷川で画された地域で，中央やや東方の谷間を府道乾谷―東畑線がはしり，丘陵の間を乾谷川・煤谷川分流が通り，痩せ尾根と急斜面が多い。そして，谷筋と丘陵斜面を利用した棚田が尾根近くまで造られているが，現在は荒地となった所が多く見られる。

3. 調　査　概　要

この調査は，分布調査の成果に基づき，遺構の有無，遺跡の範囲をつかみ，遺跡の記録保存及び本調査のための資料を作成することを目的として実施した。古墳と推定されるものには，幅1mの断ち割りトレンチを設け，遺物散布地には，推定範囲内に分散するように幅3mのトレンチを設けることを基本とした。

ここで使用した水準高は，国土地理院の設置した三等水準点及び，これを使用して京都府土木工営所が新たに設置した水準点から測量したものである。

(1)　No. 1 地点

調査地の西端に位置し，標高160mの丘陵頂で，径約10mの円形の盛り上がりが見られる。東から見れば高さ2.5m前後あり，南は急な斜面となっている。雑木等を伐採した後，幅1mのトレンチをT字形に設定した。これによって，盛り上がりは，粘土層・砂・砂礫からなる自然地形であることが判明した。地層は，西から東に向って傾斜している。出土遺物は確認していない。

(2)　No. 2 地点

東に延びる丘陵稜線上にあり，雑木等を伐採した後の地形観察で，隅丸の三角形を呈する1～2mの盛り上がりである。幅1mのトレンチを設定したところ，No. 1と同じく自然地形であった。出土遺物なし。

(3)　No. 3 地点

北から南東に延びる丘陵から東方に派生した丘陵稜線上にあり，短径10m・長径15m前後の不整円形を呈する盛り上がりで，高さ1～1.5m。北東と南は竹藪による土取りで崖面となり，南は急峻である。トレンチを十字形に設定したところ，頂点から東側で0.5m前後の盛土があるほかは，粘土層・砂・砂礫層からなる自然地形であった。盛土から土師器片が出土した。

(4)　No. 4 地点

南東方向にのびる丘陵の分岐点に位置し，径約10mの円形の盛り上がりで，マウンドの

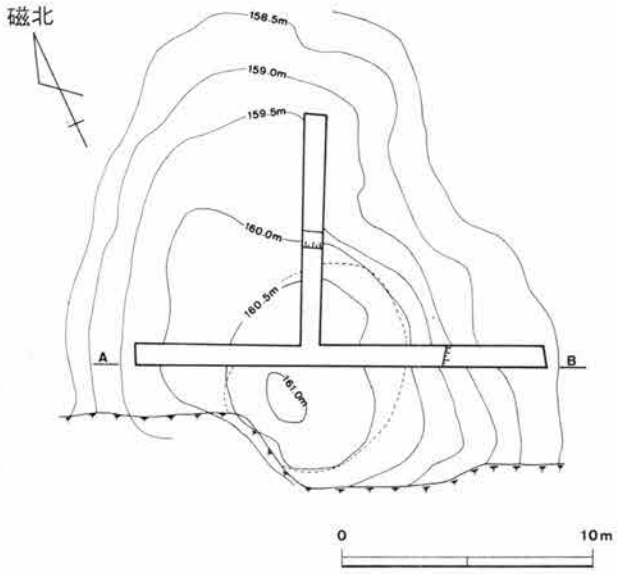
南東にわずかに傾斜する幅5m前後の平坦面がある。東方から見れば，高さ2m程度の円墳に似ている。トレンチを十字形に設定したところ，頂点に水分のしみ込みによる方形の土の変化がみられるほかは，これまでと同様，粘土層・粘質土・砂・砂礫層からなる自然地形であることが判明した。出土遺物はなし。

(5) No. 5 地点

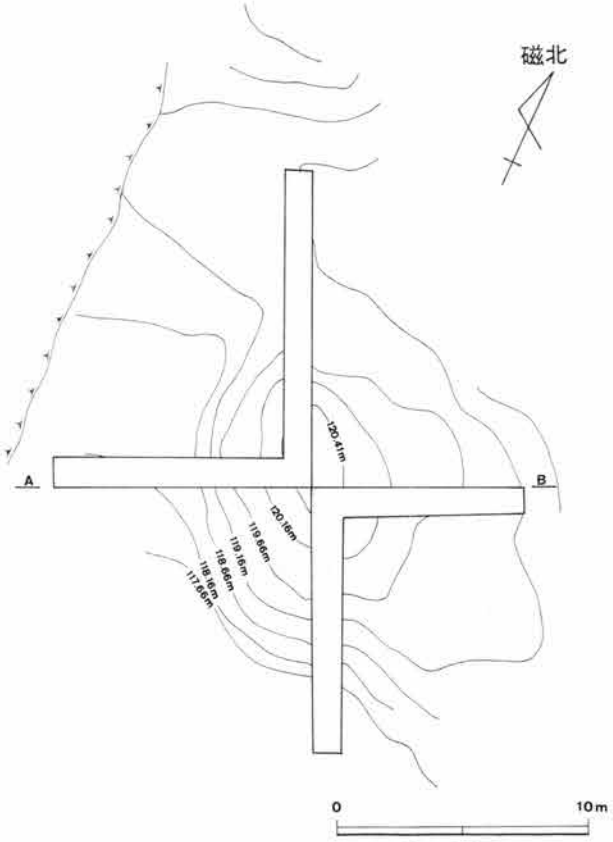
No. 2 地点の東側で，丘陵斜面と谷筋を利用した水田及び休耕田となっている。調査対象地域に幅2～3mのトレンチを合計6か所設定したが，顕著な遺構は検出できなかった。丘陵斜面の水田では，耕作土の下にわずかの床土等があり，その下はすぐ地山面となる。谷筋の水田では，耕作土の下に，水田を造成した盛土が0.5～1mほどある。盛土中から，キセル・陶磁器・土師器・棧瓦などが出土した。

(6) No. 6 地点

調査地の北東に位置し，北側を煤谷川が東流し，この氾濫原と丘陵斜面が水田及び休耕田となっている。幅3mのトレンチ・グリッドを合計11か所設定し



第87図　No. 1 地点平面図



第88図　No. 4 地点平面図

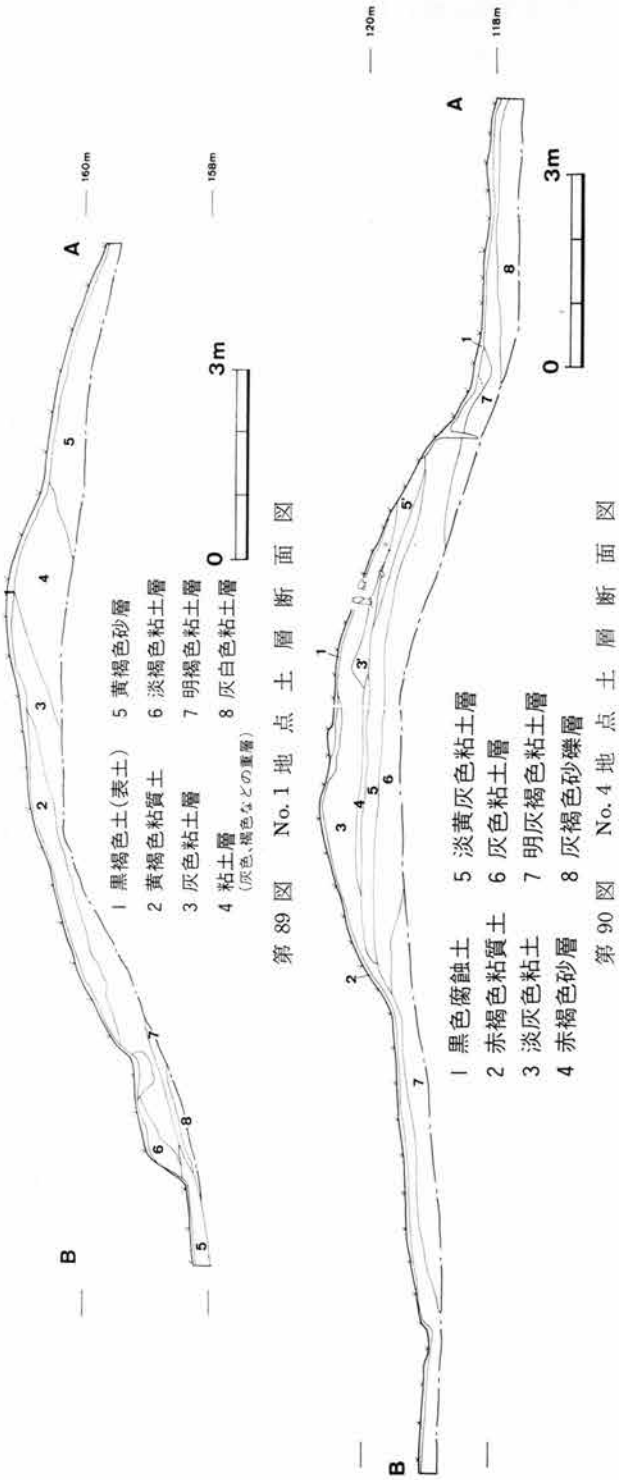
たが，顕著な遺構は検出されなかった。煤谷川畔の水田では，耕作土・床土の下は，氾濫による砂礫層・粘土層の堆積がみられる。丘陵斜面の休耕田では，耕作土・床土の下に粘土層・砂・砂礫層となっている。土師器・陶磁器・棧瓦などが出土した。また，この周辺で行われた煤谷川の護岸工事の際にも同様な遺物が採取された。

(7)　No. 7 地点

調査地の東端に位置し，丘陵斜面と谷筋を利用した水田となっている。幅 3m のトレンチ・グリッドを合計7か所設定したが，水田造成時の段差を検出したのみであった。谷筋の水田では，耕作土・床土の下に，粘質土・粘土層が厚く堆積している。斜面地の水田では，耕作土・床土の下に，水田造成の盛土があり，その下は地山面とおもわれる粘土層・砂礫層となっている。盛土から，陶磁器・土師器・瓦などが出土した。

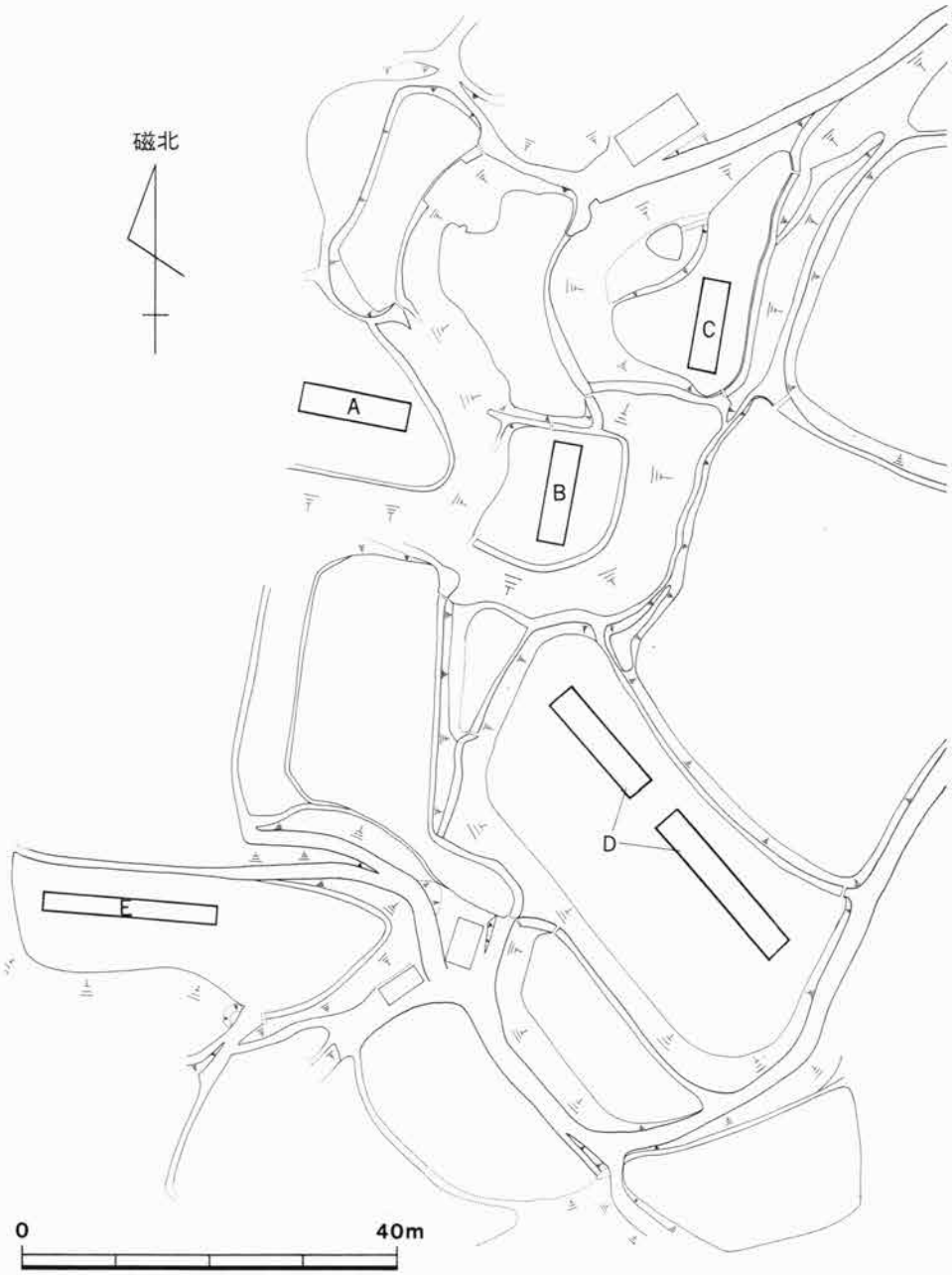
(8)　No. 8 地点

N.o 7 地点の北西で，谷の分岐点から西に入った場所で，No. 7 地点と同じく，谷筋と丘陵斜面を利用した水田・休耕田



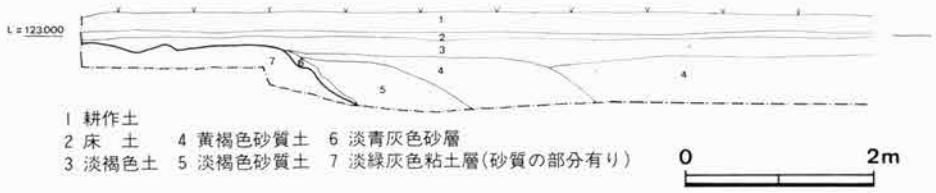
第 89 図　No. 1 地点土層断面図

第 90 図　No. 4 地点土層断面図



第 91 図　No. 5 地 点 ト レ ン チ 配 置 図

となっている。幅 3 m のトレンチを合計 6 か所設定したが顕著な遺構は検出されなかった。谷水田の土層は，No. 7 地点とよく似た状態であった。丘陵斜面の水田では，耕作土・床土の下に 30 cm 前後の盛土があり，他の場所よりやや多くの遺物が出土した。出土遺物には，



第 92 図　No. 5 地点土層断面図（Eトレンチ南壁）

須恵器・土師器・陶磁器・寛永通宝などがある。

(9)　No. 9 地点

調査地の東南に位置し，北から東南にのびる丘陵から南方に派生した丘陵の南端，乾谷川によって段丘状になった部分及び，谷筋を水田としている。乾谷川沿いに府道乾谷―東畑線が平行している。昭和57年度に，幅 2～3 m のトレンチを合計 9 か所設定したところ，丘陵南端（Bトレンチ）で，幅約 2 m, 深さ 30～40 cm の南東から北西に傾く素掘り溝 (SD 01) と，溝の北西で平瓦の出土した落ち込みを検出した。溝と落ち込みは交叉するが，前後関係は不明である。落ち込みの稜線は，南方にのびることがわかった。昭和58年度に，溝 SD 01 の延長部分と，落ち込みの上段及び南側にトレンチを設定した。上段トレンチでは，顕著な遺構・遺物ともに見つからなかった。溝 SD 01 は，南東に約 10 m のびたところで，しだいに浅くなり消滅していた。溝の埋土は，暗灰色土・暗灰色砂質土で土師皿などが出土した。落ち込みの埋土は，溝 SD 01 の埋土と酷似した暗灰色土で，下層には砂質土も堆積していた。落ち込みから出土した遺物は，布目瓦・土師器・瓦器片がある。他の出土遺物には，土師器・陶磁器などがある。No. 9 地点の土層は，府道沿いでは耕作土・床土の下に砂・砂質土と部分的に粘土層もある。また，No. 9 地点周辺で，布目瓦に関連した遺構（窯跡）が想定されるため，丘陵部分・谷筋で分布調査を実施したが，少量の遺物が見つかっただけである。

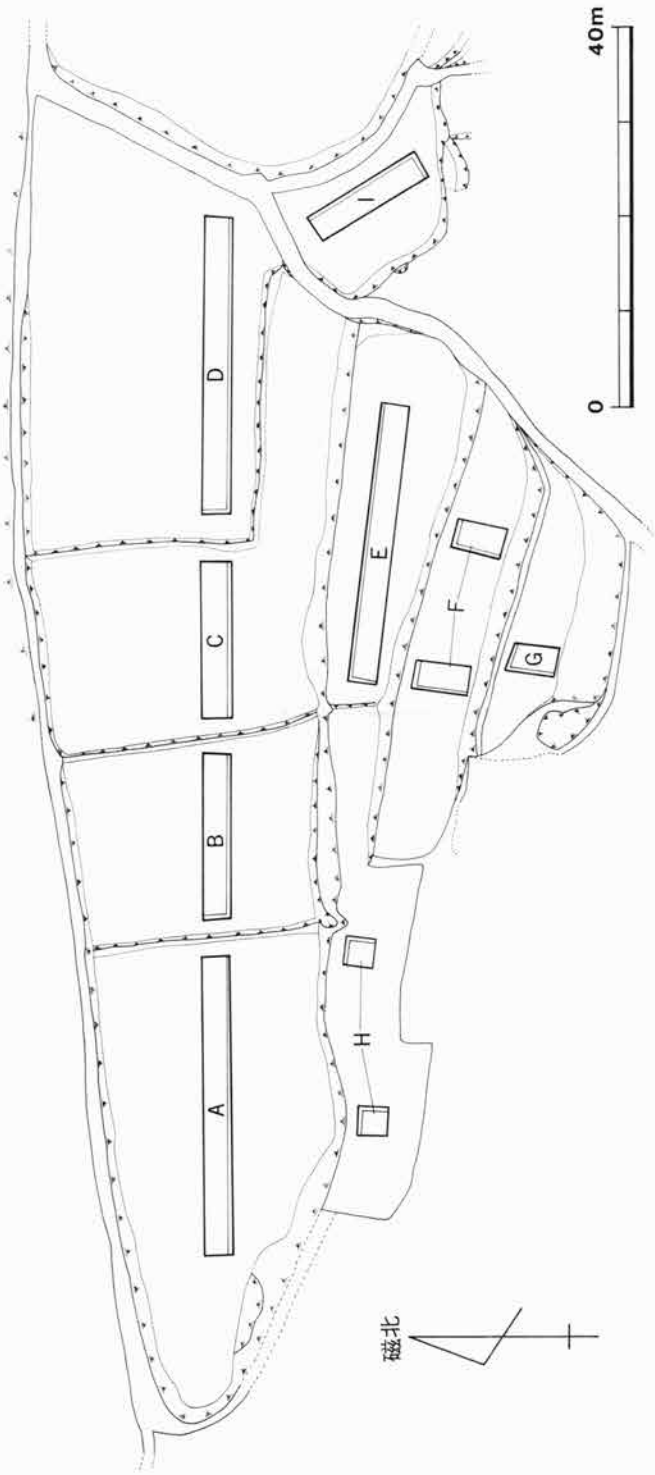
(10)　No. 10 地点

No. 9 地点の乾谷川をはさんだ斜め西側で，乾谷川の上流の谷が合流する地点である。谷沿いと丘陵斜面が水田・休耕田となっている。幅 3 m のトレンチを合計 5 か所設定したところ，谷沿いの水田（Aトレンチ）で南北方向の幅 20 cm 前後の浅い溝を検出した。この溝は，1.4～1.8 m の間隔で並び，合計11条ある。この上層及びB・Dトレンチでもよく似た溝が見つかっている。Bトレンチの溝のひとつから土師皿が出土した。Cトレンチでは，粘質土の凹地に砂の入ったものが見つかっている。動物の歩いた跡かもしれない。また，土質の異なる粘土の互層があり，水田の作り変えがわかる。A～Dトレンチでは，耕作土・床土の下に上流から流されて来た粘質土・砂質土・砂・砂礫層が堆積している。丘陵斜面地のEトレンチでは，水田造成の盛土が厚い部分で 1 m 前後あり，この盛土から 8 世紀末期の須恵器壺・

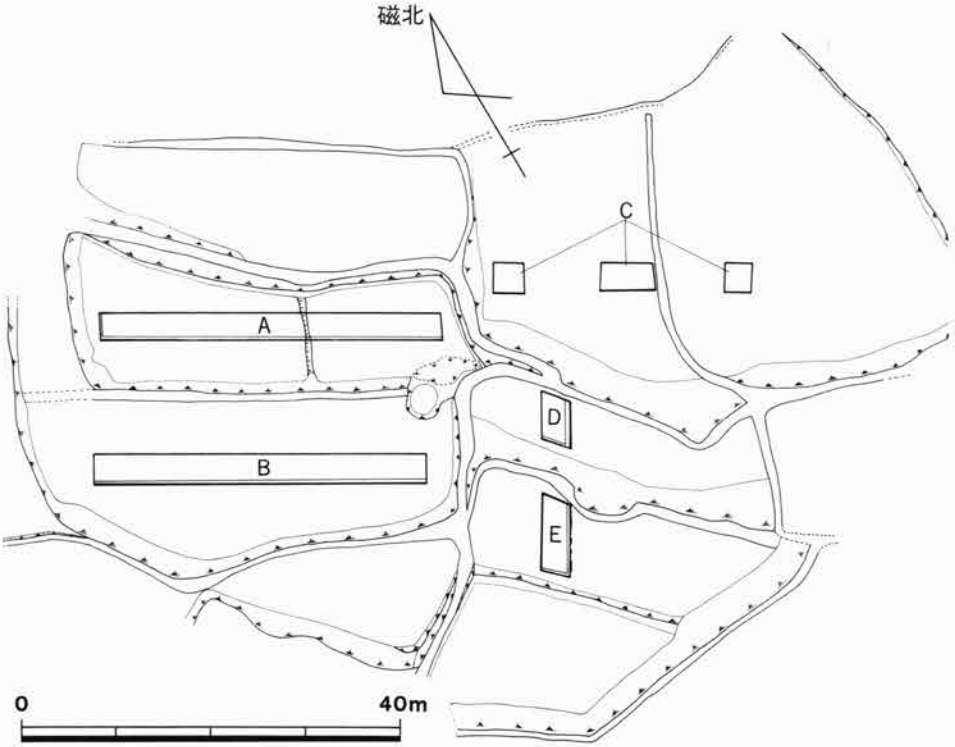
同土師器甕，室町～安土・桃山時代の土師器などが出土した。Eトレンチの土層は，耕作土・床土及び盛土層の下は固く締まった粘土層・砂礫層となる。

(11) No. 11 地点

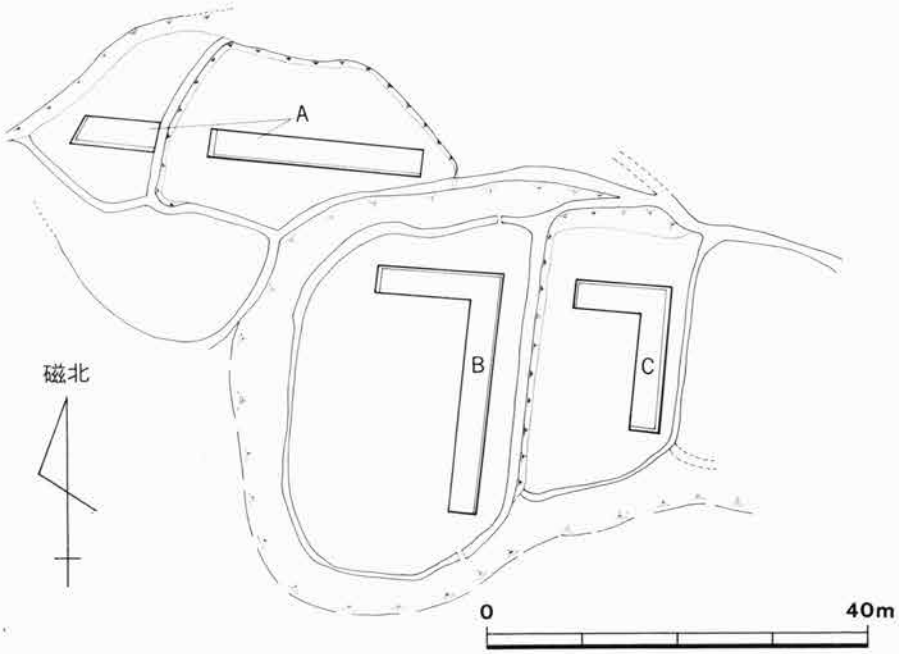
No. 10地点の北西にあたり，丘陵の南がNo. 10地点，北がNo. 11地点となる。丘陵の北斜面に，谷川から尾根付近まで棚田が開かれている。丘陵斜面に幅3mのトレンチを合計5か所設定した。最上段のトレンチでは，水田造成の盛土が1m以上あった。Bトレンチでは，暗渠排水路と杭列を検出した。杭列は，水田造成または補修のときの土止め材で，現在の水田の畦畔から3m以上内側にあることから，水田の変化がよくわかる。B～Eトレンチでは，耕作土・床土の下に盛土があり，これから土師器・瓦器



第93図　No. 6地点トレンチ配置図



第 94 図　No. 7 地 点 ト レ ン チ 配 置 図



第 95 図　No. 8 地 点 ト レ ン チ 配 置 図

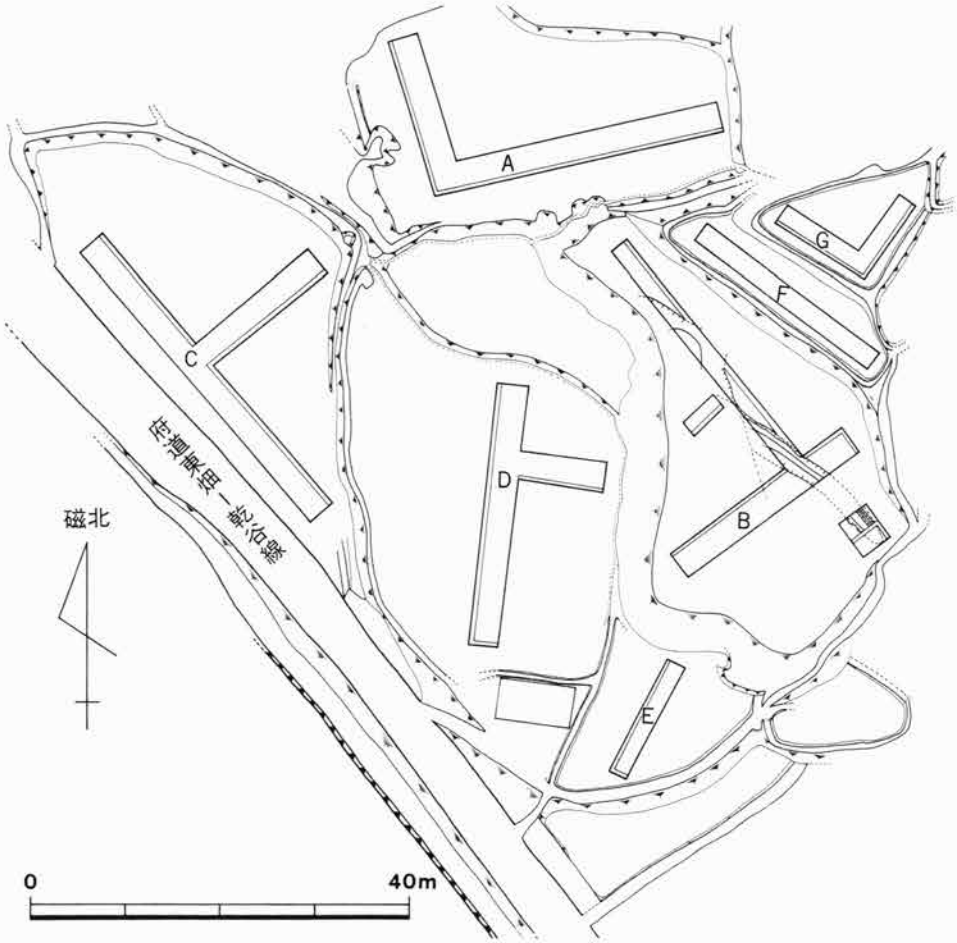
・陶磁器・寛永通宝などが出土している。谷川沿いのAトレンチでは，耕作土・床土の下が砂・砂礫層と砂質土となり，上流からの堆積によることがわかる。遺物は，ほとんど含まれていない。

⑿　No. 12 地点

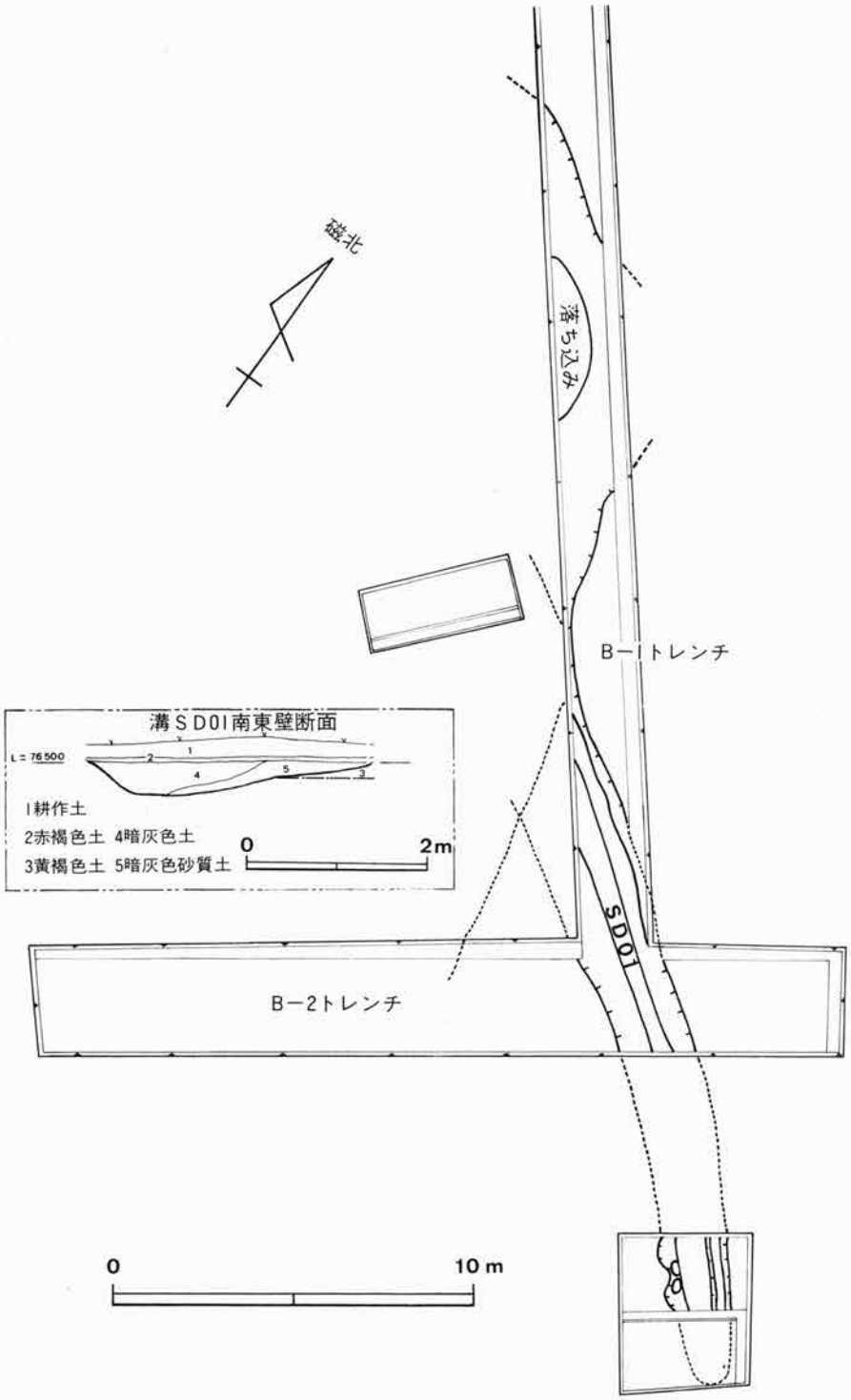
府道乾谷―東畑線の峠から少し南で，府道沿いの谷間を水田としている。幅3mのトレンチを合計7か所設定したが，浅い溝の痕跡が2か所で見つかっただけで，顕著な遺構は検出されなかった。耕作土・床土の下は，粘土層・粘質土・砂礫層となっている。陶磁器・土師器などが出土した。

⒀　No. 13 地点

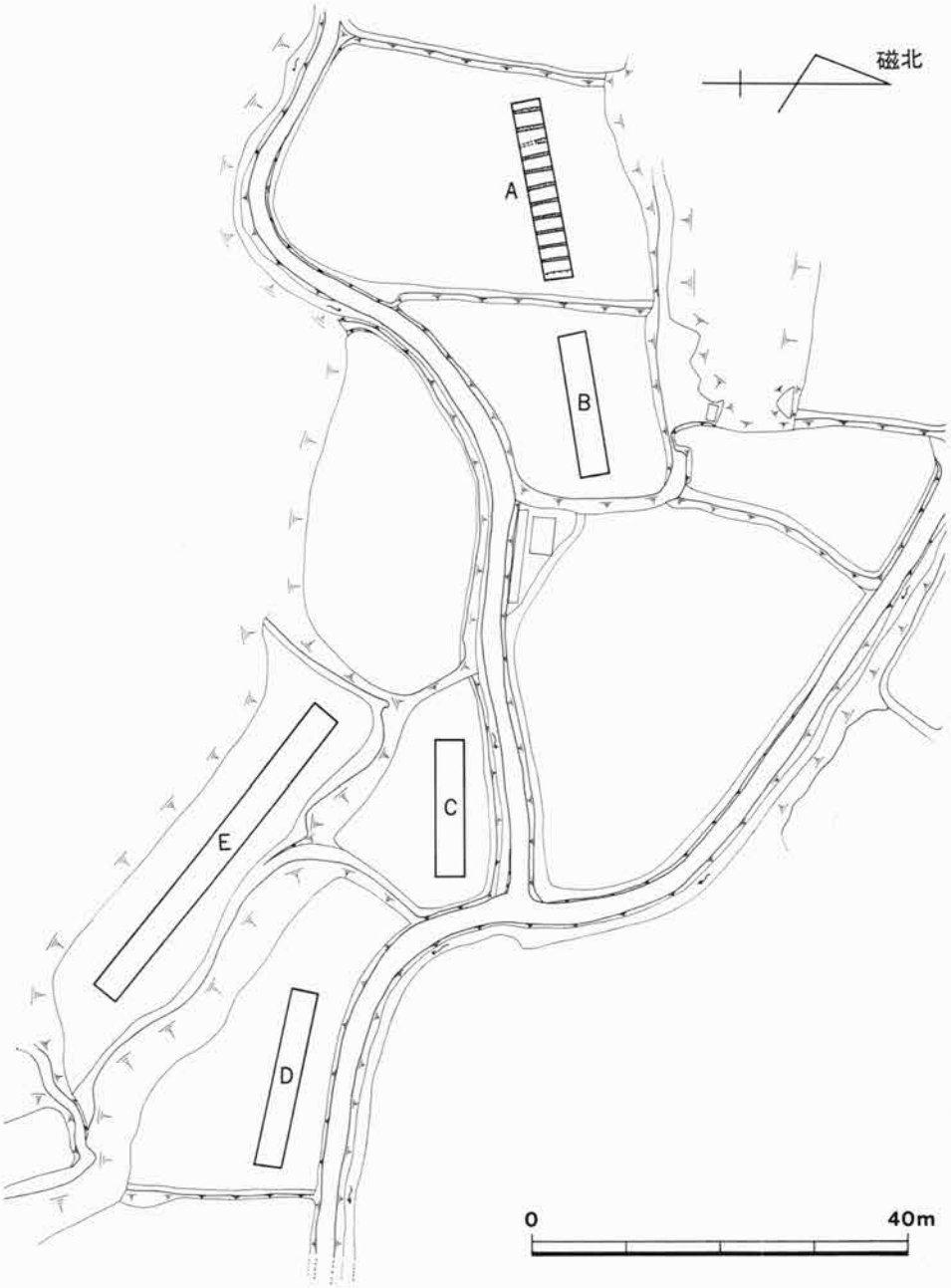
乾谷川の最上流にあたり，東向きの丘陵斜面を水田としている。かつて，この周辺には多



第96図　No. 9 地点トレンチ配置図

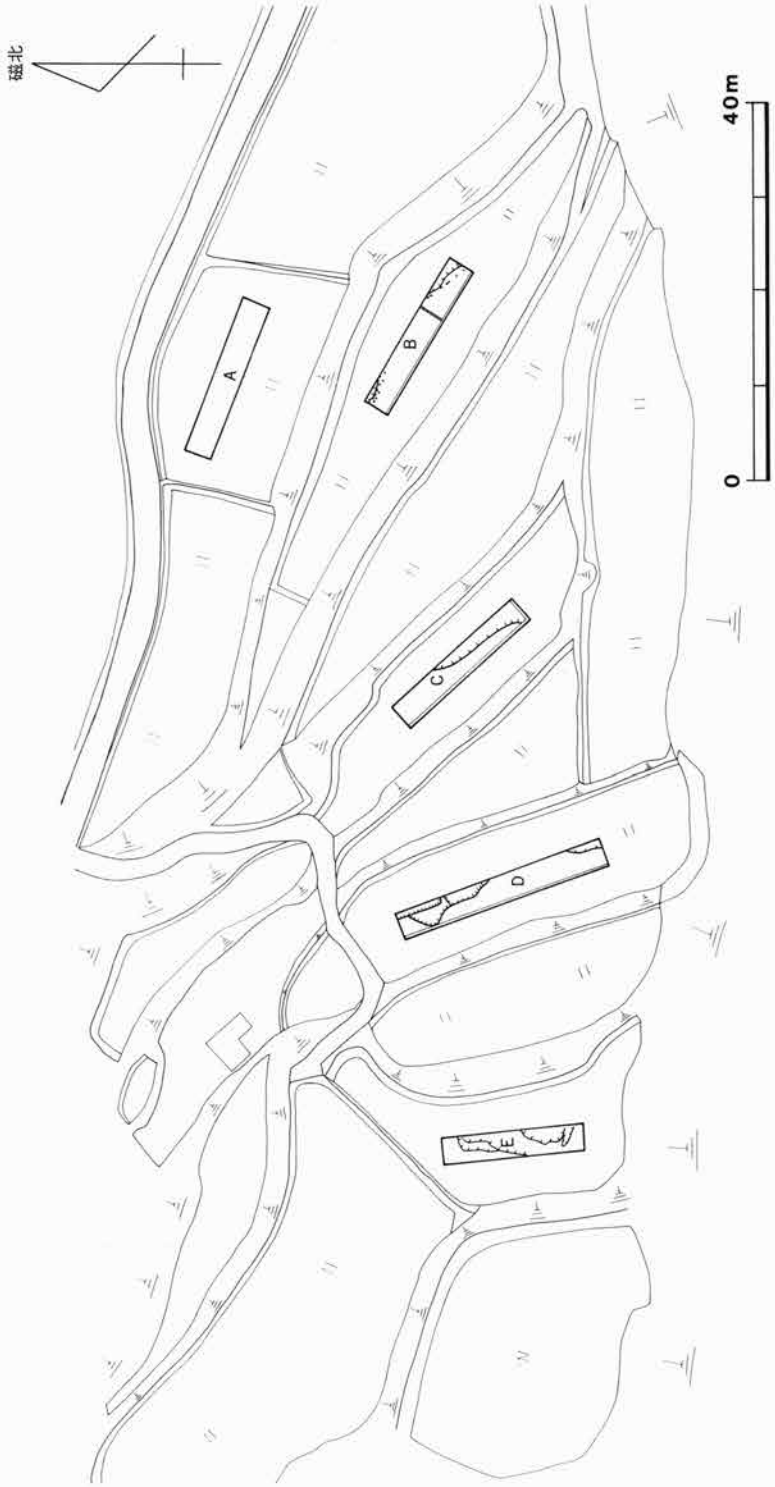


第 97 図　No. 9 地点 B トレンチ平面図

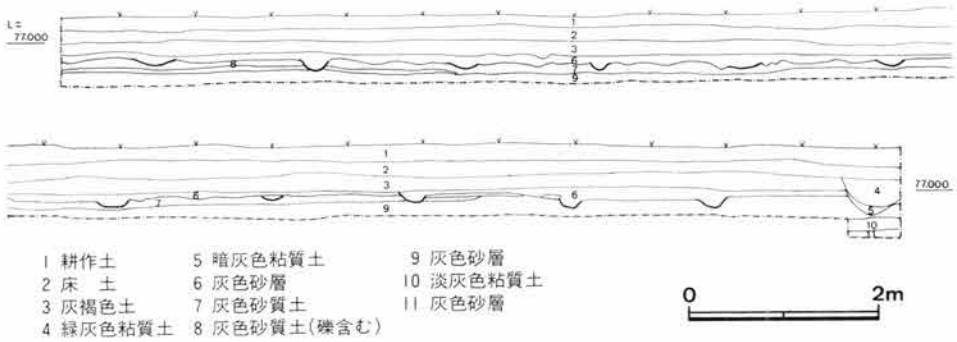


第 98 図　No. 10 地 点 ト レ ン チ 配 置 図

くの棚田があったが，現在は荒地化し，東南の丘陵のみに水田がつくられている。幅 3m のトレンチを合計 6 か所設定したが，うち 2 か所で湧水による崩壊のため調査を中断した。顕著な遺構は見つからなかった。南東向きの水田（C・D トレンチ）は，耕作土・床土の下が



第99図　No. 11 地点トレンチ配置図



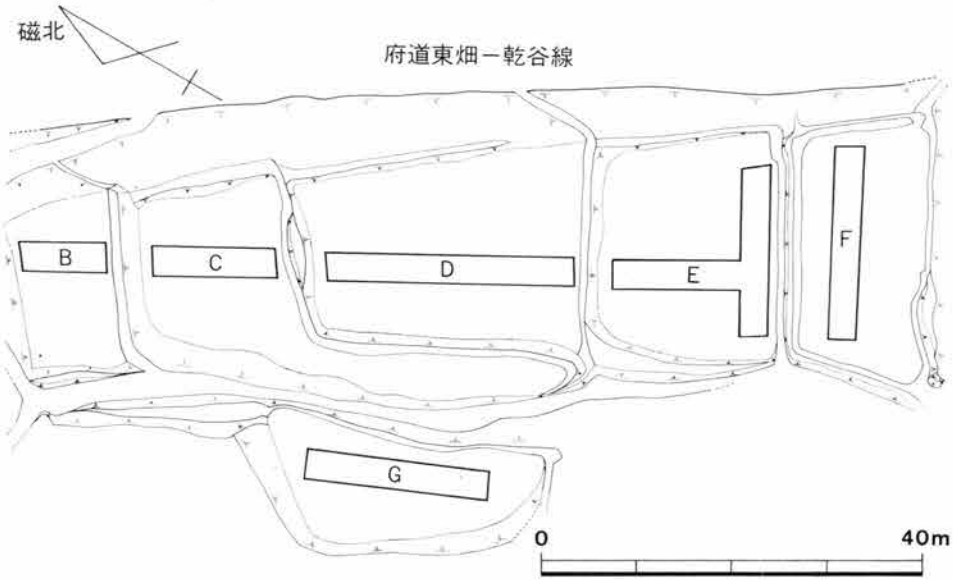
第100図　No. 10 地点 Aトレンチ北壁断面図

粘質土・粘土層で，この粘土層を削って水田造成を行っているため，粘性が強く良質の田畑となっている。これと陽あたりのよいことが僻地にありながら現在まで水田が維持されてきた理由であろう。

北東向きの斜面（Fトレンチ）は，下層が粘質土か砂層で，南東向き水田とは若干異なる。Fトレンチでも，水田造成の盛土がみられ，盛土層から土師器・瓦器が出土している。ほかに，陶磁器・須恵器片がある。

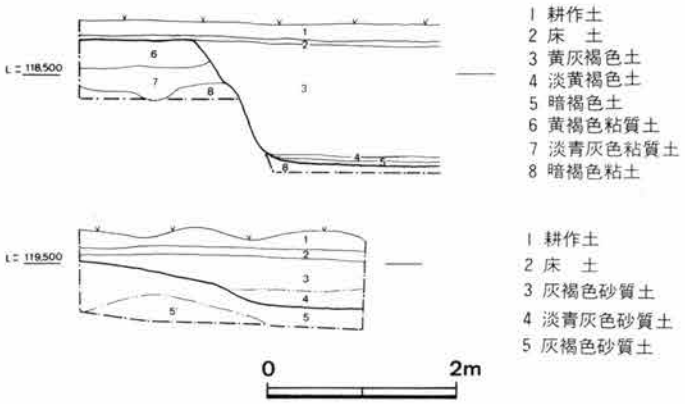
(14)　No. 14 地点

調査地の南西端に位置し，南北丘陵の西斜面と谷筋では，かつて丘陵尾根付近まで水田が作られていたが，今では下位に水田が残るだけで，ほとんどが荒地となっている。山田川の



第101図　No. 12 地点トレンチ配置図

支流権谷川の対岸は生駒市で，丘陵が削平され，川沿いに水田が残る程度である。幅3mのトレンチ・グリッドを合計14か所設定したが，顕著な遺構は検出されなかった。耕作土・床土の下は，粘土層・粘質土・砂・砂礫層となっている。水田を造ったときの埋土から，陶磁器・土師器・棧瓦・寛永通宝などが出土している。



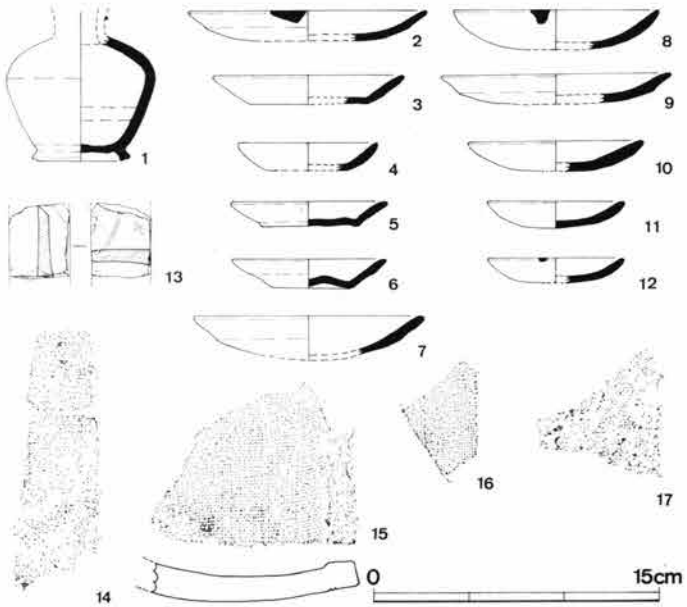
第102図　No. 13 地点土層断面図
上-Dトレンチ南東壁　下-Fトレンチ北西壁

4. 出土遺物

この調査で，約4,000 m² を試掘調査したが，出土した遺物は，整理用コンテナ箱に3箱と非常に少量である。これは，調査地内に顕著な遺構が検出されなかったことによる。出土した遺物は細片が多く，図示できるものはわずかである。年代的には，室町時代から江戸時代の土師器皿・陶磁器が多く，8世紀末期の須恵器壺・土師器甕，奈良～平安時代の平瓦なども混っている。

須恵器壺(1)は，No. 11 地点Eトレンチの盛土層(淡灰褐色砂質土)から出土した。壺の頸部は失われているが，体部の中心から少し上に最大径があって，若干肩の張る形である。体部内外面ともロクロなで仕上げで，高台を貼り付けている。胎土にチャート・黒色粒を含み，焼成は良好で淡青灰色を呈する。須恵器は，No. 8・No. 13 地点からもわずかに出土している。

土師器皿は，2～4が No. 8 地点Aトレンチの盛土から出土した。5は，No. 9 地点溝SD 01から，6は，No. 10 地点Eトレンチで，1の須恵器と同じ盛土層から，7は，No. 10 地点Aトレンチの南北方向の溝から，8は，No. 11 地点Eトレンチの盛土層から，9は，No. 13 地点Fトレンチの盛土層から瓦器片とともに，及び 10・11 は，No. 14 地点 C-4 トレンチの盛土層から，12は，No. 14 地点 A-2 トレンチ盛土層から各々出土している。5・6・11は，ほぼ完形品である。6は，底部が平らで口縁との境界がわずかに屈曲し，板状のものの上で成形したものと思われる。7は，底部が内側に凹み，その中心は底部中央からずれたところにある。この2点は，形態などからみて15世紀後半頃のものと思われる。



第103図　出土遺物実測図・拓影

土師器の皿は，いずれも内面と口縁端部をなでている。底部と口縁下半は未調整で，指圧痕のみられるものもある。2・8・12は，油煙痕が残り，燈明皿として使用されたことがわかる。

13は，No. 10 地点Eトレンチの盛土層から出土した。幅 31 cm で，上下両端は欠損している。表裏ともよく使用され，磨いたように摩滅しており，厚い部分は約 10 mm，薄い部分は 4. 5 mm ある。淡黄褐色をした粘板岩質で，砥石に使われたと思われる。

14～17は，No. 9 地点Bトレンチの落ち込みと，その周辺から出土した。凹面に布目痕が，凸面に縄目痕が残る。14は，焼成が甘く，淡褐色で，15～17は，焼成が良好で，青灰色である。14は，若干摩滅しているが，その他は摩滅していない状況から，これらの瓦は，No. 9 地点の周辺から運ばれたものと考えられる。

5. ま　と　め

今回の調査で，No. 9地点で平瓦の出土した落ち込みとこれに交差する溝，No. 10 地点で幅 20 cm 前後の溝，No. 11 地点で暗渠排水路と杭列が検出されたが，ほかに顕著な遺構はない。No. 9 地点の平瓦の見つかった場所は，南に張り出した丘陵斜面の先端で，南西を乾谷川が流れ，南から見ると狭い段丘状を呈している。西からも丘陵が張り出し，狭い谷になっており，かつて，乾谷川が蛇行していた痕跡をとどめている。出土した平瓦は摩滅が少ないことから，調査地周辺から運ばれたものと思われる。また，No. 10 地点では，8 世紀末期の須恵器なども発見されているので，この付近に奈良～平安時代の窯跡の存在を推定できよう。今後，工事等を実施するときは充分な注意が必要であろう。なお，No. 9 地点から山田川までは直線で約 1 km を測る。

開発予定地内の水田は，溝や盛土中から出土する遺物，排水路や杭列からみて，15世紀代には水田開発が始まり，近世には幾度かの改修が行われたことが判明した。これらの水田の上位に必ず池を設けていることがこの付近の特徴である。

丘陵上のマウンドは，すべて自然隆起で古墳でないことがわかった。これは，南山城地方の大阪層群の丘陵によく見られるもので，やわらかい地層が流出し，堅い地層がとり残され古墳状隆起を呈しているものである。「祝園地区」の東方の木津町吐師山丘陵遺跡(注6)も同様な報告がなされており，南山城地方の丘陵部の調査では，古墳状自然隆起に注意が必要であろう。

（石尾 政信）

注1　田中秀雄・浦井清一・永井熊雄・杉島喜太郎・浦井光子・浦井茂子・前田千代子・前坂絹枝・辻本キミ江・永井マサ子・杉浦維子・鍛冶谷さわ子・浦井柳栄（以上，敬称略）

注2　小住寛二・東松義郎・北川雅章・中西繁則・寺本雅宣・吉田　徹・堀居正則・大久保真那・田中康夫・岩前良幸・岩前宏誉・藤本正之・西垣正則・北川敏男・南　旨光・団村　香・大西敦子・林　仁美

注3　中川要之助『精華町祝園地域開発整備に伴う自然環境調査』日本住宅公団関西支社　(財)都市調査会　1976
中川要之助ほか『同志社田辺校地及びその周辺の地質　―南山城の自然史―』同志社大学校地学術調査委員会　1978

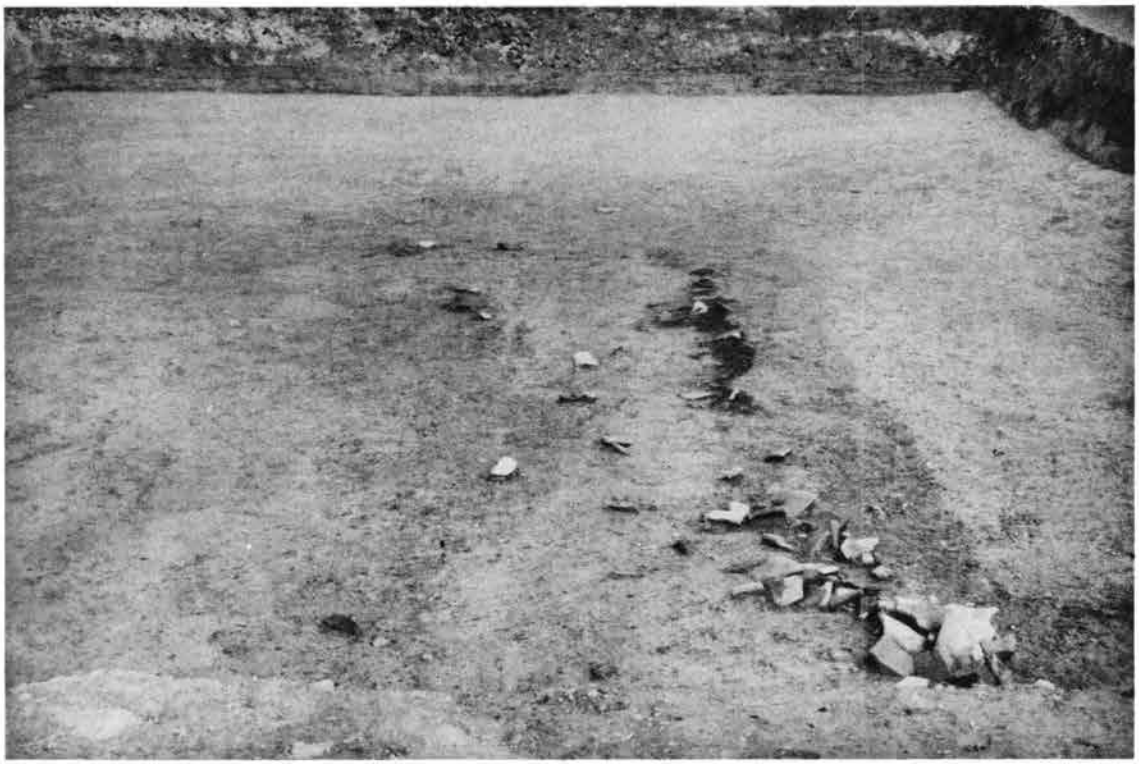
注4　梅原末治「山田荘村乾谷の瓦窯跡」(『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第14冊　京都府) 1933

注5　『京都府遺跡地図』による。

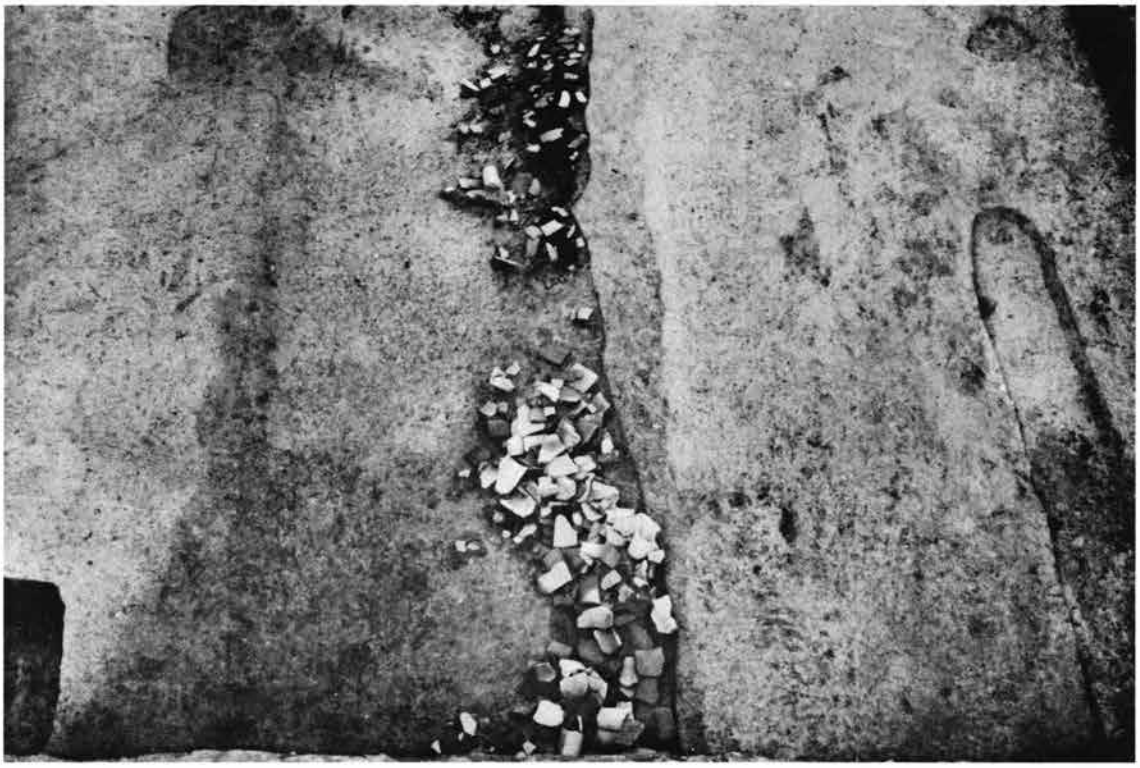
注6　辻本和美「吐師山丘陵遺跡試掘調査概報」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集　木津町教育委員会) 1980

図　　版

(1) 調査地近景（南東から）



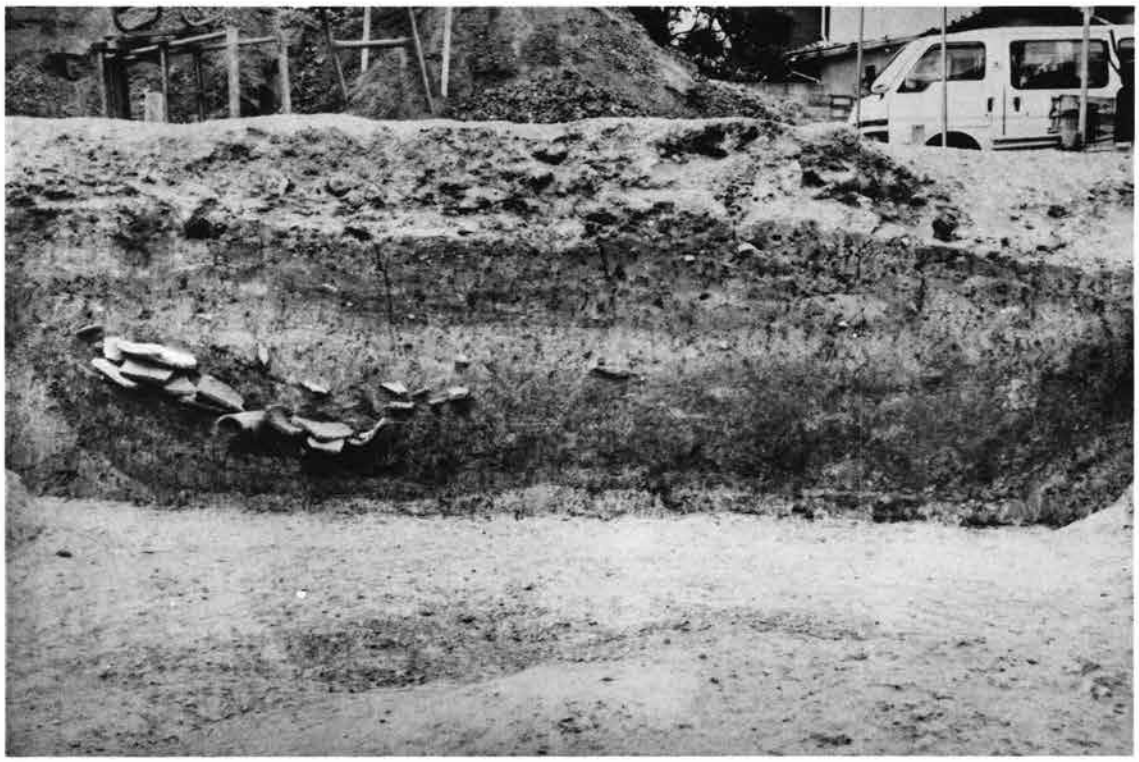
(2) SD14001検出状況（西から）



(1) SD14001瓦堆積状況（西から）

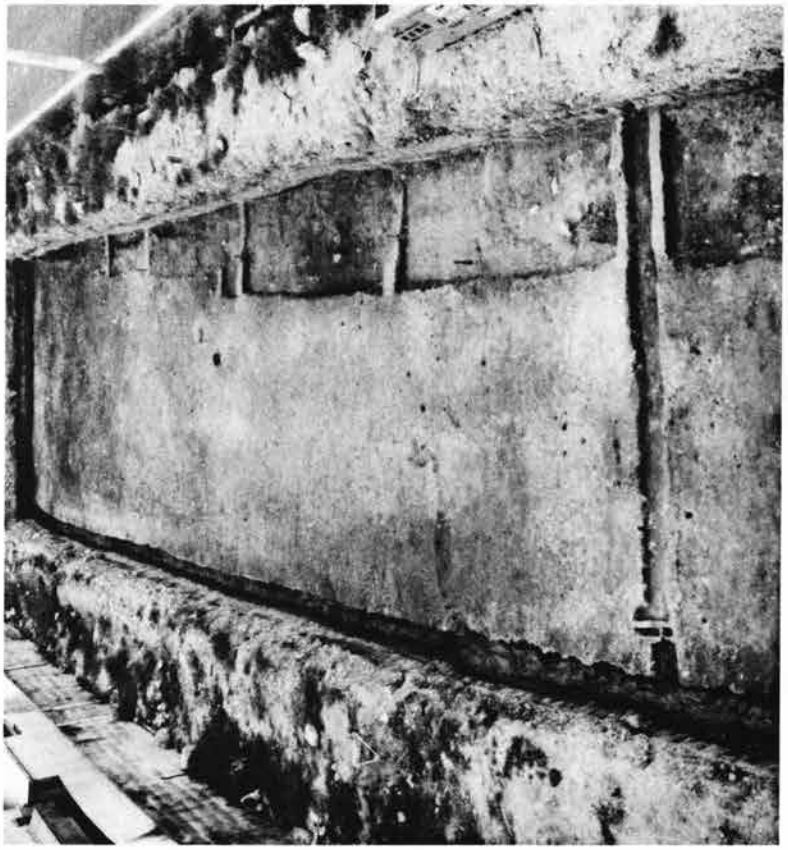
(2) SD14001軒平瓦出土状況（西から）

(1) トレンチ全景（東から）

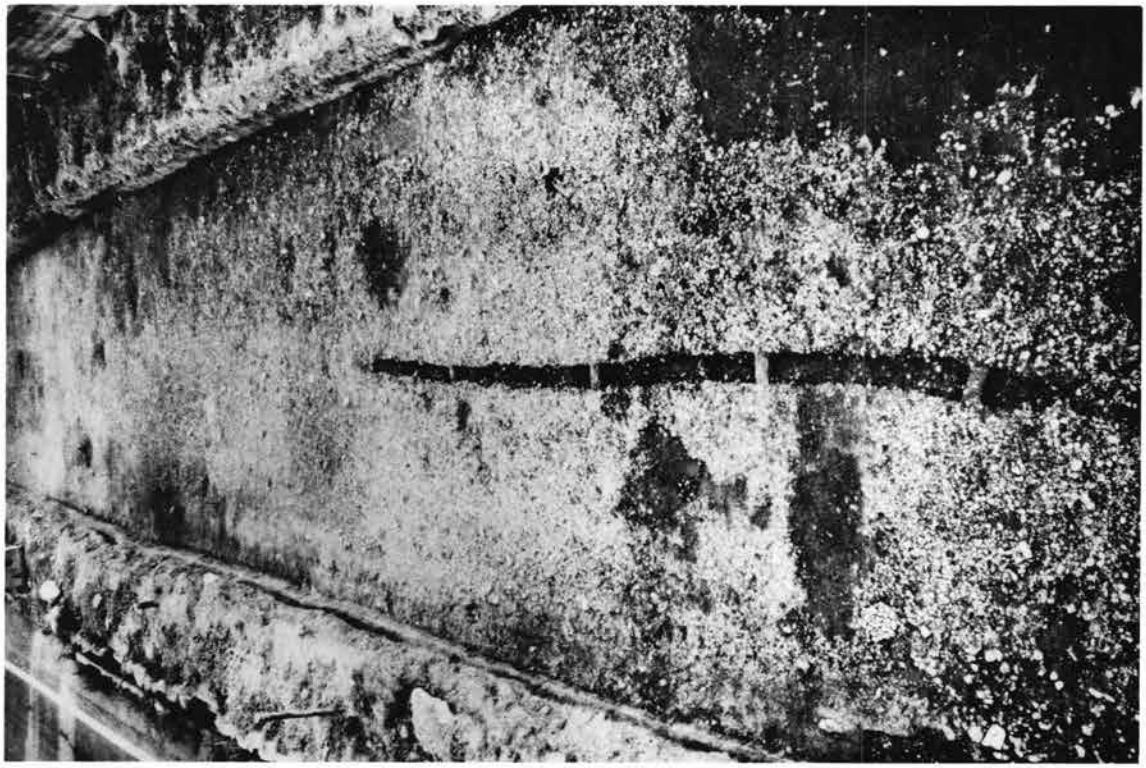


(2) SD14001東断面（東から）

出土遺物　1・2，軒平瓦　3，須恵器杯　4，ふいご羽口　5～9，鴟尾片

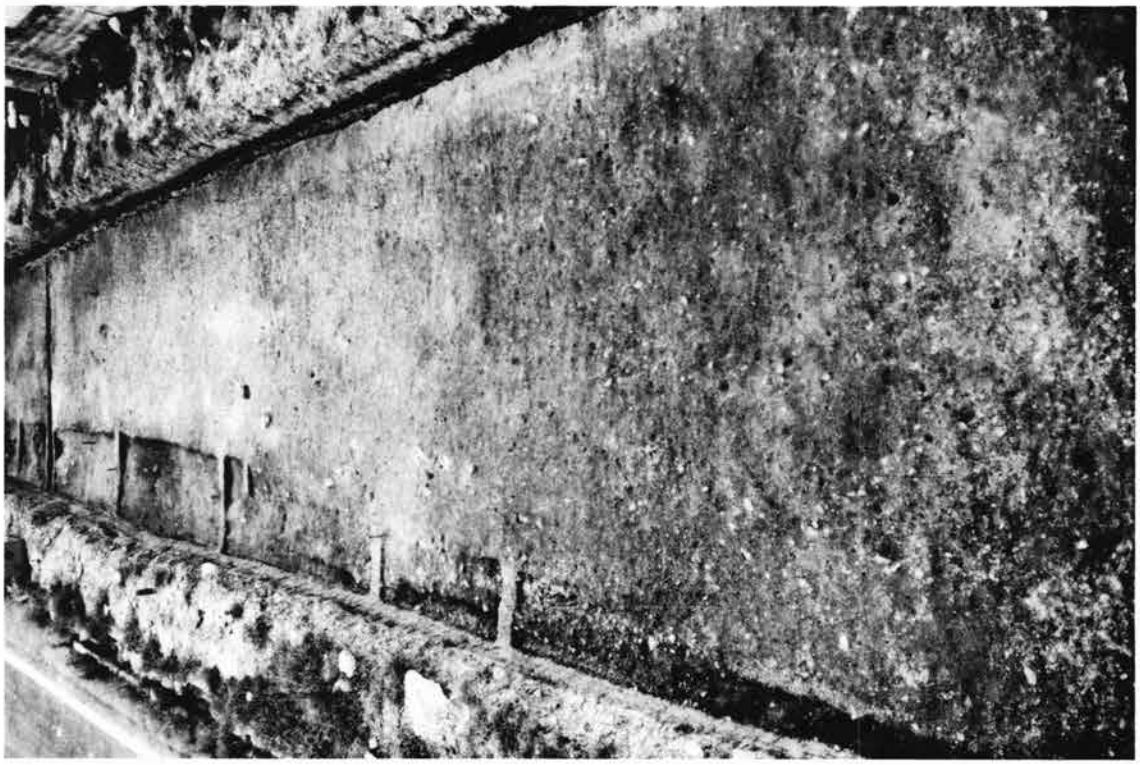


(1) 南トレンチ完掘状況（南から）



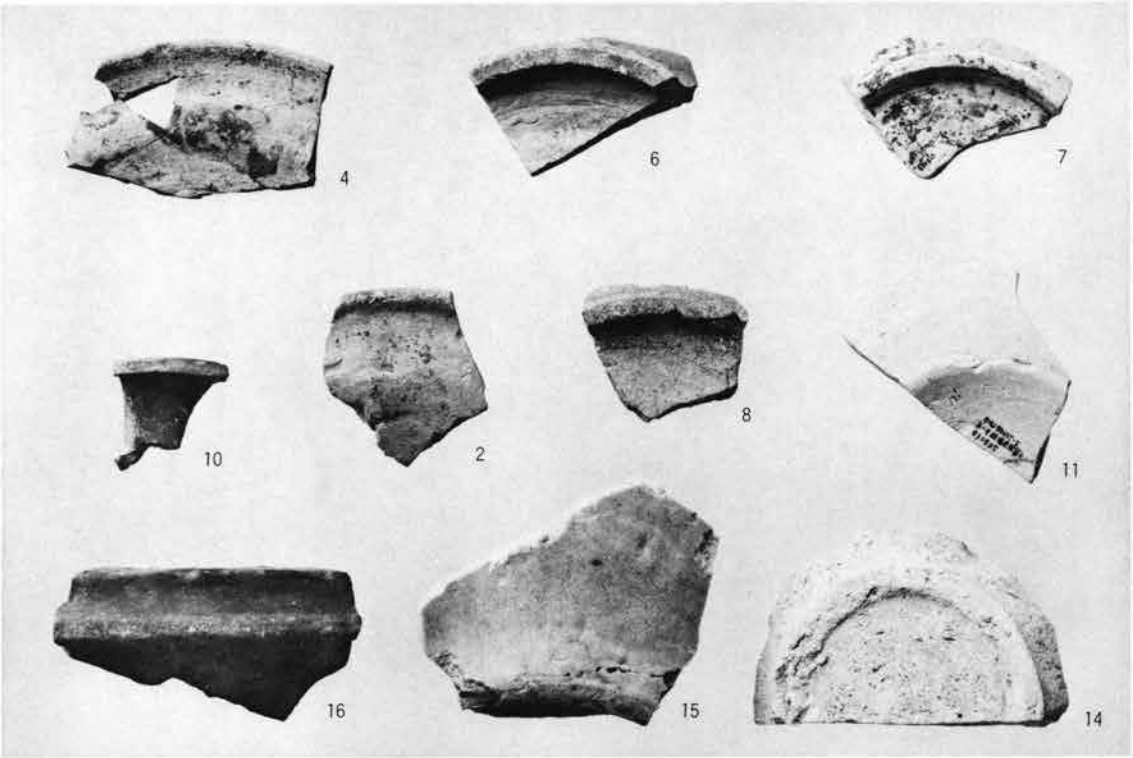
(2) 石溜りSX14105・溝SD14101検出状況（南トレンチ）（北から）

(2) 溝SD14103近景（北から）

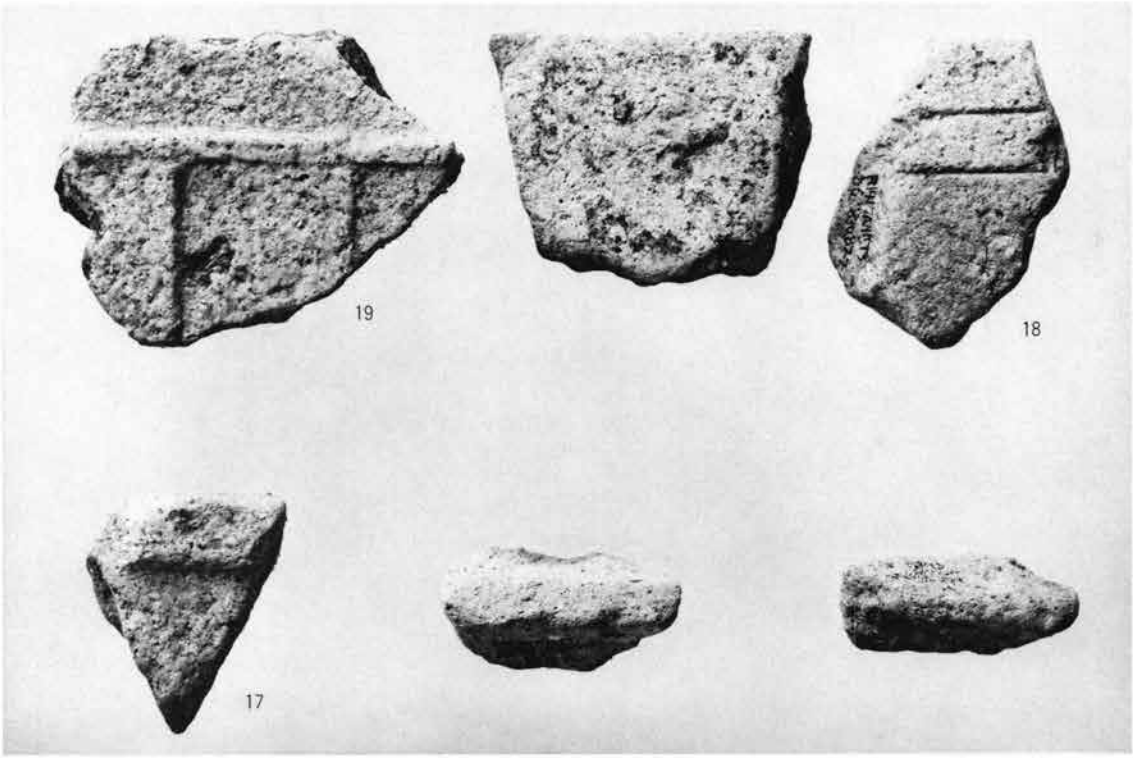


(1) 溝SD14103（南トレンチ）（北から）

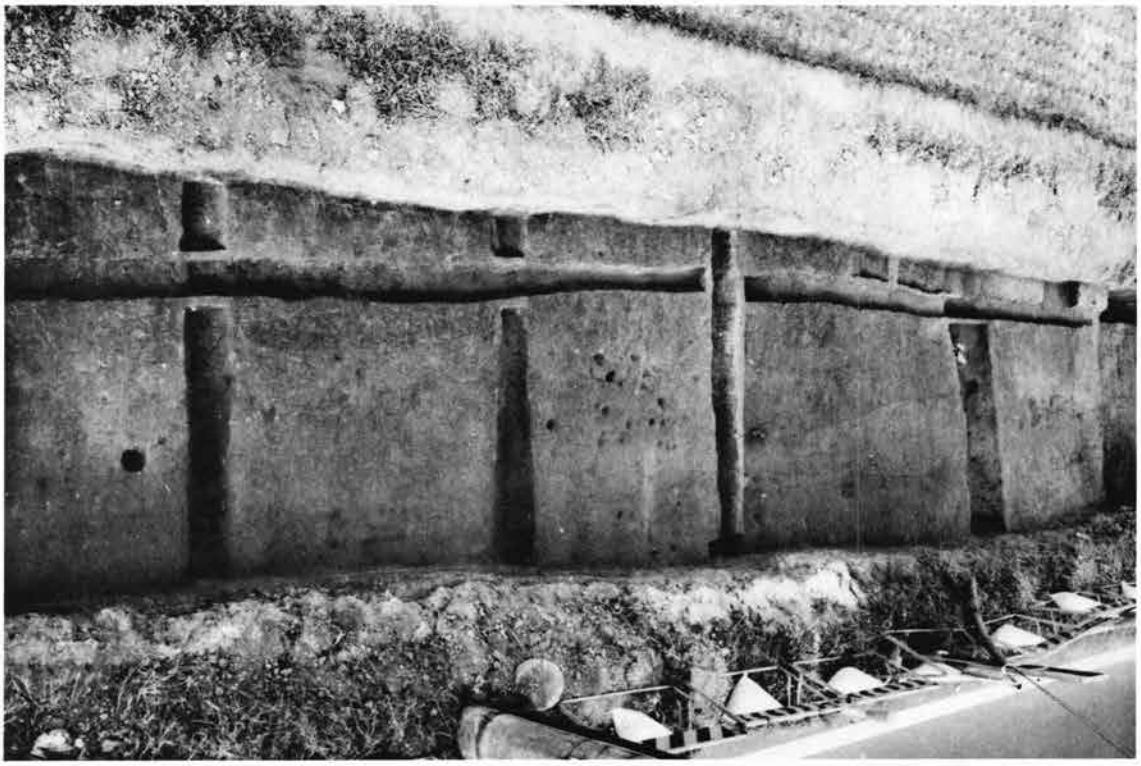
出土遺物



(1)　出土遺物



(2)　出土遺物

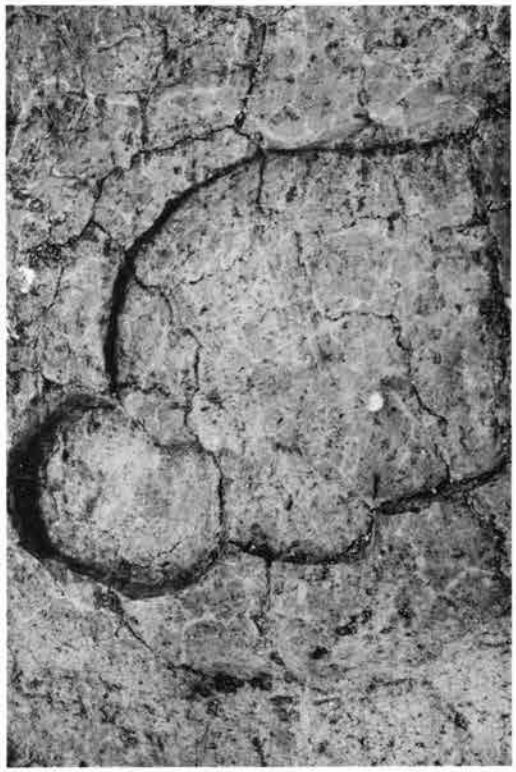


(1) 上層遺構検出状況（西から）

(2) 溝状遺構（中世）検出状況

(1) 下層遺構検出状況（東から）

(2) 掘立柱建物跡（SB14801）検出状況（西から）



(1) 柱穴（P3）検出状況

(2) 柱穴（P5）検出状況

(3) 柱穴（P7）検出状況

(4) 柱穴（P9）検出状況

(1) 溝（SD14801）および南壁断面土層堆積状況

(2) 南西隅南壁（H）土層堆積状況

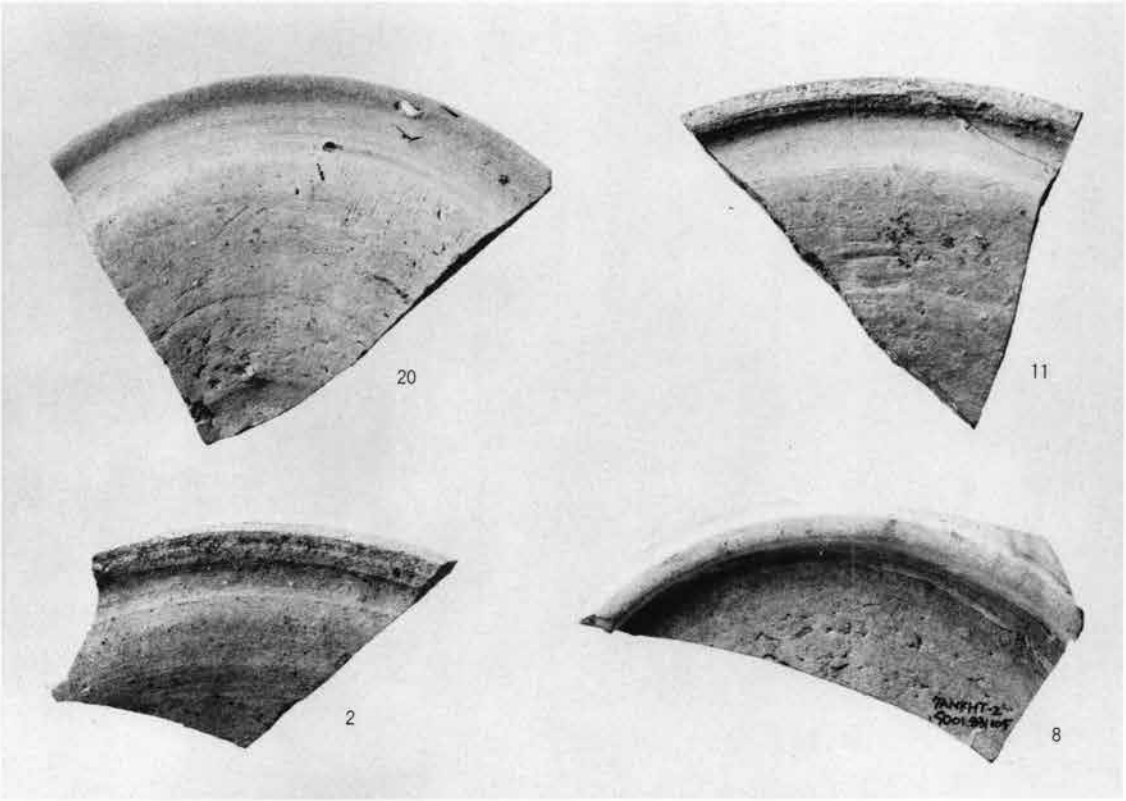
17

19

25

22

14



出土遺物

図版第14　木津川河床遺跡

(1) 調査地遠景（男山山頂から）

(2) 調査地近景（西から）

図版第15　木津川河床遺跡

(1)　発掘区掘削作業（東から）

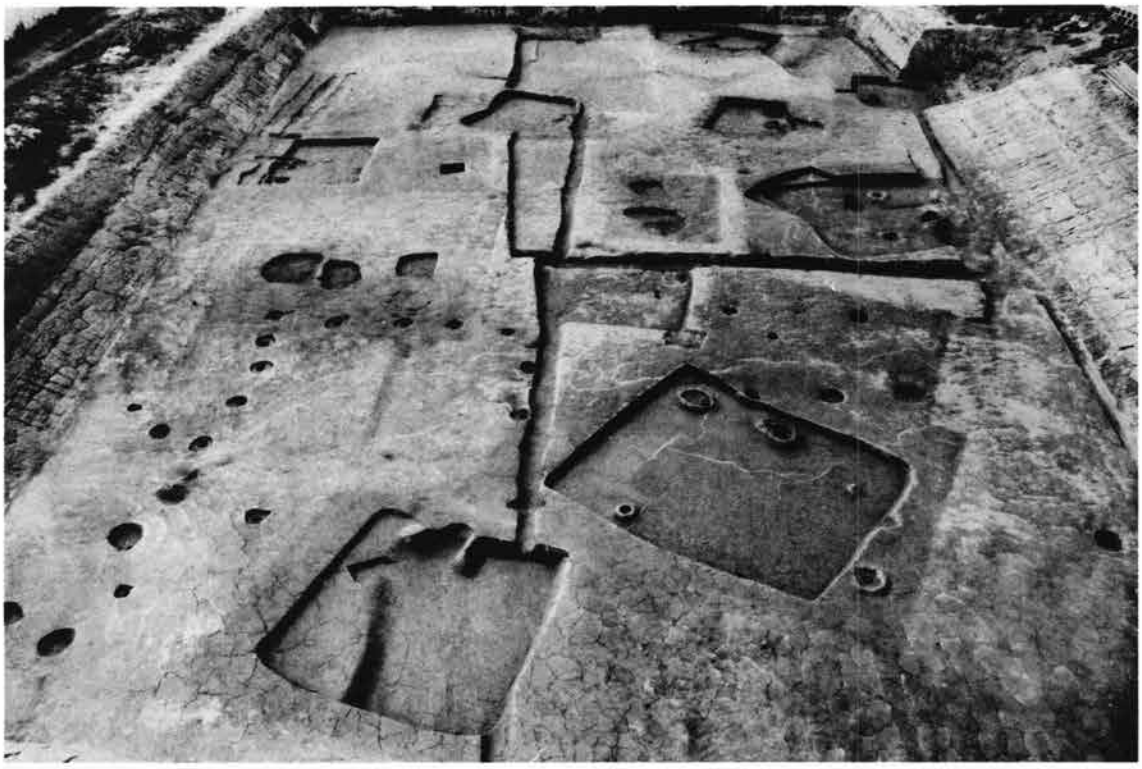
(2)　北壁土層断面（西側隅）

(3)　北壁土層断面

(4)　東壁土層断面

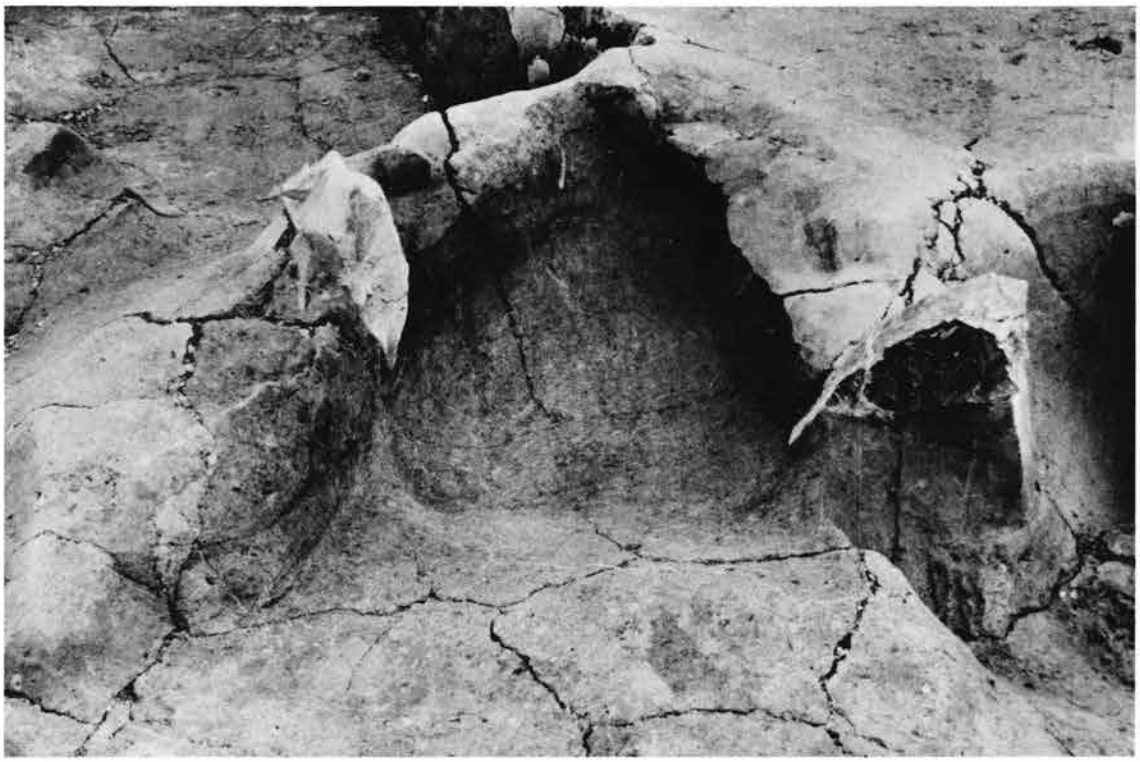
図版第16　木津川河床遺跡

(1) 発掘区全景（西から）



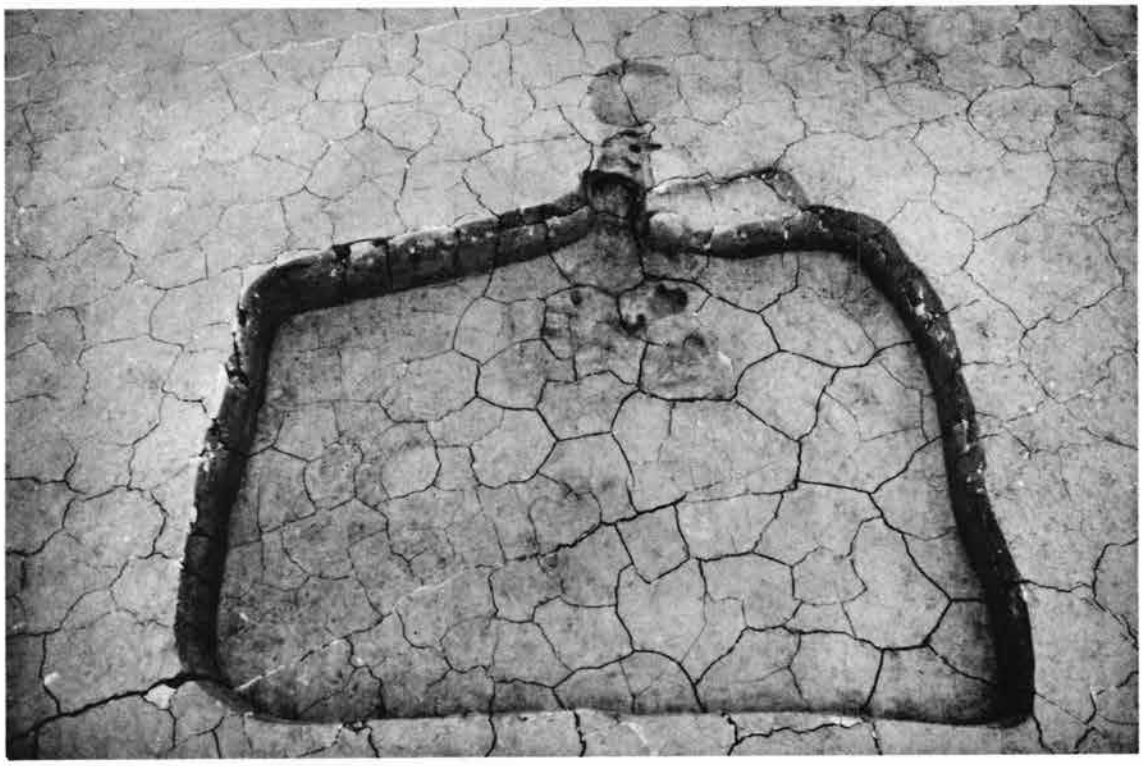
(2) 発掘区全景（東から）

(1) 竪穴式住居跡（SB01・SB02）



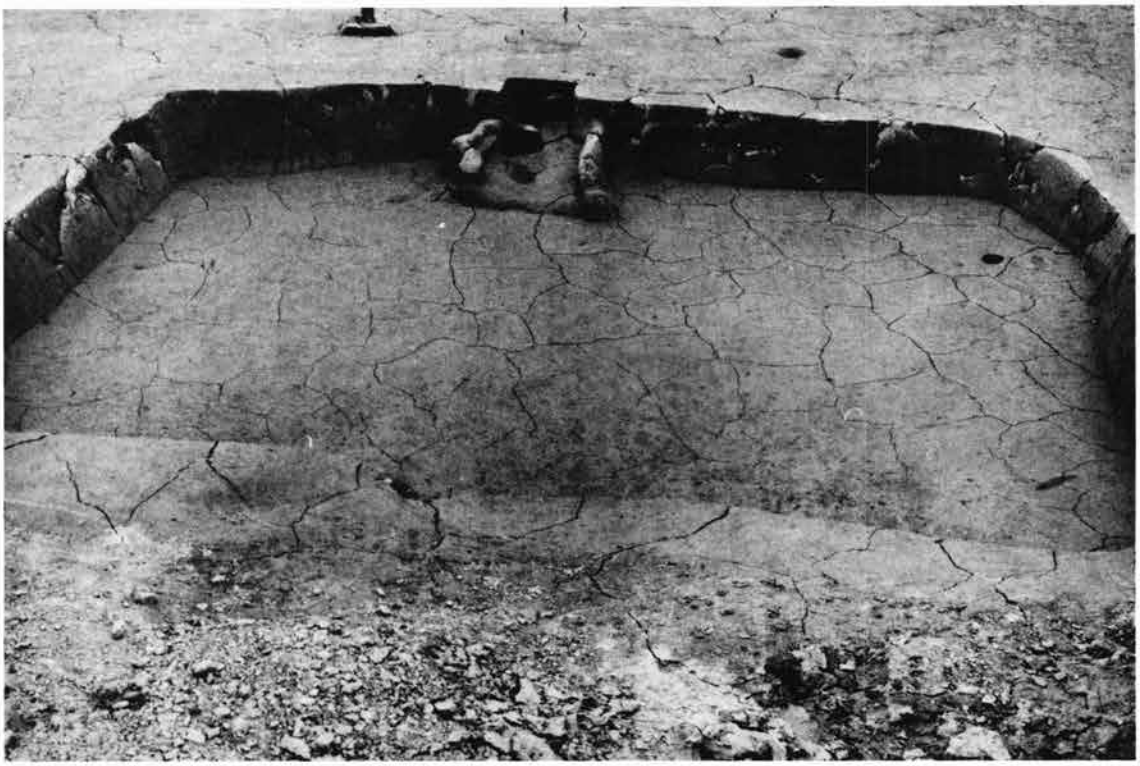
(2) SB01かまど部

(1) 竪穴式住居跡（SB03）

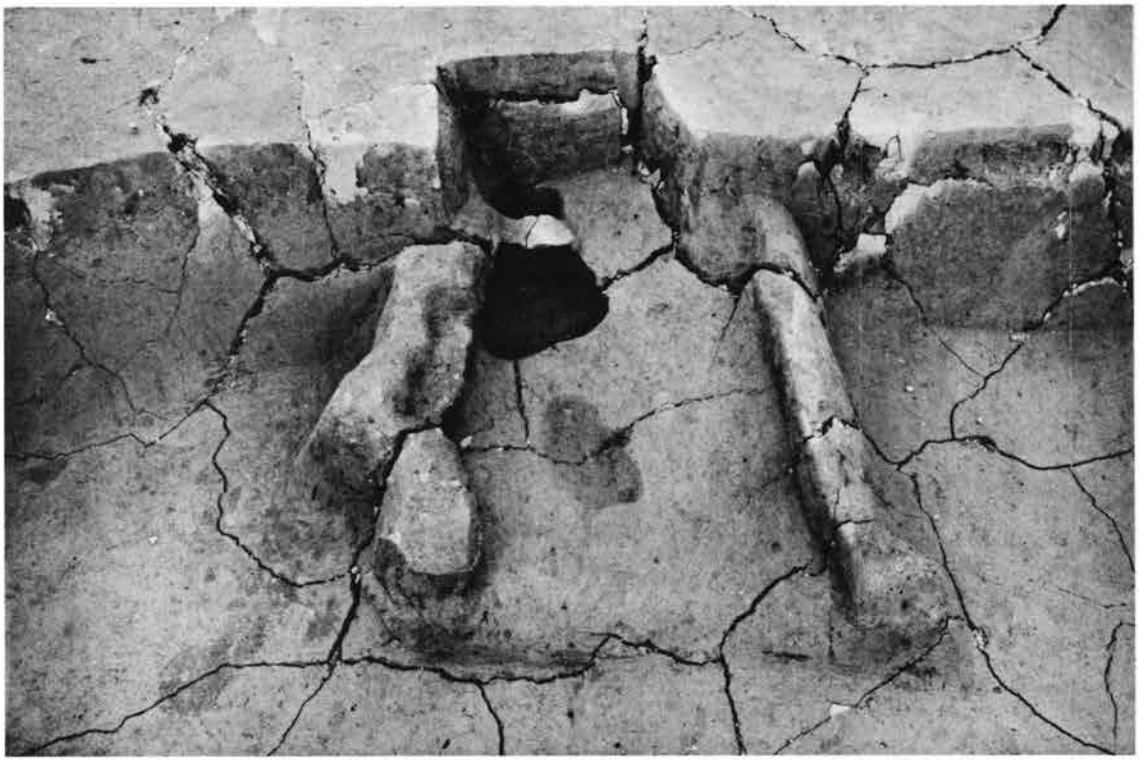


(2) 竪穴式住居跡（SB04）

図版第19　木津川河床遺跡

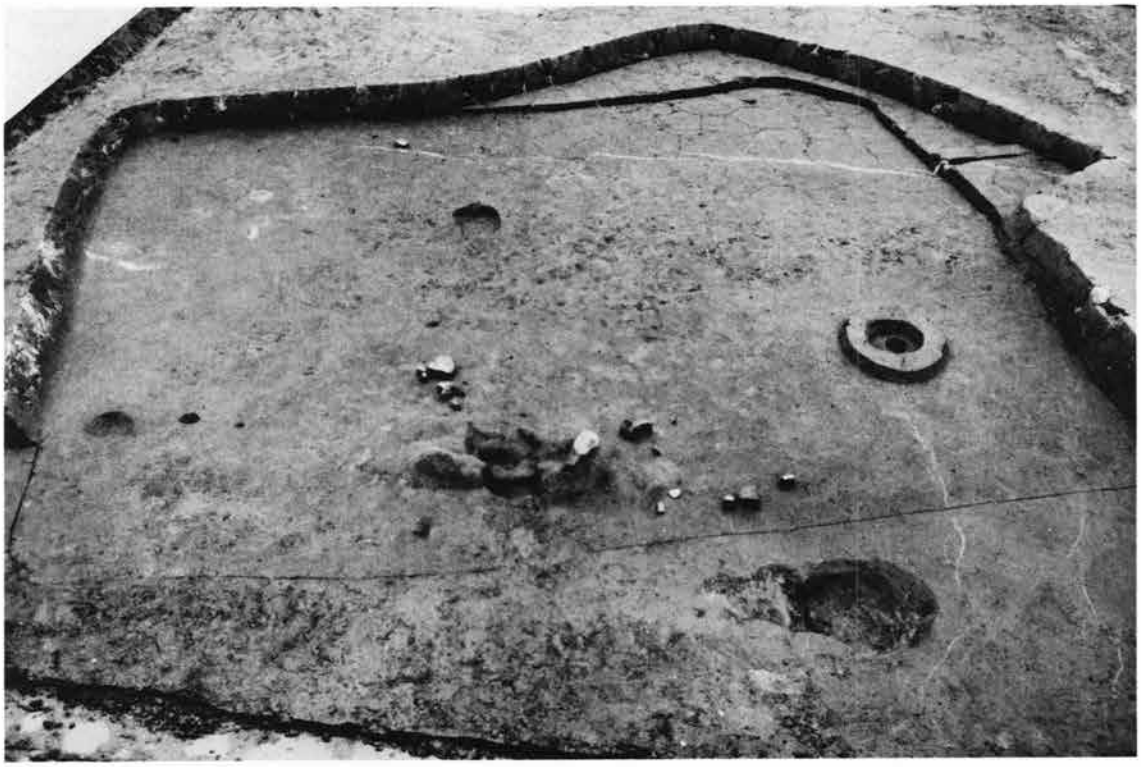


(1) 竪穴式住居跡（SB05）

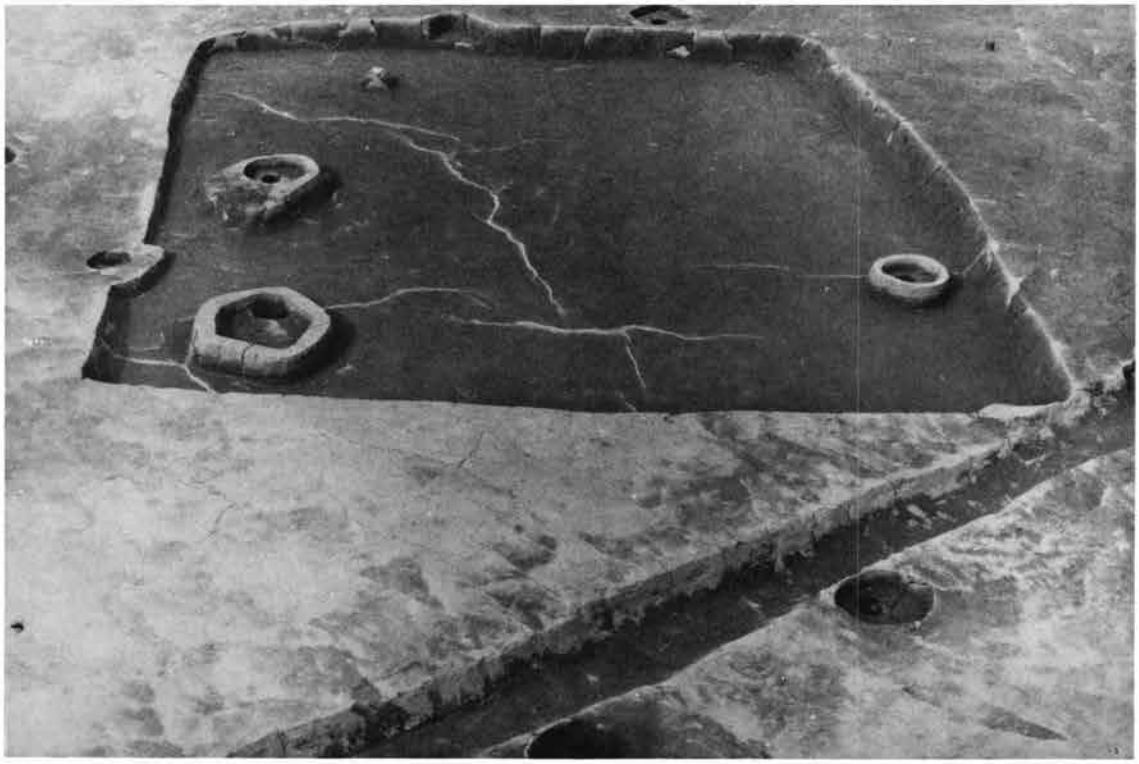


(2) SB05かまど部

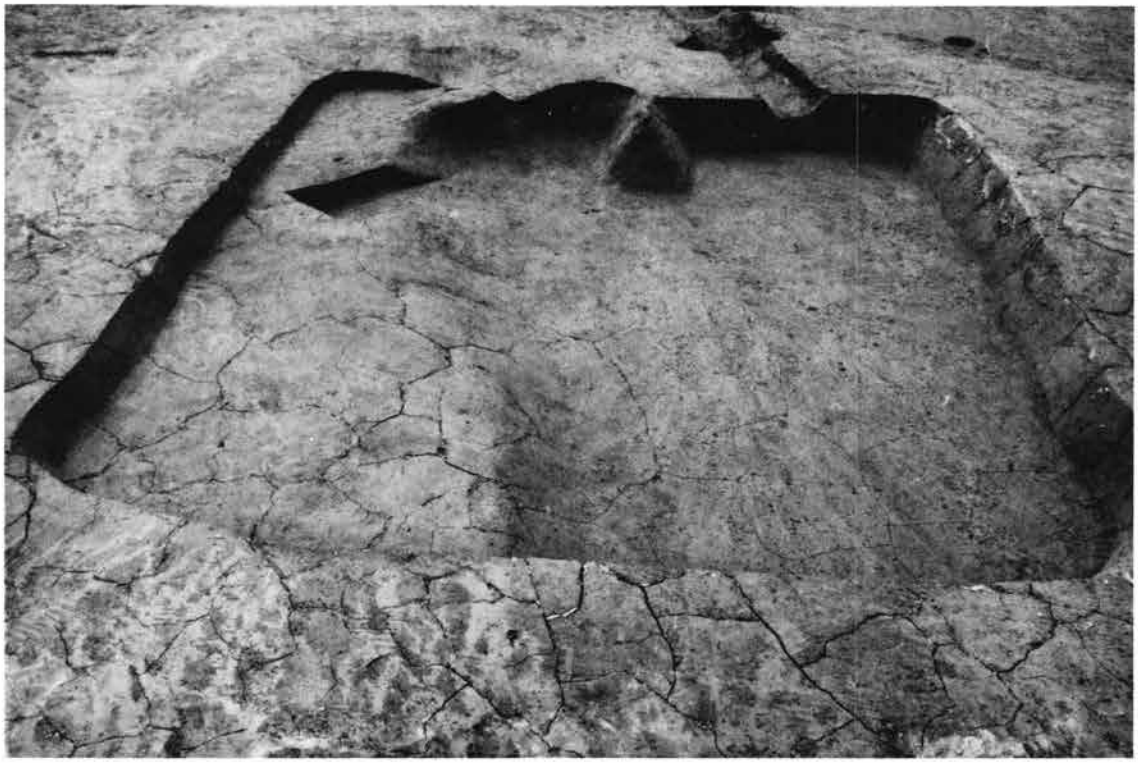
(1) 竪穴式住居跡（SB06）



(2) 竪穴式住居跡（SB07・SB08）



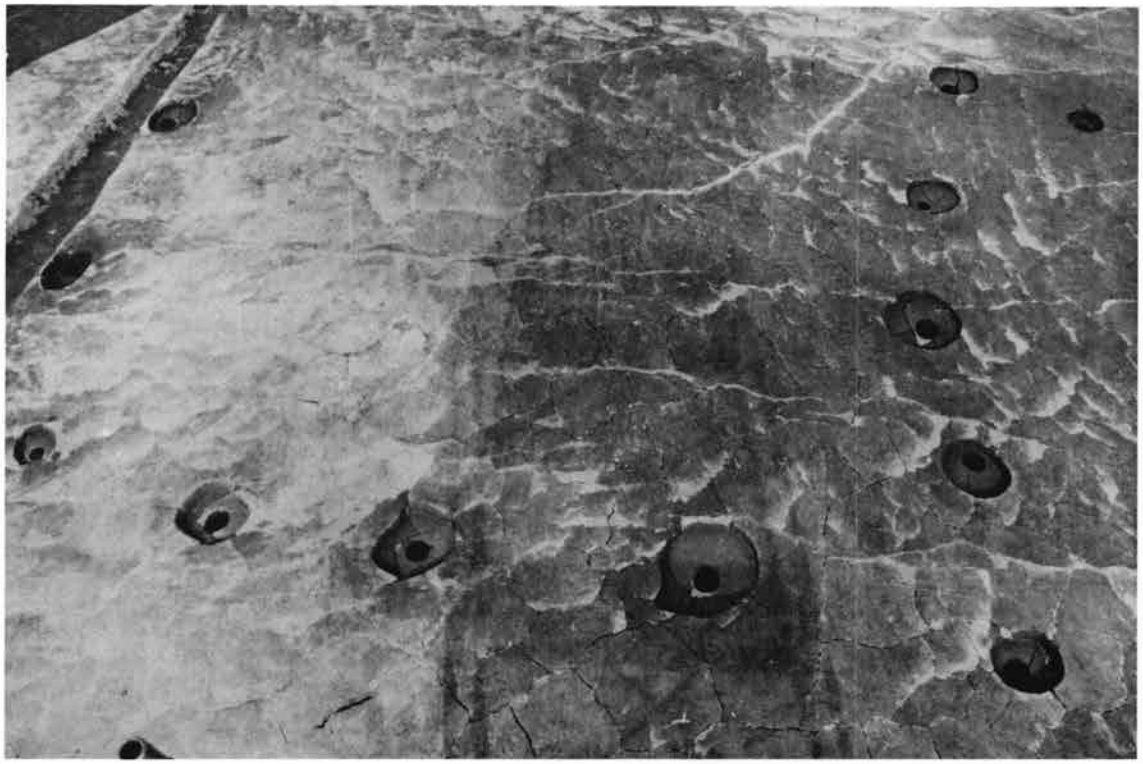
(1) 竪穴式住居跡（SB09）



(2) 竪穴式住居跡（SB10）

図版第22　木津川河床遺跡

(1) 掘立柱建物跡（SB11）



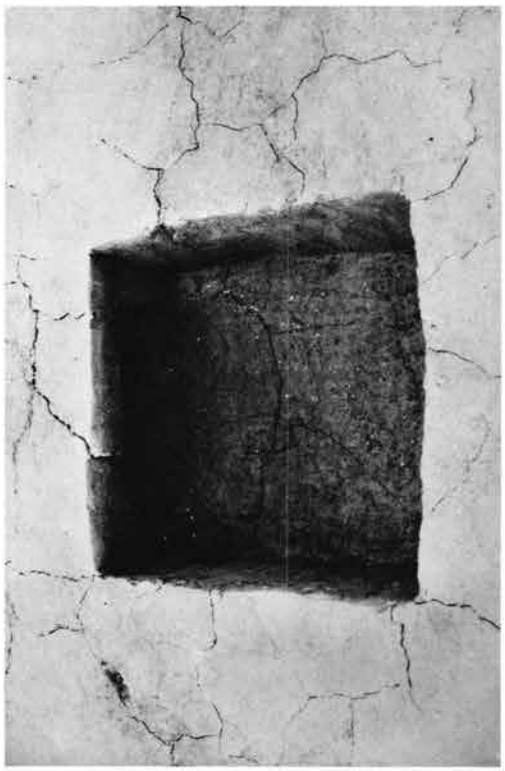
(2) 柵　列（SA01）

図版第23　木津川河床遺跡

(1) 土　坑（SK01）

(2) 土　坑（SK02）

(3) 土　坑（奥よりSK06・07・08）



(4) 土　坑（SK09）

(1) 溝状遺構（左からSD05・06・07）

(2) 土器溜り（SX01）検出状況（南から）

(1) 土器溜り（SX01）検出状況（西から）

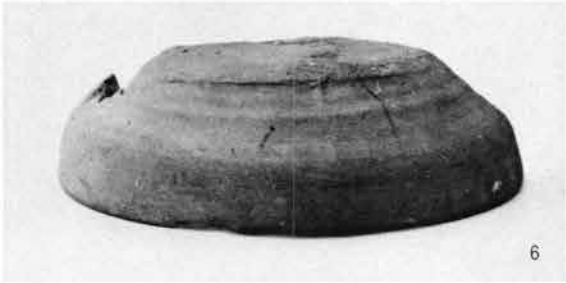
(2) 土器溜り（SX02）検出状況（北から）

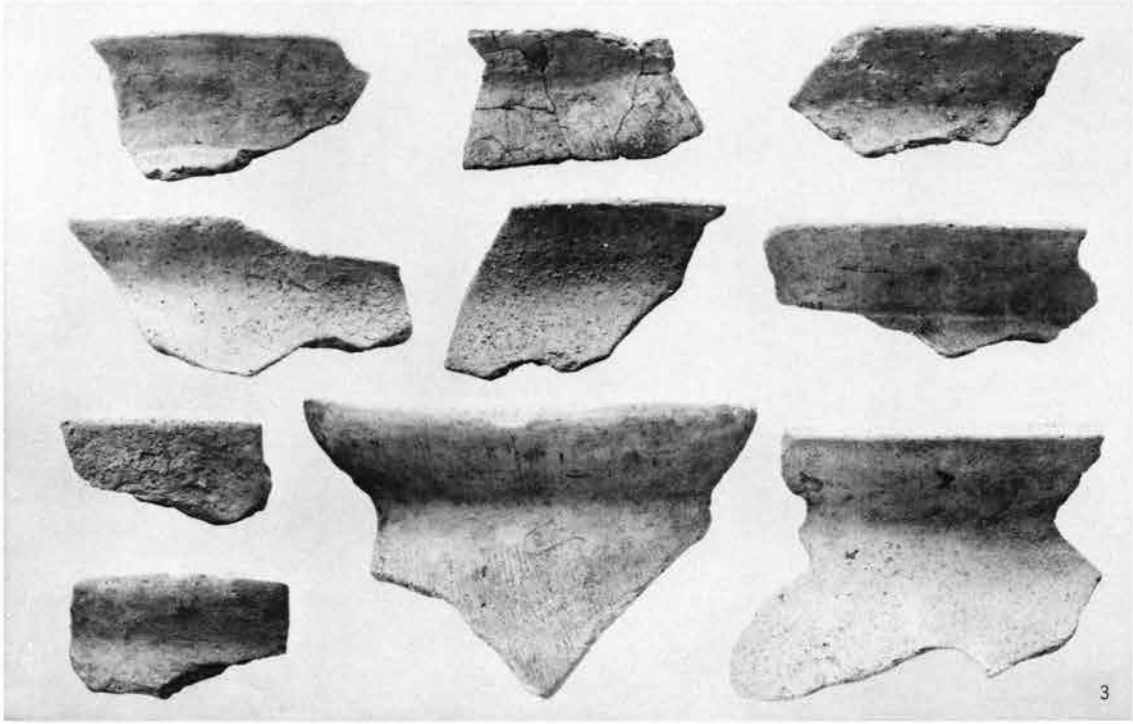
(1) 土器溜り（SX01）部分①

(2) 土器溜り（SX01）部分②

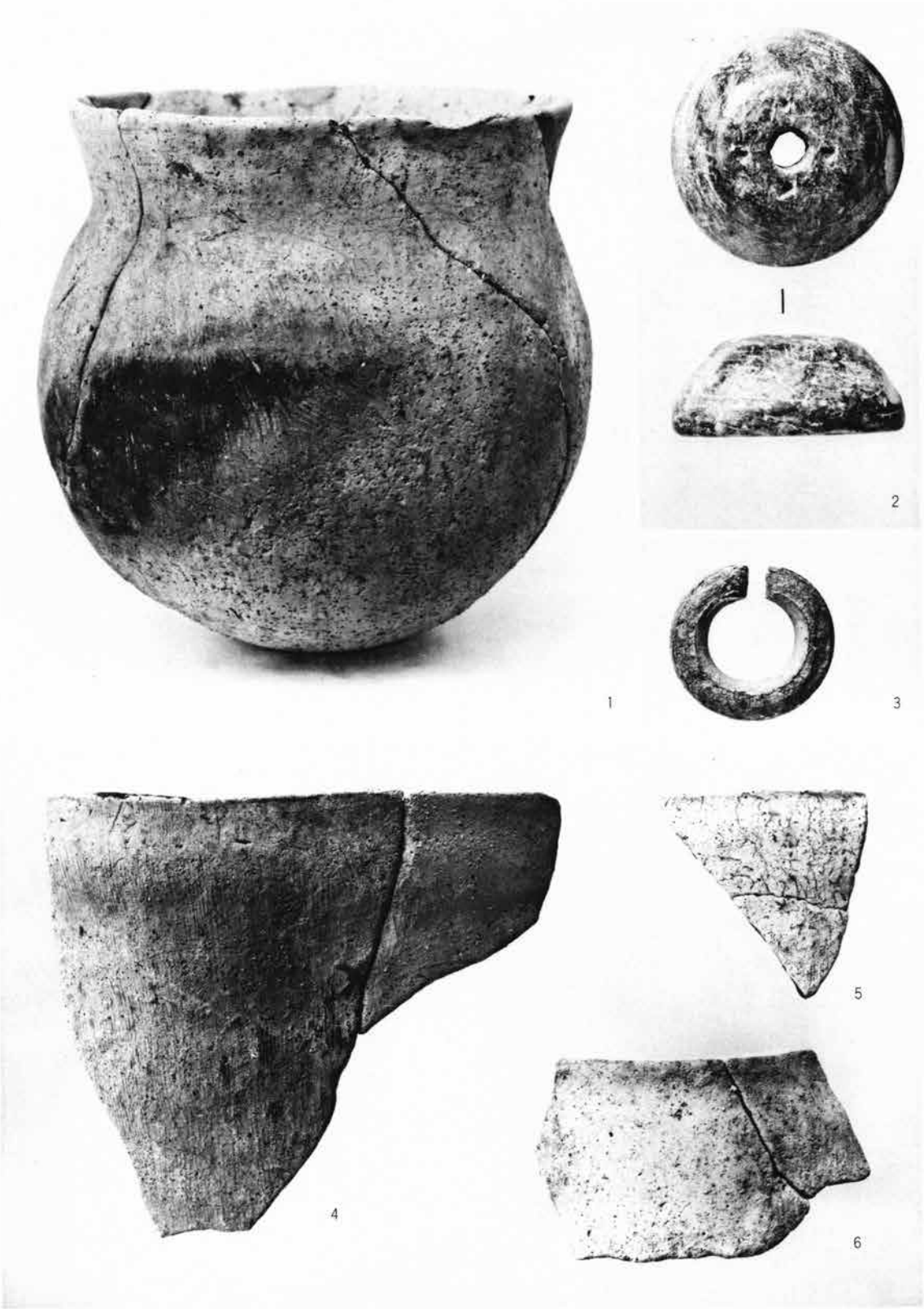
(3) 土器溜り（SX01）部分③

(4) 土器溜り（SX01）部分④



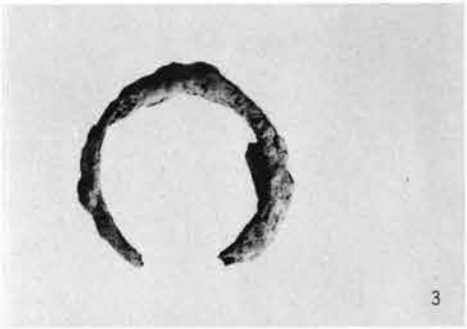


竪穴式住居跡内出土遺物　1～3，土師器甕　4 ～6，須恵器杯蓋



竪穴式住居跡内出土遺物

1．土師器甕　2．紡錘車　3．耳環　4・5．甑　6．無頸壺



竪穴式住居跡内・(焼)土坑内出土遺物

1，須恵器壺　2，須恵器杯　3，鉄環　4，須恵器高杯　5，須恵器杯蓋　6，土師器甕

(4・5は8号住居跡内焼土坑より　6は焼土坑SK11より)

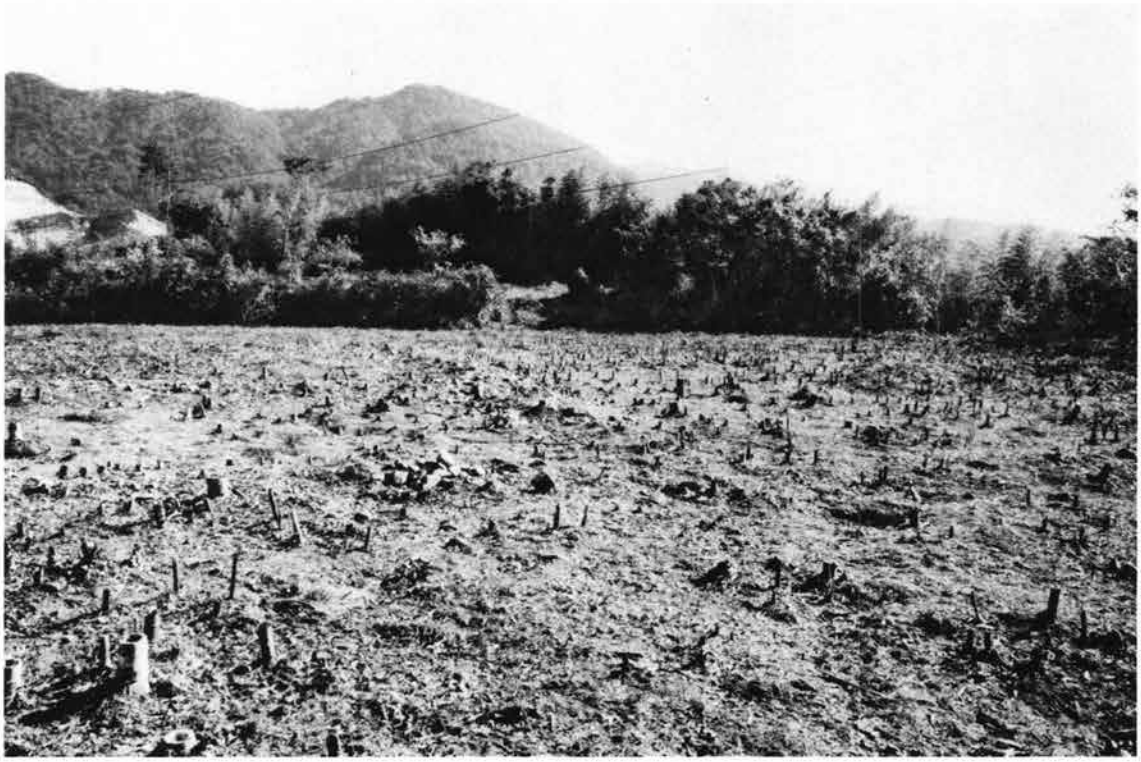
竪穴式住居跡内・土器溜り内出土遺物
1，土師器壺（8号住居跡より）　2～4，土師器甕　5，高杯　6，器台

土器溜り内出土遺物

1・2，土師器壺　3・4，器台　5・6，小型丸底壺

図版第32　隼上り遺跡

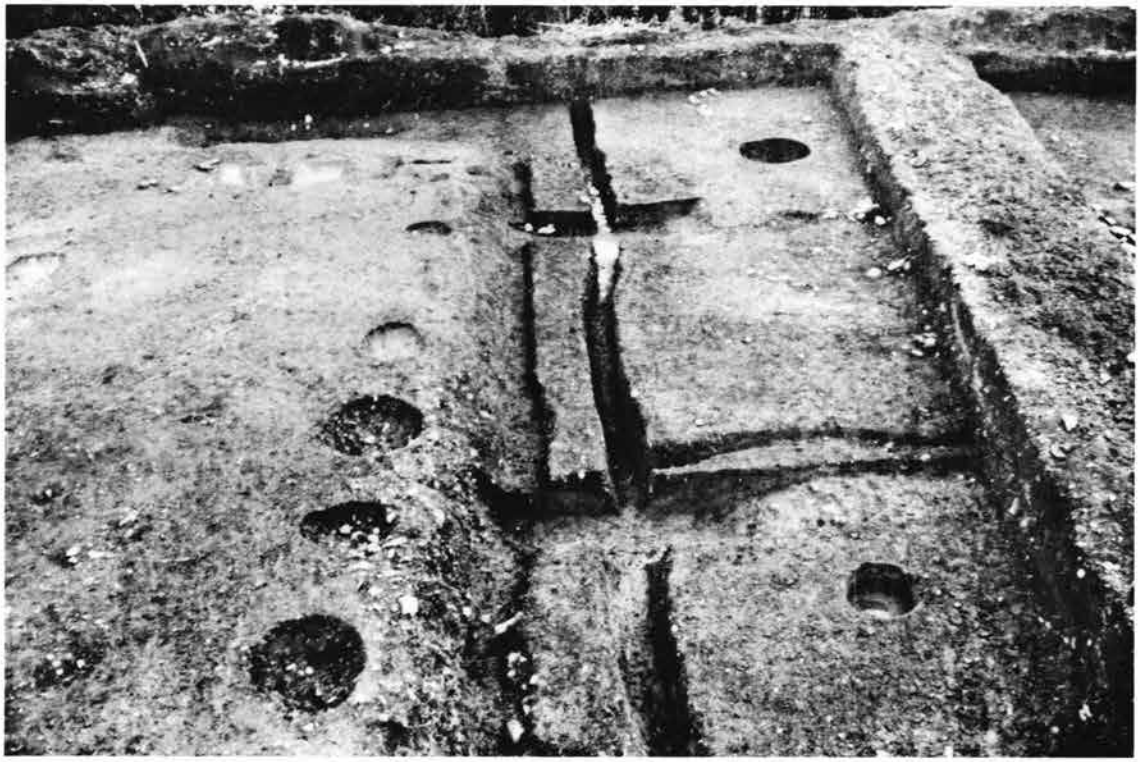
(1)　調査地遠景（隼上り瓦窯跡から）



(2)　調査地全景（西から）

図版第33　隼上り遺跡

(1) CⅣ区近世遺構全景（東から）



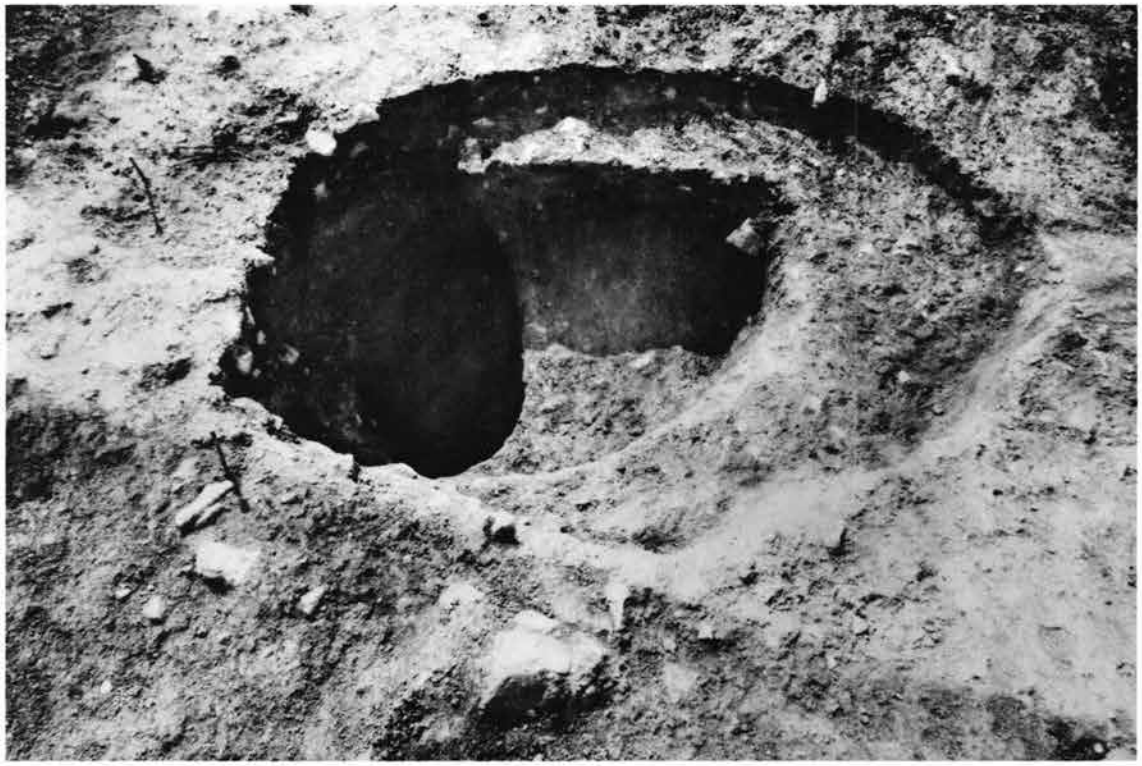
(2) DⅤ区近世遺構全景（北から）

図版第34　集上り遺跡

(1) 近世墓

(2) 近世墓礫検出状況

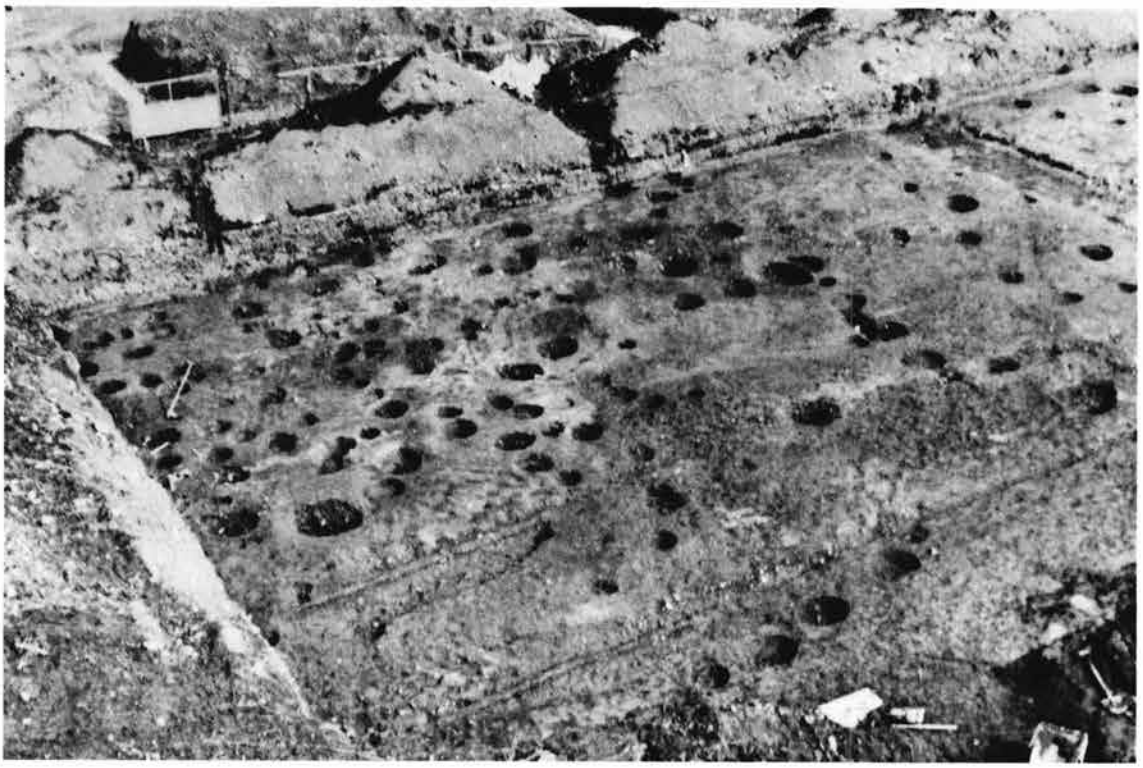
図版第35　隼上り遺跡



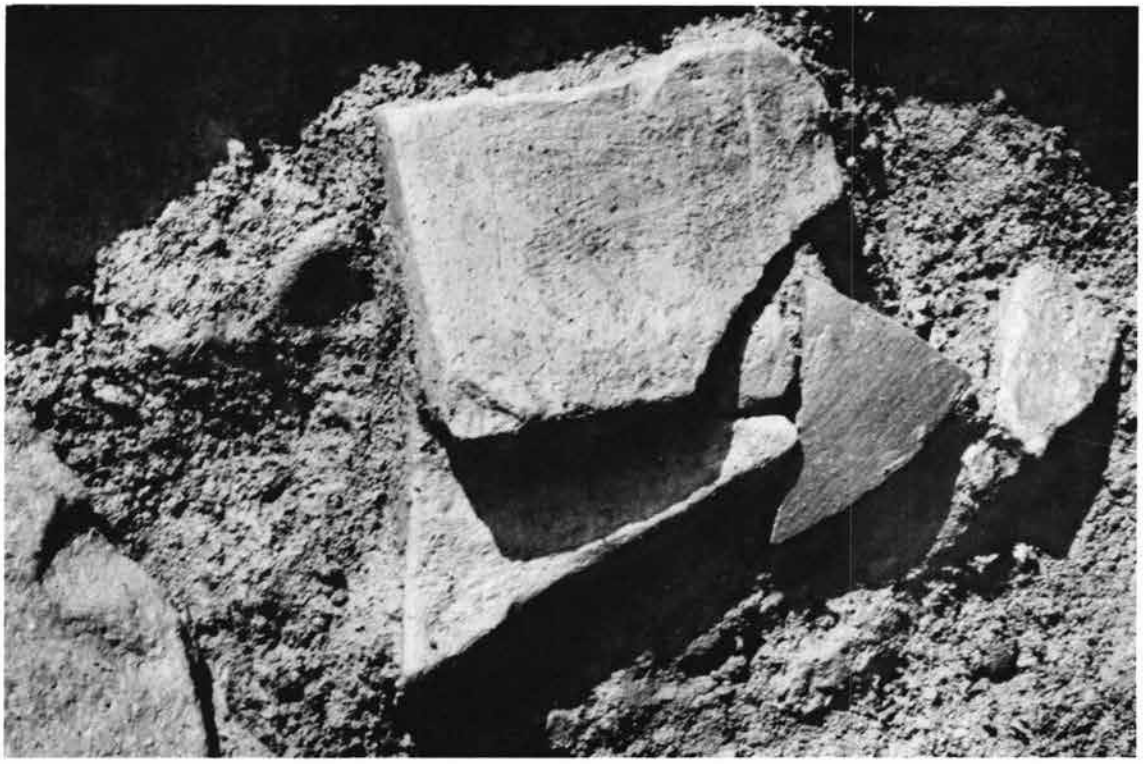
(1)　中世土坑完掘状況

(2)　中世土坑遺物出土状況

図版第36　隼上り遺跡



(1) BV・Ⅵ・Ⅶ区柱穴群（南東から）

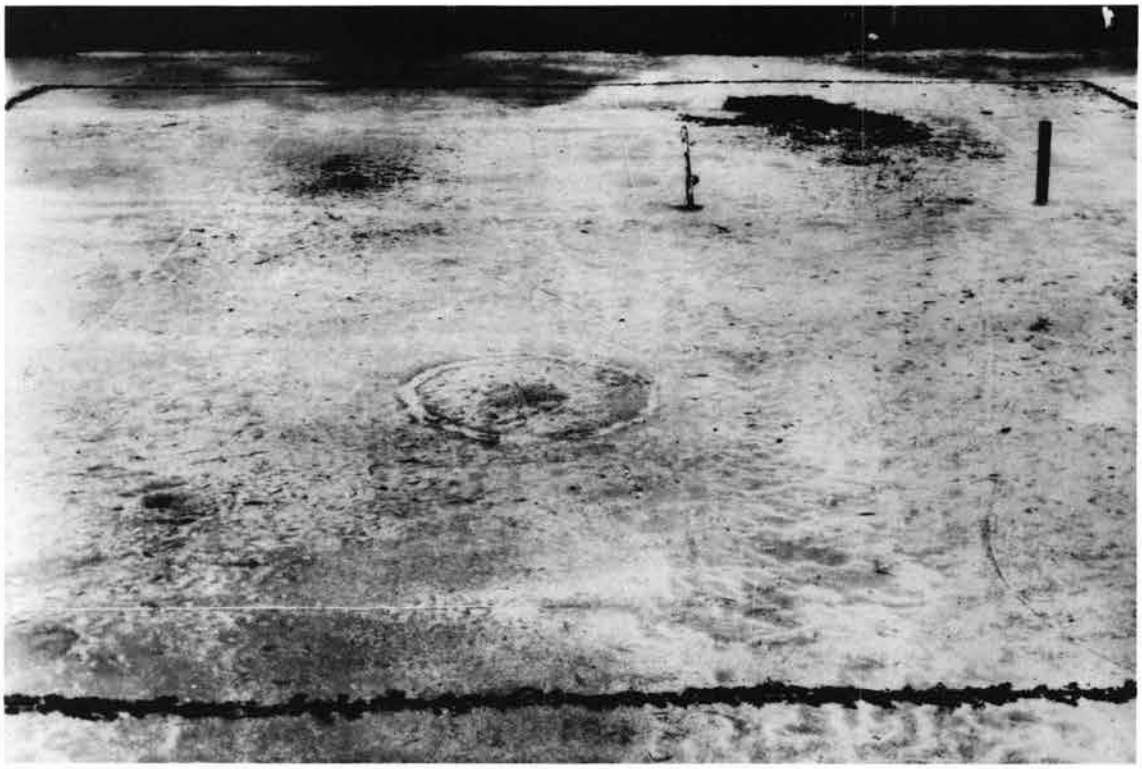


(2) 瓦出土状況

図版第37　平安京跡

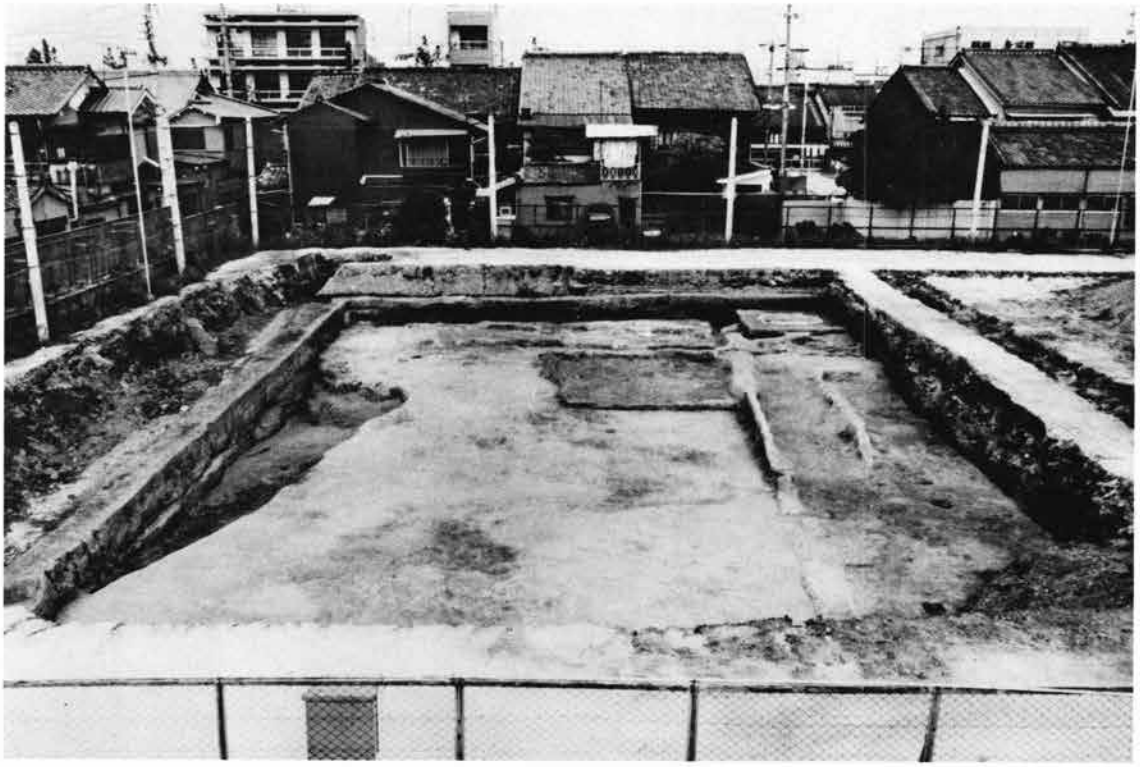
(1) 発掘調査地全景（東南東から）

(2) 発掘調査地全景（東から）

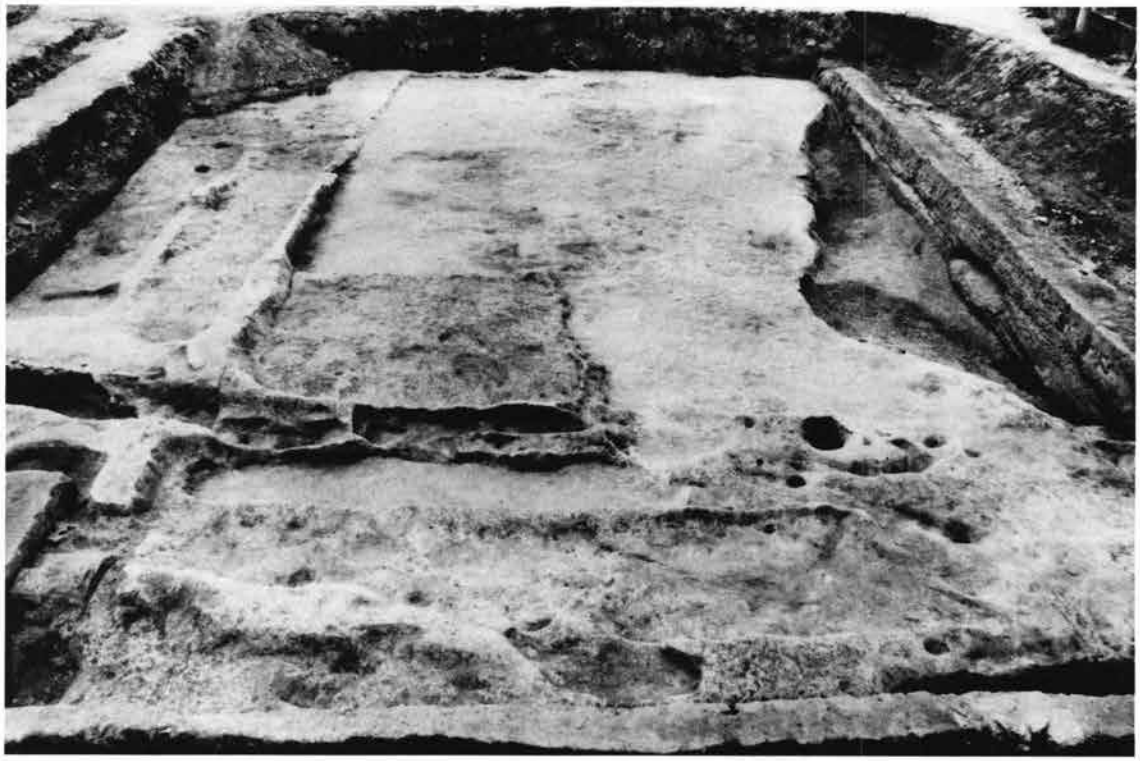


(1)　A地区発掘前の全景（南から）

(2)　A地区第1文化面全景（南から）



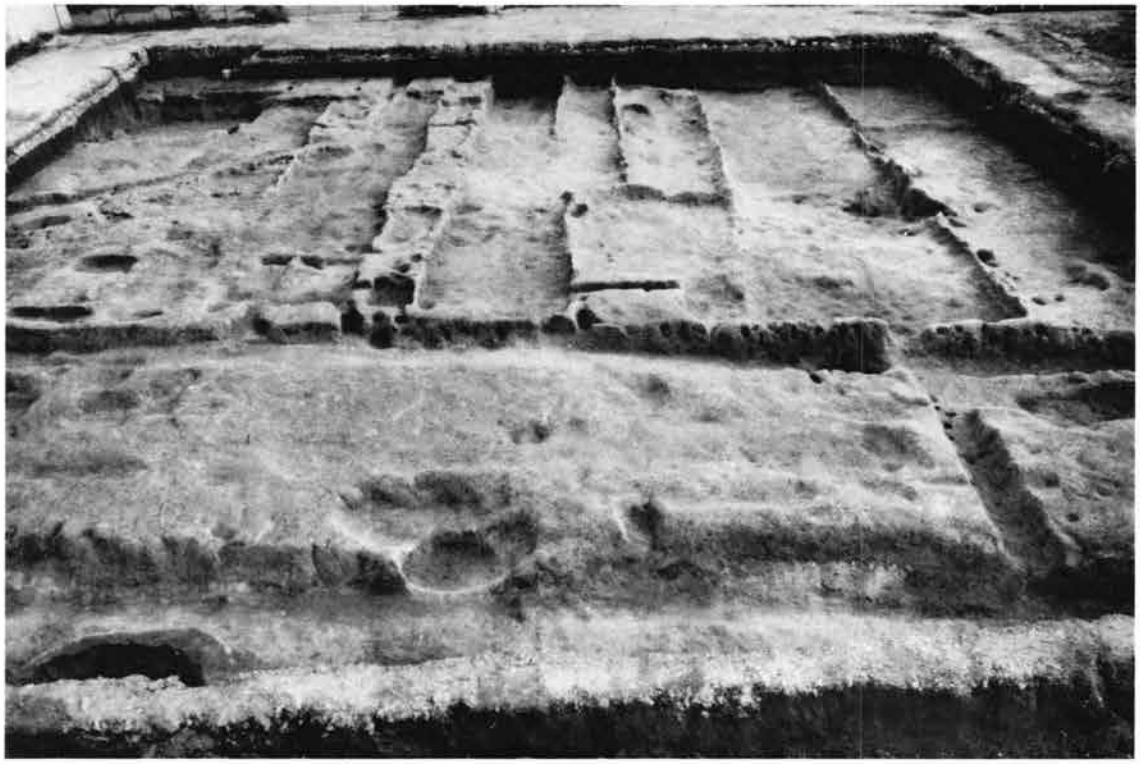
(1)　A地区完掘後の全景（南から）



(2)　A地区完掘後の全景（北から）

(1)　B地区発掘前の全景（南から）

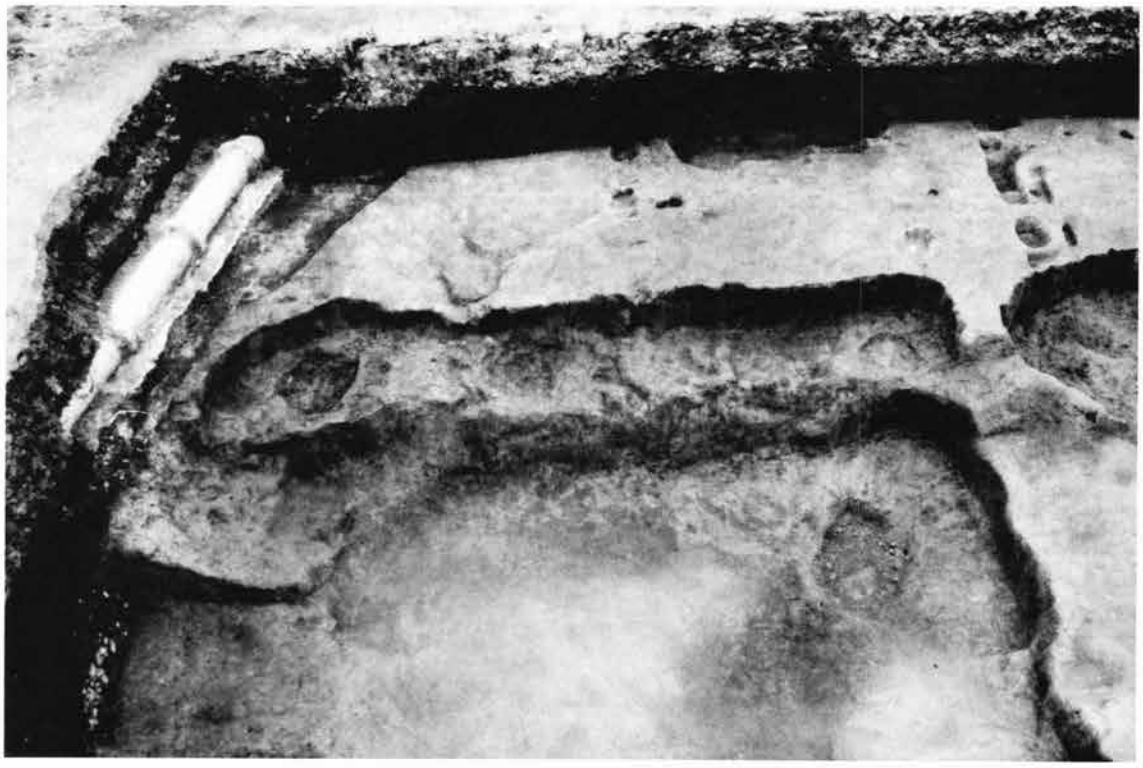
(2)　B地区完掘後の全景（南から）



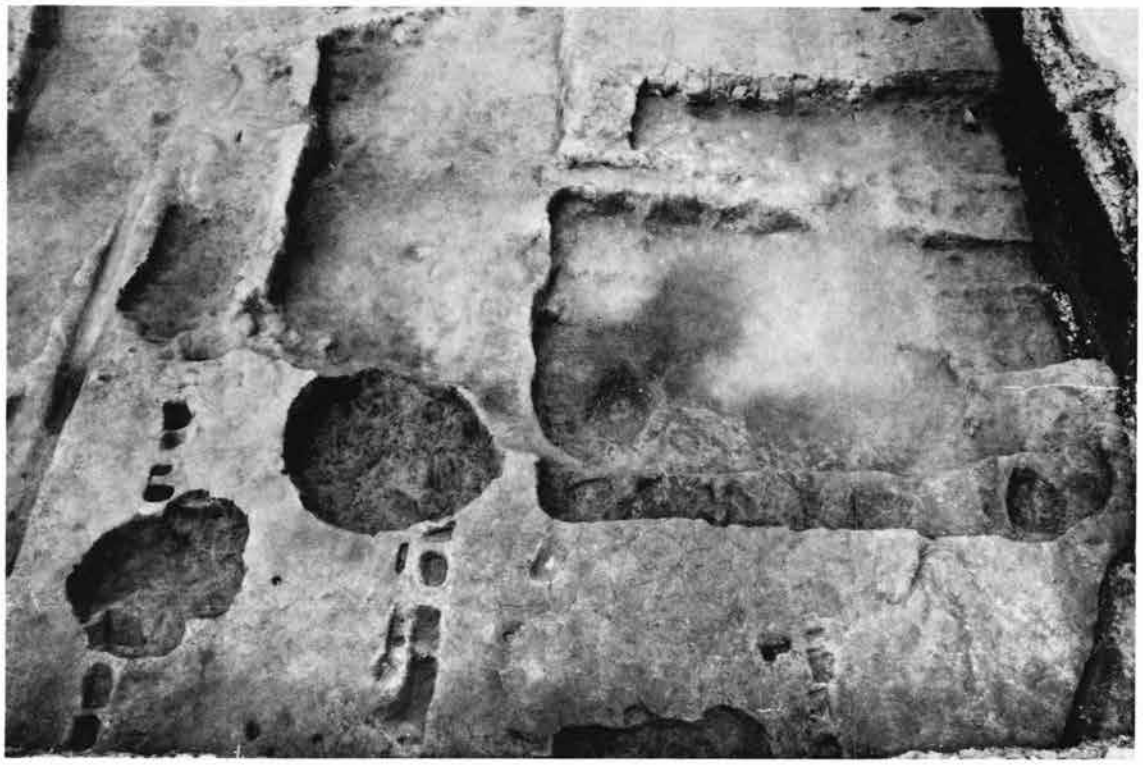
(1) B地区完掘後の全景（北から）

(2) B地区帯状遺構（東から）

図版第42　平安京跡



(1) B地区 掘り込み1（北から）



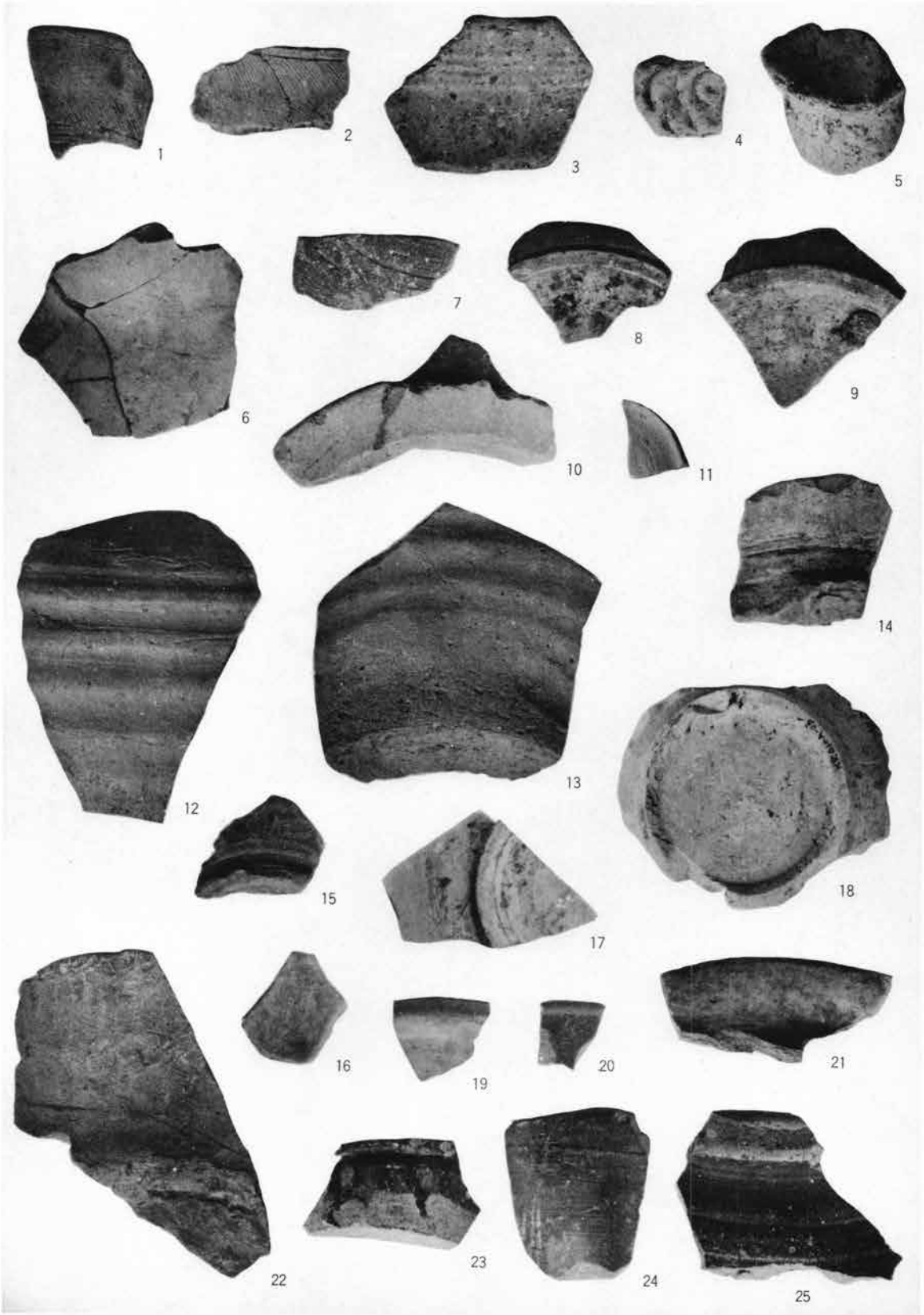
(2) B地区 各土坑及び掘り込み1（南から）

(1)　C地区 発掘前の全景（北から）

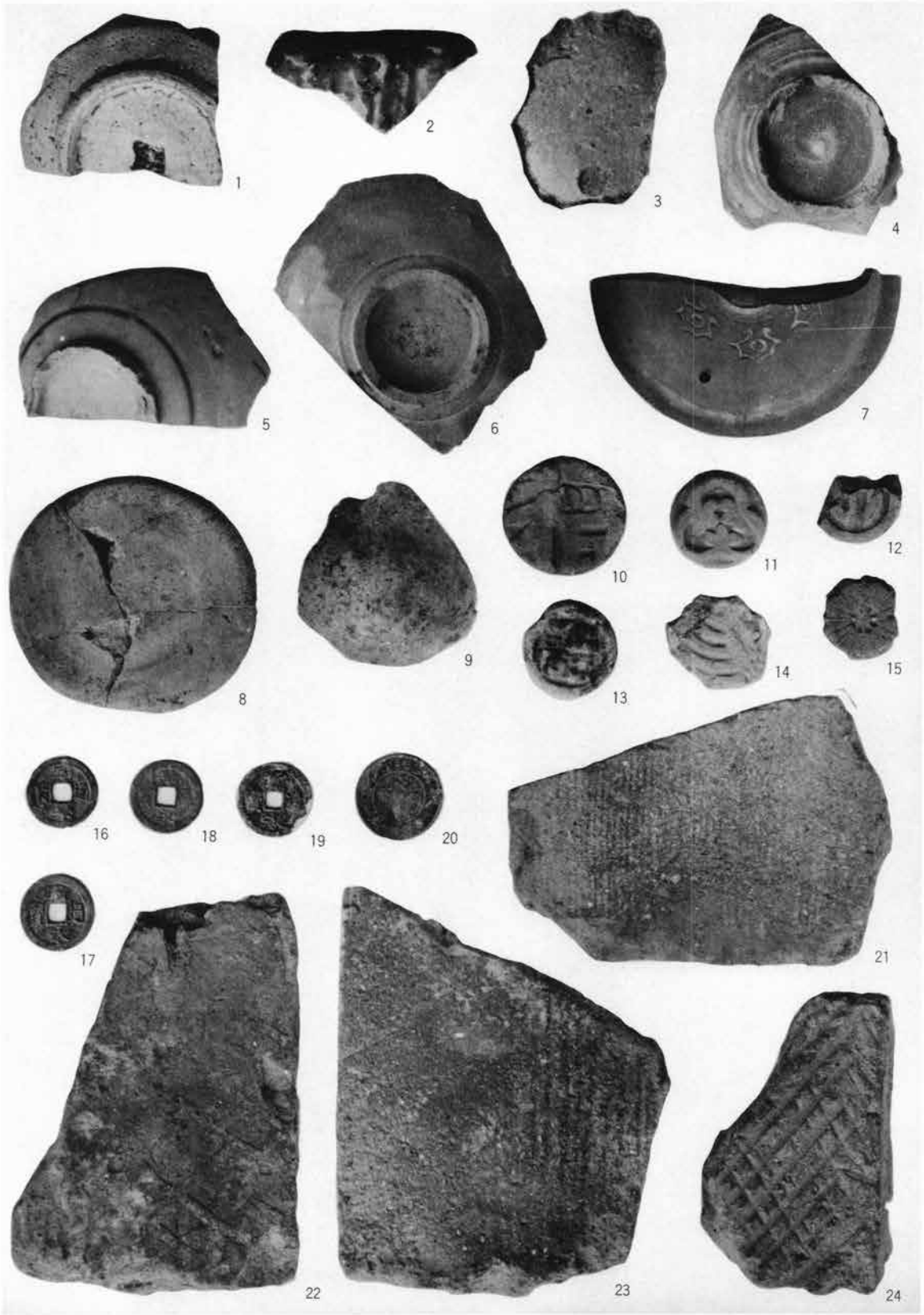
(2)　C地区近景（北から）

(2)　C地区 完掘後の全景（東から）

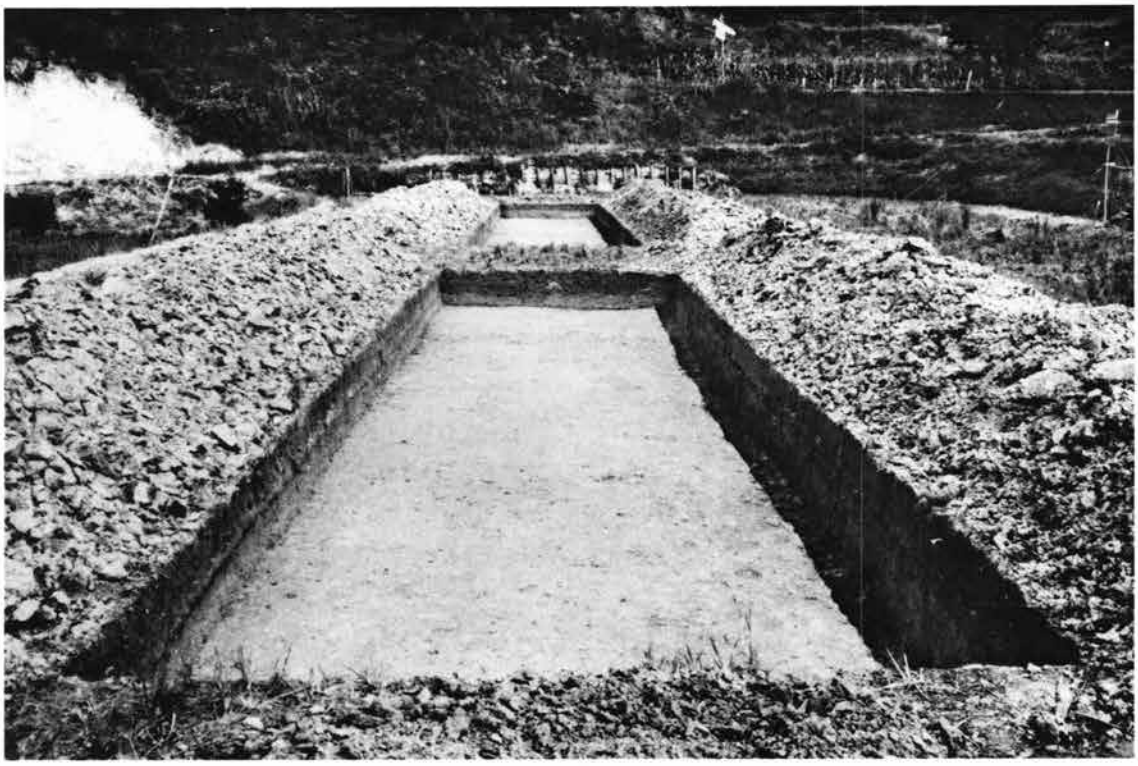
(1)　C地区 完掘後の全景（西から）



出土遺物 (1)

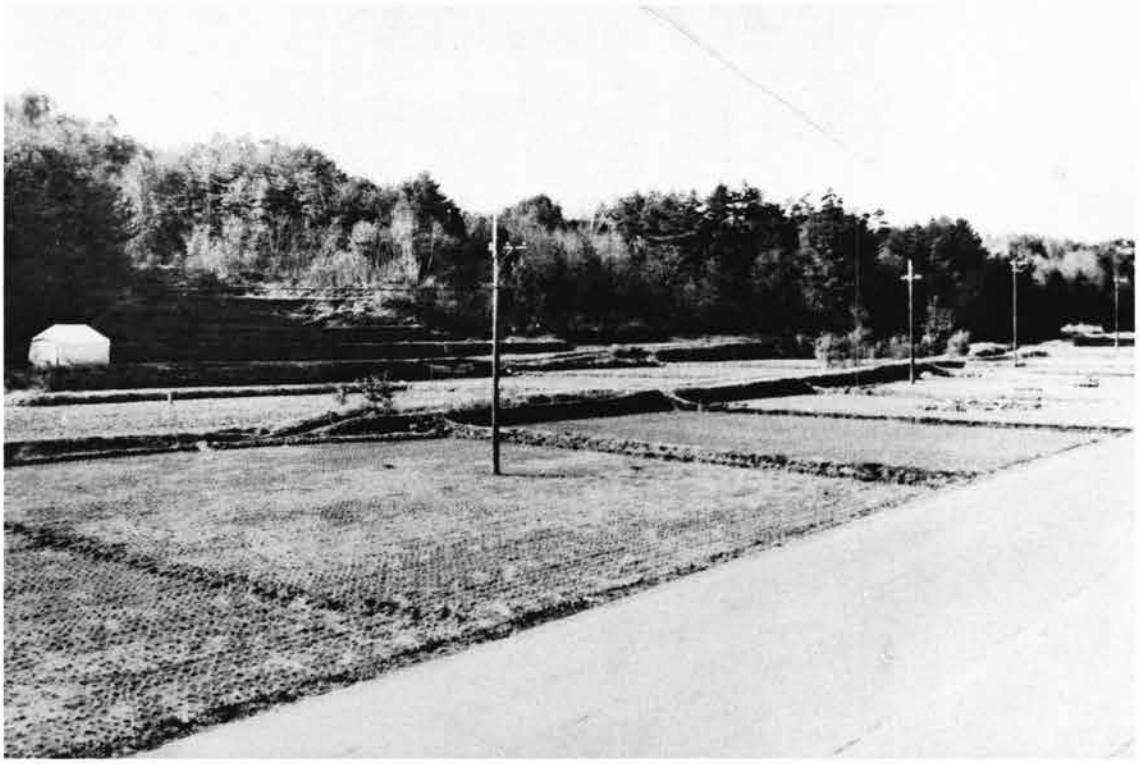


出土遺物 (2)



(1) No.5地点　Dトレンチ全景（北西から）

(2) No.5地点　Aトレンチ南壁



(1) No.6地点　調査地全景（北方から）

(2) No.6地点　Dトレンチ全景（東から）

図版第49　祝園地区関係遺跡

(1) No.7地点　調査地全景（南東から）

(2) No.7地点　Aトレンチ全景（西から）

図版第50　祝園地区関係遺跡

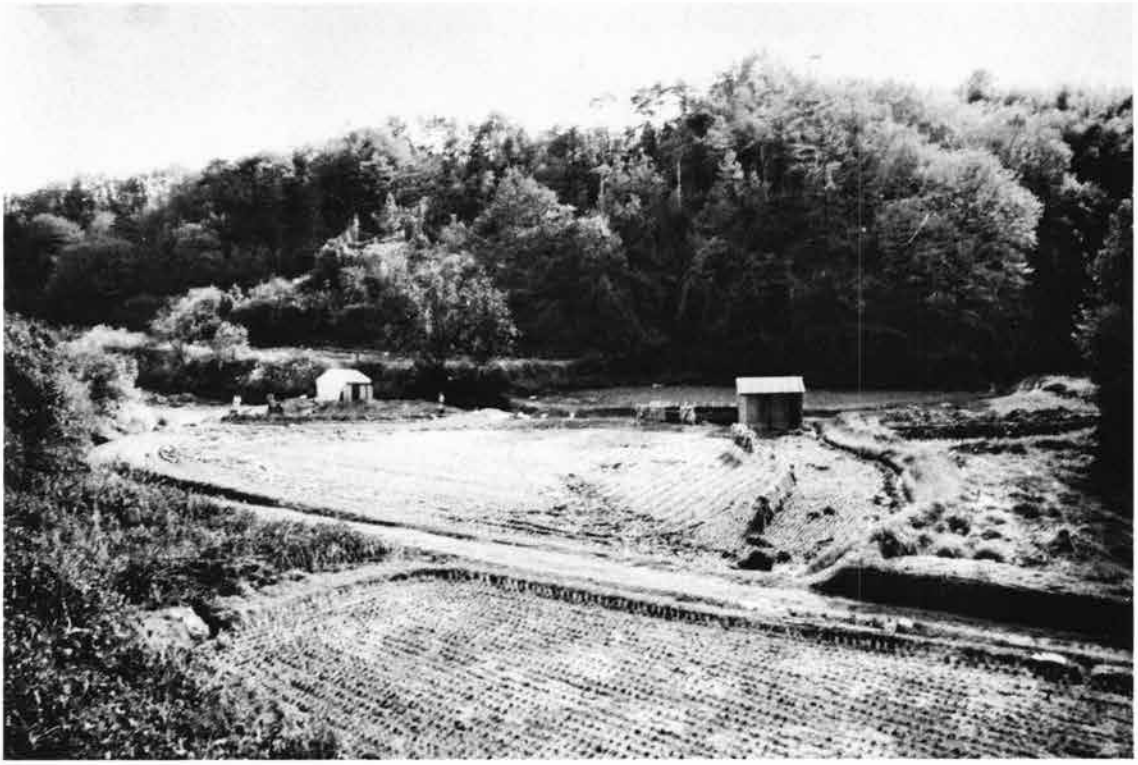
(1) No.8地点　調査地全景（東から）

(2) No.8地点　Aトレンチ全景（西から）

(1) No.9地点　調査地全景（南から）

(2) No.9地点　Bトレンチ溝SD01全景（東から）

図版第52　祝園地区関係遺跡



(1) No.10地点　調査地全景（北東から）

(2) No.10地点　Aトレンチ全景（東から）

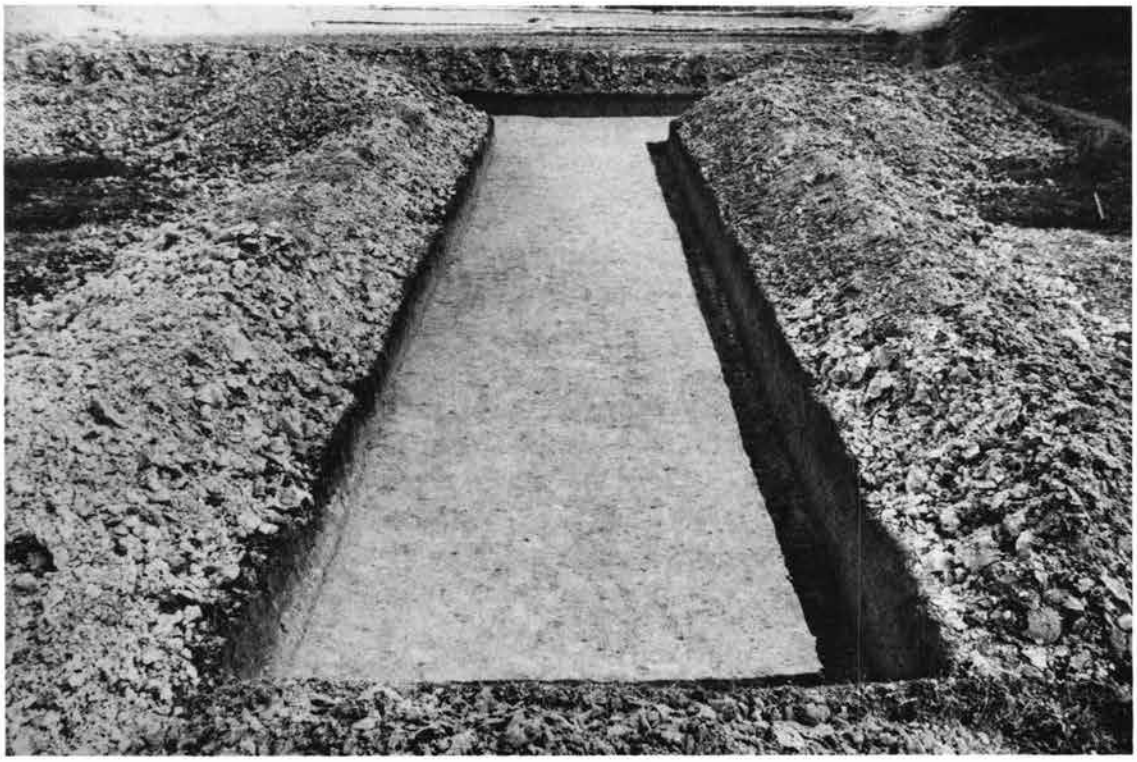
図版第53　祝園地区関係遺跡

(1) No.11地点　調査地全景（東から）

(2) No.11地点　Bトレンチ全景　杭列と暗渠排水路（南東から）

図版第54　祝園地区関係遺跡

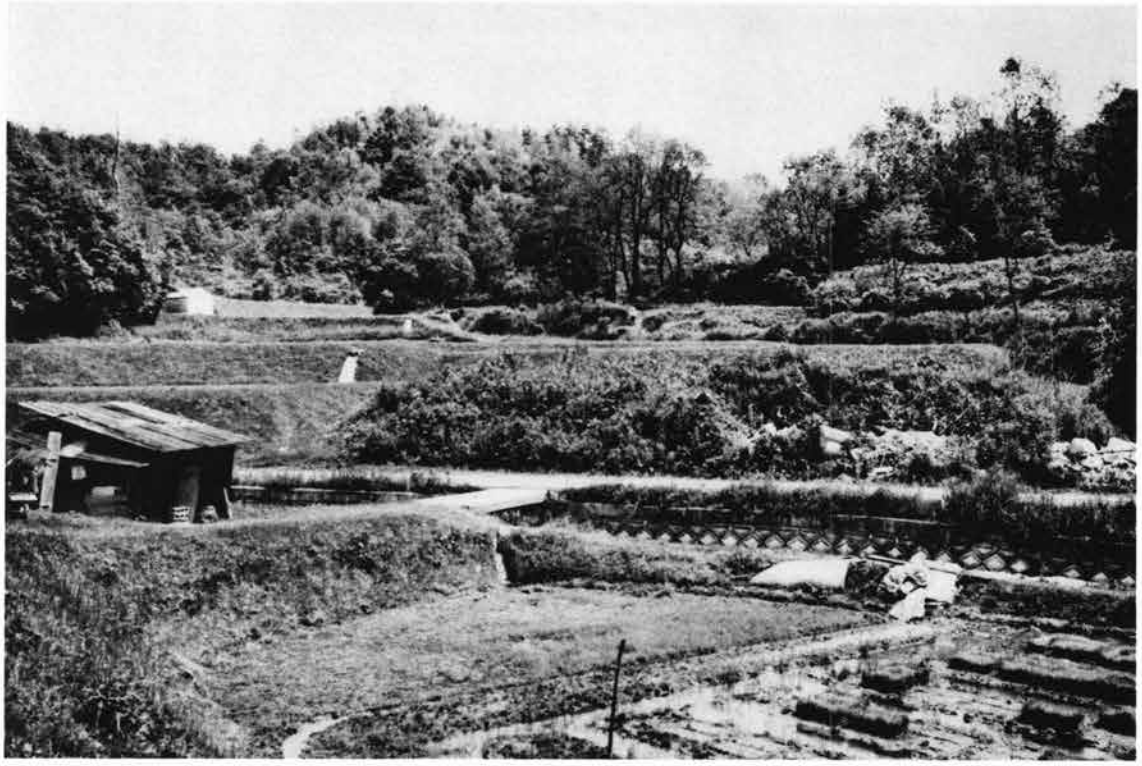
(1) No.12地点　調査地全景（北から）



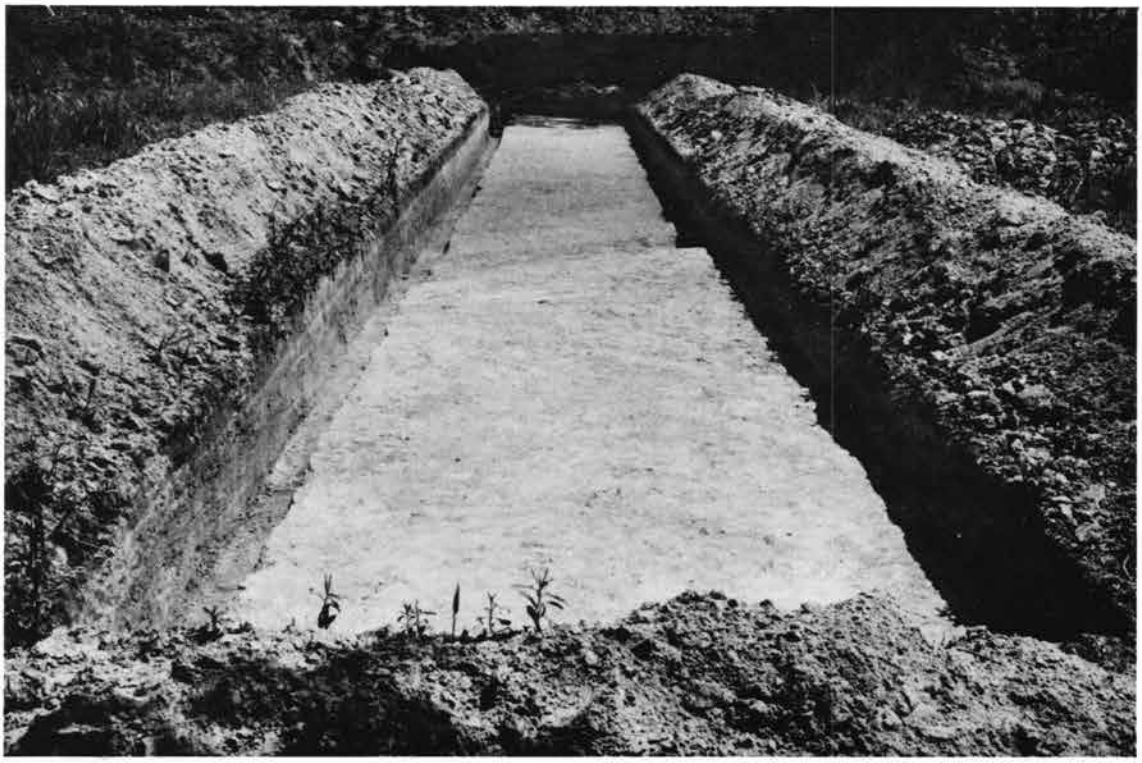
(2) No.12地点　Eトレンチ全景（北から）

(1) No.13地点　調査地全景（南西から）

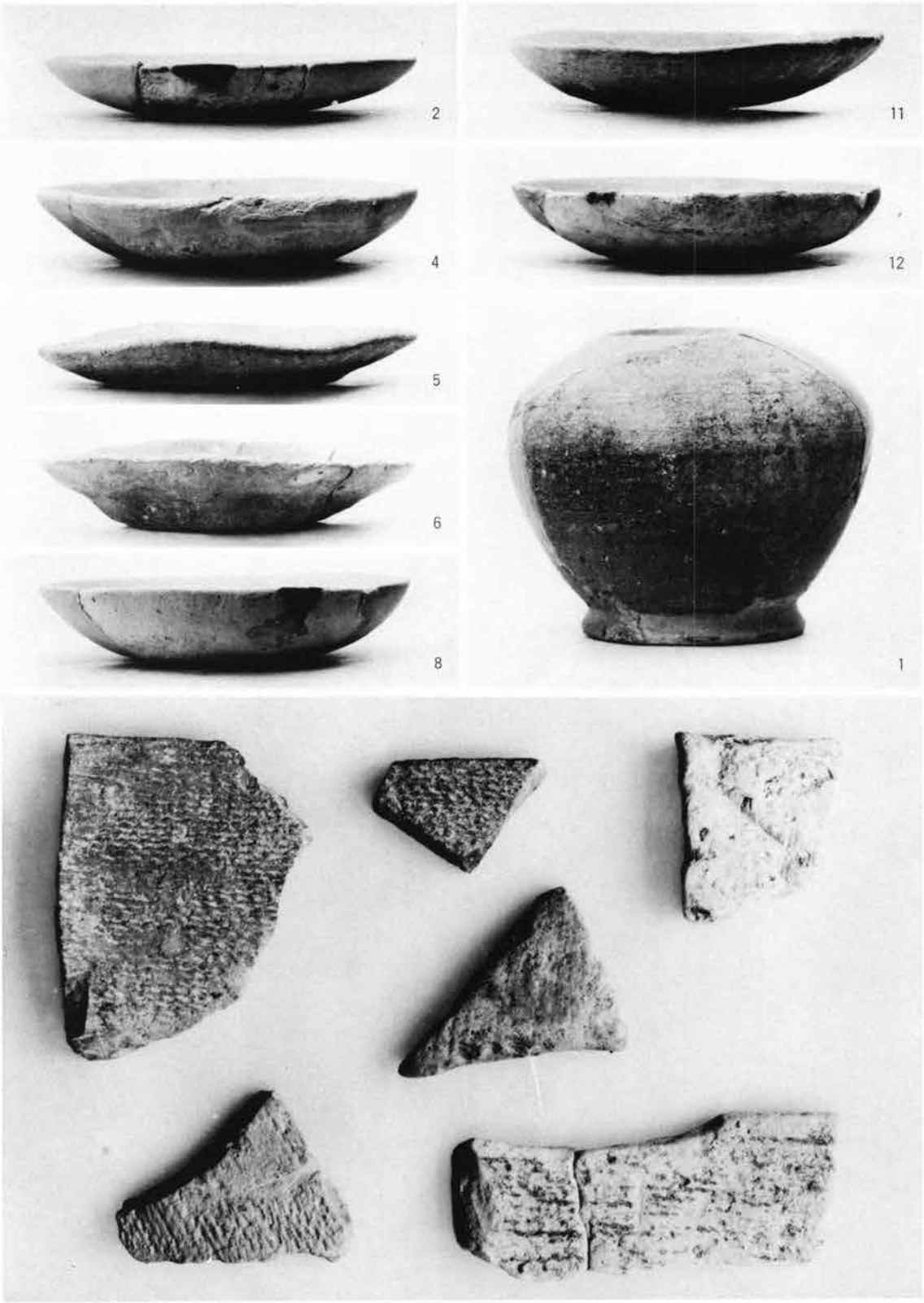
(2) No.13地点　Fトレンチ全景（北西から）



(1) No.14地点　調査地全景（南から）



(2) No.14地点 C－1トレンチ全景（北から）



出土遺物　1．須恵器　2～12．土師器
下．瓦

京都府遺跡調査概報 第11冊

昭和59年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）